特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡

県道鯖江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書

1983. 3

福 井 県 教 育 委 員 会
福井県立朝倉氏遺跡資料館

序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、山城と城下町の跡が良好に遺存するわが国屈指の大規模な戦国時代の遺跡であります。

昭和42年に発掘調査、環境整備事業を開始以来、事業も順調に進捗し、義景館跡周辺を中心にかなりの整備をみるに至っております。一方、年々遺跡来訪者の数も多くなり、自動車の通行量も増大の一途をたどっております。

かねてから地元民や一般来訪者の方々から既存の県道は、非常に狭く車の往来がままならない状態であり、一日も早く善処して欲しいとの強い要望が出されており、文化庁や関係者と種々検討を加えた結果、遺構に支障のない範囲において県道を新設することとしましたために県道新設にあたる箇所の遺構を正確に記録する必要があり、昭和52年度から昭和57年度の６ヶ年間をかけ、調査をいたしました。ここに、その発掘調査で得た成果を広く一般の方々に公開するため、報告書を刊行しました。本書が戦国時代と朝倉文化を研究する上で、いささかでもお役に立てばと考えております。

この発掘調査を進めるにあたり、終始暖かいご指導とご協力を賜わりました文化庁、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会、県土木部ならびに福井土木事務所の関係各位、発掘調査に従事された文化財調査員および作業員の皆様に心から感謝の意を申しあげる次第であります。

昭 和 58 年 3 月

福 井 県 教 育 委 員 会

教 育 長　　津　田　四　郎

例　　言

1．この報告書は、昭和52年８月から昭和57年10月まで、県道鯖江・美山線改良工事に先だち、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡に含まれる敷地内を緊急に発掘調査した概要である。

2．この緊急発掘調査は、福井県土木部の委託により福井県立朝倉氏遺跡資料館（昭和56年８月20日をもって朝倉氏遺跡調査研究所より組織替）が担当した。

3．調査に関係した諸機関・諸氏は、以下のとおりである。（順不同）

福井県土木部、福井土木事務所、福井県教育庁文化課

福井県立朝倉氏遺跡資料館

河　原　純　之	（所　長）	昭和53年４月文化庁記念物課に転出
藤　原　武　二	（館　長）	
中　谷　　賢	（次　長）	
水　藤　　真	（文化財調査員）	昭和55年10月国立歴史民俗資料館に転出
水　野　和　雄	（文化財調査員）	
小　野　正　敏	（文化財調査員）	
清　田　善　樹	（文化財調査員）	
岩　田　　隆	（文化財調査員）	
吉　岡　泰　英	（文化財調査員）	
南　　洋一郎	（文化財調査員）	
伊　藤　正　敏	（文化財調査員）	昭和57年10月文化庁記念物課に転出
青　木　研　吾	（非常勤嘱託）	
西　村　　広	（　〃　）	

調査作業員　天井康昭、石田艶枝、石田ミヨ子、上坂和子、梅田みさを、奥田末子、奥田恵美子、岸田あや子、小林ヒサヲ、斉藤喜代松、田中トシヲ、田中文右衛門、平鍋与津治、三崎チエ子、山下喜美子、吉川サダ子、石倉清亨、石田カズキ、今吉ハギ、伊與 ふじ子、奥田まつえ、奥田ユリ、木村政志、小林末子、小林澄子、田中和子、谷口惣次郎、谷口仁作、戸田起世子、平井茂左衛門、福岡敏子、福岡まつ子、福岡遊蔵、福岡義信、藤田武志、藤田忠、細田弥三郎、前田しなえ、山口さだを、山口堅、山下みす子、山根木茂磨、吉川斉、吉川宗男（以上発掘作業）

朝倉八重子、石田隆代、千葉和子、辻岡幸子、吉越強（以上室内作業）

4．この報告書を作成するにあたって、整理、執筆、編集は、県立朝倉氏遺跡資料館の文化財調査員全員がこれにあたった。

藤原武二、水野和雄、小野正敏、岩田　隆、吉岡泰英、南洋一郎、川村俊彦（調査補助員）

5．この報告書に掲載した地形図は、パシフィック航業株式会社に、また平面図および空中写真は、アジア航測株式会社に委託した成果を使用した。

6．実測図に用いた座標系は、「第Ⅵ系」である。

目　　次

頁
Ⅰ．発掘調査事業概要……1
　1．工事概要……1
　2．調査概要……2
　　遺構写真　ＰＬ．1～ＰＬ．8
　　道路線形図　第１図（折込）
Ⅱ．第31次調査報告……7
　1．遺　　構……8
　2．遺　　物……14
　　遺構写真　ＰＬ．9～ＰＬ．15（第31次調査・遺構１～７）
　　遺物写真　ＰＬ．16～ＰＬ．20（第31次調査・遺物１～５）
　　遺構図面　第２図～第10図（第31次調査・遺構１～９）
　　遺物図面　第11図～第16図（第31次調査・遺物１～６）
Ⅲ．第36次調査報告……19
　1．遺　　構……20
　2．遺　　物……32
　　遺構カラー写真　ＰＬ．21（第36次調査・遺構）
　　遺物カラー写真　ＰＬ．22（第36次調査・遺物）
　　遺構写真　ＰＬ．23～ＰＬ．39（第36次調査・遺構１～17）
　　遺物写真　ＰＬ．40～ＰＬ．56（第36次調査・遺物１～17）
　　遺構図面　第17図～第31図（第36次調査・遺構１～15）
　　遺物図面　第32図～第52図（第36次調査・遺物１～21）
Ⅳ．第43次調査報告……45
　1．遺　　構……46
　2．遺　　物……51
　　遺構カラー写真　ＰＬ．57（第43次調査・遺構）
　　遺物カラー写真　ＰＬ．58（第43次調査・遺物）
　　遺構写真　ＰＬ．59～ＰＬ．69（第43次調査・遺構１～11）
　　遺物写真　ＰＬ．70～ＰＬ．85（第43次調査・遺物１～16）
　　遺構図面　第53図～第67図（第43次調査・遺構１～15）
　　遺物図面　第68図～第82図（第43次調査・遺物１～15）

付図
　第83図～第85図　発掘調査地区位置図１～３　　第86図　第31次調査・遺構全測図
　第87図　第36次調査・遺構全測図　　第88図　第43次調査・遺構全測図

Ⅰ．発掘調査事業概要

1．工事概要

福井県は、従来の海岸景観探賞ルートとは異なった、歴史と産業の見学を主要目的とする越前平野東側の山際沿いに走る観光見学ルートを立案した。丸岡城、永平寺、朝倉氏遺跡、越前漆器の里（鯖江市河和田）、越前和紙の里（今立町岡本）、越前の里（武生市味真野）を結ぶコースである。

観光バスを史跡内に乗入れ、通過させるとすればそれなりに受入体制、特に道路事情の改善が必要とされるが、それまでにも史跡内道路改良については、城戸ノ内集落内を通過する既存の県道が大変狭く、路線バスやトラックなどとのすれちがいもできない状況で、地元からも現県道の拡幅、あるいは道路の新設が、強く要望されていた。しかし拡幅は、多くの民家の立退きを必要としきわめて難しいと考えられた。また県道北中足羽線は、館の外濠を縦断しており、今後の保存整備に支障をきたすとともに、遺跡の核である館の直前まで観光バスを乗入れることは、史跡環境保全上からも好ましくなく、別の場所に自動車道を新設した方が良いという意見もあった。

昭和46年に行われた特別史跡指定、主として水田であった平地部21ヘクタールの一括買収、公有化の段階では、集落をさけたバイパス的な県道新設の案に固まりつつあった。特別史跡内に道路を新設することは、大変重要な基本的な問題であるので、学識経験者、歴史、建築、造園の専門の先生方および地元代表者で構成された朝倉氏遺跡調査研究協議会に諮問することになった。

昭和49年８月22日と11月５日の二度にわたって会議がもたれ討議された。基本的には遺構がすくないと思われる一乗谷川左岸、西側沿いに道路建設が認められた。建設にあたっては十分な発掘調査をし記録保存後埋め戻す。地下遺構を物理的に破壊しない道路の構造にする。史跡の環境をできるだけ損わないように、道路斜面には低木を植樹するなど種々の意見がだされた。

また上城戸近くの山を削り道路を拡幅する計画は、この地点で山が狭ばまり城戸をつくるにふさわしい地形景観を呈しているものを、大きく変えることになるので認め難い。同じく下城戸の土塁を削ることも遺跡保存の根幹にかかわることであり、その部分で多少道路が狭くなってもいたしかたないという意見が多かったのである。

史跡の現状変更等許可申請書が、県の土木部から文化庁に、昭和49年９月25日提出された。上城戸と下城戸の部分は除外されている。現状変更は次のような条件のもとに許可された。１．必要個所の発掘調査を貴県知事部局の負担において実施すること。２．保存上欠くべからざる遺構が発見された場合は、文化庁と協議の上、路線を変更すること。３．当該特別史跡の歴史的景観を保持するため、道路の構造及び植栽等につき、最大の顧慮をすること。４．その他、必要事項については、福井県教育委員会の指示に従うこと。などであった。

なお道路敷になる部分は、分筆登記し土木部サイドで買収された。

道路はできるだけ一乗谷川に沿うようなルートが計画されたが、赤渕、川久保地係で200mほど、中惣、瓢町、下城戸地係では 300m の区間が、川からかなり離れている。なお赤渕、川久保地係では、新設道路と川の間に遺跡見学者用の便益施設である公園センターが建設される。館橋から

南側、川合殿、藤兵衛川原地係では、現県道 230m 分が、新設道路にとりこまれる。また下城戸地係でも 100m の区間が、現県道をとりこんで造成される。下城戸地係の既存の用水路は、道路の西側に併行してつけかえられる。また用水路に沿う道路の肩部に、サザンカを列植し、水路に雪が捨てられるのを防ぐとともに、景観の向上をはかることになった。

新設道路の総延長は、1,720m である。

道路の工事は、発掘調査が終了したところから順次実施された。発掘遺構は山砂で埋めもどしその上に盛土し路盤を造成することを原則とするが、道福橋近くの中惣地係では、新しく石垣を築いて畑にしていた遺構のない部分を、幅２ｍ、長さ35m にわたって削平している。

道路は車道幅 5.5m で東側に幅 1.5m の歩道をもち、歩道と車道の間にはＬ型側溝が設置される。道路上面幅は、反対側の路肩を入れて合計８ｍ50㎝である。道路の標準断面は30㎝厚の砕石基礎路盤に10㎝の上層路盤で、アスファルト舗装仕上げである。道路の斜面には芝生を植栽する。なお一乗谷川に近接し護岸が必要なところには玉石積を施すことになった。また道路西側の排水処理のため、ヒューム管で暗渠の道路横断溝をつくるが、溝の入口に玉石を積みヒューム管の木口が目立たないよう考慮する。以上が遺跡に関連した工事の概要である。

２．調査概要

道路敷の発掘調査は、昭和52年度から57年度にかけて、遺物整理も含め総予算83,100,000円で14,820㎡について行った。道路敷幅10m ほどの狭長な範囲の発掘調査では、遺構の全貌をつかみにくいので、極力朝倉氏遺跡の他の調査地に隣接させて発掘地区を設定、同時に調査を行った。したがって年度ごとに、上城戸側、あるいは下城戸側から順番に調査をするということになっていないが、どちらかというと上城戸寄りの地区が先に行われている。

記述は、上城戸手前の地係から順を追って行うことにする。

藤兵衛川原地係および館橋以南の川合殿地係の調査内容については、昭和53年10月14日から54年５月11日にかけて行われた第31次調査報告を参照されたい。

館橋以北の川合殿地係および平井地係の一部は、昭和53年５月11日～８月20日に行われた第29次調査、53年８月23日～10月21日にかけて行われた第30次調査と一緒に実施した。詳細については、昭和53年度発掘調査概報の第29次、30次調査の報告を参照されたい。

道路敷で検出された遺構について報告することにする。

この地域には、溝あるいは石列によって区画された間口６ｍ～10m、奥行12m 前後の小さな敷地が、南北方向の二条の幹道の間に背中合せに並んで発掘された。屋敷が背中合せに並んでいると推定されるのは、中央に敷地の境界となる南北方向の石列があること、また一乗谷では通例、屋敷の裏側の塀などに沿って存在したと考えられる石積施設が南北方向に並んで検出されたことなどによる。これらの小規模な屋敷は、町人や下級武士の住居や店屋と思われる。

東側の屋敷群は、一乗谷川の氾濫をうけたらしく、道路に沿った東端の施設は不明であるが、溝や柵があり道路に面して入口を開いていたことは確かである。この川沿いにあったと推察される南北道路も、路面が流出してその幅員などは不明である。この道路に直角に交わる東西方向の幹線道路ＳＳ975は、幅7.5m で、北側は土塁で南側は道路側溝で画されている。道路面は３時期あり、いずれも砂利敷である。

ＳＳ 975から南約60m のところにある東西道路ＳＳ 977は、幅約 2.7m の小路で、道路面は２時期確認された。ＳＳ 977から南約35m にある東西道路ＳＳ1180は、幅約２ｍで、道路の南辺にそって石組溝ＳＤ1186があり、反対の道路北辺にはＳＸ1245の石列がみられる。道路の東端近くには、砂利敷面が遺存し、道路を横断する暗渠ＳＺ1222も検出された。

ＳＳ 977から南の屋敷群には、庭をもつ中規模程度の屋敷から小規模なものまで混在しているが、後世の攪乱を受けて残存状況はあまりよくなく、それらの正確な配列は不明である。

溝跡は一乗谷川に向う東西溝が多く５条、南北方向の溝は１条検出された。

建物跡は５棟検出されている。すべて礎石建物で、基本的には１間＝ 1.9m の造営尺で建築されていることが推定される。

ＳＢ1024は2.85m × 1.9m の小さな南北棟で地覆石が残っている。ＳＢ1027は、礎石と地覆石を西辺と南辺に残すが、規模は明らかでない。石敷の建物で倉庫的性格を有すると思われる。ＳＢ1028、1029も東辺、南辺に一部礎石が遺存するが規模は推定できない。

ＳＸ1224は、越前焼の大甕が連続して配置された遺構である。この甕は、下部約50cm程が地中に埋められていたと推定される。その据付穴は計28個検出され、そのうち11個には甕の下半部が残存していた。この据付穴は、約 0.9m のグリッド状に規則正しく配列されている。大甕は器高約90cm、口径約80cm、容量はいわゆる２石入である。これらのことからほぼ接するように下部のみ地中に埋められ、配置されていたことがうかがわれる。この甕の中にどのような物がはいっていたのか、現時点では不明であり、遺構の性格も分らない。

井戸は計８基発掘した。全て河原石積みで、井戸上面の直径が50～60cmの小型のもの、70cm～80cmの中型のものが多い。井戸は事故防止のため完掘していないが、それまでの調査結果から推察して、川沿いでもあり３ｍを越える深いものはすくないと思われる。

石積施設は計９基検出した。一辺１ｍ以下の長方形または正方形で、深さ 0.6m 前後のものが大部分で、自然石を３～５段に積んでいる。これらの石積施設は直線状に南北方向に並んでいる。

平井地係の調査は、昭和52年８月３日から同年11月５日にかけて行われた第25次発掘調査に含まれている。この地区は義景館と川をへだてて対峙する場所で、武家屋敷の遺構の存在が予想されていた。予想通り上、中級クラスの屋敷跡が発掘された。しかし道路予定地に屋敷跡の主要部はかからず、屋敷の東側を区画する土塁や入口跡がはいるのみである。屋敷の内部の遺構については、昭和50年度発掘調査概報の第15次調査報告、昭和52年度発掘調査概報の第25次調査報告を参照されたい。

土塁ＳＡ 384は幅1.5～1.8m で、基部の石垣のみ残存していた。門の部分を含んで延長約33m分が検出された。土塁石垣の下層に、遺構ＳＸ925、926、929等が検出され、町割作定以前の遺構が存在することが判明した。門ＳＩ 415は幅約３ｍであるが、礎石や掘立柱穴も検出されず、規模や構造は不明である。門跡が発見されたので、土塁と一乗谷川の間には、南北方向の道路が存在したことは確かであるが、一乗谷川が度々氾濫し遺構が流失したらしく、道路面も確認できず、道路幅も推定できなかった。

土塁は北端で折曲って東西方向の土塁になるが、この土塁に沿って幅８ｍの東西方向の道路ＳＳ944と側溝ＳＤ896がある。この道路も東端部は一乗谷川の氾濫原であり、また水田造成などで削平をうけたらしく遺存しない。なおこのＳＳ944は『朝倉始末記』の中の「大橋ノ通」に比定された。

斉藤地係の大半と木蔵地係の調査は昭和55年４月９日～55年４月25日にかけて行った。この地区は、一乗谷川に平行に接して設定されている。やはりこの地区も一乗谷川の流路になったことがあるらしく、朝倉氏時代の遺構はまったくみられなかった。

水田に関連すると思われる後世につくられた玉石溝、川の護岸も兼ねていたと推定される玉石積の畦の石垣などが検出された。トレンチを入れて下層も調査したが、下層も氾濫原と思われる礫まじりの堆積土であった。

吉野本、奥間野地係については、昭和54年８月31日～55年７月４日にかけて行われた第36次発掘調査報告を参照されたい。

赤渕地係については、昭和56年７月21日～10月13日にかけて行った第42次発掘調査と一緒に行った。詳細については、昭和56年度発掘調査概報を参照されたい。

この地区においても東西と南北の幹道、道路に面して並ぶ間口６～８ｍ、奥行12～18m の、小さな溝や石列で区画された町屋敷群が検出された。道路敷地にかゝる主要遺構は、以下のようなものである。

ＳＳ495は、谷内を南北に縦貫すると考えられる南北道路である。すでに第17、36次の調査で検出されており、予想されていた。東と西の両側に溝をもち、幅員は側溝を含んで約 8.5m である。道路断面から判断すると、５回の改修が考えられ、当初の道路面と最終の道路面との高低差は、約0.5～0.7m である。改修は基本的には、山土の上に砂利を固く敷きつめており、非常に良くしまっている。道路面は、北へ向ってゆるやかに傾斜している。

ＳＳ1850は、ＳＳ495に直交する東西道路である。幅員は両側溝を含めて約7.5m である。この道路は断面から３回の改修が推定される。この道路の直下から井戸が検出されたことから、ＳＳ1850は、ＳＳ495等に代表される谷内の当初の町割時から少し遅れて設定されたとも考えられる。東は一乗谷川の氾濫原になっており、川に架かる橋跡などは遺存しないが、道路東正面の山裾の一段高い所は、地籍が「上殿」であり、この東西道路ＳＳ1850が、文献の中にみられる「上殿ノ橋ノ通」に当ると考えられる。

ＳＤ518は、ＳＳ495の西の側溝で、幅は約0.35m、深さは約 0.6m である。道路の改修に伴って積上げされたためか、かなり深い。この溝はＳＤ1853につながるものと思われる。

ＳＤ1851は、ＳＳ495の東の側溝である。幅は約0.3～0.35m、深さは約0.3m である。この溝も改修された痕跡がみられるが、下層の溝はあまりはっきりしない。

ＳＤ1852は、ＳＳ1850の南の側溝である。西端でＳＤ1851につながっている。幅は約 0.3m、深さも約 0.3m である。この溝の南の側石は、道路南の屋敷の境界石垣をかねており、東部においては、屋敷面と道路面に高さの差があるため、北の側石に比べ一段高くなっている。

ＳＤ1853は、ＳＳ1850の北の側溝である。幅は約0.6～0.7mと広く また深さも0.6～0.8m と深い。側石も比較的大きなものを使用している。この溝は南北道路ＳＳ495の西に拡がる屋敷群からの水を受け、東の一乗谷川へ排水する主要な溝であったと考えられる。

ＳＤ1858は、東西方向の溝で、南北道路東の小規模屋敷を区画する溝の一つである。幅は 0.3m である。この溝を境にして、南と北の屋敷に高低差があったとみられ、南の側石積が、北の側石に比べ一段高くなっている。

ＳＤ1860は、南北方向の溝であるが、かなり破壊されている。南から北へ流れ、ＳＤ1852に繋

っていたと考えられる。

ＳＢ1895は、掘立柱の東西棟である。９個の柱穴が検出され、一部に柱根が残っていた。東西約 8.4m 、南北約 5.2m の規模を持つ。東西方向の柱間寸法は約 4.0、4.4m 、南北方向の柱間寸法は、約2.6mで、いずれも広い。この９本の柱を基本の柱として、その中間には、礎石を用いた柱がたっていた可能性もある。

越前焼大甕埋設遺構は３箇所検出された。ＳＸ1921は２個のカメを、ＳＸ1922、1923は８～10個のカメを並べたものである。埋め方は、腰附近までと、肩附近まで埋めた場合とが推察される。

井戸は道路予定地に計４基発掘された。すべて玉石に近い自然石を組んでいる。深く掘り下げるには危険を伴うため、上面より 1.5m 程度の発掘に留め、深さは確認していない。径は約 0.6～0.7mのものが多い。井戸はほぼ例外なく１屋敷に１個は検出されている。位置等に明確な法則性はないようであるが、水脈に関係するためか、ある幅をもって帯状に分布し、どちらかというと屋敷の前よりに多いようである。

石積施設は、１基だけ検出された。縦、横約１ｍ、深さ 0.6m ほどである。

川久保地係は低地になっているが、やはり一乗谷川の流路になったらしく、遺構らしいものは検出されなかった。

中惣、瓢町地係と下城戸地係の一部は、第43次発掘調査で調査されたので、その報告を参照されたい。

下城戸地係の大部分は、昭和54年５月28日～８月29日にかけて実施した第35次発掘調査と一緒に調査した。詳細については、昭和54年度発掘調査概報を参照されたい。

下城戸土塁寄りの道路予定地北側は、遺構の残存状況が悪かったが、南側では城内の幹線道路と道路に面した小規模屋敷群を発掘した。

ＳＳ1340は、両側に側溝を有する路幅約 5.5m の、東北から西南方向に走る幹道である。道路砂利敷面からみて、３時期にわたってかさ上げ利用されたことがわかる。北側は削平されており、下城戸枡形へのとり付き状態は不明である。南側は、ゆるくカーブして西の山際に向い、第18次調査で検出されたＳＳ622、第17次調査のＳＳ495、498につながるものと推定される。

溝は計８条検出されている。石組溝ＳＤ1367、1368は道路ＳＳ1340の側溝で、西南から東北に流れる。ＳＤ1369～1374の溝は各屋敷を区切る排水溝である。

ＳＤ1409は、下城戸の外濠である。濠底まで完掘していないので深さはわからないが、幅は約10m で、地山を削って作られている。濠の城戸側の肩部には石垣が地山の上に据えられており、石垣と城戸裾の間に幅約３ｍの犬走りと考えられる平坦部がみられる。

ＳＢ1342は、道路ＳＳ1340に面して建てられた礎石建物で、間口 6.3m 、奥行 8.5m の規模をもつ。建物全面を焼土で整地しているが、廃絶時の焼土との区別は困難であった。建物の北東隅に井戸ＳＥ1351と洗い場の石敷遺構ＳＸ1392をそなえた土間がある。建物の中央には炉状遺構ＳＸ1391がある。建物の南側は、幅 0.5m の２列の石列で、北側は溝ＳＤ1374で区画されている。建物ＳＢ1342の南には、石組溝に囲まれた不整方形の敷地が２個所みられる。礎石や柱穴が部分的に残存し、建物の存在が推定できる。

ＳＢ1344は、礎石建物で南北 6.4m 、東西は７ｍを越える規模をもつ。東端は、現県道下になり、東西長は不明である。

ＳＢ1345は、井戸ＳＥ1353の付属建物と考えられる。２ｍ×1.4ｍの小規模の掘立柱建物である。

ＳＢ1346は、礎石建物で南北 9.3m 、東西 7.5m 以上の規模である。東辺は現在の用水路敷地にはいり不明である。のちにこの建物の南北長は 9.5m にわずかに拡張してつくりかえている。またこの建物は、28個の大甕が据えられた埋甕施設ＳＸ1388を覆うためのものである。埋甕施設は、焼土でうめられていたが、その用途や性格ははっきりしない。貯蔵かあるいは液体を取り扱う職業にかかわるものであろう。５×６列に大甕を接して密に据えてあったと考えられるから甕の口縁直上に床を張り、穴をあけて作業をしていたと推察される。

ＳＢ1413は礎石建物であるが、北と東側は削平されており、その規模は不明である。

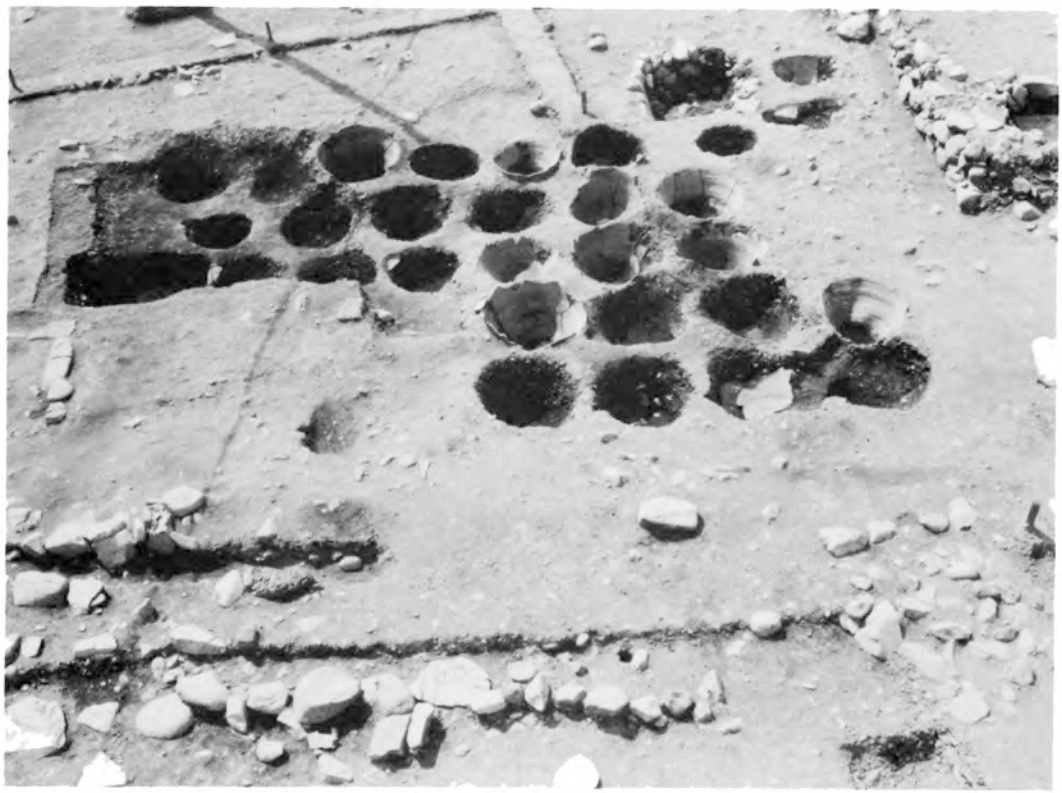
井戸は２基検出された。いずれも建物内につくられたものである。石積みで、深さは３ｍ前後、上面径は 0.8m 、底部径は同程度である。

石積施設は、４基発掘された。河原石を３～４段に積んだものであるが、天端の石はほとんど残っていなかった。

年　度（昭和）	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度
調　査　面　積	220㎡	2,200㎡	3,000㎡	3,800㎡	4,000㎡	1,600㎡
共　済　費	12千円	76千円	120千円	164千円	168千円	109千円
賃　金	690	6,067	10,415	13,473	17,036	8,845
旅　費	41	205	321	430	503	277
消耗品費	110	510	568	563	769	829
燃料費	11	108	144	108	190	60
印刷製本費	36	155	217	268	259	2,202
役務費	—	—	77	—	11	153
委託料	100	1,379	2,100	2,952	3,600	2,035
使用料及び賃借料	—	600	1,038	1,042	1,464	490
計	1,000	9,100	15,000	19,000	24,000	15,000

表―１　年度別発掘調査費

川合殿地係発掘遺構　　南から



川合殿地係大甕埋設遺構（ＳＸ1224）　　北から

川合殿、平井地係発掘遺構　　東から

平井、斉藤地係発掘遺構　　東北から

平井地係発掘遺構　SI　415　　東から

平井地係発掘遺構　SA384　　南から

斉藤、木蔵地係発掘遺構　　南から

斉藤、木蔵地係発掘遺構　　北から

赤渕地係発掘遺構　ＳＳ495　　南から

赤渕地係小区画屋敷群と道路　　北から

川久保地係発掘遺構　　南から

下城戸地係発掘遺構　　南から

下城戸地係発掘遺構　ＳＸ1388　　北から

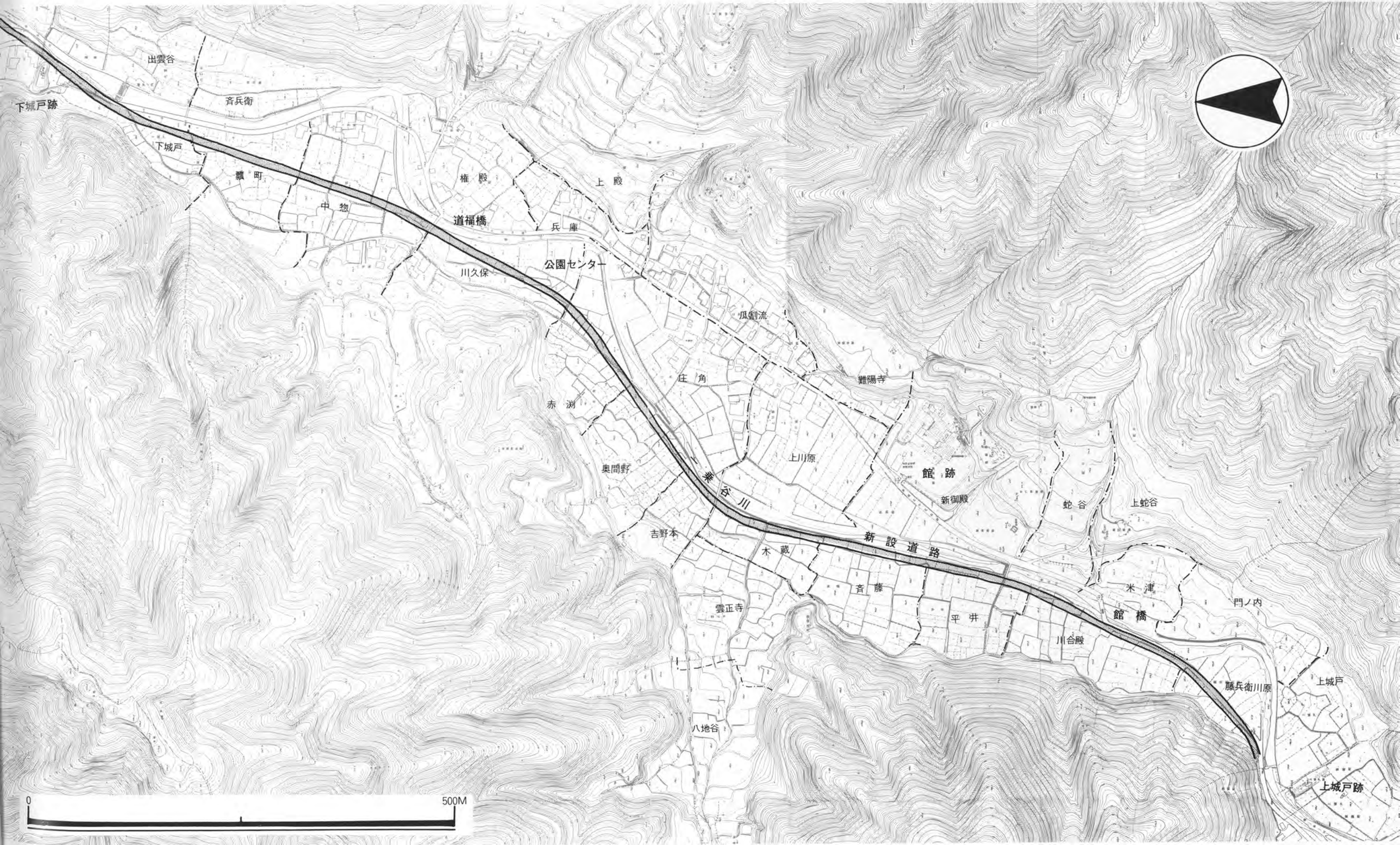
下城戸地係発掘遺構　ＳＥ1351、ＳＸ1392　　東北から

下城戸南側発掘遺構　　南から

下城戸外濠発掘遺構　　北から

第1図

道路線形図


出雲谷
下城戸跡
斉兵衛
下城戸
瓢町
中物
権殿
上殿
道福橋
兵庫
公園センター
川久保
瓜割流
庄角
難陽寺
赤渕
上川原
館跡
新御殿
奥間野
兼谷川
蛇谷
上蛇谷
吉野本
木蔵
新設道路
斉藤
米津
門ノ内
雲正寺
平井
館橋
川合殿
藤兵衛川原
上城戸
八地谷
上城戸跡
0
500M

第31次調査報告

Ⅱ．第　31　次　調　査

1．遺　　構

この調査地区は、朝倉氏遺跡の中心となる「城戸ノ内」にあって、この「城戸ノ内」を形成する「上城戸」の北、一乗谷川の西岸に位置し、字名は「藤兵衛川原」である。全体は、水田化されていたが、指定後、公有地化され、草地となっている。水田等の現地形を基に、発掘のために地区割されており、南から、９ＭＩＭ－Ｗ地区に始まり、Ｖ・Ｕ・Ｔの４地区に分かれている。

地形は、全体として、南から北へ向かって傾斜しており、また、西の山裾から、東の一乗谷川へ向かって低くなっている。水田化のためか、いくつかの小区画に区画されており、石垣等による段差がみられる。これらの区画の多くは、遺跡の遺構に関連する場合が多くみられる。

調査区は、県道に沿って南北に設定されており、その幅は、南のＷ地区では、約４ｍ、中央のＶ地区では約６ｍ、Ｕ地区では約８ｍ、そして、北のＴ地区は６～９ｍとなっている。南北は、約 230m と非常に細長い調査区となっている。また、一般的には、覆土は少なく、水田耕土直下から遺構が検出される例が多く、しかも、水田化に際し、水平面とするため、一部削平される場合が多い。しかも生活面間においても、段差が設けられる例が多く、この調査区全体を通じての時期的前後関係を考察することは出来なかった。

また、この調査が終了し、道路拡幅を待って、現在の道路下に、４本のトレンチを設定した。その結果は、現在の県道の旧石垣を検出したにとどまった。

発掘された遺構

検出された主な遺構は、道路１、土塁及石垣５、溝16、建物４、井戸12、石積施設19、カメ埋設遺構３、暗渠２等である。前述した通り、この調査区は、４地区から成っている。そこで、南のＷ地区から順次その概要を述べ、その後、各遺構について解説する。

Ｗ地区　（ＰＬ．９　第２・３図）

この地区は、旧水田畦畔によって、南北に２分して考えることが出来る。南半は石積施設ＳＦ1479・1480等が検出されており、生活面も少なくとも２面検出されている。しかし、上層は、ほとんど削平されていて、掘り下げられた前述の石積施設を残すのみである。この面から約 0.4m 下に、下層の生活面がみられる。ピット列ＳＸ1540等である。北半は、大きく削平されており、ほとんど生活面を残さず、井戸ＳＥ1462等の掘り下げられた遺構がみられる。しかし、北端において、少し、生活面と考えられる面が残されており溝ＳＤ1447等がみられる。この地区は、概して、保存状況は悪く、性格は不明である。

Ｖ地区　（ＰＬ．９　第３・４図）

この地区は、ほぼ中央を東西に走る土塁状遺構ＳＡ1428を境にして、南北に約0.4～0.5m の高低差がみられる。南半は、この土塁状遺構ＳＡ1428の南約６ｍの所に平行して位置する石列ＳＶ1429によって２分され、それぞれに井戸ＳＥ1460・1461が検出され、それらによって、ほぼ生活面の高さも推定される。その差は、約0.15m とみられ、同時期とみて良いと考えられる。前述の

W地区との間には農業用水路が設けられ分断されているため、その時期的関係は明らかでないが溝ＳＤ1447を中心とする生活面と、井戸ＳＥ1461を中心とする生活面との間には、約 0.6m の高低差がみられる。

北半は、２度にわたる水田面が検出されていて、その間は、北部においては、約0.3～0.4m となっている。井戸ＳＥ1459は、この下層の水田直下から検出された遺構である。この時期の遺構はほとんど削平されたとみられる。この生活面から、約0.3～0.4m 下に、溝ＳＤ1445を中心とする生活面が検出された。この溝ＳＤ1445と、土墨ＳＡ1428は平行しており、その間は約18m である。南部のＳＸ1532等の遺構も、この溝ＳＤ1445と同時期と考えられる。また、土墨ＳＡ1428を隔てた、南の遺構群とも同一時期と考えられる。

この地区は、下層において比較的多くの遺構が検出されたが、この地区の性格を決定付ける要素には乏しい。しかし、この城戸ノ内においては、中規模の区画であるとは言えよう。上層においては、ほとんど削平されているため、不明である。

U地区　（ＰＬ．９　第５・６図）

南北約35m と比較的小地区であるため、この地区を南北に分けるようなものは見あたらない。南のＶ地区とは、水田畦畔によって大きな段差が設けられており、検出した遺構面の間に約0.75m の差がみられる。また、北のＴ地区との間にも約0.7m の差がみられる。全体としてみると、北部の残存状況が良く、南部が削平されたと考えられる。

この地区において最も先行する遺構は、道路ＳＳ1425と、この側溝ＳＤ1442及横断溝ＳＤ1441である。次いで、道路は、約0.15m 積上げされ、溝ＳＤ1443とその暗渠ＳＺ1482等に代表される生活面となる。これに伴う遺構には、他に、井戸ＳＥ1456や石積施設ＳＦ1473等がみられる。南方の溝ＳＤ1444や石積施設ＳＦ1475等もほぼ同時期とみて良いと考えられる。この生活面から約0.5～0.6m 上に、井戸ＳＥ1458に代表される生活面が考えられるが、ほとんど削平されていて、他には、石積施設ＳＦ1476を残すのみである。

前述したように、この地区を南北に区画する遺構はみられず、ほぼ、一区画と考えられ、その幅は、約30m と比較的大きなものといえよう。

T地区　（ＰＬ．９・10　第７～10図）

この地区は、東西方向石列ＳＶ1426・1427によって３分される。南部は、南北約28m の幅である。南半が比較的残存状況が良く、一部ではあるが、建物ＳＢ1449・1450等も検出されている。ほぼ、同一時期の遺構とみられるが、礎石や覆土との関係から、井戸ＳＥ1453・1454は、これらに若干先行するものとみられる。この区画の南西隅において西へ延したトレンチ内から暗渠ＳＺ1481や、南北方向土墨とみられるＳＡ1553が検出され、これを境として、西方は、約0.45～0.55m 高い別区画となっていたと考えられる。北半においては、ほとんど遺構は検出されなかった。

中央部は、南北約33m の幅である。この区画を明確に分ける遺構は、みられないが、南から約12m 北で東西に走る溝ＳＤ1436によって２分されている可能性も考えられる。石列ＳＶ1427によって、南部の区画との間に、約0.3～0.4m の高低差がみられる。この区画は、比較的良く遺存しているが、詳しい性格はわからない。全体的に同一時期とみて良いものと思われる。

北部は、石積施設等が検出されている。石列ＳＶ1426によって、中央部の区画との間に約0.2m の高低差がみられる。この区画は、第30次調査によって調査されている北方の区画と一体の遺構

とみられる。

ＳＳ1425　（ＰＬ．11　6図）　Ｕ地区北端に位置する東西道路で、幅は 4.5m である。この道路を境にして、北のＴ地区とは、約 0.7m の高低差がみられる。南北には、側溝ＳＤ1442・1439がみられる。この道路は少なくとも２期に渡って機能したと考えられる。上・下の道路面の間には0.15m の高低差がみられ、いずれも、砂利敷のしっかりとした面を持っており、それぞれの時期に応じ、横断する溝が検出されている。

ＳＶ1426　（ＰＬ．10　9・10図）　Ｔ地区中央部北寄に位置する東西石列である。一部にこの石列に沿って、幅0.8ｍの裏ごめ石らしいものもみられることから、小土墨状の遺構であった可能性が強い。この石列によって隔てられた南北の区画の間には少なくとも、0.2m の高低差が存在する。

ＳＶ1427　（８図）　Ｔ地区南部北端に位置する東西石列である。この石列に対応するように、約 2.1m 南にＳＸ1506・1507が存在しており、この間が、土墨もしくは、通路となっていた可能性も考えられる。

ＳＡ1428　（ＰＬ．9・12　3・4図）　Ｖ地区中央に位置する東西土墨で、幅は、0.8mである。この地区で検出された遺構の中の下層の遺構である。これを境にして南北の区画間には、 0.4～0.5ｍの高低差がみられる。

ＳＶ1429　（ＰＬ．9　3図）　Ｖ地区南半中央に位置する東西石列である。この地区における下層の遺構群の一つである。前述の土墨ＳＡ1428とは、内法で６ｍ南に位置する。この石列を境にして南北の区画間には約0.15m の高低差がみられる。

ＳＶ1432　（２図）　Ｗ地区南端で検出された南北石垣である。後世の水田化に際して設けられた遺構とみられる。

ＳＤ1433　（10図）　Ｔ地区北部で検出された東西溝で、幅は、0.18m 、深さ 0.1m である。側石も多く抜き取られている。

ＳＤ1434　（10図）　Ｔ地区北部で検出された南北溝で、溝ＳＤ1433にそそぐ。幅0.15m 、深さ 0.1m である。ＳＤ1433同様ほとんど側石は欠けている。

ＳＤ1435　（ＰＬ．10　9・10図）　Ｔ地区中央部北端で検出された南北溝で、幅0.18m 、深さ 0.2m を計る。北で少し東へ曲げられており、少しみだれている。このことから、一部改変された可能性が考えられる。また、南端近くは、ほとんど側石が抜き取られている。この溝は、東の建物ＳＢ1448に関連する遺構であろう。

ＳＤ1436　（ＰＬ．10　8・9図）　Ｔ地区中央部に位置する東西溝で、幅 0.2m 、深さ 0.1m とみられるが、側石は、ほとんど抜き取られている。西端で、少し北へ湾曲している。この溝で、この中央部の区画は、２分されていたことも考えられる。

ＳＤ1437　（８図）　Ｔ地区中央部南よりに位置する南北の溝状遺構で、幅 0.3m 、深さ 0.1m 、長さ４ｍを計る。当初より側石は存在しなかったとみられる。

ＳＤ1438　（ＰＬ．10・13　7図）　Ｔ地区南部に位置する東西溝で、幅 0.3m 、深さ0.12m を計る。素掘りの溝とみられ、側石はみられない。建物ＳＢ1449を横切っている。性格は不明である。

ＳＤ1511　（ＰＬ．10・13　7図）　Ｔ地区南部に位置する東西溝で、幅0.18m 、深さ 0.2m を計る。建物ＳＢ1449・1450の間に位置する。ちょうど、ＳＢ1449の西南隅の礎石近くから始まっており、これらの建物に関連する遺構であると考えられる。

ＳＤ1439　（ＰＬ．11　６・７図）　Ｕ地区北端に位置する東西溝で、幅 0.2m 、深さ 0.2m を計るが、南壁は、道路ＳＳ1425の路肩を兼ねており、北壁より約 0.3m 高くなっている。西端は、南北土塁ＳＡ1553を潜り、南北溝ＳＤ1440と繋っている。この幅 1.8m の土塁を潜る部分は、暗渠ＳＺ1481となっており、底には敷石がみられ、天井石は、大きなものは、 100cm×60cm×18cm である。内径は、幅 0.3m 、高さ0.25m を計る。この溝ＳＤ1439は道路ＳＳ1425の側溝であり南北土塁ＳＡ1553の西の区画の排水を集め、東の一乗谷川へ流す用途を持つと考えられる。

ＳＤ1441　（ＰＬ．11　６図）　Ｕ地区北端に位置する南北溝で、道路ＳＳ1425を横断し、北側溝ＳＤ1439にそそぐ。この地区における最下層の遺構の一つで、幅 0.2m 、深さ0.18m を計る。

ＳＤ1442　（ＰＬ．11　６図）　Ｕ地区北寄りで検出された東西溝で、道路ＳＳ1425の南側溝と考えられる。幅 0.2m 、深さ 0.2m 程度とみられるが、かなり壊されており、不明な点も多い。最下層の遺構の一つで、道路を横断する溝ＳＤ1441と繋っていたとみられる。

ＳＤ1443　（ＰＬ．11　６図）　Ｕ地区北寄りで検出された溝で、道路を斜めに横断後、東へ大きく曲る。幅 0.2m 、深さ0.15m を計る。道路横断部は、暗渠ＳＺ1482となる。この暗渠は、内径幅 0.2m 、高さ0.12m を計り、天井石は、30cm×20cm×15cm程度の石を用い、間隙を径５cm程度の小石で塞いでいる。この地区全体に検出されている中層の遺構群に属する。

ＳＤ1444　（５図）　Ｕ地区南寄りで検出された東西溝で、幅 0.2m 、深さ0.15m を計る。側石は一部抜き取られている。この地区全域で検出された、中層の遺構群の一つである。

ＳＤ1445　（ＰＬ．12　４図）　Ｖ地区北部に位置する東西溝で、幅 0.2m 、深さ0.15m を計る。かなり側石は抜き取られている。この溝の西端には、幅 0.6m の土塁状遺構ＳＸ1542がみられることから、この溝によって、南北に区画されていたことも考えられる。

ＳＤ1446　（ＰＬ．12　４図）　Ｖ地区北部西で検出された南北溝で、幅 0.2m 、深さ0.15m を計る。南端は、ＳＤ1445に繋っていた可能性が強いが、性格等は不明である。

ＳＤ1447　（３図）　Ｗ地区北端に位置する東西溝で、幅0.33m 、深さ 0.1m とみられるが、一部の検出のため、不明な点が多い。

ＳＢ1448　（ＰＬ．10　９・10図）　Ｔ地区中央部北に位置する礎石建物である。一部の検出のため、不明な点が多い。脇に、南北の溝ＳＤ1435が存在することから、南北棟と考えられる。

ＳＢ1449　（ＰＬ．10・13　７図）　Ｔ地区南部に位置する礎石建物で、南北長、8.45m とみられる。東西は、2.82m を検出しているが、さらに東へ延びているとみられる。内部を溝ＳＤ1438が通っているが、どのような性格を持つのか不明である。

ＳＢ1450　（ＰＬ．10・13　７図）　Ｔ地区南端に位置する礎石建物で、南北長は、 5.8m である。この建物の北に位置する建物ＳＢ1449との間は、礎石心々で、0.94m であり、かなり近接しており、また、溝ＳＤ1511が存在している。一部の検出にとどまるため、詳しい性格は不明である。また、この２つの建物の礎石のレベルをみると、ＳＢ1450の方が、約0.08m 低くなっている。

ＳＸ1496　（ＰＬ．10　９・10図）　Ｔ地区中央部北端に位置する石敷である。土塁状遺構ＳＶ1426に接し、南北 1.0m 、東西 2.0m 程の拡りを持っている。20～30cm程の大きさの天端の平らな石を並べている。性格は現在のところ不明である。

ＳＸ1497　（９・10図）　Ｔ地区中央部北寄りで検出された南北に細長い砂利敷遺構である。本来は、東西へもう少し拡っていたものが一部削平されたとみられる。

ＳＸ1504　（ＰＬ．14　８図）　Ｔ地区中央部南端に位置する越前焼大甕埋設遺構である。底部が約 0.4m 埋められた状態で検出された。このように単体で埋設使用される例は他にもみられ、水甕としての用途が推定される。

ＳＸ1509　（ＰＬ．13　７図）　Ｔ地区南部中程に位置する石敷遺構である。東西 1.0m 、南北 1.0m 程の規模を有し、径約10cmの石を敷きつめている。また、この南端を縁取ると考えられる部分は、石を木端立て使用している。周囲にはこうした縁取りが巡らされていたと考えられるが現在は３石残るのみである。こうした状況から、水を使用する流しのような用途の遺構と推定される。東の建物ＳＢ1449と関連する遺構であろう。

ＳＸ1510　（７図）　Ｔ地区南部中程に位置する砂利敷遺構である。南は溝ＳＤ1438を境とし、また西、北はほぼ直線的に範囲が設定されている。東は一部削り取られているため不明な点もあるが、東西 2.0m 、南北 1.6m 程の範囲とみられる。用途等は明らかでない。

ＳＸ1519　（６図）　Ｕ地区中程で検出された石敷遺構である。東西 1.6m 、南北 1.0m 程の規模を有する。並べられている石の径は10～20cmと少しばらつきがみられる。

ＳＸ1524　（ＰＬ．14　６図）　Ｕ地区中程西端で検出された越前焼大甕埋設遺構である。腰部から下が埋められていたとみられ、深さは約 0.5m である。

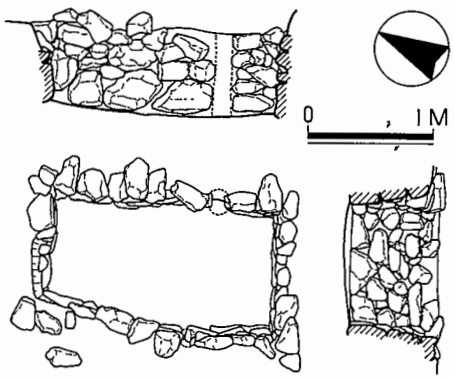
ＳＸ1532　（ＰＬ．９・12　３・４図）　Ｖ地区北部南端に位置する。全体的に焼土がみられ、西端には甕の上部が天地を逆にして伏すように据えられている。この部分は他に比べ少し深く 0.3m であるが、東半は 0.1m の深さとなる。用途は不明である。

ＳＸ1534　（３図）　Ｖ地区南部南寄りで検出された石敷遺構である。他の石敷遺構とは多少異なり、表面は平坦とはいえず、石で敷き固めたといった様相を呈している。南北 4.5m とかなり広い範囲にみられる。

ＳＸ1539　（２図）　Ｗ地区北部中程で検出された越前焼大甕埋設遺構である。底部約35cm程を残す。

ＳＥ1451～1462　（表－２　ＰＬ．14）　今回検出した井戸である。安全面での問題もあり、底までは掘り下げず、確認するにとどめた。この谷内で検出される井戸はこの例にみられる様に一般的には径0.7～0.8m 程である。ＳＥ1462は例外的な大口径の井戸で 1.2m を計る。天端の踏石まで完全に残る例は比較的少ない。

ＳＦ1212・1463～1480　（表－３　ＰＬ．15）　石積施設である。単純な構造・形式を取っており、用途等を特定することが困難な場合が多いが、他の調査によって明らかとなった便所とか泥溜・貯蔵穴・ゴミ溜といった機能が想定される。形状は一般的には 1.0m 前後の矩形平面を呈し、約 0.6m 程の深さに石を３～４段に積むが、今回検出されたＳＦ1473は例外的なもので、円形を呈している。また、ＳＦ1464（挿図－１参照）は壁面に柱を設ける特殊な例である。この柱は径12～15cm程のもので、底面からさらに0.15m 下から掘立とする。この柱等を利用し、あるいは便所のような施設と考えることも出来よう。また、ＳＦ1212等にみられるように、中途において一



挿図－１　　ＳＦ1464

方の壁面の前面に新たに壁面を積み、規模を縮少する例も多くみられる。

表－2　井戸一覧表

遺構番号	位　置	径(m)	備考	参照図版
SE1451	T地区北部	0.6		8図
SE1452	T地区中央部	0.8	天端有？	PL.6　7·8図
SE1453	T地区南部	0.8	上部破壊	6図
SE1454	同　上	0.75	上部破壊	PL.6　6図
SE1455	同　上	0.75		6図
SE1456	U地区	0.7	天端有	5図
SE1457	同　上	0.7		4図
SE1458	同　上	0.8	天端有	PL.6　4図
SE1459	V地区北部	0.7	天端有？	PL.6　3図
SE1460	V地区南部	0.7	天端有？	PL.6　2図
SE1461	同　上	0.8		2図
SE1462	V地区北部	1.2	天端有？	PL.6　1図

表－3　石積施設一覧表

遺構番号	位　置	形状(m)				備考	参照図版
		東西	南北	深	段数		
SF1212	T地区北部	0.75	1.2	0.6	4	南北 0.9に縮少	PL.7　9図
SF1463	同　上	1.0	0.8	0.45		東西 1.2？	9図
SF1464	同　上	1.8	1.0	0.8	5	南・北壁に柱有	PL.7　9図
SF1465	T地区中央部	1.2	1.2	0.8	5～6	底部 0.9× 0.9	8図
SF1466	同　上	1.0	0.9	0.4	2		8図
SF1467	同　上	1.0	0.9	0.7	3～4		7·8図
SF1468	同　上	0.9	1.1	0.9	7		PL.7　7図
SF1469	同　上	0.8	0.7	0.5	4		PL.7　7図
SF1470	T地区南部	1.2	0.9	0.6	3～4	東西 0.9に縮少	PL.7　6図
SF1471	同　上	0.85	0.85	0.25			6図
SF1472	同　上	0.9	1.2	0.8	5～6		6図
SF1473	U地区	上径 0.9	下径 0.75	1.0	10	円　形	PL.7　5図
SF1474	同　上	—	1.0	0.3			5図
SF1475	同　上	1.0	1.1	0.7	3～5	南北 0.9に縮少	4図
SF1476	同　上	1.7	0.9	0.3		上部破壊	4図
SF1477	同　上	0.8	0.7	0.4	3		PL.7　4図
SF1478	V地区北部	0.6	0.9	0.18		上部破壊	3図
SF1479	W地区南部	1.1	0.9	0.6	3～4		PL.7　1図
SF1480	同　上	1.0	1.0	0.5	2		1図

2．遺　　物

第31次調査で出土した遺物は総点数7380点余である。そのうち道路、礎石建物、土塁等比較的遺構の残りが良好な発掘区の北半部に6割強が集中している。南半部は遺構の項で述べた通り、調査範囲が既設道路の路肩に近い部分が殆んどを占めており、そのため遺構は井戸・石積施設を除いて殆んど検出されず、遺物は表土にあたる耕作土層、及び床土のものが大半を占めていた。以下概略を述べる。

越前焼　（ＰＬ．16・17　第11～13図）

今回も越前焼の出土は他の遺物の量を凌いでおり、その中でも甕はやはり圧倒的に多い。しかし、前述したように、発掘区の設定に制約があったのと、遺構自体の位置関係からか、29・30・35・36次等でみられた埋甕遺構、いわゆる甕ピット群の検出はみられなかった。むしろ、単独で据えつけられたものが目立った。即ち、ＳＸ1504、ＳＸ1524、ＳＸ1532、ＳＸ1539である。(1)はＳＸ1504の甕で胴及び底部が約40cmの高さまで土中に埋められてのこっていた。肩から口縁部にかけての破片は少なく、かなり散逸している。(1)は一乗谷出土の甕の中では古い時期に位置づけられ、概報ⅨでⅠ群としたグループに属する。推定復原高約77cmで底部は焼き歪みによって凹みを生じている。つくりは全体に薄手で胎土は灰黒色を呈す。固く焼き締っている。口縁部はいわゆる折り返し口縁で、やや外開きとなっている。内側には指押えによる浅い沈線がみられる。口縁帯は幅約16mmである。頸部は一旦、垂直に立ち上るが長くは続かず、すぐに肩へと流れる。肩の張りは顕著である。破片数が少ないため、スタンプ文については不明である。肩と胴の継手には刻み目を入れた上に更に斜方向の細かいヘラ削りを施している。底部径は器高に比べて小さく、やや安定感を欠く。器壁外面は一旦、指押えによって成形したあとヘラ削りを数段に亘って行ない、更にその後横方向にナデつけている。ナデは特に肩から口縁部にかけて顕著にみられる。底部内面に磨耗痕が認められる。(2)はＳＸ1524で出土した甕でⅡ群に属す。(1)でみられた口縁帯は既に退化してみられず、外側に稜線、内側に細い沈線をのこすのみとなる。また(1)のような肩の張りはなくなりなで肩となっている。胴から腰にかけてはゆるやかな起伏を伴ないながら絞られてゆき、底部でいきなり強く屈曲する。粘土の継手は6個所認められる。器壁の外面には肩から胴にかけて調整痕が顕著にのこり、約10cm幅で下から上方にむかって数段に亘るヘラ削りが行なわれたあと、肩のところで刷毛状工具によって斜及び横方向に強くナデつけている。肩から口縁部にかけては釉がかかっているのと、器面調整のナデが丁寧に行なわれているため、ヘラ削りの痕跡ははっきりしない。スタンプは凸字で「本(？)」に格子目の組み合せと思われるがスタンプの版木が割れているのか、「本」の部分は不明瞭である。胎土は黒色で砂粒を含んでザラザラしている。底部内面に磨耗痕をのこす。(3)はＳＸ1532の甕で、前述したように倒立した状態で出土した。底部はすぐ隣りのグリッドの焼土ピットからまとまって出土している。この甕もⅡ群に属すると考えられるもので、口縁端部の肥厚化がわずかに認められるようである。器高約70cmで中甕のグループに入ろうかと思われるが、その割に口径が開いているのは焼成時の焼き歪みによるもので、楕円形につぶれた状態を呈しているものである。この甕は(2)に比べて肩が直線的に屈曲しているものの、胴から腰にかけてはゆるやかに起伏しながら底部へと絞られていく。胎土は堅緻でよく焼き締っている。器壁外面の調整は(2)と同様、粘土帯の幅で数段に亘って下から上へかき

上げるように粗くヘラ削りを施こした後、肩部で横方向に粘土の溜りをかき取るようにヘラ削りを行なっている。肩部に明らかにヘラ記号と思われる沈線が2本みられる。スタンプ文はない。粘土の継手は6ないし7個所みられる。(4)はⅢ群の甕でほぼ1個体分が遺存した。胎土は肌色を呈し、締りがない。口径84cm、器高約90cmを計りバランスのとれた器形である。口縁端部は最大限に肥厚し、内側の沈線は段に変わる。肩の位置はⅠ・Ⅱ群の甕に比べて上位に移動している。底部は出土時にも1片もみられず、作為的に打ち欠かれたことが考えられる。器壁外面のヘラ削りは5ないし6段に亘って施され、やはり(2)・(3)と同様に下から上へと斜方向にかき上げるようにして行なわれる。ヘラを止めた痕跡が三日月状にのこる。肩に格子目だけのスタンプ文が浅くみられる。粘土帯の継手は7個所認められる。

(5)は壺である。胎土は灰色でよく焼き締っており堅緻である。釉は黒色を示し光沢がある。内面は指押しによる成形の後、胴下半部に粗いナデ調整を加えている。外面は3ないし4段に亘ってヘラ削りした後、丁寧にナデ調整を施こしている。口縁部および胴部の一部を欠損しているがおそらくおはぐろ壺に比定されよう。(6)は内湾する鉢で器壁内外面に釉がみられる。胎土は灰黒色を示し、焼成は良好である。口縁部は指押えによって内側に強く押えこんでいる。(7)も同様の鉢であるが(6)に比べて大ぶりで口縁部も立ち上り気味である。色調は灰色で器面はザラザラしている。底部裏面に板目痕をのこす。(8)は擂鉢形を呈する鉢である。やや外反気味に開く。(9)は底の浅い鉢でやはり擂鉢形を呈す。口縁部は内湾気味に立ち上る。櫛状工具による扇形の刻みが3個所みられる。工具はいずれも左回転である。(10)は擂鉢である。一乗谷では通有のものでこのタイプは量的にも多い。色調は赤褐色で焼成も良好である。擂目は隙間なく施こされる。擂目は底部を中心に先ず放射状に4回引かれ、次に各々の間に数回ずつ隙間を埋めるように引いている。工具はこの場合は底部から口縁にむかっている。櫛の数は10本である。底部裏面に縄状の圧痕が認められる。

瀬戸・美濃焼陶器、土師質土器　（ＰＬ．18・19　第14・15図）

鉄釉には碗、壺、茶入、水滴等がある。(11)は小ぶりの天目碗である。口縁はくの字に強く外反する。釉は黒色でたっぷりと施釉されているが、器壁内外面に細かいヒビ割れが走り、かせている。(12)は厚手のずんぐりした碗で釉は柿渋の色にちかい。胎土は肌色でボソボソしている。器壁内面は露胎となっておりろくろ目をのこす。(13)は鉄釉の水滴である。胴下半部を欠損する。(14)は破片資料から復原を試みた鉄釉壺である。四耳を有すると思われる。頸部はほぼ直立し、ゆるやかに肩部へと続く。釉は鉄錆色を示す。胎土は肌色でボソボソしている。

灰釉には碗、皿、壺、片口鉢等がある。(15)は推定復原高40cmに達するとみられる壺でおそらく四耳を有するものと考えられる。口縁部先端で折り返され、少しつぶれた感はあるものの玉縁状をなす。口縁は開き気味で、肩は少し張った状態でゆるやかに胴部へと続く。肩および胴部には3ないし5条の平行沈線が3段に亘って施こされる。これと同タイプの四耳壺が30次で出土している（概報Ⅹ）。しかし、30次の壺は胎土が黄灰色を示し、焼きなまった感がするのに対し今回の資料は胎土が灰色で堅く焼き締っている。釉調も30次のものは厚目にたっぷりとかけられているのに対して薄く、胴下半部は釉流れが激しい。また肩の張りもわずかに残っているなど30次の資料よりも古式の様相をもつものと判断された。(16)は40次で出土した灰釉坏（概報Ⅻ第7図5）と同タイプのものである。成形・施釉の観察から坏とするよりも蓋の機能を考えた方が妥当のよ

うに思われる。（17・18）はみこみに印花文のスタンプを有する端反の皿である。

⑲は土師質土釜の破片である。口縁部と突帯の中間に「ヤ」のヘラ記号がみられる。⑳は土師質の皿の破片を打ち欠いて円盤状としたもので、灯明皿に使用する灯芯押えの未穿孔のものとも考えられる。

中国製陶磁器　（ＰＬ．19　第15図）

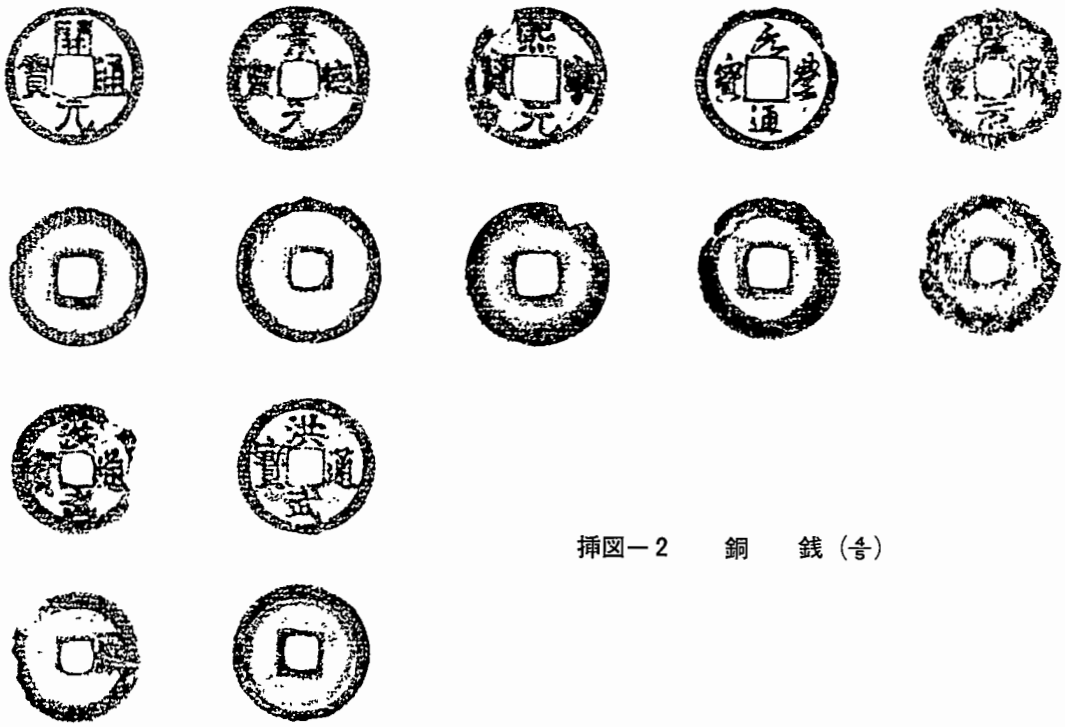
中国製陶磁器は今回まとまった遺物は出土せず、大半が破片資料である。

㉑は波状口縁をなす白磁の小皿である。みこみ及び底部裏面が露胎となっている。外面に口縁から底部にむかってヘラ描きによる沈線が放射状にみられる。㉒は菊花形の青磁皿で薄手のつくりである。２次加熱を受けたのか釉に光沢がなく、かせている。㉓は白磁の皿である。破片資料から復原を試みた。外反気味に開く、底の浅い皿で高台はない。全体につくりは薄手で胎土は乳白色、釉調は黄白色を呈す。細かい貫入がみられる。口唇部は露胎で、いわゆる口禿口縁となっている。器壁内面に曲線の暗文がみられる。底部裏面にも釉がかけられている。顕著なろくろ目をのこす。㉔は内面みこみに連続渦巻文と動物文をもつ染付皿である。口縁部を欠く。呉須は明るいブルーを示し、にじみはみられない。口縁部は内外面とも無文である。これに対し㉕は内湾する無高台、いわゆる碁笥底の染付皿であるが、呉須のにじみがひどく、色も黒みを帯びたブルーである。㉖は内面みこみに人物文を有する碗で、みこみが丸く盛り上り饅頭心碗の一群に属す。高台裏に「長命富貴」銘がみられる。２次加熱を受けたのか全体が黄褐色にくすんでいる。口縁部を欠く。㉗は破片資料から復原を試みた青磁盤である。口径27cmをはかる。体部に２条の沈線を施こし、ヘラ描きによる蓮弁がめぐる。内面もヘラ描きによる草花文がみられる。

金属製品　（ＰＬ．20　第16図）

金属製品には鉄釘、銅銭および各種金具類がみられる。出土傾向は溝や石組施設に集中するようである。

銅銭には開元通宝、景徳元宝、熙寧元宝、元豊通宝、聖宋元宝、洪武通宝等がある。特に洪武



挿図－２　銅　銭（$\frac{4}{5}$）

通宝は数種類のものが確認され、うち１枚の背面右側に「一錢」の文字銘が鋳出されているものがある（挿図―２）。

金具類は家具・装飾品・武具等多岐に亘り、その種類は雑多である。今、図示し得るものを挙げてみた。(28)は８字形銅製金具で幅約５㎜の板を折り曲げたもので同種のものが他に１点みられる。(29)は留金具、(30)は金製の金具で入念な細工が施こされている。刀装具の一部かと思われる。(31)は切羽である。類例は24次、40次等にみられ、殆んど同タイプに属しているようである。(32)は同じく刀装具の一種で鞘の口金かと思われる。錆が激しい。(33)は引手金具と考えられるものである。つまみの部分と座金に分かれており、つまみは座金の裏側で、横木をさし込んで止めている。座金は２枚あり、間に薄い片木板を挟み、４個所に鋲穴を穿って鋲で止めている。裏側の座金に布の断片が付着している。（34・35）はともに煙管の雁首部分である。(34)は断面円形で鎬がみられる。(35)は断面六角形を呈し、竹製の羅宇が残存している。(36)は銅錘である。高さ30㎜、重量51g（13.6匁）をはかる。鈕座には蓮弁がめぐる。一乗谷ではこの種の銅錘は現在までに10例確認され、その都度報告している。棹秤のおもりと考えられるがその形態にはバラツキがみられ、一定しない。従ってその法量も小は21.85gから大は113.7gと量差が目立つ。『七十一番歌合』の薫物うりにみられる、胴部に鎬の入ったおもりに酷似する例も今までに４点みうけられるが、これが通有のタイプであるかどうかは今のところ判断しにくい。

石製品　（ＰＬ．20　第16図）

石製品には火炉（バンドコ）、火鉢、鉢、盤、硯、砥石等がみられる。(37)は半欠の盤である。石材は青味を帯びた凝灰岩で、粗い白斑が多く認められる。器面調整は内面に比べて外面、底面は粗雑である。削り出しによる脚がつく。類例は13次（概報Ⅵ）にみられる。13次のものより小ぶりで底も浅い。(38)は平面楕円形を呈する小型の火炉で空気窓の部分を欠損するほかはほぼ完形である。蓋は伴出しない。石材はやや赤味がかった凝灰岩である。窓は長辺の一方にのみ開けられ、計５個であることがその割付線からも伺える。窓の寸法は縦29㎜、横19㎜をはかる。蓋受けの部分は奥側約10㎜で窓側にむかって幅広くなっていく。底部は無脚で若干あげ底風に凹ませている。器壁内面に粗いノミ痕がのこる。煤の付着が観察される。(39)は平面長方形を呈する火炉で空気窓、底部のコーナーの一部を欠く。蓋は伴出しない。石材はくすんだ灰色を示す凝灰岩である。類例は29次・40次に若干破片資料として認められる。成形技法に関しては通例のものと大差なく、特殊な加工は加えられていないようである。空気窓は６個開けられていたものと推定される。器壁内面は粗いノミ痕がのこり、特に底部では器壁に沿って左回りにノミが打たれ、凹凸面をそのままのこしている。器内に灰を入れる際の安定と熱効率をはかる工夫かと考えられる。ノミ幅は23㎜である。器形は各辺ともに多少のふくらみをもたせており、上辺より下辺を長くして重心を下げる工夫がみられる。蓋受けは(38)でみたようにやはり奥側より窓側の部分を幅広くとっている。底部は無脚で多少凹みをもたせている。他に３足を有する火鉢がある。石材は赤味を帯びた凝灰岩で粗い白斑が目立つ。細片のため全体の器形は図示し得ない。

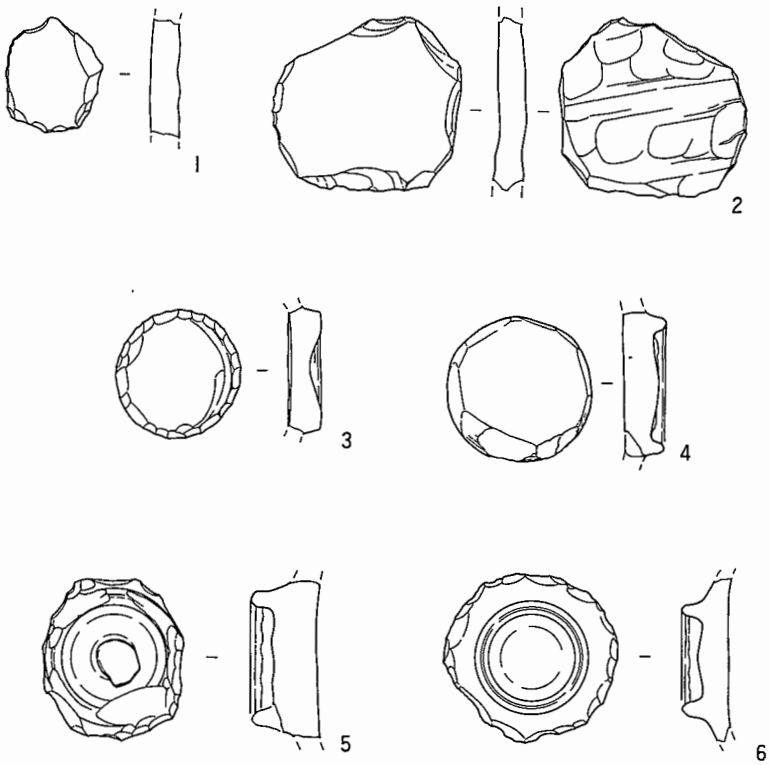
周知のように火炉や火鉢（瓦質製も含む）は暖房具として使用されたもので、火鉢が主として手を暖める道具であるのに対して火炉は主に足を暖めるものだと考えられ、両者はその機能の点で相互関係にある。現在までの調査例では破片の数量に差があるようにみうけられる。また材質の点では火炉に瓦質製のものが見当らず、バンドコと通称されるこの製品は今のところ全て凝灰

岩製である。耐火性を考えれば不向きとされる、この種の凝灰岩が何故大量に火鉢やバンドコに利用されたのか疑問点は多い。

附、円板状陶製品について

さて今回、挿図ー3に示した遺物は土器の破片に2次的な打ち欠きを加えて円板状としたもので、従来から草戸千軒町遺跡をはじめとする各遺跡でも指摘されてきた。一乗谷では本調査区に限らず、量比の差はありながらどの調査区からもコンスタントに出土しており、ごくありふれた遺物としてのイメージが強くなってきた。唯、遺憾ながら何に使用したかという点に関してはその根拠を示す遺構的、遺物的条件が今ひとつはっきりしないために元興寺極楽坊遺跡（日本仏教民俗基礎資料集成四「元興寺極楽坊Ⅳ」1977）での考察の域から抜け出ないまま、特殊遺物としての扱いに甘んじている観がある。これについてはいずれ詳細な検討を加える必要があろうかと考える。今回はその紹介にとどめておきたい。（1、2）は越前焼の甕の破片に加工を加えたもので大きさは一定しない。(3)は鉄釉碗の高台の円形を意識して、その周辺を打ち欠いたものである。(4)の灰釉碗高台も同様である。(4)の場合は打ち欠いた後、更に断面に研磨を加えた痕跡が認められる。（5、6）は中国製青磁碗の高台を利用したものである。他には図示しなかったが染付の破片を打ち欠いて円板としたものも見つかっている。第15図20の土製円板もあるいはこれらの範ちゅうに含めて把えられるかも知れない。

これら円板状陶製品はこれといった材質を問わず、国産、中国製、いずれの土器片をも利用の対象としている。つまり、一乗谷ではごくありふれた日常生活品としてのやきものの破片を対象としていることが考えられ、この点については草戸千軒町遺跡でも同じ傾向にあるようである（「草戸千軒町遺跡」1980)。更に破片の2次活用としては、円形を意識せず、割れたままの状態でその器面や断面部分に研磨を加えている例が見つかっている。越前焼の甕や壺の破片にその例が多い。この点については鎌倉の各遺跡の報告中でもつとに触れられているところである。



挿図ー3　円板状陶製品　0　15cm

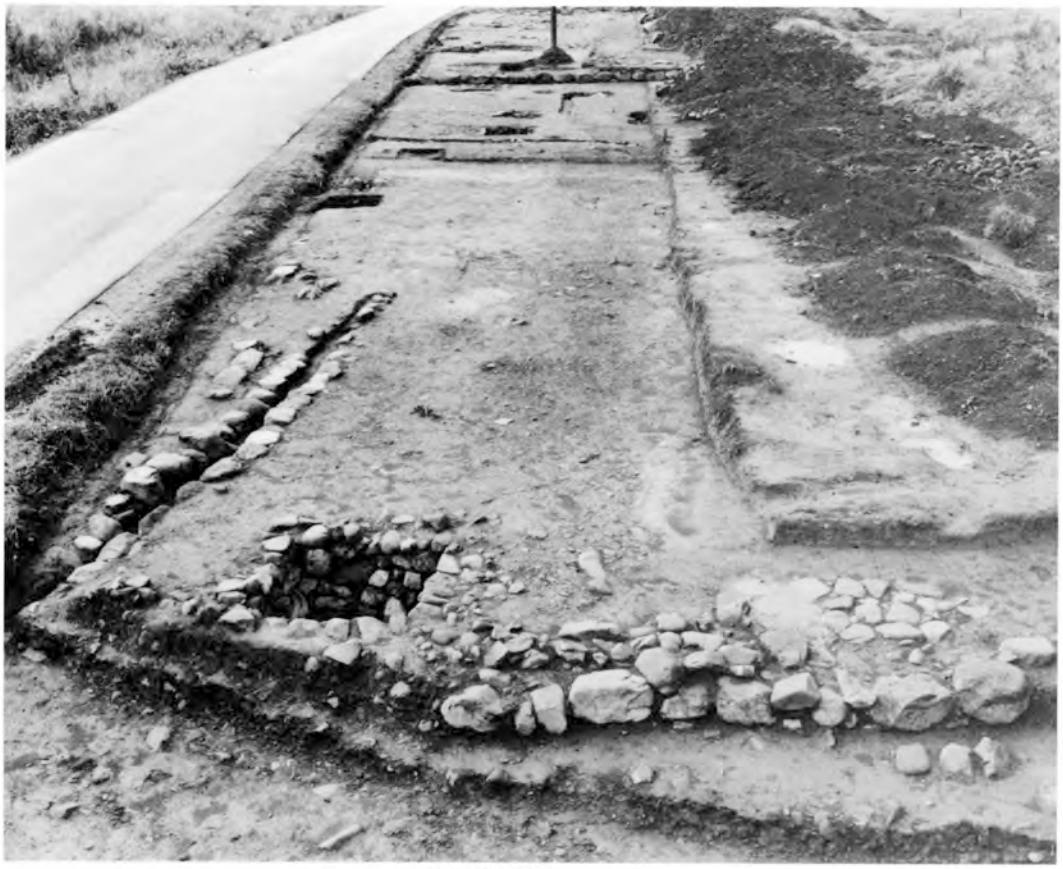
発掘区北半

北から

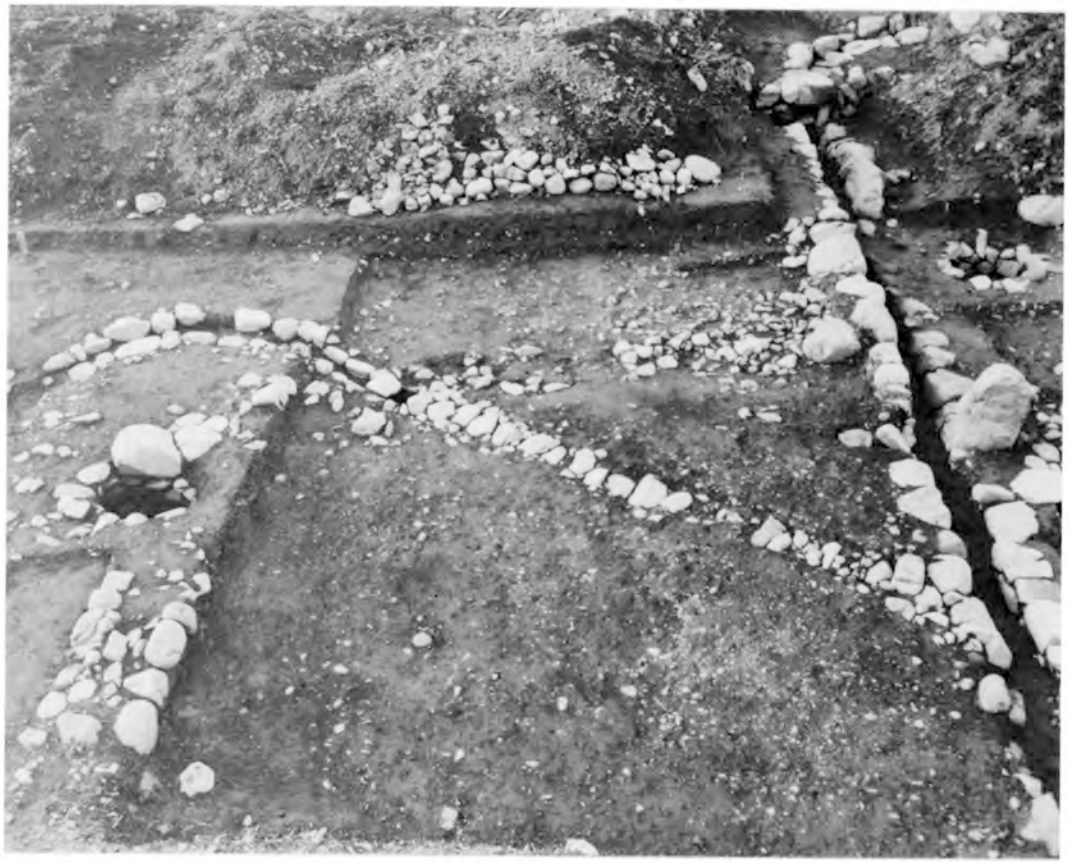
発掘区南半

南から

T地区南部　　南から



T地区中央部　　北から



道路ＳＳ1425（上層）　　東から

道路ＳＳ1425（下層）　　東から

土塁ＳＡ1428、カマド状遺構ＳＸ1532　　東から

溝ＳＤ1445・1446、土塁状遺構ＳＸ1542　　東から

建物ＳＢ1449　　東から

建物ＳＢ1450　　東から

SE1452

SE1454

SE1458

SE1459

SE1460

SE1462

SX1504

SX1524

SF1212

SF1464

SF1468

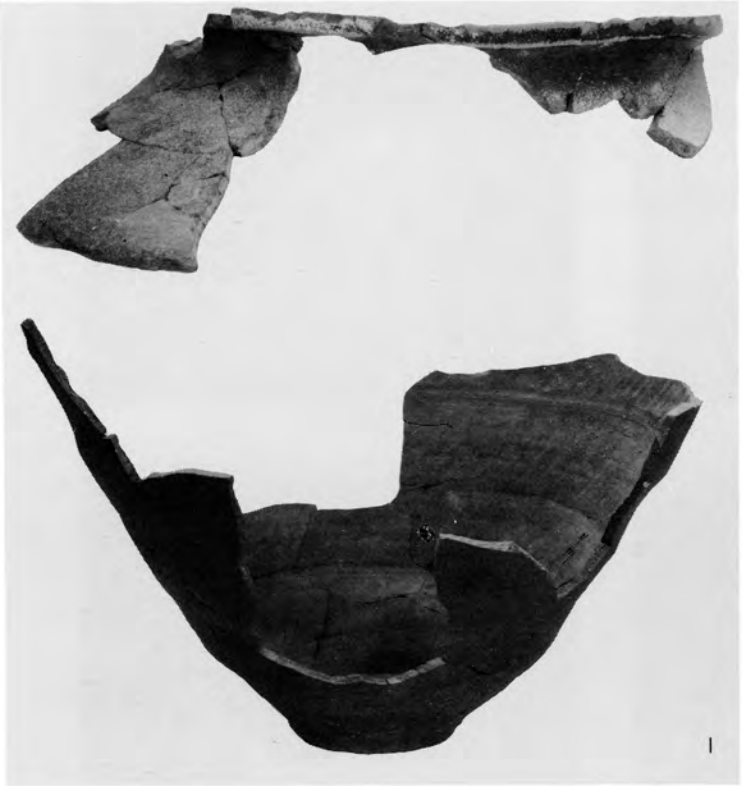
SF1469

SF1470

SF1473

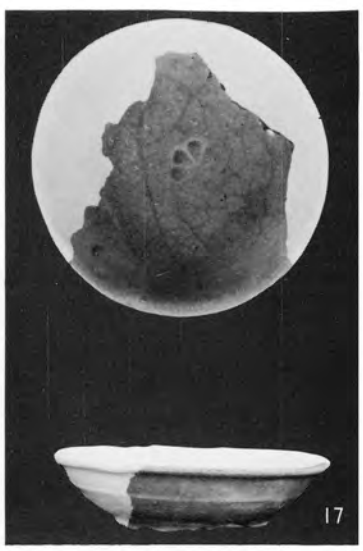
SF1477

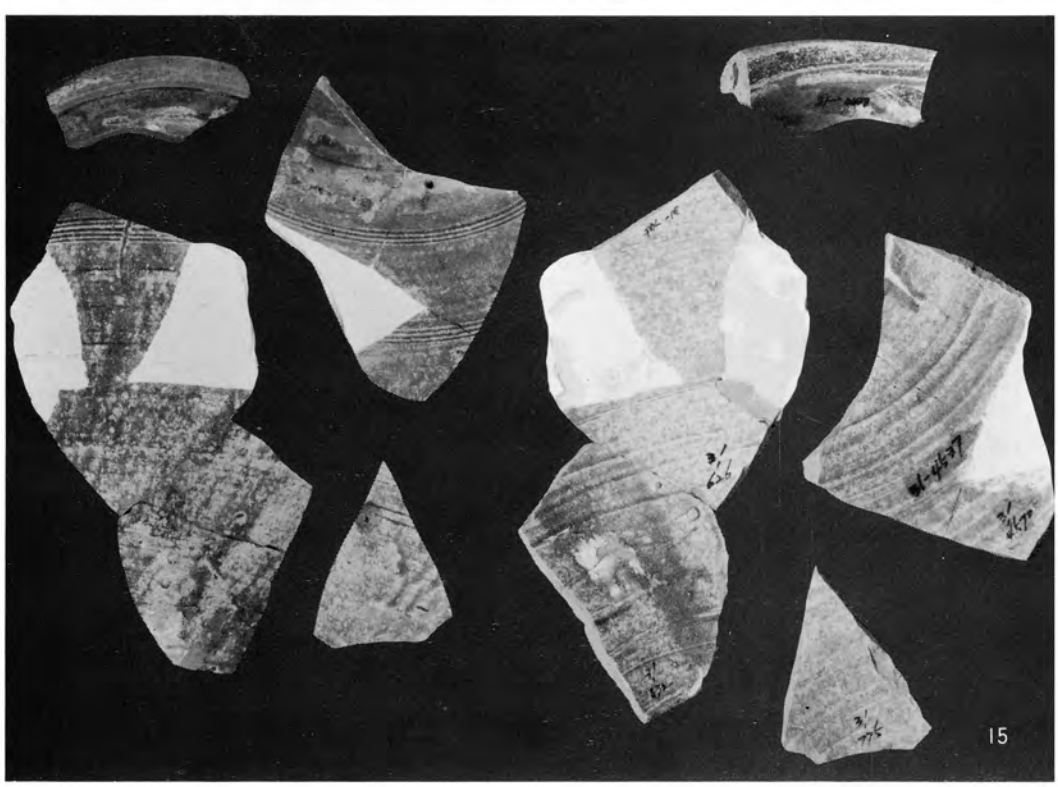
SF1479



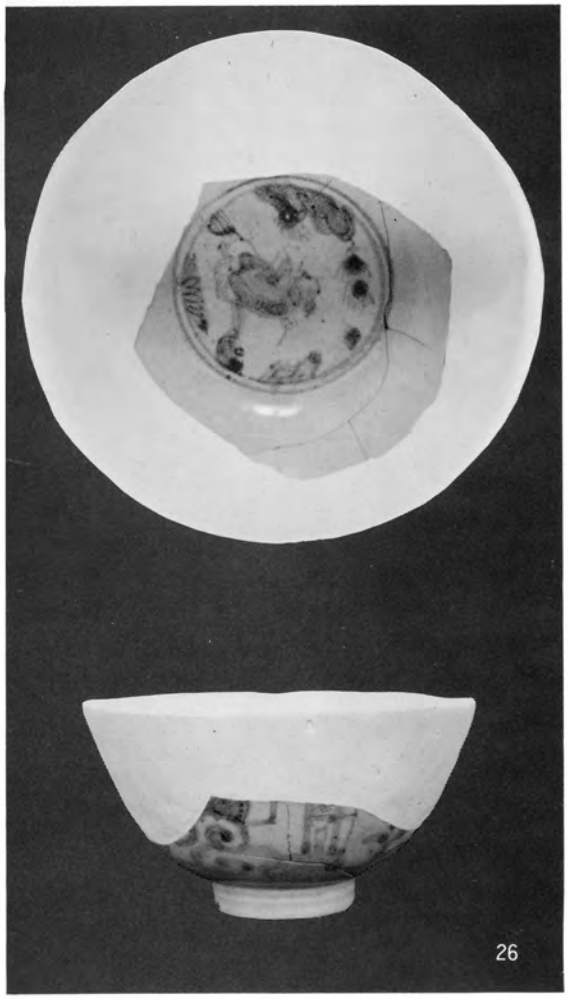
1～4．越前焼甕

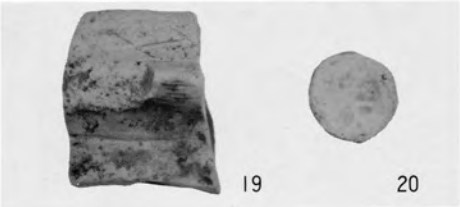
5．越前焼壺　6～9．越前焼鉢　10．越前焼擂鉢

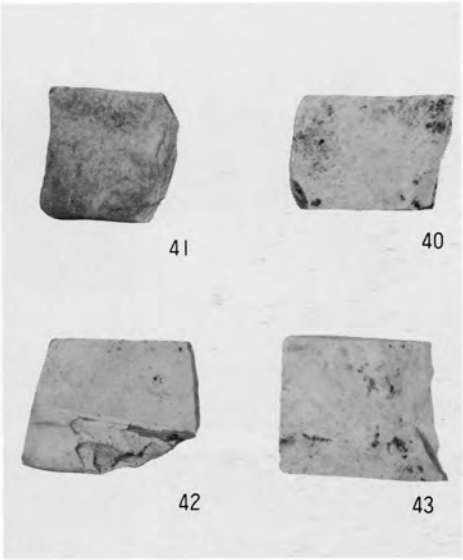


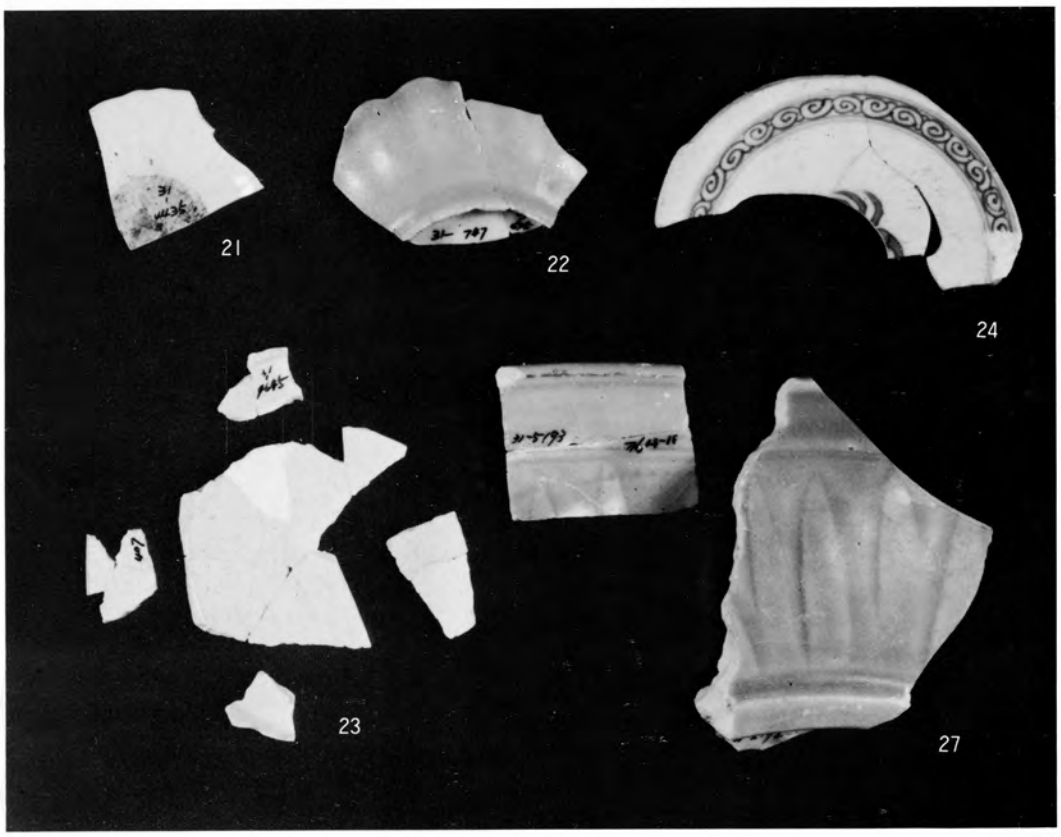


11・12. 鉄釉碗　13. 鉄釉水滴　14. 鉄釉四耳壺　15. 灰釉壺　16. 灰釉蓋　17・18. 灰釉皿

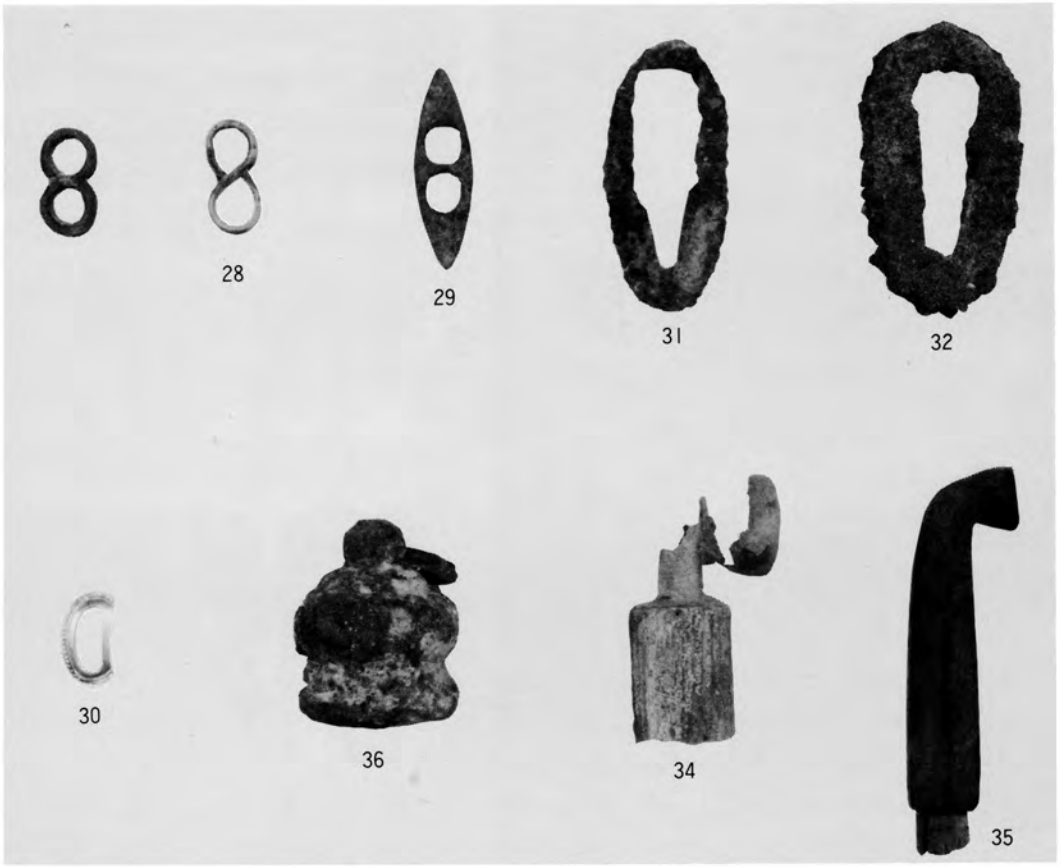


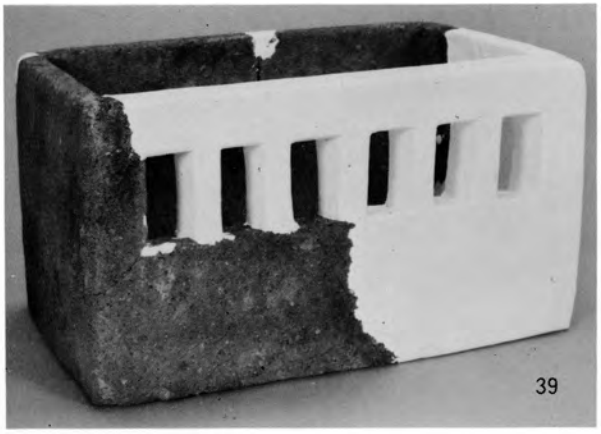






19. 土師質土釜　20. 土製円板　21. 白磁皿　22. 青磁皿　23. 白磁皿　24・25. 染付皿　26. 染付碗
27. 青磁盤　40～43. 砥石

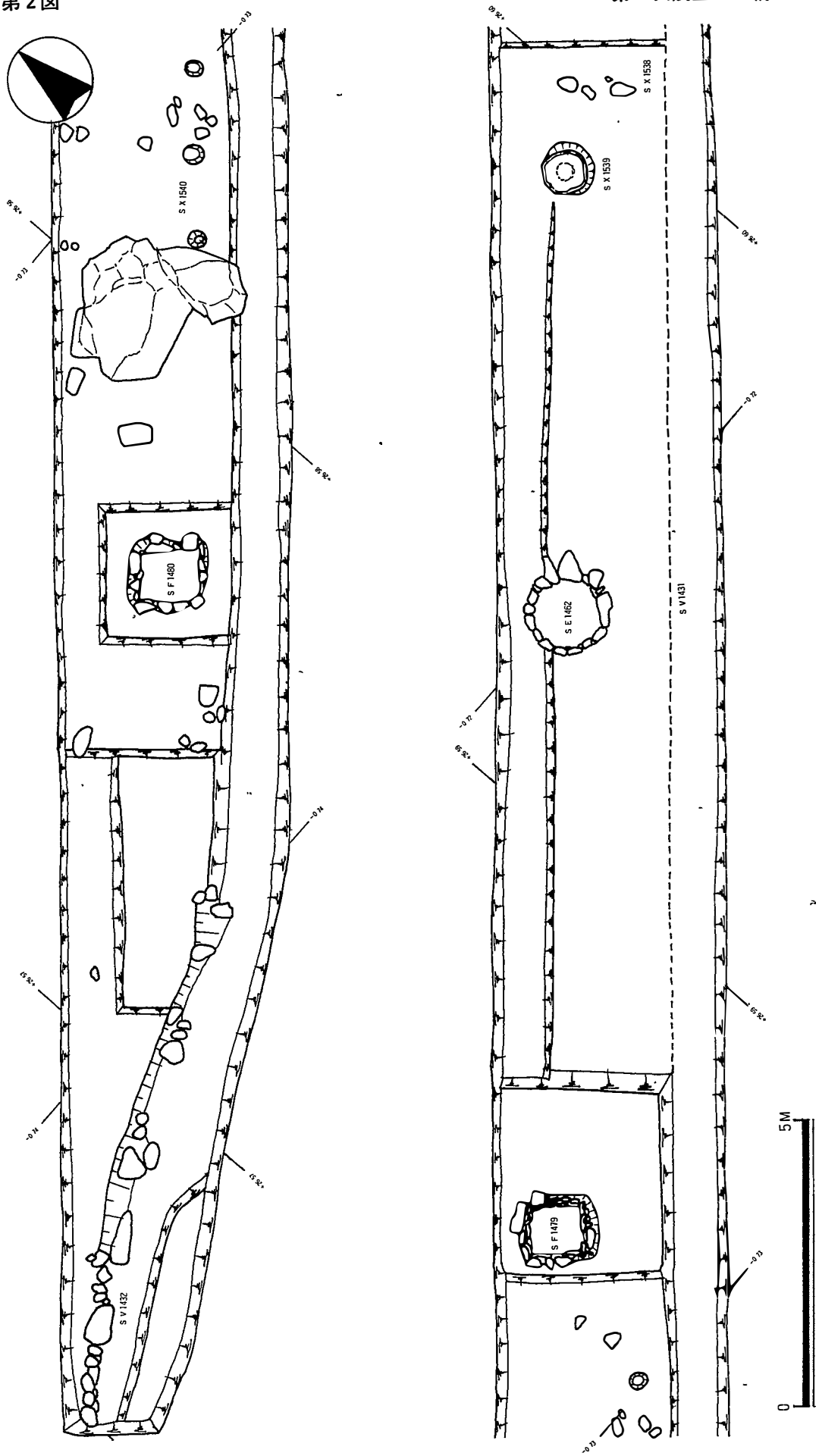




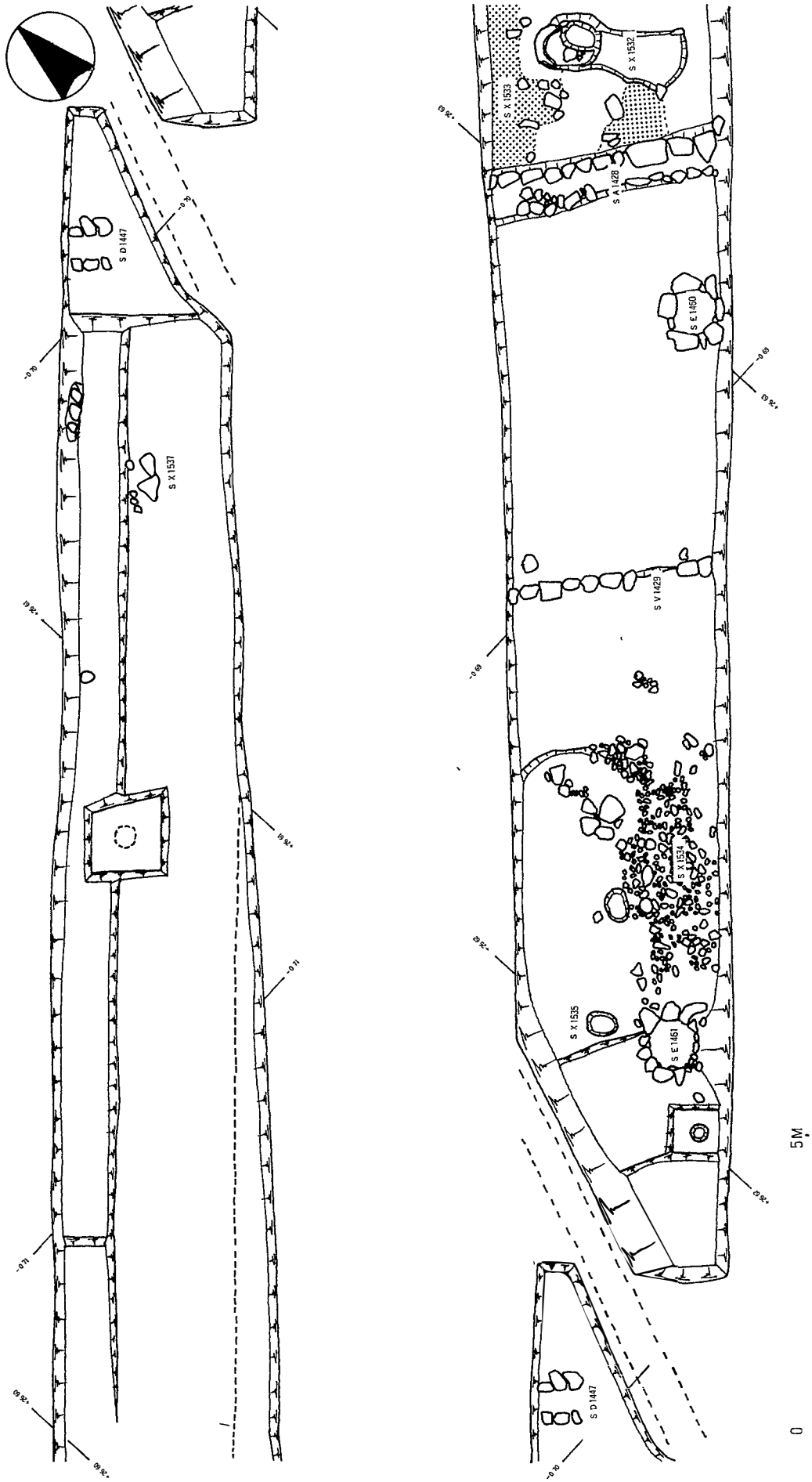
28・29. 銅製金具　30. 金製金具　31・32. 刀装具　33. 引手金具　34・35. 煙管雁首　36. 銅錘
37. 石製盤　38・39. 火炉

第2図

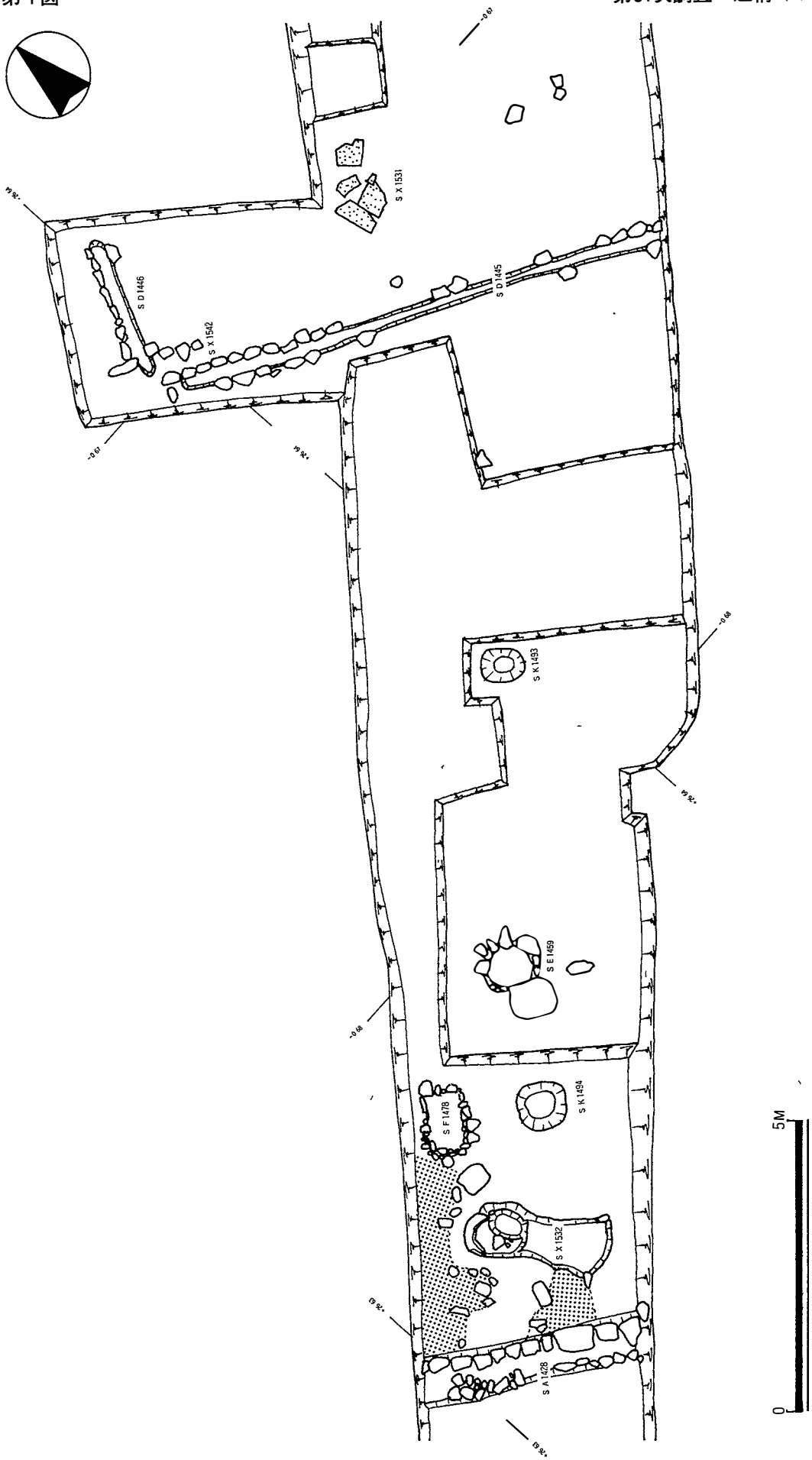
第31次調査・遺構 (1)



第３図　　第31次調査・遺構 (2)

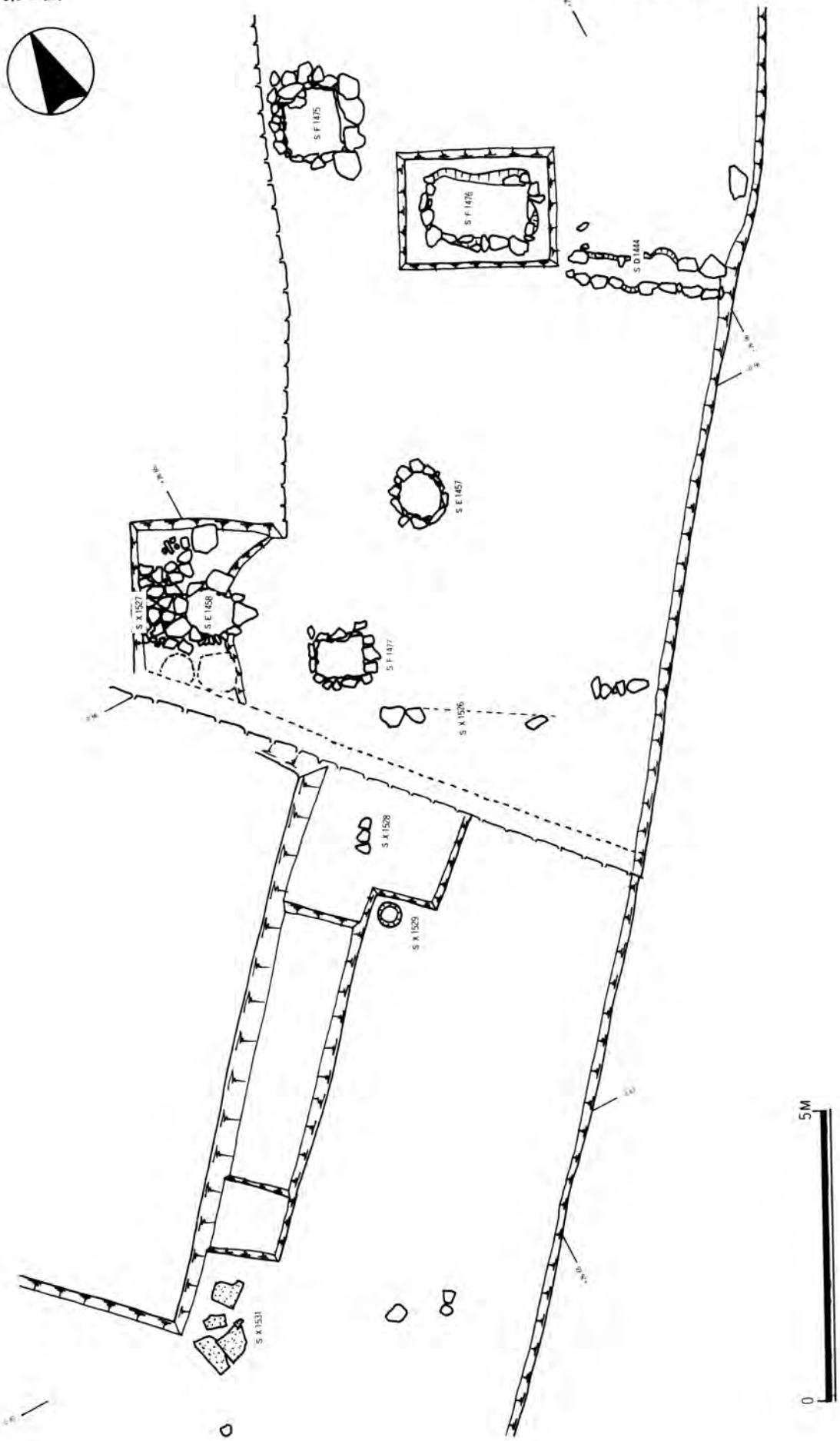


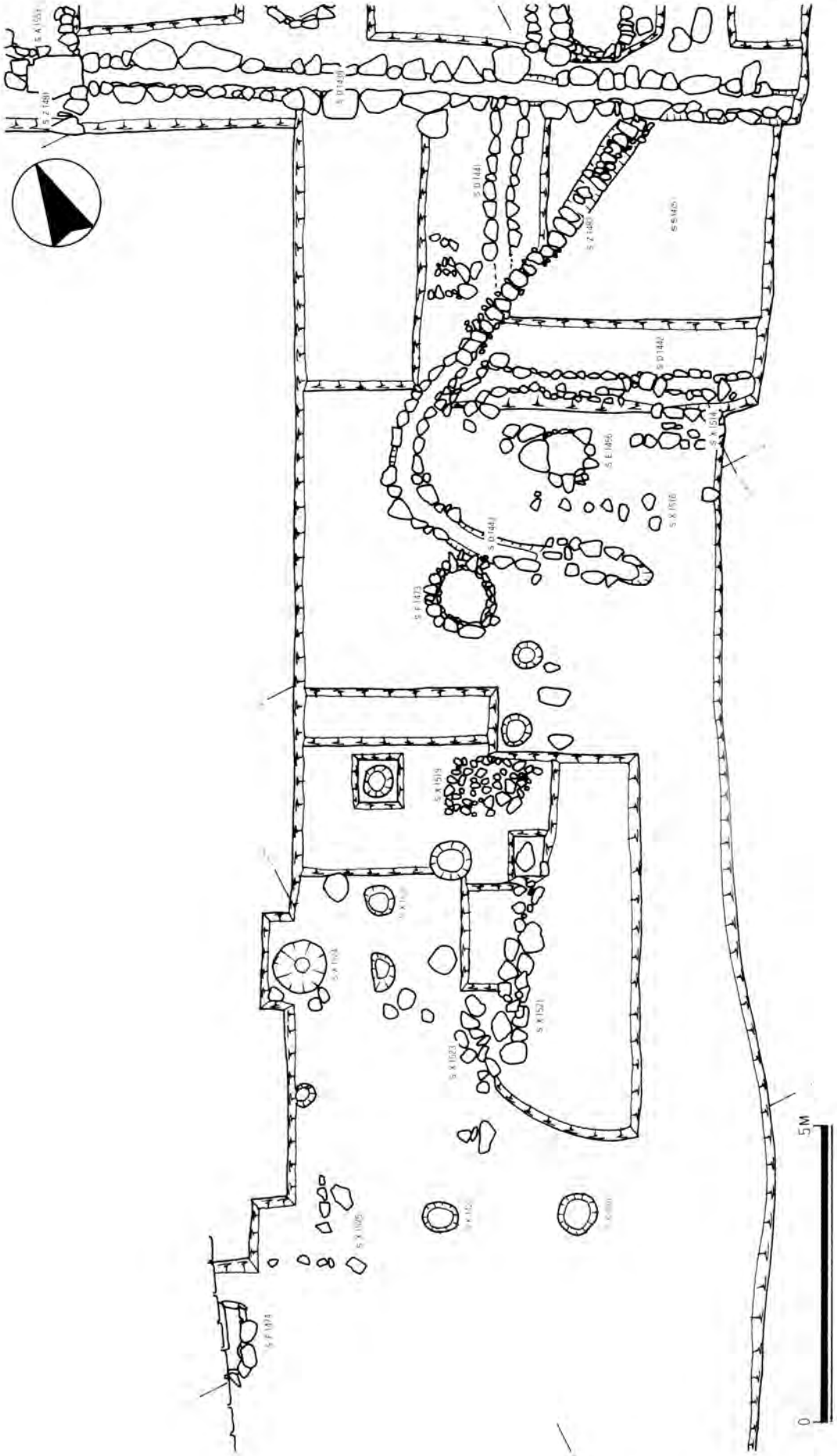
第４図　　第31次調査・遺構（3）



第5図

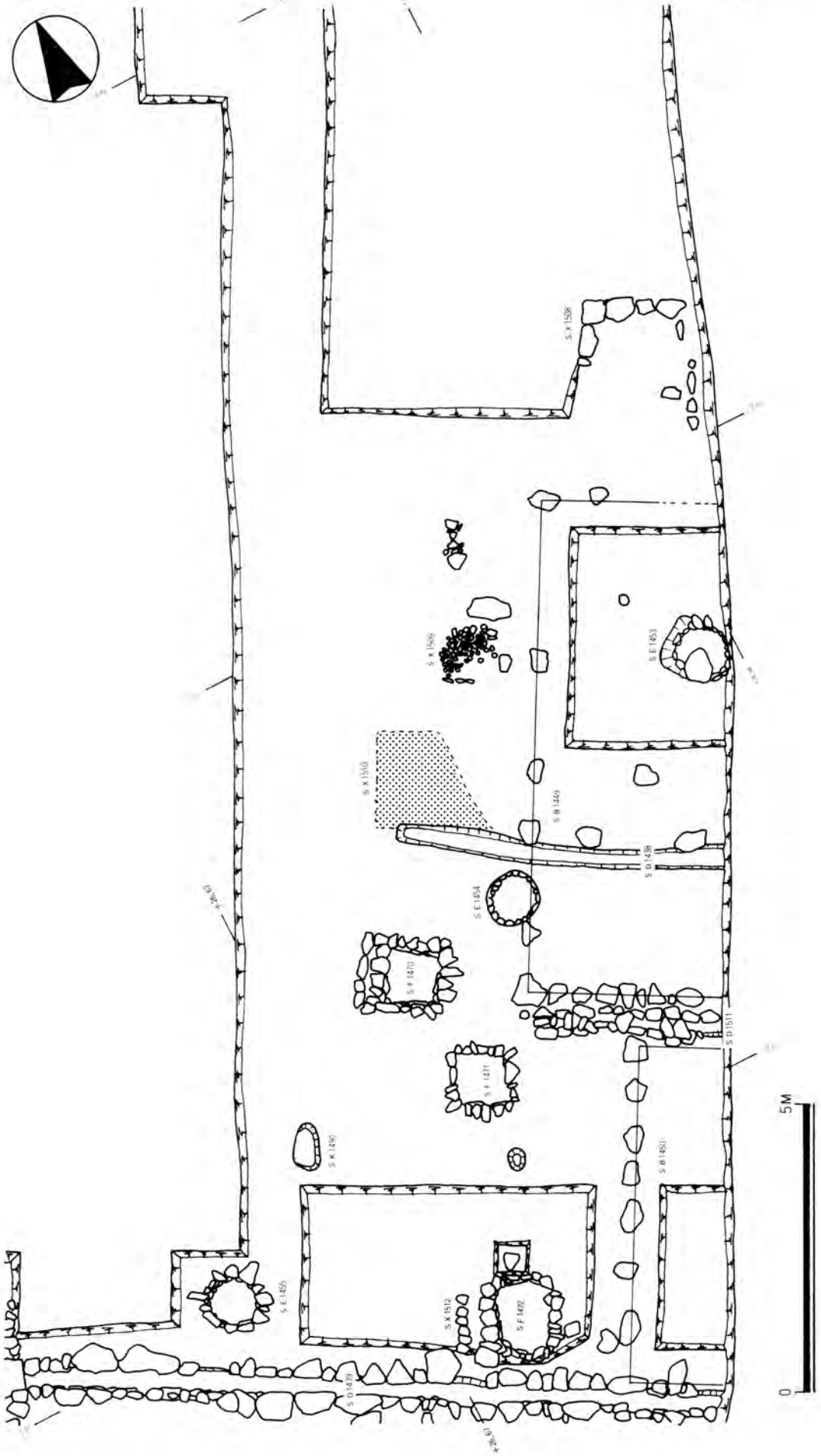
第31次調査・遺構（4）




S X 1551
S Z 1480
S D 1440
S D 1441
S Z 1487
S E 1485
S D 1442
S X 1514
S E 1456
S X 1516
S D 1444
S F 1473
S X 1519
S X 1521
S X 1523
S X 1525
S F 1078
0
5M

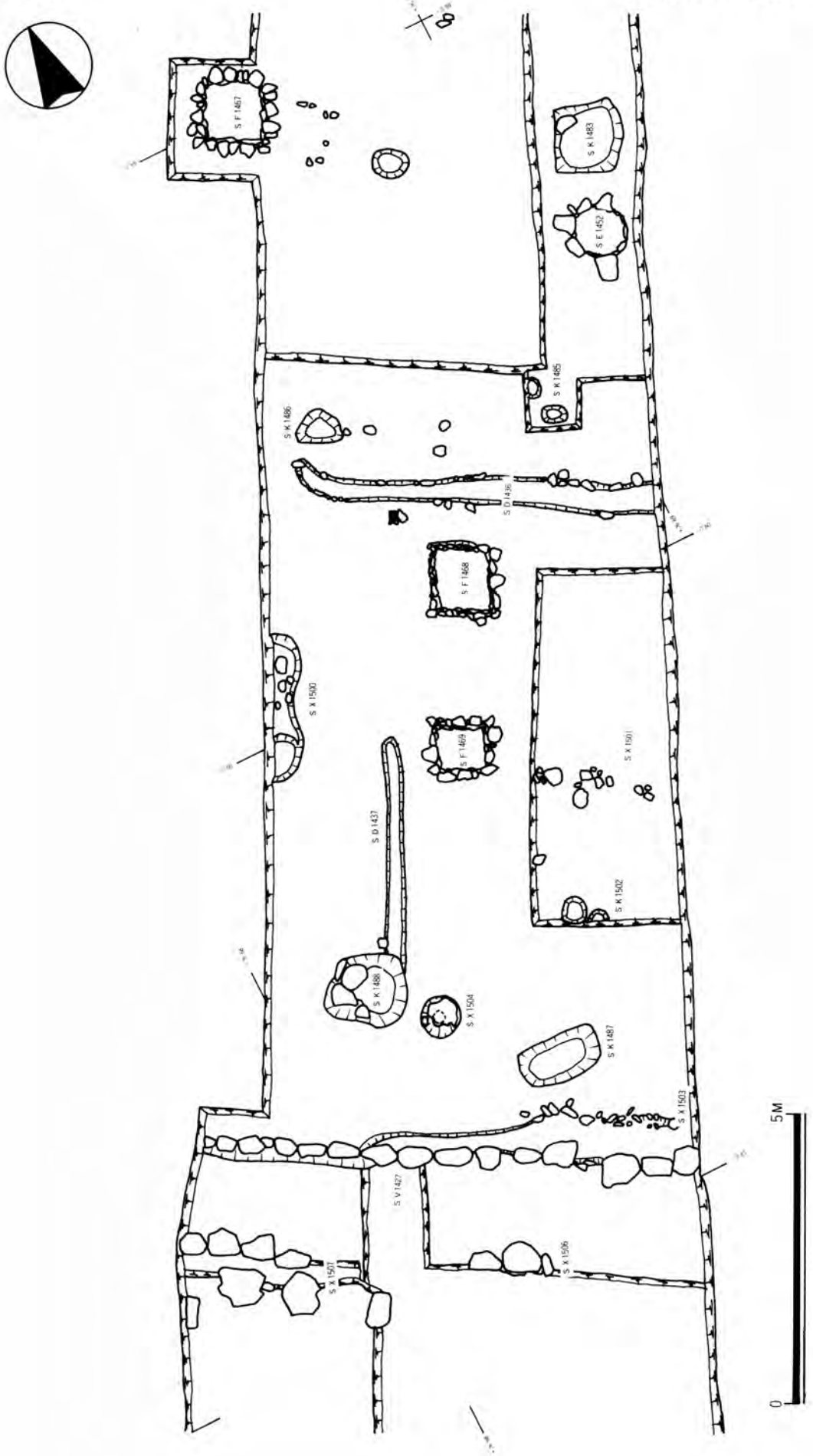
第７図

第31次調査・遺構（6）



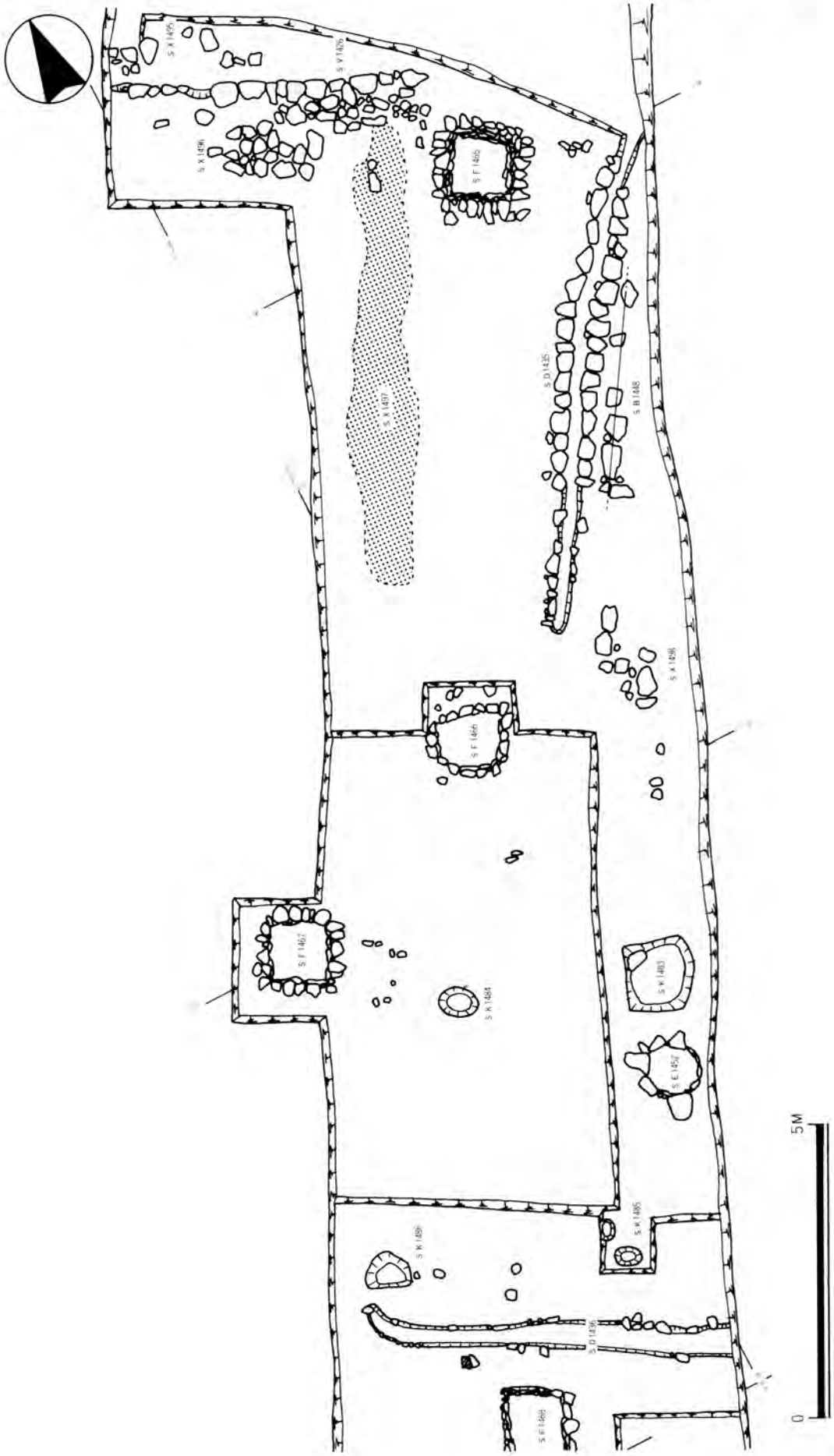
第８図

第31次調査・遺構（7）

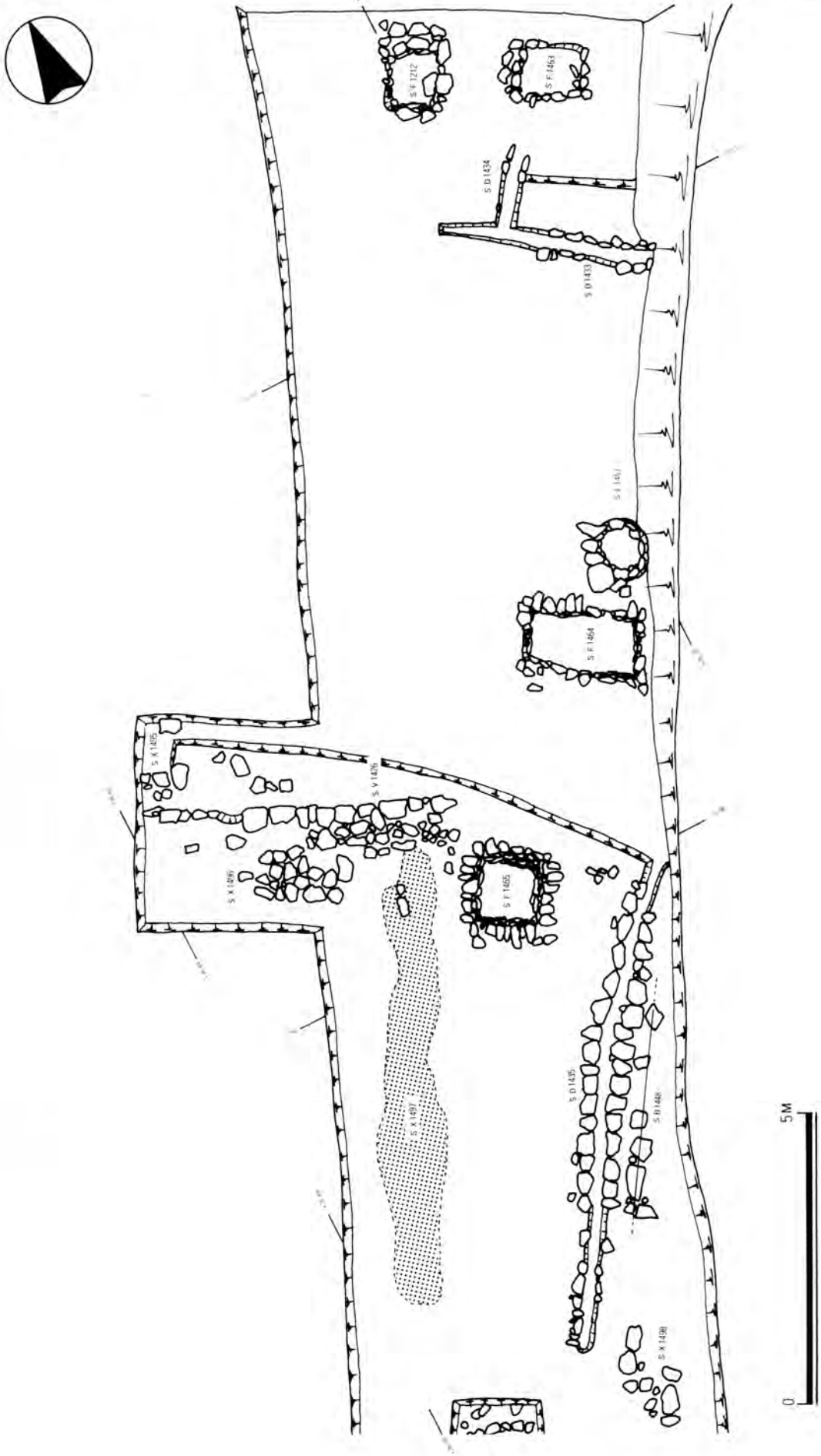


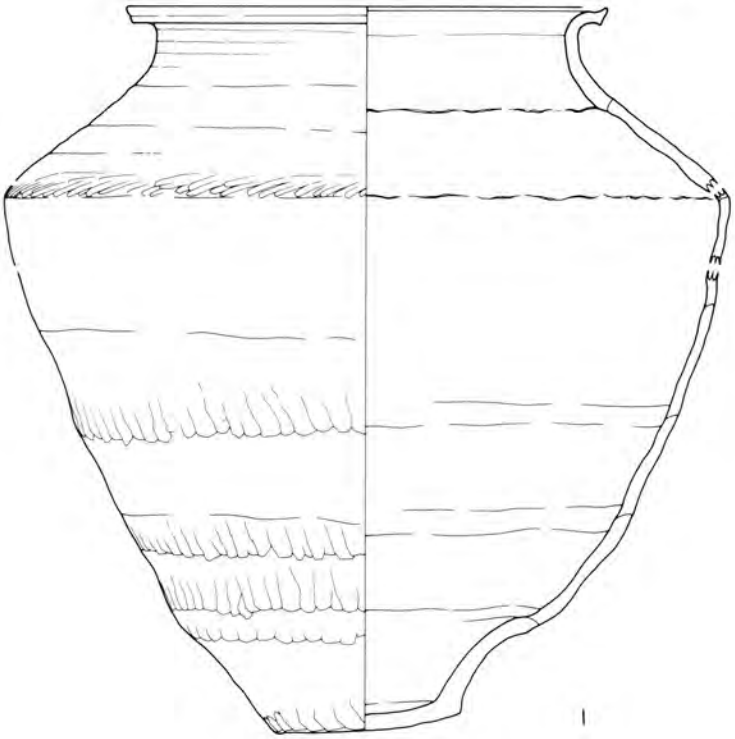
第9図

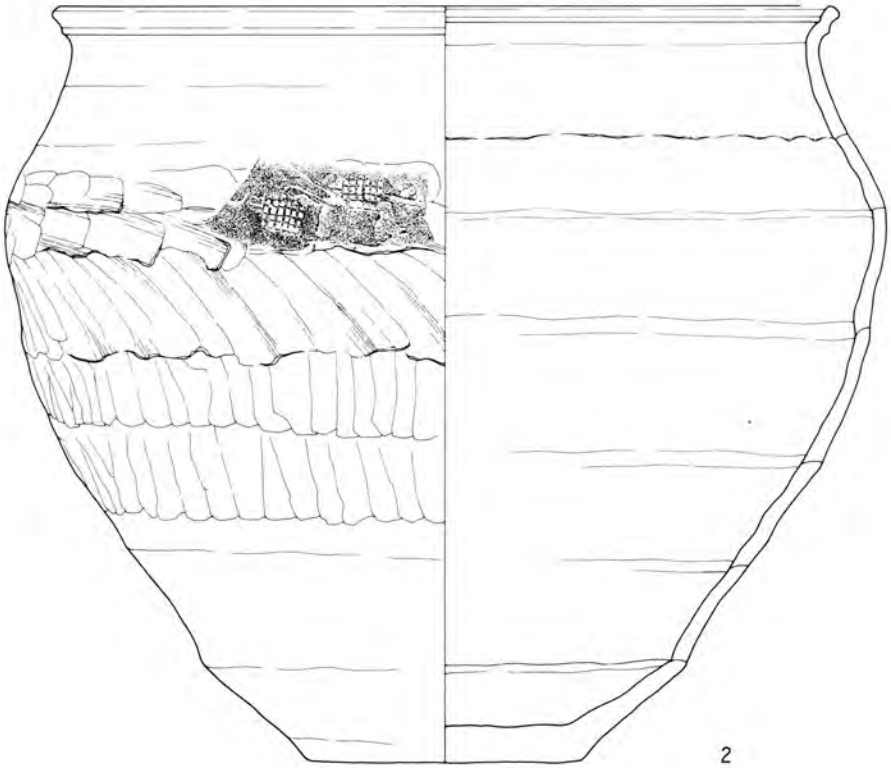
第31次調査・遺構（8）



第10図

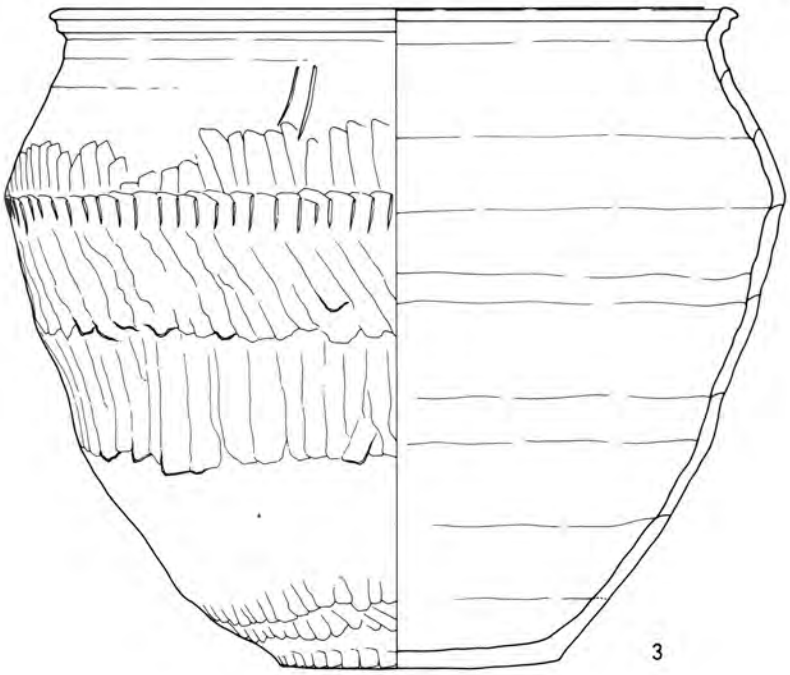

S F 1212
S F 1463
S D 1434
S D 1433
S F 1464
S X 1425
S V 1426
S X 1496
S F 1465
S D 1435
S D 1436
S X 1497
S X 1498
0
5M

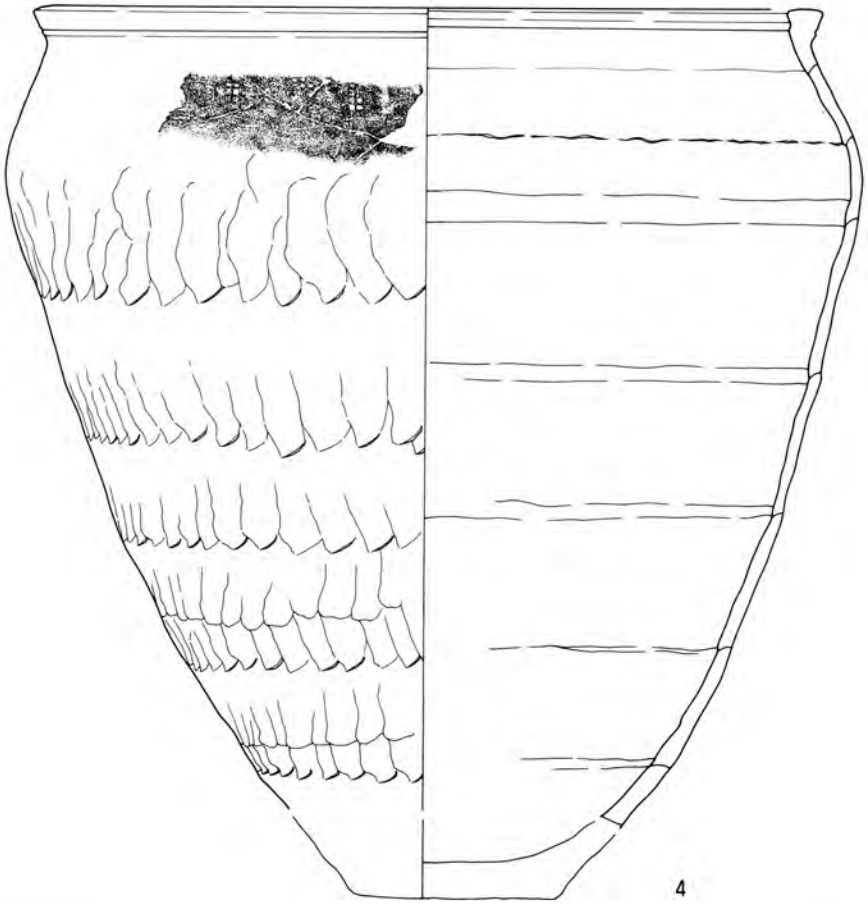




1・2．越前焼甕

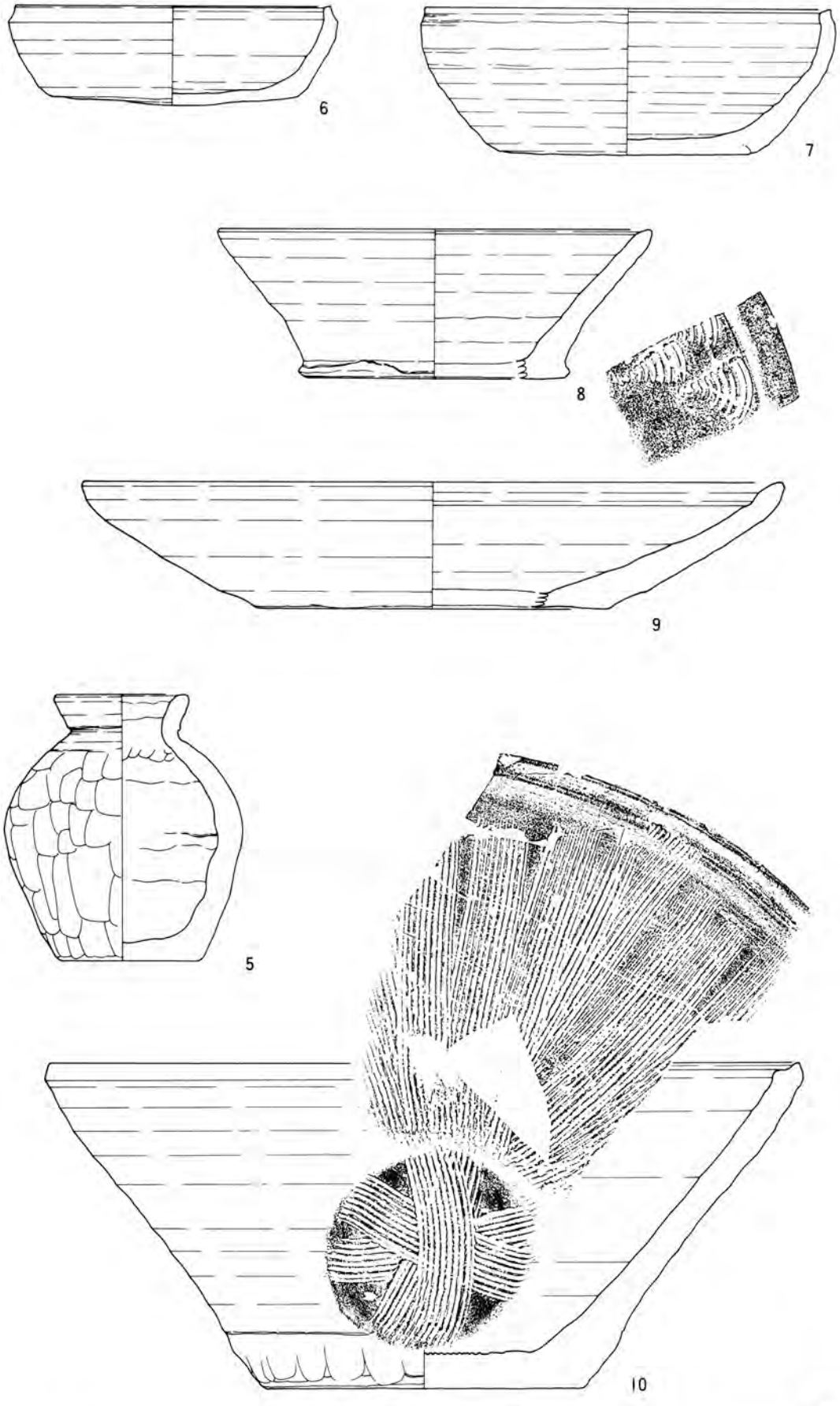
0　40cm



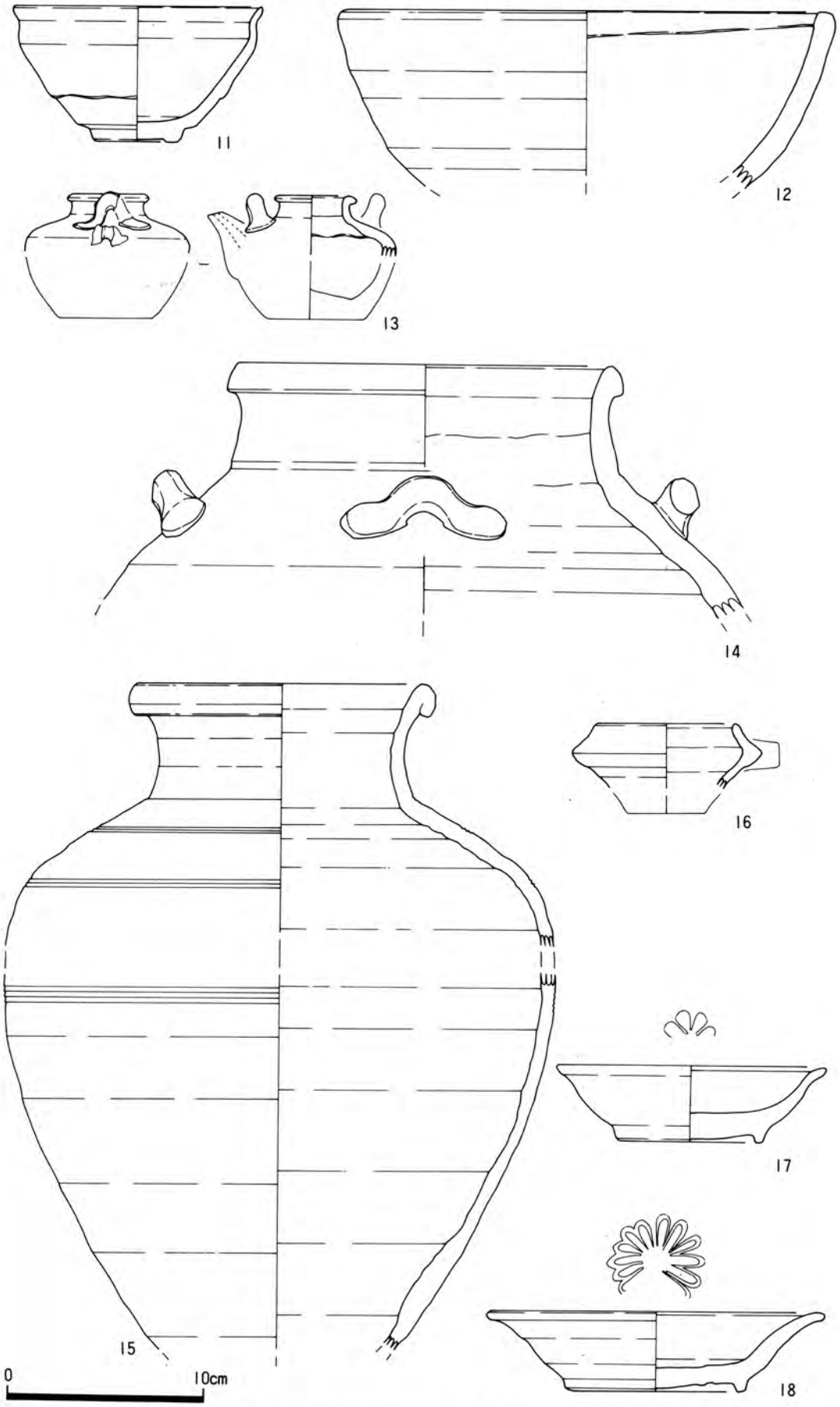


3・4．越前焼甕

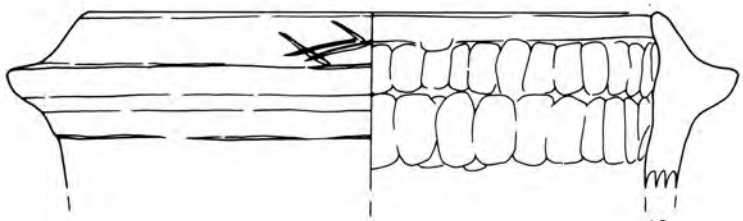
0　40cm

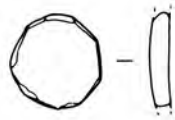


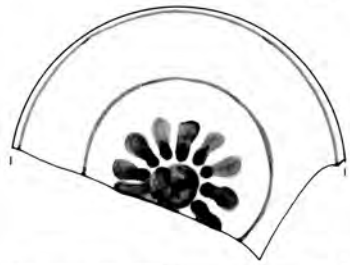
5．越前焼壺　6～9．越前焼鉢　10．越前焼擂鉢

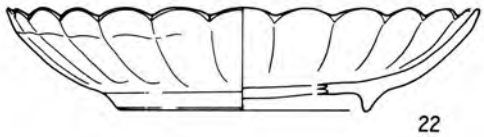


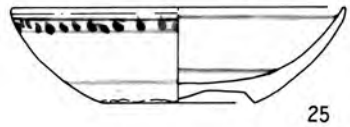
11・12. 鉄釉碗　13. 鉄釉水滴　14. 鉄釉四耳壺　15. 灰釉壺　0　10cm
16. 灰釉蓋　17・18. 灰釉皿

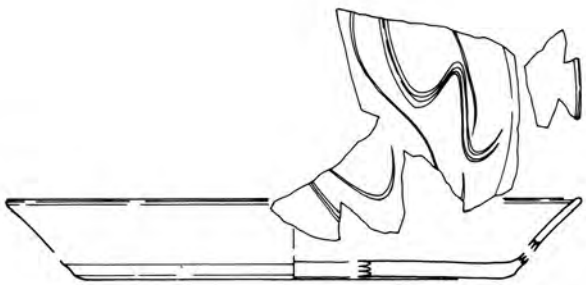


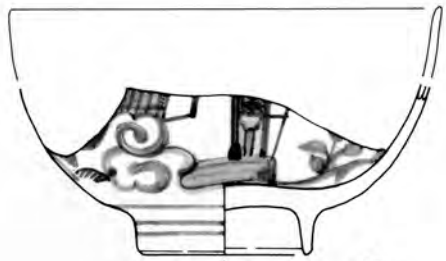


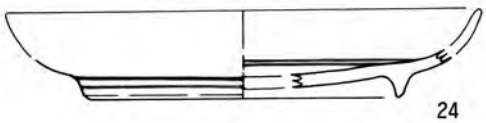


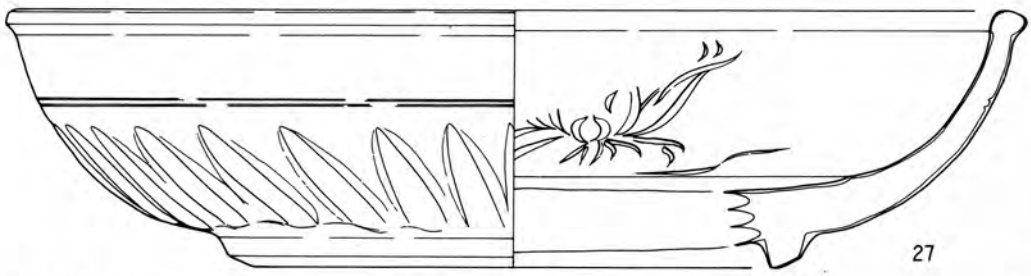






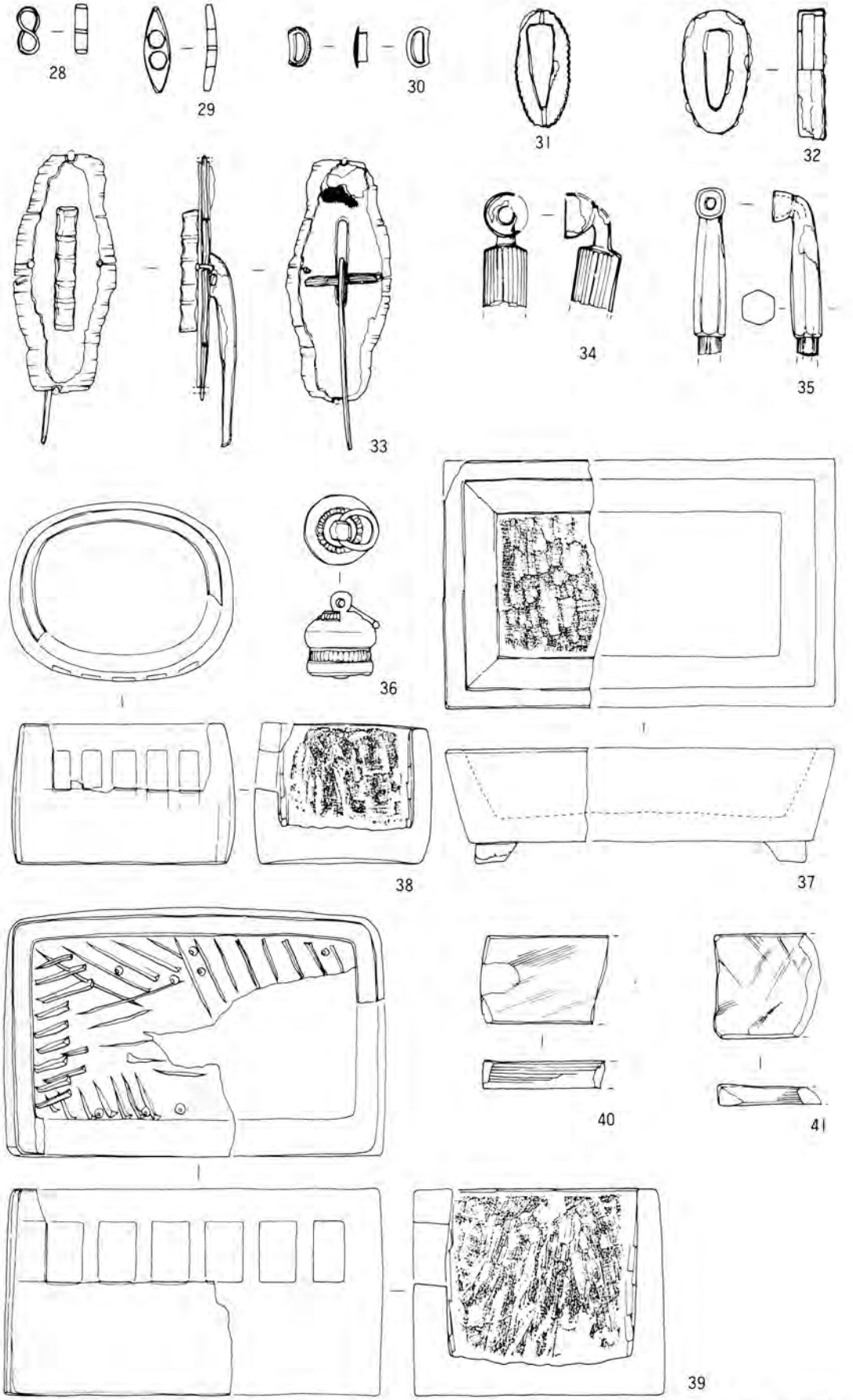






19. 土師質土釜　20. 土製円板　21. 白磁皿　22. 青磁皿
23. 白磁皿　24・25. 染付皿　26. 染付碗　27. 青磁盤

0　10cm



28・29．銅製金具　30．金製金具　31・32．刀装具
33．引手金具　34・35．煙管雁首　36．銅錘　37．石製盤
38・39．火炉　40・41．砥石

0　10cm（28～36・40・41）
0　20cm（37～39）

第36次調査報告

Ⅲ．第 36 次 調 査

1．遺　構

この調査地区は、朝倉氏遺跡の中心となる「城戸ノ内」のほぼ中心部の一乗谷川西岸に位置している。字名は「赤渕」・「奥間野」・「吉野本」となっており、9ＭＩＬ－Ｊ地区は「赤渕」に、9ＭＩＬ－Ｎ及びＯ地区は「奥間野」に、9ＭＩＬ－Ｐ地区は「吉野本」に対応する。指定後、公有地化され、発掘前は草地となっていた。地形は、全体として平坦であるが、水田化のため小区画に区分され、それらの間に段差がみられる。しかし、後に述べるように、これらの境界は、比較的良く一乗谷の町割を踏襲している。

調査区は、一乗谷川に沿って設定された、幅約15ｍ、長さ約180ｍの範囲で、面積は約2800㎡である。水田化する際に一部削平し平坦にしたとみられ、また覆土は比較的少なく、水田耕土直下から遺構が検出される場合が多い。また、こうした水田面の高低差等によって、全体的な時期の前後関係の考察に支障をきたす場合も多い。

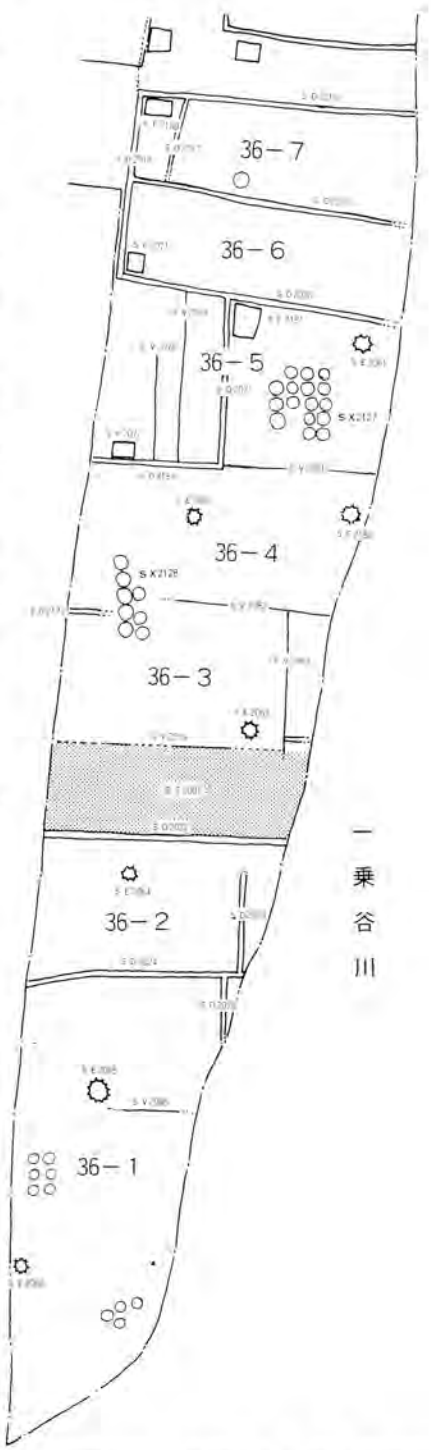
発掘区は、南北軸に対し、北で東へずれるが、記述の都合上、一乗谷川の流れを南北と仮定している。

発掘された遺構

検出された主な遺構は、道路５、溝32、建物20、井戸23、石積施設11、甕埋設遺構12等である。前述した通り、この調査区は、４地区から成っている。また、それらの地区は、溝や石列等によって小区画に区画されており、その数は22区画を数える。そこで、南のＰ地区から順次その概要を述べ、その後、各区画について詳説することとする。

Ｐ地区　（ＰＬ．24　第17図）

この地区は、明確に地区内を区分する遺構はみられず、全体として一区画と考えられる。この区画を36－１と呼ぶこととする。（以下同様に小区画毎に

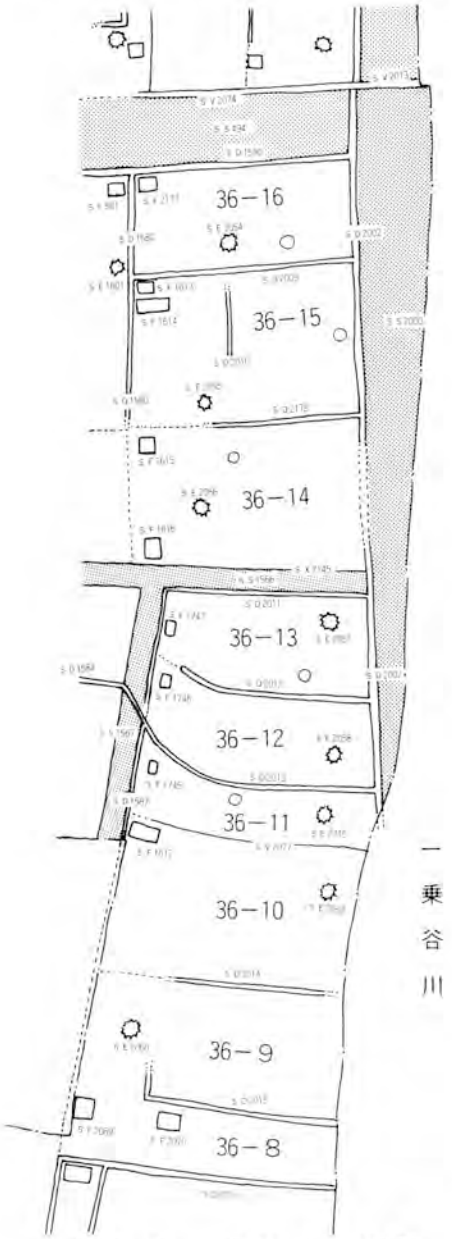


挿図－4　9ＭＩＬ－Ｏ・Ｐ地区

挿図４・５・６にみられる様に番号を附す）全体的削平を受けたとみられ保存状態はあまり良いとはいえない。北のＯ地区とは溝ＳＤ2024により分れる。この溝がほぼ水田畦畔となっていた。両地区の間には、検出面において約 0.1m の高低差がみられるが、当初はもう少し多かったと考えられる。

Ｏ地区　（ＰＬ．24・25　第18～21図）

この地区は約52m の長さであって、その間は挿図４に示すように東西方向の石列や溝によって小区画に区分されており、東西方向の幅約 5.5m の道路ＳＳ2001をはさみ、南に１区画(36－2)、北に５区画（36－３～36－７）として考えることが出来よう。水田化する際の削平のため、一般的にいって東の一乗谷川沿はあまり保存状態は良くない。また、36－４の大半は大きく破壊されており、井戸を除いてほとんど遺構はみられない。この地区の区画の内36－３～36－５については、その遺構からみて、区画割がはっきりしない点も多く、越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2128のように、明らかに36－３と36－４にまたがる遺構もみられる。



挿図－５　　９ＭＩＬ－Ｎ地区

また36－５については、南北方向の溝ＳＤ2021によって、さらに東西に２分されていた可能性も強い。この地区全体をみわたすとき、一般的に西側が屋敷の裏側と考えた方が理解しやすく、そのように考えれば、現在一乗谷川によって削り取られた所に、Ｊ・Ｎ地区にみられた南北道路が延びていたとみるべきであり、この地区の小区画は、基本的にはこの予想される南北道路に面した屋敷とみられる。

Ｎ地区　（ＰＬ．25・26　第22～26図）

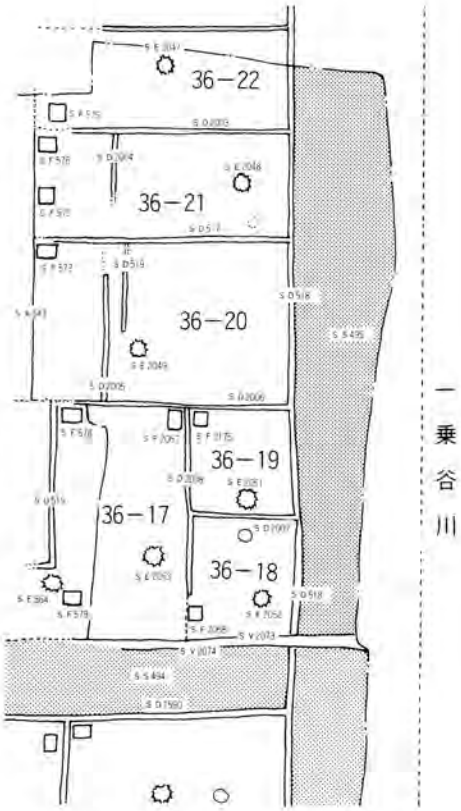
この地区は約66m の長さであって、Ｏ地区同様に、東西方向の道路や溝・石列によって挿図５に示すように９区画に分かれている。また東西方向道路ＳＳ1566によって大きく南北に２分して考えることが出来、南は、36－８から36－13の６区画がみられる。ここでは南北方向道路ＳＳ2000も検出されており、また、40次調査によって、これらの区画の西限もほぼ確認されていて、小区画の規模や全体像をうかがうことが出来る。それぞれの区画内には井戸と石積施設がみられ、それらの施設が生活上の必要要素であることを示している。区画の幅は約４ｍから８ｍと多少ばらつきがみられる。奥行は町割方位の調整のためか前後の区画線を平行としないため、13～18ｍ程となっている。ＳＳ1566の北は、幅９ｍ程の区画（36－14、15）と幅６ｍの区画（36－16）の３区画と東西方向の幅約 4.5m の道路ＳＳ 494 に区分さ

れる。区画の奥行は約13.5mとみられる。この地区は比較的保存状態も良く、また小区画（屋敷）の規模や様子も知ることが出来ることは貴重である。

J地区　（PL．27　第27～30図）

N地区と同様、全体の保存状態は良く、またその区画割もかなり明確である。東西方向道路SS494と南北方向道路SS495の交点の西北の屋敷群であって、主に、東西方向道路SS494に面する36—17から36—22の6区画である。区画割はかなり整然としており、基本的には間口（幅）約6.5mとみられるが36—20のようにその1.5倍の約10mの区画もみられる。奥行は約15mとみられる。この地区のそれぞれの区画内にも井戸と石積施設がみられ、また、その変遷の跡もかなり確認することが出来た。

以上、各地区について概説した。次に各区画を区分する遺構について述べ、その後に、それぞれの区画について解説を加える。



挿図—6　9MIL—J地区

SS495　J地区の36—18～36—22の区画群の東に位置する南北方向道路である。町割の基本となる道路の一つと考えられるもので、その構造は非常に堅固である。この道路の東部は一乗谷川によって破壊されている。（道路幅は、第42次調査によって東西の両側溝を含め約8.5mであることが確認された。）この道路断面（第31図参照）をみてみると、よくたたきしめられた砂利敷面が6層みられ、年月を経る中で積上されながら使用されてきたことを示している。最下層の砂利敷面から最上層の砂利敷面までは約0.5mのレベル差がみられる。なお、上部3層については明らかにそれぞれ道路面と認められるが、下部3層については多少不明な点もある。

SS2000　前述のSS495と同じ南北方向道路であるが、東西方向道路SS494との交点から南部をこの番号で呼ぶこととする。SS495と同様数度の積上がみられる。断面（第31図参照）をみてみると、礫（砂利）敷面は6～7層とみられるが、明確に道路面として認識されるのは上層5層である。下部の層は当初の道路築造工程によるものと考えるのが良いのではなかろうか。このことからSS495・2000の南北方向道路は5回に渡る改造を受けたと考えることが出来よう。

SS494　J地区とN地区の境に位置する東西方向道路である。南北方向道路SS495・2000から西の山裾へ向って延びている。道路幅は不明な点もあるが、当初は約6m、後に4.5mに縮少されたと考えて良かろう。これは基本となる道路でも、その状況によっては、大きな改変を受ける場合もあったことを示しているといえよう。道路断面（第31図参照）をみてみると、6層にわたる礫（砂利）敷面がみられ、それらはわずかに中央部が高くなっているようにみられる。最下層と最上層の礫敷面の間は0.7～0.8mであって、SS495・2000同様、この町割当初から存在した道路と考えて良いものと思われる。

ＳＳ2001　Ｏ地区南部に位置する東西方向道路である。南には側溝ＳＤ2022がみられるが、北には側溝がみられず、その境界がはっきりしない点もあるが、東西の石列ＳＶ2218がこの道路の北境界とみて良かろう。とすれば、幅は約 5.5m となる。道路面は３層確認することが出来たが、他の道路と比べ少ない。一部の検出にとどまっているため不明な点も多い。

ＳＳ1566　Ｎ地区中部に位置する東西方向道路で南北方向道路ＳＳ2000から西へ延びる。幅は南側溝を含め約 1.5m である。北は石列ＳＸ2145が境界とみられる。断面をみてみると、この道路下に区画36―14の下層建物ＳＢ2194の礎石列がみられることから、当初はこの道路が存在しなかったようである。また、この道路には２層にわたる砂利敷面が確認されている。

ＳＤ2024　Ｐ地区の北端に位置し、区画36―１と36―２を分ける東西方向の溝である。この溝が水田畦畔にほぼ一致することもあって破壊されている所もみられるが、幅は 0.2～0.25m とみられる。この溝は上層では西端で少し南へ曲っているが、当初はほぼ真直であったとみられ、下層にその痕跡を残している。南へ少し曲げられた後の溝にも２つの時期が認められ、その前期には一部に杭を打ち込んで壁面の崩壊を防いでいる。このように、この溝は大きく３時期に分けて考えることが出来る。深さは約 0.3m である。

ＳＤ2022　Ｏ地区南部に位置する東西方向溝で東西方向道路ＳＳ2001の南側溝となる。幅は約0.3m、深さ約 0.2m とみられる。この溝も一部に改変の痕跡をとどめている。溝側石の高さには南北の違いはほとんど認められないことから、区画36―２と道路ＳＳ2001の間には高低差は存在しなかったと考えられる。

ＳＤ2172　Ｏ地区中央部の西端で検出された東西方向溝である。一部の検出であるため詳細は不明である。区画36―３の北境界と考えられるＳＶ2082の延長線附近に位置していることから、こうした境界となる遺構とみて良かろう。

ＳＤ2183　Ｏ地区中央部で検出された東西方向溝である。幅は約 0.2m である。中程で北へ折れ、ＳＤ2021となる。この溝の東への延長線上に石列ＳＶ2081があって、この２つの遺構によって区画36―４と36―５が分けられる。

ＳＤ2020　Ｏ地区北部で検出された東西方向溝で、西から東へ流れる。幅は約 0.3m とみられる。西端で南北方向溝ＳＤ2018と接続する。区画36―５と36―６の境界となる溝である。この溝の西部には壁面の崩壊を防ぐための杭が多く打ち込まれていた。

ＳＤ2019　Ｏ地区北部で検出された東西方向溝で西から東へ流れる。西端で南北方向溝ＳＤ2018と接続している。幅は約 0.2m であり、この溝によって区画36―６と36―７が分けられる。

ＳＤ2018　Ｏ地区北部西端で検出された南北方向溝である。区画36―６、36―７の背面の境界となる遺構と考えられる。幅は約0.2～0.3m である。

ＳＤ2016　Ｏ地区北端で検出された東西方向溝で西から東へ流れる。西端で南北方向溝ＳＤ2018と接続する。幅は約0.25m とみられる。この溝によって区画36―７と36―８が分けられる。しかし、この溝は下層では存在せず、36―７と36―８は一区画となっていたと考えられる。また、この溝の北側石附近が水田畦畔となっており、北は大きく削平されている。この畦畔がＯ地区とＮ地区の境となる。

ＳＤ2015　Ｎ地区南部で検出された東西方向溝で西から東へ流れる。西で北へ折れるようであるが、全体的にかなり破壊も受けており、詳しいことはわからない。幅は 0.2m 程とみられる。こ

の溝が36—８と36—９の境界となる。

ＳＤ2014　Ｎ地区南部で検出された東西方向溝である。全体的に壊されており、東西両端附近ははっきりしない。やはり西から東へ流れていたと考えて良いと思われる。幅は 0.3m 程である。区画36—９と36—10の境界となる。

ＳＶ2077　Ｎ地区南部に位置する石垣（石列）である。ここが水田畦畔となっていたため詳しいことはわからない。ここが区画36—10と36—11の境界となっていたと考えられる。

ＳＤ2013　Ｎ地区中央部で検出された東西方向溝である。西で北へ湾曲している。幅は 0.2m 程とみられ、西から東へ向かって流れ、東端で南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002に接続している。また、この溝は西の一段高い区画から流れる溝ＳＤ1584と南北方向の道路(通路)ＳＳ1567の側溝ＳＤ1587を受け、東へ流す機能も受け持っている。区画36—11と36—12の境界となる。

ＳＤ2012　Ｎ地区中央部で検出された東西方向溝である。西端ははっきりしないが東端は南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002に接続しており、西から東へ向かって流れていたと考えられる。幅は 0.2m 程とみられる。区画36—12と36—13の境界となる。

ＳＤ2011　Ｎ地区中央部で検出された東西方向溝である。南北方向道路（通路）ＳＳ1567の東側溝ＳＤ1588を受け、西から東へ流れ、南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002と接続する。幅は 0.2m 程である。この溝は南北の基本道路ＳＳ2000から西へ入る東西方向道路（通路）ＳＳ1566の側溝であり、また、区画36—13の北境界となる。

ＳＤ2178　Ｎ地区北部の下層で検出された東西方向溝である。東端は、南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002に接続する。幅は 0.2m 程とみられる。上層ではこの溝は廃棄されるが、ほぼこの附近で整地土も変っており、ここがやはり区画36—14と36—15の境界となっていたと考えられる。

ＳＤ2009　Ｎ地区北部で検出された東西方向溝である。東端は、南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002に接続するが、西端は南北方向溝ＳＤ1580と接続していたかどうか不明な点もある。幅は0.25m 程である。区画36—15と36—16の境界となる。

ＳＤ1590　Ｎ地区北端で検出された東西方向溝で東西方向道路ＳＳ 494の南側溝である。幅は約 0.4m ,深さは道路の積上に応じて側石も積み増されたため当初の溝底までは約 0.7m を計る。西から東へ流れ、南北方向道路ＳＳ2000の西側溝ＳＤ2002に接続する。区画36—16の北境界となる。

ＳＤ1580　Ｎ地区北部で検出された南北方向溝で、南から北へ向かって流れ、北端で東西方向道路ＳＳ 494の南側溝ＳＤ1590に接続する。幅は 0.2～0.25m である。南北の基本となる道路ＳＳ2000に面する区画36—15、36—16の背面（西）境界となる。

ＳＤ2002　Ｎ地区の中央部から北部にかけて検出された南北方向溝で、南北方向道路ＳＳ2000の西側溝であり、また、この道路に面する区画群の前面（東）境界となる。これらの区画の南と北の境界となる東西方向溝を受けている。幅は 0.4m と少し広い。道路の改変に応じ側石も積み増され、当初の溝底からは約 0.8m の深さを計る。中央附近は一乗谷川護岸が崩れたためか道路と共に大きくえぐり取られた痕跡をとどめている。基本的には南から北へ向かって流れていたと考えられる。水田畦畔と水路となっていた石垣ＳＶ2073・2074のあたりで一乗谷川へ流れ落ちていたのではなかろうか。

ＳＶ2073・2074　Ｊ地区南部に位置する東西方向石垣である。水田畦畔と水路となっていた。現状の石垣は後世のものと考えられるが、この位置に東西方向道路ＳＳ 494 の北境界となる側溝が

存在したと考えられる。

ＳＤ 518　Ｊ地区の東部で検出された南北方向溝で、南北方向道路ＳＳ 495 の西側溝となる。この道路に面する西の区画群の南北の境界となる東西方向溝を受ける。幅は0.3～0.4m であるが、道路の改変に応じ側石も積み増したり改造したりしており、当初はほぼ真直であったものが南部で少し東へ湾曲している。最終期の溝底は当初の溝底から約 0.4m 上昇しており、このため最終的には側石の深さは 0.8m 程となっている。

ＳＤ2007　Ｊ地区南部で検出された東西方向溝である。上層では廃棄されており、下層で検出された。幅は 0.2m 程である。東西両端でそれぞれ南北方向溝ＳＤ 518 とＳＤ2008と接続している。区画36—18と36—19の境界となる。

ＳＤ2008　Ｊ地区南部で検出された南北方向溝である。南端ははっきりしないが、南から北へ流れていたとみられ、北で東西方向溝ＳＤ2006に接続している。改変の結果、当初の位置からは上層で西へ0.2m 程移動している。幅は約0.2m である。区画36—17と36—18、36—19の境界となる。

ＳＤ2006　Ｊ地区中央部で検出された東西方向溝である。西から東へ流れ南北方向道路ＳＳ 495 の西側溝ＳＤ 518と接続する。幅は 0.2m 程である。区画36—20と36—17、36—19の境界となる。

ＳＤ 517　Ｊ地区中央部で検出された東西方向溝である。西から東へ流れ南北方向道路ＳＳ 495 の西側溝ＳＤ 518に接続する。幅は 0.3m 程とみられる。区画36—20と36—21の境界となる。

ＳＤ2003　Ｊ地区中央部で検出された東西方向溝である。西から東へ流れ南北方向道路ＳＳ 495 の西側溝ＳＤ 518と接続する。幅は 0.2m 程である。区画36—21と36—22の境界となる。

ＳＸ 543　Ｊ地区中央部に位置する南北の石列で、すでに第17次調査によって検出されていたが、今回の調査によって、南北方向道路ＳＳ 495に面する区画群の背面（西）境界となる遺構であることが明らかとなった。

36—１　（ＰＬ．28　第17図）

今回調査したＰ地区全体を占る区画である。全体的に少し削平されており詳しい点は不明であるが、他の区画群とは少し異る点が多い。まず、越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2129・2130が存在しており、また区画の規模も大きい。内部には井戸も２基（ＳＥ2065・2066）存在する。この区画の中程北寄に東西の石列ＳＶ2086がみられるが、これは、この区画内を区分する遺構と考えられる。また、北東端にみられる南北方向溝ＳＤ2025をみると、この溝の東西に約0.15m の高低差があったとみられ、西が少し高い。

36—２　（ＰＬ．28　第18図）

Ｏ地区南端に位置し、北は東西道路ＳＳ2001となる幅約８ｍの区画である。比較的保存状況も良く、建物の様子もかなり知ることが出来る。

検出された礎石配置から考えると、東西10m 、南北5.6m の建物とみられるが、あるいはこれは東西6.36m と3.04m の２棟に分けて考えることも出来よう。また、南面には1.06m 幅の庇状の張り出しも想定される。内部には井戸ＳＥ2064や、小さな炉跡ＳＸ2212がみられる。また、石敷遺構ＳＸ2210も存在する。また、建物

挿図－７　炉跡ＳＸ2212

の東には 0.6m 離れ、建物に平行する南北方向の溝ＳＤ2023がみられる。この区画の東には、町割の基準となる南北方向の道路が想定される為、この区画や建物がどちらを向いていたのか不明な点もあるが、北の東西道路ＳＳ2001に向け、出入口を想定することが良いと思われる。

36―３　（ＰＬ．29　第18図）

Ｏ地区の東西道路ＳＳ2001の北に位置する区画である。幅は 8.5m 程とみられる。全体に削平されている様子で詳しいことはわからない。この区画の北には、越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2128がみられ、これは、この区画の北境界を越え北へ延びており、後には、36―４の区画と一体となっていたと考えられる。区画内には、内部に土坑ＳＫ2113を持つ掘立柱の建物ＳＢ2044がみられるが、他の遺構との時期関係等不明な点もある。東の南北石列ＳＶ2083は水田畦畔となっており詳しくはわからない。

36―４　（第19図）

Ｏ地区中央部の区画である。幅は 8.5m 程とみられるがかなり破壊されており、内部の様子は不明である。前述したように、36―３の区画と一体となっていたとも考えられる。井戸は、ＳＥ2062とＳＥ2182の２基が検出されているが、ＳＥ2182がＳＥ2062に先行する。

36―５　（ＰＬ．29　第20図）

Ｏ地区中央部の区画である。幅は10m 程であるが、西で少し開き、東でとじていて、矩形とはなっていない。この区画は、中央の南北方向溝ＳＤ2021によって東西に２分されていた可能性が高い。

東半は越前焼大甕17個を埋設した遺構ＳＸ2127がみられる。また、南北溝ＳＤ2021に沿って礎石列ＳＢ2206がみられる。この建物の内部にＳＸ2127が設けられていたと考えて良かろう。また、西北隅部には、石積施設ＳＦ2181がみられる。これは深さ約 1.0m 程であり、内部には杭を打ち板材等で壁面を支えていた。また東北部には井戸ＳＥ2061がみられる。西半は平行する南北の石列がみられる。西端は建物の礎石列ＳＢ2043で、規準となる柱間寸法は 6.2尺とみられる。この南端には石積施設ＳＦ2072が検出されている。この建物の東にみられる石列ＳＶ2078は、北半は建物との間は 0.4m 程であるが南半は 1.3m となっていることから、南半には建物にも４尺程の何らかの張り出しがあったと考えられる。これらの状況から考えると、南北方向溝ＳＤ2021と南北方向石列ＳＶ2079の間は通路として利用されていたと考えることも出来よう。

36―６　（ＰＬ．30　第21図）

Ｏ地区北部に位置する区画で、幅は約 5.5m である。内部の建物については詳しいことはわからない。しかしこの区画の西南隅部に位置する石積施設ＳＦ2071附近からは大量のヘギ板や桜皮等が出土しており、この区画の住人が「桧物師」のような職人であったことをうかがわせる。

36―７　（ＰＬ．30　第21図）

Ｏ地区北部に位置する区画で、幅は約 6.5m である。内部の建物については詳しいことはわからないが、一部に残る礎石間隔からみると規準となる柱間寸法は 6.2尺程とみられる。内部に越前焼大甕を１個埋設した遺構ＳＸ2126がみられる。水ガメとして利用されたのではなかろうか。また、西寄に南北方向の溝ＳＤ2017がみられるが、これは、中心となる建物に関連するものとみて良かろう。また西北隅部には石積施設ＳＦ2180がみられる。この遺構の４隅には杭が検出されている。

36－8　・（ＰＬ．31　第22図）

Ｎ地区南端に位置する区画で、幅は 4.5m である。ほとんど削平されており、詳細は不明である。この区画からは石積施設ＳＦ2069、ＳＦ2070が検出されている。このＳＦ2069は西壁を除き上部は削平されている。このすぐ西、南北方向溝ＳＤ2018とＳＤ1587を結ぶ線がこの区画の西境界と考えられる。また、前述した通り南隣36－７との境界となる東西溝ＳＤ2016は下層では存在せず、同一の整地が施こされており36－７と一体となっていたと考えられる。

36－9　（ＰＬ．31　第22図）

Ｎ地区南部に位置する区画で、幅は 7.5m である。内部には掘立柱建物ＳＢ2039と礎石建物ＳＢ2038がみられる。掘立柱建物ＳＢ2039が先行するとみられる。この建物は東西６ｍ、南北4.5mと考えられる。礎石建物ＳＢ2038はかなり礎石が取り払われており規模は不明である。西部に井戸ＳＥ2060がみられ、また、下層には石敷遺構ＳＸ2151もみられる。

36－10　（ＰＬ．31　第22図）

Ｎ地区南部に位置する区画で、幅は９ｍ程と考えられる。全体的に削平された所が多く、建物等内部は不明である。東部に井戸ＳＥ2059がみられる。また、西北隅に石積施設ＳＦ1617がみられる。この中から

考えると、石積施設の内、多くは便所として考えることがゆるされるのではなかろうか。

36－11　（ＰＬ．31　第22・23図）

Ｎ地区中央部に位置する区画で、幅は約 3.5m である。東部に井戸ＳＥ2215がみられ、また越前大甕を埋設した遺構ＳＸ2125が存在する。西端には石積施設ＳＦ1745が検出されている。非常に幅の狭い区画であるが、基本となる遺構はそろっている。

36－12　（ＰＬ．32　第23図）

Ｎ地区中央部に位置する区画で、幅は 5.5m 程である。西で北へ湾曲している。この内部中央附近に東西 2.8m 、南北 2.4m の建物ＳＢ2036がみられる。この区画内の主屋とは考えられず附属屋であろう。この建物の東に主屋は存在したと考えられる。井戸ＳＥ2058は主屋内と考えて良いと思われる。この区画の西端には石積施設ＳＦ1746が存在する。

36－13　（ＰＬ．32　第23図）

Ｎ地区中央部に位置する区画で、幅は 6.3m である。この区画を形作る溝側石に天端の扁平な石が規則的にみられこれがこの区画の建物礎石とみられるが、規模等詳しいことはわからない。この建物の内部と考えられる所には井戸ＳＥ2057や水甕と考えられる越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2124等がみられる。また、ＳＸ2195はカマドと考えられる遺構である。他の区画同様この区画の西端にも石積施設ＳＦ1747が存在している。

36－14　（ＰＬ．33・34　第24・25図）

Ｎ地区中央部に位置する区画である。上層では南に東西方向道路ＳＳ1566がみられ、幅は8.5mとなるが、当初はこの道路が存在せず10m の幅の区画と考えられる。また、北隣との境になる東西の溝ＳＤ2178は上層では存在していない。また東の一部は大きく一乗谷川の方へ崩れ、南北道、側溝共にえぐられている。上層においては、掘立柱の建物が検出されている。南北 6.7m の規模とみられる。井戸ＳＥ2056は、この区画後方に検出されており、この主屋内となるのかどうか不明

である。また水甕と考えられる越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2122がみられる。この区画の西北・西南隅には２基の石積施設ＳＦ1615、1616が検出されている。

下層においては礎石列が検出されている。それによれば、東西 5.9m 、南北７ｍ程と考えられるが、さらに東へ１ｍ、北へ１ｍ延びる可能性も残るが詳しいことは不明である。

36―15　（ＰＬ．33・34　第24・25図）

Ｎ地区北部に位置する区画で、幅は 9.5m である。上層の建物についてはほとんど礎石が残っておらず不明であるが、この区画の中央の東西の石列ＳＶ2075が下層の建物の礎石列と一致しており、下層の建物と大差ないものと考えられる。下層で検出された建物ＳＢ2032は、東西 5.7m、南北 8.6m の規模を持つ。中程に礎石列がみられるが、これが棟通ではなかろうか。内部には井戸はみあたらない。上層においては、水甕と考えられる越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2123がみられる。また、炉状遺構ＳＸ2142・2143が上層にみられる。この区画内からは鉱滓やるつぼが出土しており、鍛冶屋と関連付けることも可能であろうが詳細については不明である。南北方向溝ＳＤ2010は、この区画の主屋と考えられる建物の西に位置し、この建物の棟通とみられる所から北に限られている。この南方には井戸ＳＥ2055がみられる。この井戸は主屋の突出部的な建物で覆われていたと考えて良かろう。また、西北隅部には石積施設ＳＦ1613・1614が２基みられる。

36―16　（ＰＬ．34　第26図）

Ｎ地区北部に位置する区画で、幅は６ｍである。建物礎石はほとんどみあたらず詳しくはわからないが、溝側石の中にいくつか礎石を兼ねると考えられるものがあり、ほぼ区画一杯に建物が建っていたと考えて良かろう。内部には、井戸ＳＥ2054と水甕と考えられる越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2121がみられる。また、西北隅には石積施設ＳＦ2177が検出されている。

36―17　（ＰＬ．35　第27・29図）

Ｊ地区南部に位置する区画で、東西道路ＳＳ 494 に面する。幅は明確でない。ほとんど上層は削平されている。内部には井戸ＳＥ2053がみられる。しかし、西の第17次調査で検出されている石積施設ＳＦ578・579や井戸ＳＥ 564 との関係は明らかでない。北東隅には石積施設ＳＦ2067が検出されている。

36―18　（ＰＬ．35　第27・29図）

Ｊ地区南部に位置する区画である。この区画と北の36―19の境界となる東西溝ＳＤ2007は上層でははっきりせず、この２区画が一つとなる可能性も残るが、井戸がいずれの区画にもみられるのでここでは別々の区画と考える。

東西 6.5m 、南北約７ｍの規模である。小さな規模であるから建物はほぼ区画一杯に建てられたと考えて良かろう。内部には、井戸ＳＥ2052や越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2120、石積施設ＳＦ2068がみられる。また下層には石積施設ＳＦ2176がみられ、この時は東西道路ＳＳ 494が広く、この区画の南北幅は 1.4m 程小さいものと考えられる。

36―19　（ＰＬ．35　第27・29図）

Ｊ地区南部に位置する区画である。東西 6.5m 、南北 6.5m の規模を持つ。建物礎石はほとんどみられず詳細については不明である。南端に井戸ＳＥ2051が検出されている。また下層において西北隅に石積施設と考えられる遺構ＳＦ2175が検出されている。この区画において注目すべき点は、その出土遺物である。焼土で整地された上層の遺構面の下から玉砥石、水晶の原石とその

破片、そして数珠玉の未完成品等が数多く採集された。これらの品は、この区画内に限られており、中でも北東部に集中している。このことから、この区画の下層の時期の住人は、数珠造の職人であったと考えられる。

36 20　（ＰＬ．36　第28・29図）

Ｊ地区南部に位置する区画である。東西（奥行）15.5m、南北（間口）10m の規模を持つ。この区画は比較的保存状況が良く、その建物の様子が知られる外、一部ではあるが、その変遷も知ることが出来た。

まずその土層をみてみると、基本的には５期の生活面が認識される。最下層をⅠ期とし、最終の上層をⅤ期として記述を進める。Ⅰ期に対応する礎石は検出することが出来なかった。しかし井戸ＳＥ2174がこれに対応する遺構である。このⅠ期は一部２時期に区分される可能性も残されている。Ⅱ期については礎石以外明確な遺構は検出出来なかった。Ⅲ期については礎石と共に越前焼大甕埋設遺構ＳＸ2216と井戸ＳＥ2050が対応する。そして、これらの遺構を廃棄し、Ⅳ期、さらにはⅤ期の遺構がみられる。Ⅳ期・Ⅴ期は比較的近い時期とみられ大きな変更はみられない。最終となるⅤ期については中心となる建物ＳＢ2028の礎石も良く残っている。建物は基準柱間寸法を6.2尺とする。北部で一部礎石を欠くが、東西（奥行）4.5間（8.45m）、南北（正面）４間（7.52m）の規模を持ち、棟通りは、正面柱筋から２間の位置と考えられる。また、井戸が背面柱筋上に位置することから、背面には南２間幅に、半間の掛出しが設けられていたと考えられる。また、北へ少し拡がっていた可能性もある。側廻り柱筋については中間にも礎石を配し、ほぼ3.1尺毎の礎石配置がみられる。内部には炉壇石ＳＸ615や井戸ＳＥ2049が存在している。この建物の西には南北方向溝ＳＤ2005が存在し、この主屋と裏庭を分ける。この裏庭の西北隅には石積施設ＳＦ573がみられ、これが便所とみられる。他の附属建物も予想されるが検出することは出来なかった。また、正面の道路側溝上には、踏石として利用された板碑が第17次調査で検出されている。

36―21　（ＰＬ．37　第30図）

Ｊ地区中央部に位置する区画である。東西（奥行）15.5m、南北（間口）6.5m の規模を持つ。礎石はあまりみられず建物については詳しいことはわからないが、6.2尺を基準柱間寸法とし、正面３間、奥行５間程の規模と推定される。内部には井戸ＳＥ2048が存在する。この主屋の背後には南隣の36―20の区画同様南北方向溝ＳＤ2004が存在し、裏庭と分けている。この裏庭部分にも建物が存在したようにみうけられる。また、石積施設ＳＦ572・576が検出されている。いずれかが便所に相当するのであろう。また正面北寄には凝灰岩製の踏石がみられ、このあたりが出入口であったと考えられる。

36 22　（ＰＬ．37　第30図）

Ｊ地区中央部に位置する区画である。水田畦畔の関係から北部は今回の調査区に含まれていないが、南北（間口）は36―21の区画同様 6.5m であることが確認されている。東西（奥行）については明確でないが石積施設ＳＦ575の西辺あたりであろう。内部については詳しいことはわからない。井戸ＳＥ2047等が検出されている。

以上検出した遺構について解説を加えてきたわけであるが、最後に若干の考察を加え、まとめとする。

これまでみてきたように、この調査区は全体として非常に残存状況が良く、町割の一端を良く示している。南北の基本となる道路に面して表－4に示すように比較的規則的に割り付けられた間口の区画がみられる。中でも基本となるのは間口 6.5m の区画とみられ、10m の区画はその1.5倍と考えることが出来よう。また、その区画内をみてみると、表－5・6に示すように、ほぼ区画毎に井戸や便所と考えられる石積施設もみられ、また水甕と考えられる単体の越前焼大甕埋設遺構も多く検出されており、区画内に生活の基本機能をそなえていたと考えることが出来よう。また、内部の建物をみてみると一部に平入と妻入の混在していた様子もうかがわれ興味深い。

また、一部ではあるが、区画内の住人の職業を特定する遺物も検出されており、そうしたことから、これらの区画に住した人々は、職人等とみられ、町家地区として設定されていたことが知られる。中世の町については、その実態が不明な点が多い中で、これら一乗谷の町の調査は多くの成果を提供するであろうことを明記してまとめとする。

表－4　区画規模一覧表

区　画	南北（m）	東西（m）
36－1	—	—
36－2	8.0	—
36－3	8.5	—
36－4	8.5	—
36－5	10.0	—
36－6	5.5	—
36－7	6.5	—
36－8	4.5	—
36－9	7.5	—
36－10	9.0	—
36－11	3.5	16.0
36－12	5.5	15.0
36－13	6.3	13.0
36－14	8.5(10.0)	13.5？
36－15	9.5	13.5
36－16	6.0	13.5
36－17	13.5	7.5？
36－18	7.0	6.5
36－19	6.5	6.5
36－20	10.0	15.5
36－21	6.5	15.5
36－22	6.5	13.5

表－5　井 戸 一 覧 表

遺構番号	位　置	径(m)	備　考	参照図版
SE2066	36－1（南）	0.6	—	第 17 図
SE2065	36－1（中央）	1.0	—	第 17 図
SE2064	36－2	0.7	建物内・天端有	第 18 図
SE2063	36－3	0.6	天端有？	第 18 図
SE2062	36－4	0.7	—	第 19 図
SE2183	36－4（下層）	0.8	—	第 19 図
SE2061	36－5（東）	0.65	—	第 20 図
SE2060	36－9	0.8	—	第 22 図
SE2059	36－10	0.7	—	第 22 図
SE2215	36－11	0.7	—	第 22 図
SE2058	36－12	0.7	—	第 23 図
SE2057	36－13	0.6	—	第 23 図
SE2056	36－14	0.7	—	第24・25図
SE2055	36－15	0.6	—	第24・25図
SE2054	36－16	0.65	—	第 26 図
SE2053	36－17	0.8	—	第27・29図
SE 564	36－17？	0.9	—	第 27 図
SE2052	36－18	0.6	—	第27・29図
SE2051	36－19	0.8	—	第27・29図
SE2049	36－20（上層）	0.55	建物内・天端有	第28・29図
SE2050	36－20（中層）	0.8	—	第 29 図
SE2174	36－20（下層）	0.7	—	第 29 図
SE2048	36－21	0.8?	半　壊	第 30 図
SE2047	36－22	0.6	—	第 30 図

表－6　石積施設一覧表

遺構番号	位置	形状				備考	参照図版
		東西(m)	南北(m)	深さ(m)	段数		
SF2072	36－5　西	0.8	0.6	0.7	6	—	PL. 39 第20図
SF2181	36－5東(西北隅)	1.0 0.6	1.4	1.0	4	杭有	PL. 39 第20図
SF2071	36－6(西南隅)	2.0	1.0	0.6?	3	杭有	PL. 39 第21図
SF2180	36－7(西北隅)	1.2	1.1	0.8	6	杭(4隅)有	PL. 39 第21図
SF2070	36－8(　中　)	1.3	1.0	0.3?	2?	半壊	第22図
SF2069	36－8(西北隅)	1.2	1.1	0.8	4	半壊	第22図
SF1617	36－10(西北隅)	1.8	1.0	1.0	6	杭有・金隠出土	第22図
SF1745	36－11(西北隅)	0.8	1.0	0.6	3	半壊	第23図
SF1746	36－12(西北隅)	0.9	1.2	0.4?	3?	半壊	第23図
SF1747	36－13(西　隅)	0.6	0.8	0.4?	2?	半壊	第23図
SF1616	36－14(西南隅)	0.7?	1.4?	0.5?	3?	半壊	第24・25図
SF2179	36－14(南　隅)	1.0	1.2	0.7?	4?	半壊	第25図
SF1615	36－14(西北隅)	1.1	1.0	0.3?	1?	半壊	第24・25図
SF1614	36－15(西　隅)	2.8	0.8	0.6	4	杭有	第24・25図
SF1613	36－15(西北隅)	0.9	1.4	0.45	3	—	第24・25図
SF2177	36－16(西北隅)	1.0	0.9	0.45?	2?	—	PL. 39 第26図
SF 579	36－17　?	1.0	0.9	0.6	4	—	第27図
SF 578	36－17　?	1.2	0.9	0.6	4	—	第27図
SF2067	36－17(東北隅)	0.6?	0.9?	0.45?	2?	半壊	第27・29図
SF2068	36－18上層(西南隅)	0.8	0.8	0.6	4	—	第27図
SF2176	36－18　下層	0.8	0.6	0.5	4	—	第29図
SF2175	36－19　下層	0.9	0.5	0.3?	—	半壊	第29図
SF 573	36－20(西北隅)	0.8	0.8	0.4	2	—	第28図
SF 572	36－21(西　隅)	0.6	1.2	0.6	2	—	第30図
SF 576	36－21(西北隅)	1.0?	0.8	0.3?	—	半壊	第30図
SF 575	36－22(西南隅)	1.0?	0.9	0.55	3	—	第30図

2．遺　物

36次調査によって、72,188点の遺物が採集された。このうち、その主体を占める陶磁器について地区毎に集計したのが表－7である。この数値は、遺物を台帳に登録する際の破片による分類にもとづくものである。これによると、36次全体の組成は、これまでの一乗谷の発掘地点におけるあり方と大略類似している。しかし、これを4地区に分解してみると、地区毎に数値のバラツキがあることがわかる。特に資料数が他に比べて少ないP地区の数値は、大きく離れたものとなっている。J・N・O地区では、土師質土器と越前焼の比率に差がみられるが、両者で8～9割、土師質土器5～6割、越前焼3～4割というこれまでの一般的な傾向に変わりはない。また、これらに対する美濃焼2～3％、中国陶磁10％未満という傾向にも合致する。J地区のみをみると、土師質土器の比率が約10％程低く、その分が、美濃焼の4.1％、中国陶磁の10.2％という増加したあり方に示されている。各生産地毎の器種をみると、土師質土器では小皿、越前焼では甕、美濃焼では鉄釉の天目茶碗、灰釉の皿が卓越している。中国陶磁では、染付の皿、白磁の皿、青磁の碗皿が多く、また、染付、白磁、青磁の比も4：4：2～3に近似し、一乗谷での標準的なあり方である。

単位面積に対する遺物の出土点数は、36次全体で25.8点／㎡、J地区で24.3点／㎡である。これまでの一乗谷の調査地では、8.0～26.0点／㎡で地点によりかなりのバラツキをもつが、36次調査の場合、この中でも抜群に高い数値となっている。これは、この地区の遺構遺物の保存の良さに加えて、発掘された各屋敷が町屋と想定され、面積が小さかったこと、換言すると、一定面積における「屋敷数」＝世帯数が多いことを反映していると考えられる。隣接する第40次発掘区でも26.0点／㎡と高い数値が示される。

			J地区		N地区		O地区		P地区		合計	
			点	(%)	点	(%)	点	(%)	点	(%)	点	(%)
日本製陶磁器	土師質土器	皿	7,758		11,263		13,249		1,312			
		土釜	41		92		96					
		他	23		43		12		1			
		計	7,822	(45.9)	11,398	(55.7)	13,357	(65.4)	1,313	(43.8)	33,890	(55.6)
	越前焼	甕	4,337		3,317		3,902		1,318			
		壺	1,168		1,592		716		79			
		擂鉢・鉢	989		1,069		793		108			
		他	27		30		9					
		計	6,521	(38.3)	6,008	(29.4)	5,420	(26.5)	1,505	(50.2)	19,454	(31.9)
	美濃・瀬戸焼	鉄釉碗	160		305		150		15			
		皿	10		17		7					
		他	147		154		68		13			
		灰釉碗	33		17		69		3			
		皿	327		320		206		14			
		他	19		25		26		3			
		計	696	(4.1)	838	(4.1)	526	(2.6)	48	(1.6)	2,108	(3.5)
	瓦質陶器		40	(0.2)	100	(0.5)	31	(0.2)	4	(0.1)	175	(0.3)
	信楽・備前他		114	(0.7)	30	(0.1)	6	(0.03)	3	(0.1)	153	(0.3)
合計			15,193		18,374		19,340		2,873		55,780	

			J地区		N地区		O地区		P地区		合計	
			点	(%)	点	(%)	点	(%)	点	(%)	点	(%)
中国製陶磁器	青磁	碗	161		316		166		15			
		皿	189		193		106		25			
		他	89		75		51		1			
		計	439	(2.6)	614	(3.0)	323	(1.6)	41	(1.4)	1,417	(2.3)
	白磁	碗	8		19		5		2			
		皿	578		683		303		32			
		他	15		21		15		1			
		計	601	(3.5)	723	(3.5)	323	(1.6)	35	(1.2)	1,682	(2.8)
	染付	碗	162		132		124		17			
		皿	518		524		217		23			
		他	8		18		10					
		計	688	(4.0)	674	(3.3)	351	(1.7)	40	(1.3)	1,753	(2.9)
	他		19	(0.1)	10	(0.04)	8	(0.04)	3	(0.1)	40	(0.1)
朝鮮製陶磁器			90	(0.5)	67	(0.3)	71	(0.3)	6	(0.2)	234	(0.4)
合計			1,837		2,088		1,076		125		5,126	

総合計　60,906点

日本製陶磁　55,780点（91.6％）

外国製陶磁　5,126点（8.4％）

表－7　第36次調査出土の陶磁器組成

36次の発掘区内は溝による屋敷割が明瞭で、小さい屋敷が22区画検出された。これらに道路、溝などが伴なっている。遺構面も多い所では５面ほど確認されている。整理は、こうした成果を生かすため、作業的に有効な範囲で、各々の区画、道路、溝などの単位と各遺構面との組合せでグルーピングし、保管した。発掘現場では、グリッドを単位に遺物をとり上げているため、溝で区切られ方位の振れている屋敷と厳密には整合しないが、便宜的に遺物のグループ表示に区画名を用いた。作業の結果、区画36　17～22の６区画、道路２、溝11など20以上のグループに分離した。ここでは、この中12の例を扱った。図版の作成もこのグループ毎にまとめた。なお、写真と実測図の個体番号は共通である。特に染付は文様を図化しなかったので写真と照合して欲しい。

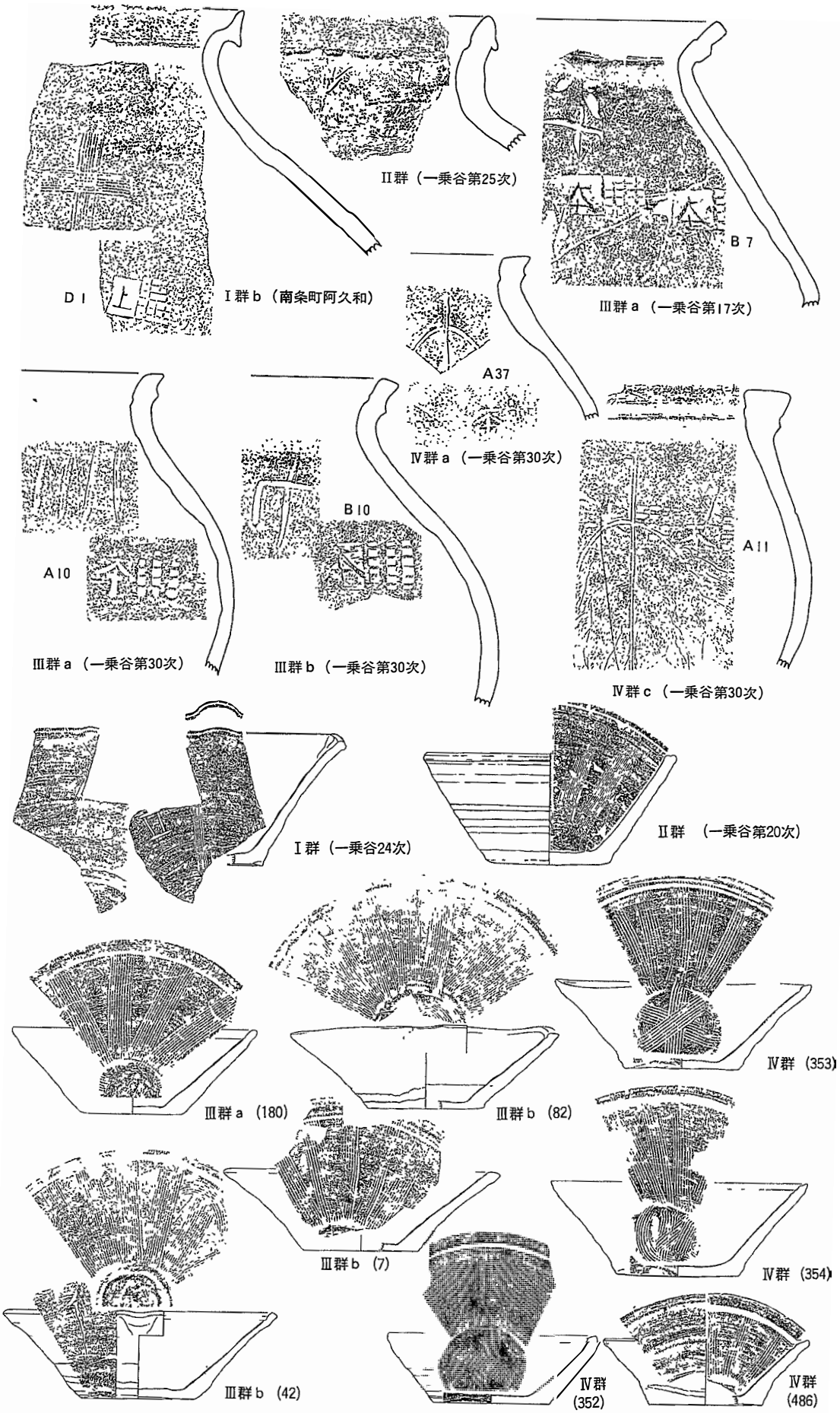
次に各遺物群を概観する。この中で用いた遺物の分類は、越前焼大甕については、丸岡町教育委員会1981「豊原寺跡Ⅱ　華蔵院跡第２次発掘調査概報」、中国陶磁の碗皿は、小野1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.２などを用いた。分類の詳細はそれらによられたい。土師質土器の皿については、1975「朝倉館跡発掘調査報告書」の分類によるが、校正段階で未刊行となっているため、「一乗谷朝倉氏遺跡Ⅵ」などを参照して欲しい。

越前焼大甕・擂鉢の分類　（挿図ー８）

大甕は、口縁部の変化に加えて肩につくスタンプと、櫛描き又はヘラ描きの記号の組合せを指標に分類できる。大甕Ⅰ群は口縁帯をもつグループで、口縁内側には樋状の凹線がつく。肩は「く」字に曲がり、胴下部にも明瞭な段をもつ。記号は櫛描きで、十字、平行線などがみられ、スタンプは菊花や凸字の「上」と格子目の例が多い。Ⅱ群は口縁帯が退化して名残りをみせ、内面の凹線は少し下がってつく。段状の例もある。頸から肩へは直線的で、肩の屈曲が強い。記号は太く浅い凹線、スタンプは凸字、凹字の「本」、「大」と格子目の例がある。Ⅲ群は口縁帯はなく、外側の稜、内側の浅い凹線に変化する。器形はⅠ、Ⅱ群に似て肩の屈曲の強いａと、肩の丸くなるｂ、ｃがある。口縁は全体に角ばった稜が凸帯状のａから、断面が丸又は四角い、稜の単純化されたｂ、ｃがある。記号は太く浅いヘラ描き、スタンプは、凸字、凹字の「本」がある。Ⅳ群は、Ⅲ群から次第に口縁の高さが減じ、肥厚するもので、ａはその初期、ｃは完成した段階である。外側の稜には多様なものがある。内側は低い段となる例が多い。器形は262のようになだらかで、肩や胴下部の段はない。記号は鋭いヘラ描き、スタンプは凹字の「本」だけとなる。

擂鉢Ⅰ群は、片口と付高台をもつグループで、少し肥厚気味の丸い口縁には、沈線がつく。腰部は回転ヘラ削りの痕を残す。擂目の条は本数が少なく、間隔も粗い。見込みの擂目がない例がほとんどで内面にヘラ記号をもつ。Ⅱ群は高台がなくなるが、片口、口縁の沈線、腰のヘラ削り、内面のヘラ記号が残る。条の本数が増加するが、間隔は粗く、見込みに擂目のない例が多い。Ⅲ群では、片口が次第に痕跡的な弱いものとなり、腰のヘラ削りもなくなる。内面のヘラ記号はもつ例が多い。口縁断面は、丸いａと四角いｂがあり、口縁から少し下がって沈線がめぐるようになる。見込みには擂目のある例とない例とがある。Ⅳ群では、片口や内面の記号が見られなくなる。口縁は内傾して切られ、断面三角形に近くなる。口縁下にはⅢ群よりも近く沈線か段がめぐる。擂目は間隔のつまった例が多く、見込みにも擂目がつく。Ⅳ群は、口縁断面に多様な例があり、さらに細分できるが、ここでは一括しておく。

なお、この分類の大甕と擂鉢の記号は各々別個で、対応関係は示さない。



挿図―8　越前焼大甕・擂鉢分類図

区画36―18・19　グループ１　（ＰＬ．40　第32図）

区画36―18と19は、耕土、床土を除去した段階でひとつの区画として検出されている(第27図)。グループ１は、この段階での遺物群で、耕土と床土の分は除いてある。

越前焼　大甕はⅣ群ｃ（２）が多く、これらにⅣ群ａ（１）が混在している。擂鉢も同じような傾向で、Ⅳ群が多い中に、Ⅲ群ｂ（７）が混じる。（７）はほぼ全形がわかる個体である。鉢には、（８・９・10）と多様な器形がある。越前焼は（７・８）以外にはまとまる個体がない。

美濃焼　量的に少なく、鉄釉では天目茶碗（11・12）、灰釉では皿（13など）があり、口縁のわかるものはすべて端反りとなる。見込みのスタンプには菊や不明（14・15）がみられる。

中国製陶磁器　白磁は皿ばかりで、皿Ｂ群とした高台に抉りのある小皿（16）が古く１点だけあり、皿Ｃ群とした端反り皿が最も多い。菊皿（19）も混じる。染付では、碗Ｃ群とした「蓮子碗」（20～22、24）や、碗Ｄ群とした「饅頭心碗」（25）がみられる。皿は高台をもつ端反り皿の中で皿Ｂ１群（26）や、碁笥底の皿Ｃ群（23）、ツバ皿の皿Ｆ群（28）がある。青磁には無文の碗（29）や、蓮弁文碗Ｃ群とした線描きの細い蓮弁文をもつ碗、算木手の香炉（32）がある。また（33）はタタキ成形の壺又は舟徳利形の瓶で、赤紫色の堅緻な土で作られ、内外面にかせた暗緑～灰緑色の釉がかかる。

石製品　陸部が丸くとじている硯（34）や、硯の縁の破片を再研磨した（35）があり、表面に「大」と線刻されている。

金属製品　長さ6.3㎝の大型の鞐（36）や銅銭がある。

区画36―18　グループ２　（ＰＬ．41・42　第33・34図）

区画36―18と19が東西溝ＳＤ2007により分割された段階の遺物群である。建物ＳＢ2030の遺構面やその上の整地層に伴なうと考えられる。

越前焼　大甕にはⅣ群ｂ（37・38)、ｃなどがみられ、同類と思われるヘラ記号をもつ破片(39)がある。擂鉢にはⅣ群（45・46・47）が多いが、この中にⅢ群ａ（41）、Ⅲ群ｂ（42・44）が混じる。（42）はほぼ半分ある個体で、擂鉢Ⅲ群ｂのモデルとした。片口、口縁断面、見込みに擂目がないことなどが注意される。（48）は浅い皿形の例で、少ない器形である。

美濃焼　鉄釉には天目茶碗（49・50）や水注（51）、仏花瓶（52）がある。灰釉は皿ばかりで、腰折れで削り出しの高台をもつ皿（53）が注意される。これ以外の、器形がわかる例は、端反り口縁で（54・55）、見込みに菊の印花をもつ。（93）は大変小さい皿で、浅く、見込みには菊の印花をもつ。

中国製陶磁器　白磁では、白磁皿Ｂ群に伴なう腰の丸い坏（57）がある。高台は削り出したまま露胎で、失透性の釉は腰でとまる。（58・59）は白磁皿Ｃ群。染付には皿が多く、染付皿Ｂ１群（61～63）、染付皿Ｃ群（64）、染付皿Ｂ２群又はＥ群と推定される高台内に「長命富貴」銘をもつ（65）がある。青磁には碗や、線描きによる菊皿風の小皿（67）がある。（66）は碗の高台部を外側からたたいて円盤状に調整した例である。（68）は瓶の頸部でロクロ挽き、暗緑色の釉がかかる。胴部はタタキ成形となるものである。

陶磁器以外には、若干の石製行火（バンドコ）の破片があり、また、多量の木炭片と共に、壁の焼けたブロックが出土している。

区画36—18　グループ3　（ＰＬ．42・43　第35・36図）

第27図にみられる建物ＳＢ2030の下位の木炭層よりの出土遺物である。

越前焼　たくさんの越前焼の破片があり、口縁のわかる例では、大甕Ⅳ群ｃが少なく、Ⅳ群ｂ（74）、Ⅳ群ａ（71・72）、Ⅲ群ｃ（70）、Ⅲ群ａ（69）など古いものが多い。大甕のスタンプは（74）はＡ17、（75）はＡ25でⅣ群に多く使用されるものである。擂鉢も同じ傾向で、Ⅳ群の例が少なく（84・85）、Ⅲ群ｂ（81・82）、Ⅲ群ａ（78・79）、Ⅲ群（80）の例が多い。（80）は内面にヘラ記号をもつ。（82）はほぼ完形品で擂鉢Ⅲ群ｂのモデルとした。（86）の鉢は見込みに「上」字のスタンプがつくが、これは大甕につけられるスタンプＣ３の「上」字と同じ印面であり、甕の場合、Ⅰ群又はⅡ群に多い。

美濃焼　鉄釉では天目茶碗（87・88）、灰釉では、青磁の蓮弁文碗を写した碗（89）や花生の口縁（97）を除くと皿が多い。皿は腰折れで削り高台をもち、腰以下を露胎、見込みに目跡を残す（90）や、高台内にワトチの跡を残す端反り皿（91）、内湾する（92）、小形の（93）などがある。見込みの印花にはカタバミ（94）、菊（95）をみる。

瓦質陶器　口径に対して浅い筒形の香炉（98・99）があり、前者は横「Ｓ」字のスタンプをもっている。

土師質土器　灯明皿や酒坏として使用された小皿の破片が多い。この中に１点、表裏に漆によって金箔を貼った破片がある。（100）は土釜で、一乗谷で通常出土する例よりも小さく直径4.6cm、器高5.1cmである。胴部は煤け使用されたことを示す。ツバの貼りつけ部には「卄」のヘラ描きがある。

中国製陶磁器　白磁では、腰折れ外反となる皿（101）や、高台抉りのある白磁皿Ｂ群（102）が古いものとして注意される。染付は、皿では染付皿Ｂ１群（103・104など）がほとんどで、他の群がない。（105）は玉壺春形の瓶の口縁部で、蕉葉文が描かれる。青磁には、弱い玉縁の口縁をもつ碗（107）、無文の碗（108）、蓮弁文碗Ｃ群（109）、稜花皿（110）、香炉（111）などがある。

石製品　バンドコの破片や砥石がある。（112・113）は小形の仕上砥で、表面に細かい櫛描状の使用痕を残す。（114）は線刻の記号があるが、意味は不明である。

金属製品　銅銭ひとさしがまとまったまま銹着して出土している。枚数は95枚で、銭種は不明である。これ以外の銅銭で種類のわかるものを（115～142）に示した。（143）は銅製の鞘で長さ5.2cm。（144）は小札である。

以上の他に雲母片が数片採集されている。

区画36—19　グループ2　（ＰＬ．44　第37図）

区画36—18と19が東西溝ＳＤ2007により分割されてからの遺構面とその上の整地土の遺物である。ＳＫ2093などのピット群に伴なうものであろう。遺物は少ない。

越前焼　大甕は少なく口縁部のわかる例がない。壺も少なく、中に凸帯を肩にもつ短頸壺（146）の破片がある。擂鉢はⅣ群（153など）、Ⅲ群ｂ（149・150）、Ⅲ群ａ（148）が混在する。（154）は擂鉢の底で、浅いヘラ記号がつけられている。（155・156）は擂鉢と同じ器形の鉢。（147）は上下不明。貫通孔があり、面が２次的に研磨されている。

美濃焼　鉄釉では天目茶碗（157）や、舟徳利形の瓶の底部（158）がある。灰釉には皿が数点と、

小壺かと思われる糸切りをもつ底部(160) がある。

中国製陶磁器　白磁は端反りの白磁皿C群 (161～164) がほとんどで、皿D群の菊皿 (165) が少しある。(161) は小形の端反り皿で、見込みには幅 0.9㎝の露胎圏がめぐる。染付では、碗に染付碗C群 (166)、碗D群 (167～170) がある。皿には染付皿B2群 (171) や皿E群 (172) がある。青磁はヘラ彫による菊皿風の (173・174) や香炉 (175) がみられる。(176)はタタキ成形の瓶の胴部である。

金属製品　(177) は胴張りの輪を2連結合した8字形の金具で、銅製である。

区画36－19　グループ3　(PL. 45　第38図)

SK2093などのピット群をもつ遺構面の下位の面や、その後区画の東北隅から集中的に出土した水晶製の数珠玉製作に関係する遺物群である。遺物は全体に少ない。

越前焼　大甕にはⅢ群又はⅣ群と推定されるスタンプA4をもつ (178) があり、擂鉢にはⅢ群a (179・180) とⅣ群 (181) がある。(180)は復原できた個体で、片口部の破片がないものの、口縁の断面、内面のヘラ記号、間隔の粗い条、見込みに擂目のないことなどⅢ群aのモデルとした。また、出土遺構面からもⅢ群、Ⅳ群の変遷の時期を考える良い資料となろう。

美濃焼　鉄釉では天目茶碗 (182・183)、灰釉では皿 (184) がある。

瓦質陶器　香炉 (185) の1点のみ。

中国製陶磁器　白磁は皿のみで白磁皿B群の (186)、皿C群の中でも高台のヘラ削りが断面三角に近く厚い特徴をもつ (187) などがある。染付も皿ばかりで、染付皿B1群 (188～190) と、皿C群 (191) がみられる。青磁は蓮弁文碗C群 (192) と稜花皿 (193) がある。

数珠玉製作に関連する遺物　これらの遺物は、区画36－19の北東隅1/4ほどの範囲より集中的に出土した (第29図)。この区画の中でもこの範囲以外からの出土はなく、この部分に限定されることから、この範囲が作業場であった可能性が高い。

玉の原材料は水晶で、無色透明なもの、淡く黒色を帯びた透明なもの、白濁したものなどがみられ、出土した資料でみる限り、余り太い水晶はない。製作の工程は、①水晶の荒割り (211～213)、②調整剝離による粗成形 (214～221)、③穿孔 (222～231)、④荒研磨 (232～238)、⑤仕上研磨 (239～246) である。第3工程の穿孔は両側から行なわれ、この工程で半分に割れる失敗例が多く見られる。また、これ以外に第1又は第2の工程で出たチップが約 250.2g ほど採集されている。完成品には、丸玉の他、扁平な玉、嚢形の玉などがあり、サイズも数種認められる。

各工程毎に、計測可能な個体についてその直径と高さを図示したのが挿図－9である。図では、第4工程、第5工程については嚢形、丸形、扁平形を区分した。分類は最大径÷高さ×100 の指数で表し、100 が真球、数値が大きい程扁平となり、小さい程嚢形となる。この結果、肉眼で分類した(232・233・236・240・243・244・246) の丸玉は、指数100～130の範囲に入り、中でも110～120 に多い。同様に(234・235・237・238・241・242・245) の扁平玉は指数により2つの群に分離された。指数140～170の範囲の扁平玉1群、220～250の扁平玉2群である。嚢形は (239)の1例のみで指数は81である。

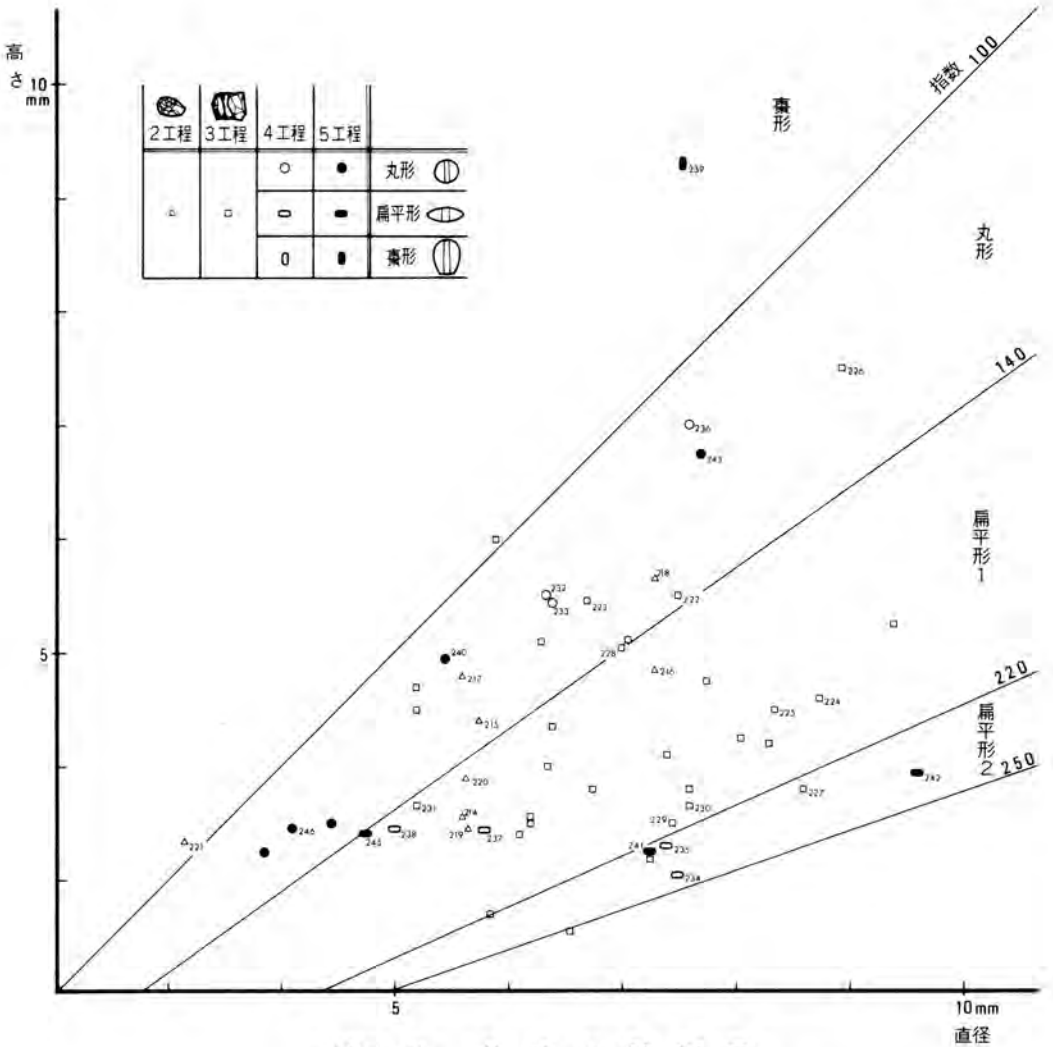
また、これらは直径と高さによりある程度の集中をみせた。丸玉では (246) などの群、(232・240) などの群、(236・243) などの群を識別でき、扁平玉では (245・238・237) の群、(234

・235・241）の群、（242）の群が認められよう。たくさんある第２、第３工程の個体については、（227）の扁平な形、（221）の小さい形が既に作られていると認められるが、大半のものはその帰属を決めることは困難である。しかし、全体としてみると指数120～220の範囲で、径が５㎜～９㎜の範囲に集中していることは指摘できよう。

研磨に使われた砥石には２種類が認められる。第４工程で使用されたと推定される荒砥（194～198）、第５工程で使用されたと推定される上砥（199～207）である。前者は当然ながら粗粒で、一乗谷の奥で産出する浄教寺砥石の粗いものと似ている。後者は細かく、節理面を利用して薄い板状に割られたものを余り整形せずに、両面又は片面を使用している。

また砥石の中には、玉の研磨にどう関連したか不明であるが、（194）などと同じ石質の荒砥が２例あり、（209）には鋭い条痕の使用痕が残されている。また、（208）は方柱状の上砥であり、表面には滑らかな使用痕をもち、両側面には切った時のものと考えられる鋸の使用痕のような条線が認められる。

金属製品　銅銭と銅製の水滴（247）がある。水滴は上面がゆるく盛上った、甲盛の１枚で作られた胴部に首と底板をろうづけしている。表面に漆の痕跡が認められる。（300）の例と作りサイズ共にほぼ同じで、底径3.5cm、高さ1.4cmである。



挿図－9　数珠玉計測図

区画36—20　グループ2　（ＰＬ．46・47　第39・40図）

建物ＳＢ2029の遺構面と、これを覆いＳＢ2028の面を形成していた焼土による整地層出土の遺物群である（第28・29図）。

越前焼　大甕はⅣ群が多く、その中にⅢ群ｃ(248）などが少し混じる。(250）はⅣ群でスタンプは「本」の部分が欠けるがＡ25である。(251）は口縁の立上りが高く、肩のなだらかな中甕、(252～256）は壺である。(256）はお歯黒壺の名の通り、内に鉄くずが入ったまま出土した。小さな片口と肩にヘラ記号をもつ。お歯黒壺は双耳の例が多いが、この壺は耳がつかない。擂鉢はいずれもⅣ群である（258～260)。(257）は火桶で底板の上に６段程の粘土を積む。内面は継目を残すが外面はきれいに調整されている。板目を残す底には、甕や壺に良く使われる傘形のヘラ記号がつく。十字は心出しであろうか。

美濃焼　鉄釉は天目茶碗（264～267）や小壺の破片、灰釉は皿（268～272）がある。(268）は口縁を指先で交互に押さえたヒダ皿、(269）は端反り皿で高台内にはワトチ痕を残す。(270）は内面にヘラで条を入れた内湾する皿で、見込みには菊花のスタンプがつく。

土師質土器　小皿はＣ類、Ｄ１類が主でこれに精良なＤ２類が少し混じる。いずれも小破片が多く計数はむずかしい。(273）は小壺で手づくねで作られている。用途は不明。

中国製陶磁器　白磁には口禿げの皿（274）が１点混じる。多いのは白磁皿Ｃ群（275・276）である。染付では、染付碗Ｃ群（277～280）や碗Ｄ群(289）がある。(278）は胴部、見込みに梅月文の略画が描かれる。皿は染付皿Ｂ１群（281～285)、皿Ｃ群（287）などがみられる。(288）は染付坏の中では最も多い草花文をもつ坏である。青磁では蓮弁文碗Ｃ群(290)、稜花皿（292・293）や、外面に浅いレリーフ状の蓮弁文、見込みに凹線で文様をもつ皿(294)、(295)の香炉などがある。(296）は五彩の坏状のもので、赤と緑が使われている。(297）は交趾三彩の型作りの皿で稜花の口縁をもつ。２次的に火を受けており赤色を呈す。

石製品　硯(298）がある。剝離がひどく硯面の保存が悪い。

金属製品　提子の吊手(299）は火を受けているが、上面には八双形のパネルに毛彫文様をもつ。地は魚子打ち、銅製である。銅製水滴(300）は直径 3.6cm、高さ 1.7cm、首は内側で曲げて接続し、底板はろうづけである。(301）は銅製の金具で用途不明。(302）は銅製の壺金。

区画36—20　グループ3　（ＰＬ．46　第41図）

ここに示した大甕は、Ｊ列のトレンチ内で検出された大甕埋設施設ＳＸ2216付近で採集されたもので区画36—20断面土層図（第31図）に見られるように、炭混り褐色土層から掘り込まれた土坑内に据えられていたと考えられる。第29図において井戸ＳＥ2174に近いのが(261)、他方が(262)である。それらは後に破却され、底部のみが残り、(263）は底部も破却された。これらを被う焼土炭混り褐色土中に数個体分の破片となって残ったものである。この層はさらに厚い灰褐色土や焼土層によって整地され、この上に新しい遺構面が作られている。（261～263）は復原できた個体で、（261・262）はほぼ完全に破片があり、(263）は底部を欠失する。(261）はⅣ群ａで、肩にヘラ記号とスタンプＡ38がつく。全体に焼歪みがひどいが、口径90cm前後、器高86cmを計る。(263）はⅣ群ｂで、肩にヘラ記号とスタンプＡ５をもつ。底部だけがない。(262）は、Ⅳ群Ｃで肩にヘラ記号とスタンプＡ17をもつ。焼歪みがなく端正で、口径86cm、器高89.7cm。

区画36—21　グループ1　（ＰＬ．48　第42図）

建物ＳＢ2027の遺構面検出に伴なう遺物群である。

越前焼　破片は多いが、口縁部が少ない。大甕の中ではⅣ群(307）が多い。擂鉢にはⅣ群が多く、Ⅲ群ａ、ｂ（310・311）が混在している。壺には14世紀頃と推定される古式の(308）や、肩に凸帯をもつ(309）などが認められる。鉢にも内面にヘラ記号をもつ例が２点あり、(315）は、古い。

美濃焼　鉄釉では瓶（317・318)、灰釉では端反り皿（319など）があるのみで少ない。

中国製陶磁器　白磁には、白磁皿Ｃ群とした端反り皿（321・322)、皿Ｄ群とした菊皿（323・324)、見込みに露胎圏をもつ坏などがある。染付は、碗では染付碗Ｃ群（325～327)、皿は染付皿Ｂ１群（328・329)、皿Ｃ群（330～333）などがあり、中でも皿Ｃ群が多い。青磁には、香炉(334・336)、浮彫の文様をもつ壺の蓋(335）がある。(337）は禾目をもつ天目茶碗で、黒い粗粒の土である。(338）は部分的に薄い褐釉をかけた鉢の口縁部、(339）はタタキ成形の瓶の胴部である。

朝鮮製陶器　(340）はいわゆる「そば茶碗」に近い平茶碗で、高台脇や見込みに段が見られ、灰青色の釉がかかる。

石製品　バンドコ類の破片がたくさんあり、中に小形のＯ形のバンドコの蓋（341）がある。長さ 9.6cm×幅 7.6cmを計る。

区画36—21　グループ2　（ＰＬ．48～52　第41・43～46図）

建物ＳＢ2027の遺構面を形成していた木炭焼土層を主体とする厚さ約30～40cmの層群とその下面のピット群をもつ遺構面上の遺物である。この遺物群の中には、越前焼をはじめ復原できた個体が多く、また石製のバンドコには内部に灰と木炭が残り、蓋付のままで出土した例があるなど、比較的原状に近いと予想されるグループを含む。しかし、ここだけではなく、区画36—20などでも知られるように、一乗谷川に近い区画では遺物を含んだままの焼土や木炭層を整地土として利用している例が多く、これらの焼土、木炭層が本来この区画のものか、他から搬入されたものかを速断することは難しい。その意味では、はっきりこの区画に帰属するのは、ＳＸ2134に伴なう越前焼甕（345）だけといえる。

越前焼　大甕は破片が多く、Ⅳ群が主体と思われるが、口縁部は少なくⅣ群ｃ(342）が少しみられるだけである。(343）は大甕の肩部でスタンプはＡ48、(344）はＡ12である。(345)は(262）などの大甕と同じ器形をもち、大甕の約$^{2}/_{3}$のサイズに作られた甕である。ヘラ記号、スタンプをもたない。この器形には、織田町不老山出土例（口径60cm、器高57cm、田中照久氏より御教示をうけた）にもみることができる。口縁部だけでは区別がつきにくいため、大甕破片の中に紛れている分が多いと思われる。壺は（346～348）が復原された。(347）は肩と胴下部にヘラ記号をもつお歯黒壺で、２次的な火を受けたためか、胴下半部から底部の剝離が顕著である。(348）も肩にヘラ記号をもつグループで、口縁には弱い片口がつけられる。擂鉢は（352～354）などが復原された。これらはいずれもⅣ群の典形的な例である。Ⅲ群ａ(349）が混在する。(355）は直線的な胴から口縁が内湾する深い鉢である。

土師質土器　小皿がほとんどで、土釜片が少し混じる。皿は手づくねで成形したものばかりで、せんべい状の粘土板を肘などへ押しあてて皿状にし、指で調整する。この時布を使うもの(379～

381)と使わないものがある。両者とも土師質皿Ｂ類としている。最も多いのはＣ類――粘土板から指で皿状に成形し、口縁外側と内面見込み中央までを指ではさんで「の」字にまわしナデし、口縁を調整したもので（382～391）である。Ｄ類――Ｃ類と同様に皿成形した後、見込み部分を先にヨコナデし、その後、口縁外部と内面胴部をはさんでまわしナデするもの、（392～394）などが少量ある。Ｃ類には、器壁が薄く、底が平坦な作りで、口縁の油を切るための立上りが顕著な（386・387）、（390・391）と、立上りが顕著でなく、厚い作りの（382～385）、（388・389）の２つのグループがあり、各々は口径が約9cm（３寸もの）と６～７cm（２～2.5寸もの）とより成っている。Ｄ類は約９cm（３寸もの）が多い。皿全体の中では、（382）例のグループが最も多い。

美濃焼　鉄釉では天目茶碗(356)、香炉(357)、瓶(358）がある。灰釉は端反り皿（360）が多く、１点の卸皿（359）がある。卸皿は割れ口に漆による接合の跡がみられる。

備前焼　（361）の１点で瓶の底部である。

中国製陶磁器　白磁は（362・363）に代表される端反りの白磁皿Ｃ群ばかりである。染付は、碗では（364・365）の饅頭心の碗Ｄ群や、（366・367）の蓮子碗の碗Ｃ群が認められる。皿は端反りの染付皿Ｂ１群(369)、碁笥底の皿Ｃ群(368)、ツバ皿の皿Ｆ群(370）などが認められた。青磁は少なく、蓮弁文碗Ｃ群(371)、香炉(372）があるのみ。（373・374）は褐色の鉄釉をかけた茶入の胴部で、（373）には赤褐色の非常に細かい漉土が使用されている。（375）は焼締の壺の胴部である。

朝鮮製陶器　（376～378）はいずれも茶碗で、直線的に開く平茶碗の形をとる。（378）は青灰色の地の上に白土を刷毛塗りした刷毛目茶碗である。

石製品　先述したように、この遺物群には笏谷石（緑色凝灰岩系）の製品で完形品に近いものが多かった。（397・398）は風炉でいずれも丸く張った胴からなめらかにすぼんで３本の軸足を作っている。窓は楕円形で１個。（397）は肩から水平に曲げて口縁としており、外面の削りが大変滑かな仕上げである。（398）は欠失するが、首の立上りがあり、少し粗い外面には全面に黒漆が塗られた痕跡が認められる。バンドコと呼ばれる行火には平面がＯ形のものとＤ形のものが最も多くみられるが、ここではＯ形のものは破片のみであった。Ｄ形のバンドコは、内部に灰と炭を残し、蓋付のものが３例出土した。（399・400）はセットで、身の直線部19.5cm、奥行17.5cm、高さ16.5cmである。窓は４窓で割付の罫描きを参考に計測すると、口から外面で 2.5cm、内面で 3.0cm 下がった位置から高さ 5.0cmに切られ、窓幅は2.9～3.4cm、窓の間は 1.1cm。窓の下は８cm。灰は窓の下枠ぎりぎりまで入り、４～５cmの厚さとなる。木炭は細片が多い。この蓋（399）の内面は煤こげ、中央に「木ま」の線刻がある。（401・402）はセットで、身の直線部22.0cm、奥行19.0cm、高さ14.5cmである。窓は５窓で、同様に口から 2.5cm、内面で 3.0cm下がった位置から高さ 6.0cmに切られる。窓幅は2.6～2.8cm、窓の間は1.1～1.3cm。窓の下は 6.0cm。灰は２cm程の厚さで窓の高さいっぱいに入る。炭は細かい。（403）は、直線部20.2cm、奥行17.5cm、高さ15.7cmである。窓は４窓で、高さ 6.0cm、幅2.9～3.1cm、窓の間は 1.3cmである。窓の下は7.0cm。灰は約３cm入っている。

Ｄ形のバンドコには数種類のサイズがあるがこの３例は最も多い典形的なものである。大きさは、大略、直線部で７寸、奥行６寸、高さ５～６寸をモデルとするようである。窓はふつう４～６窓になり、熱を外へ出すためか窓の上下はいずれも外へ上向きに切られる。（402）の窓の下枠

の切り方は例外である。割付の罫描きの刻線を残す例も多く、計測すると数㎜の誤差をもつのがふつうである。大略、窓は、窓幅１寸、窓の間は４～５分、窓の天地は口縁から内側で１寸下がり、窓の高さ２寸、窓の下は２～ 2.5寸、内側の深さは窓の下枠から１寸前後。モデルとしてこうした寸法を出せる。

(395) は台脚をもつ硯。(396) は乳白色の石製の玉で、ほぼ同形のものがもう１例出土した。

金属製品　(404) は銅製の権で、台付の形になっており、上部は鎬がつく。全面に漆塗の痕跡が認められる。重量は93.0ｇである。

道路ＳＳ495　（ＰＬ．53・54　第47・48図）

道路ＳＳ495の路面上の遺物群である。ただし、この道路は道路ＳＳ494との交点から北へなだらかに傾斜していたものが、開田に伴って、区画36―18・19の前面部分が水平に削平された状況で検出されている。焼土と共に遺物が多かったのは、区画36―20・21付近であり、その部分は最終路面上の遺物と考えられるが、いずれの場合も、本来の位置から焼土と共に動かされた結果を反映している。こうした中に、完形品に近いものが数例含まれていることに注意されたい。

越前焼　甕、擂鉢をはじめ数多くの破片が採集されている。大甕の口縁にはⅢ群ａ(405)、スタンプは凸字の「本」をもつＢ４、Ⅳ群ａ (406・407)、スタンプはＡ19などがある。(408) もⅣ群の破片でスタンプはＡ11である。(409)は甕又は壺の胴部で、越前焼には珍しく布痕を残している。壺には (410～414) がある。(414) は例を見ない異形のもので、口縁を指で押さえてヒダ状にしており、肩にめぐる断面三角形の凸帯にはヘラによる刻みをもつ。擂鉢にはⅢ群ａ(415) やⅣ群 (416～418) がある。(420) は火桶か。

美濃焼　鉄釉には天目茶碗 (428・429)、小壺(431)、茶入(430)、火桶(433) があり、灰釉には皿類が少量ある。

備前焼　(421～424) にみられる徳利形や鶴首形の瓶の破片のみである。

信楽焼　(425～427) にみられる肩と胴の張った大型の壺の破片が認められる。

中国製陶磁器　白磁には (434・435) の玉縁の碗の例が古く、横田賢次郎・森田勉1978分類の白磁碗Ⅳ類１に比定されよう。その他には、白磁皿Ｃ群 (437・438) や楕円形の小形の菊皿(439) がある。染付の碗では、染付碗Ｄ群 (441・442) 、皿では染付皿Ｂ１群 (446～451)、皿Ｃ群(443・444) がある。(452)は染付坏。青磁には、(453・454) の弱く外反する玉縁の碗があり、皿には(455) 稜花皿、(456) 菊皿がある。(457) は大型の盤、(460) は香炉で完形品に近い。(462) は胴に「寿」字の意匠を浮き出した、型成形による扁平な水注で、側面に注口部がつくが、破片が少ないため把手の有無はわからない。(463～465) は壺。(463) はロクロ成形でぶ厚く、砂質の粗い土で作られ、緑色の釉がかかる。耳の痕跡が残る。(464・465) は同じ個体で、胴部から肩へかけてはタタキ成形の痕跡を残す。土は灰白で細かく、外面には褐釉がかかる。肩にはサヤ状の融着痕を残す。(466) は花生を思わす筒でロクロでひかれる。外面は多方向にナデた調整痕を残す。土は粗く、手取りは軽い。

道路側溝ＳＤ518　グループ１　（ＰＬ．55　第49・50図）

溝ＳＤ518は約 0.7m と深く、発掘の時に上位の焼土混りの分と、これより下位の砂利混り土

の分とが分離されてとり上げられている。この上位の遺物群をグループ１、下位をグループ２とした。

越前焼　大甕にはⅢ群ｃ（467・469）をはじめ、Ⅳ群ａ（470・471）、Ⅳ群ｃ(473)が混在する。(468）はⅠ～Ⅲ群ａの胴下部のヘラによる調整痕を残す破片である。(474）は凸字「本」のＢ４のスタンプ、(475）は凹字「本」のＡ45のスタンプでいずれも「本」字の部分を欠失する。(476）は肩の張らない、口縁の立上りの高い中甕である。（478～480）は壺で、(478）は稜の作りが強い。擂鉢には、Ⅲ群ｂ(481）やⅣ群（482～486）がある。(486）は底に回転台の枘の痕を残す。(487）は小形の浅鉢。

美濃焼　鉄釉では天目茶碗（490～494)、灰釉では皿ばかりである。ヒダ皿(495）や内湾する皿(496）を含む。

備前焼　（488・489）の徳利形、鶴首形の瓶の破片がある。

中国製陶磁器　白磁は(499）のような端反りの皿Ｃ群が最も多く、皿Ｄ群菊皿(500）や、高台から外反する坏(501）などがある。染付は、染付皿Ｂ１群(504～506)、染付皿Ｃ群（502・503）が多く、皿Ｂ２群(507）が混じる。青磁には碗(508)、皿(509)、盤(510）が少しあるだけで少ない。

朝鮮製陶器　（511・512）の平茶碗の破片がみられる。

道路側溝ＳＤ518　グループ２　（ＰＬ．56　第51・52図）

越前焼　大甕にはⅢ群ａ(514)、Ⅲ群Ｃ(513)、Ⅳ群ｂ（515～518）が認められる。(520）は中甕で(476)に比べると口縁の肥厚が少なく古そうである。(523）は中甕をさらに縮少した器形の甕、（524～527）は短頸壺で肩にヘラ記号がつく。擂鉢は、Ⅲ群ｂ（528・529)、Ⅳ群（530～534）がある。(537）はⅢ群の底部で裏にヘラ記号がつき、見込みには擂目をもたない。(535）は小形の浅鉢、(536）は火桶である。

美濃焼　鉄釉には天目茶碗（538～551)、皿(552)、茶入(553・554）がある。（554）は灰褐色の堅緻な土で、内面は露胎、作りは良い。灰釉は端反り皿(555）や内面にヘラで凹線を入れた内湾皿（556・557)、小形の鉢状の（558)などがある。

中国製陶磁器　白磁には口禿げの皿(559）や、白磁皿Ｂ群に伴なう面取り坏(560）などの古いものも少し混じえる。多いのは白磁皿Ｃ群(561）や皿Ｄ群(563)でツバをもつ皿(564)、坏(565）などがある。染付では碗Ｃ群（566・567・569）や碗Ｄ群(568・577)、染付皿Ｂ１群（571～573)、皿Ｃ群(570)、皿Ｅ群(575）がある。青磁では、蓮弁文を浅くヘラ彫りした碗(578)、線描きの蓮弁文碗Ｃ群（579・580）があり、他に菊皿(581)、広口壺の口縁(582)がある。

石製品　バンドコの破片や硯(583)を認める。

Ｊ地区の遺物の接合資料　（挿図―10）

個体の復原をする作業を通じて、比較的接合の破片数の多かった例について、その分布状況を模式的に示したのが挿図―10である。記号は同じ個体を示し、その後の数字は破片数である。同じグリッド内に同じ記号が重複するのは、出土層位が異なることを示している。また凡例にある（　）内の数字は個体番号で、実測図、写真の個体番号に通じる。

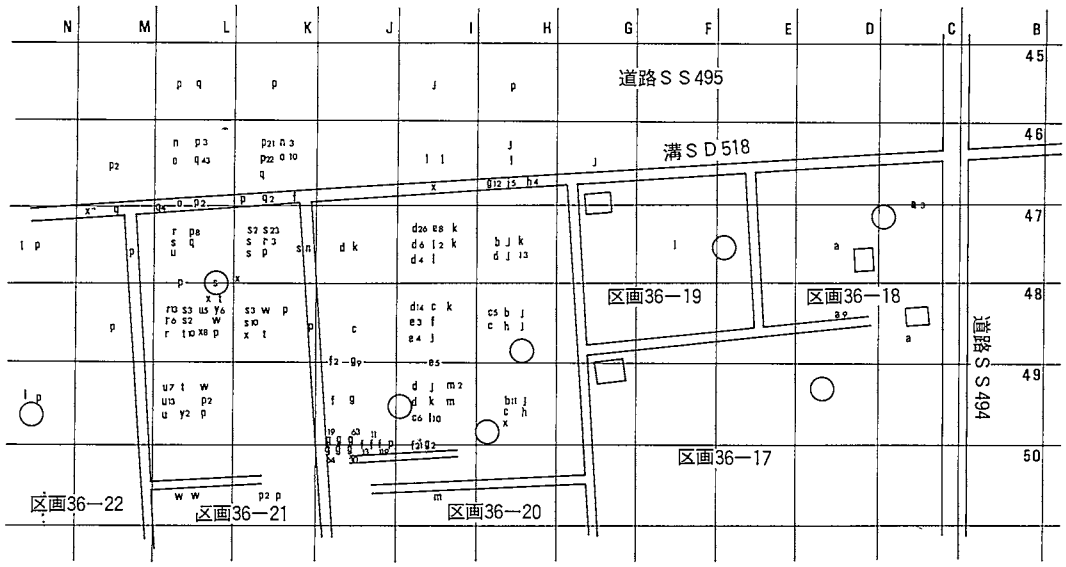
この模式図によれば、大略、同一個体は同じ区画内ぐらいに集中する傾向があるが、その範囲

内では散在する例が多い。また区画を越えて、主として屋敷から道路方向へ動くｊのような例や、ℓ、ｐのようにいくつかの区画にまたがり、広い範囲に散在する例がある。特にｐの例では、溝518によって遠く第44次の発掘区にまで到達している破片が数点ある。一方、逆に道路面上に検出された（431・455・460）の例のように、完形品がその場でつぶれた状況を示す例もある。また、いくつかの例にみられるように、出土層位が何層かにわたるものがある。

ｇ例は、この区画36—20内に埋甕として据えられていた大甕（262）であり、底部は原位置に残っていた。この甕は途中で破壊され、整地層と共に移動した破片は、道路側溝からも出土した。この大甕を含む層は、さらに上位の遺構面に覆れている。

このようにみると、道路面上の出土例から推測されるように、第１に、一乗谷の町の廃棄直後に、焼土と共に遺物が大きく動かされたことが示される。また第２に、区画36—21グループ２やｇ例に示されるように、従来より知られる開田や耕作時の攪乱だけではなく、天正以前における一乗谷の数回の造成段階に既に遺物を含んだ焼土層などが整地土として使われ、大きく移動していることが推定された。従って、検出された最上位の遺構面のみならず、下位の遺構面においても、採集された遺物は、種々の移動を受けた結果の姿であるとみるのが妥当である。遺構に伴なう遺物、その区画で使用された遺物であると認定するには、むしろ逆に出土状況からの積極的な理由づけが必要とされよう。

そうした問題も含め、層位的な出土状況など、一乗谷における遺物群をより細かく検討する資料を蓄積するため、今回は区画、層位等によって分離したままの資料を呈示してみた。

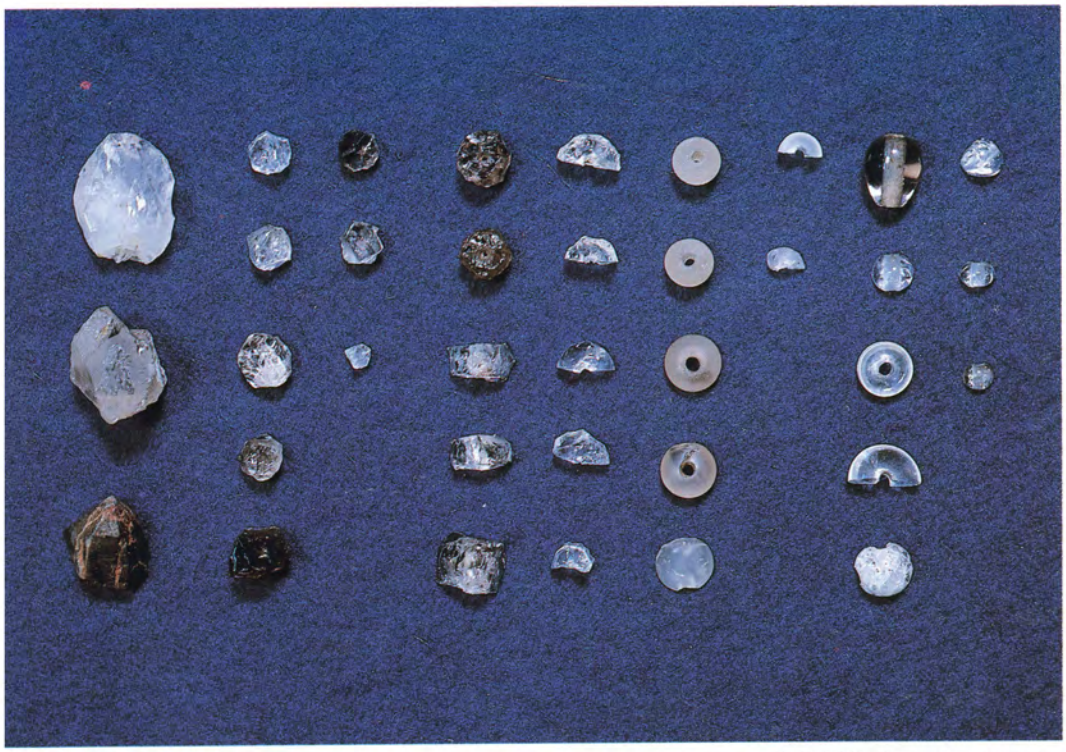


ａ：越前焼鉢（８）　ｂ：越前焼火桶　ｃ：越前焼火桶(257)　ｄ：越前焼甕　ｅ：越前焼壺
ｆ：越前焼甕(261)　ｇ：越前焼甕(262)　ｈ：染付碗(289)　ｉ：染付碗(280)　ｊ：青磁碗(291)
ｋ：鉄釉壺　ｌ：染付碗　ｍ：灰釉皿　ｎ：越前焼壺　ｏ中国製壺(463)　ｐ：中国製壺(464)
ｑ：越前焼擂鉢(486)　ｒ：越前焼擂鉢(354)　ｓ：越前焼甕(345)　ｔ：越前焼壺(347)
ｕ：越前焼壺(348)　ｗ：越前焼鉢(355)　ｘ：石製風炉(397)　ｙ：染付碗(364)

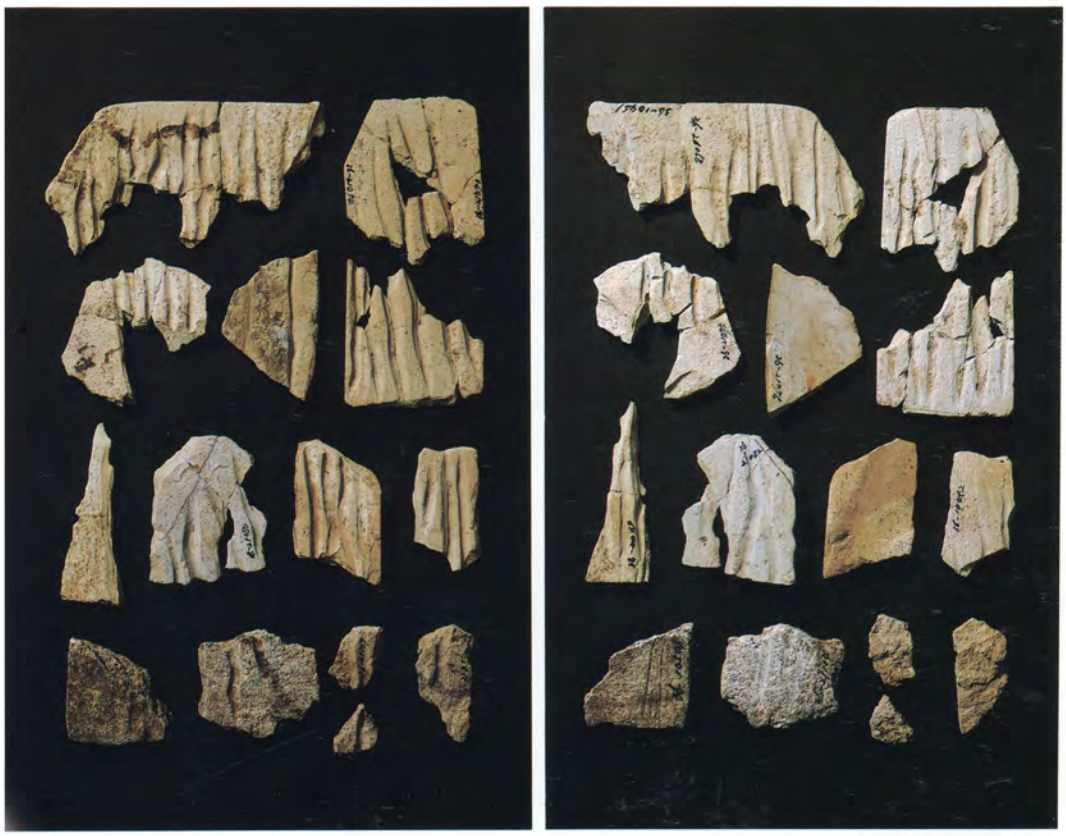
挿図—10　遺物接合模式図

全　景　北東から

9ＭＩＬ－Ｊ地区　北から



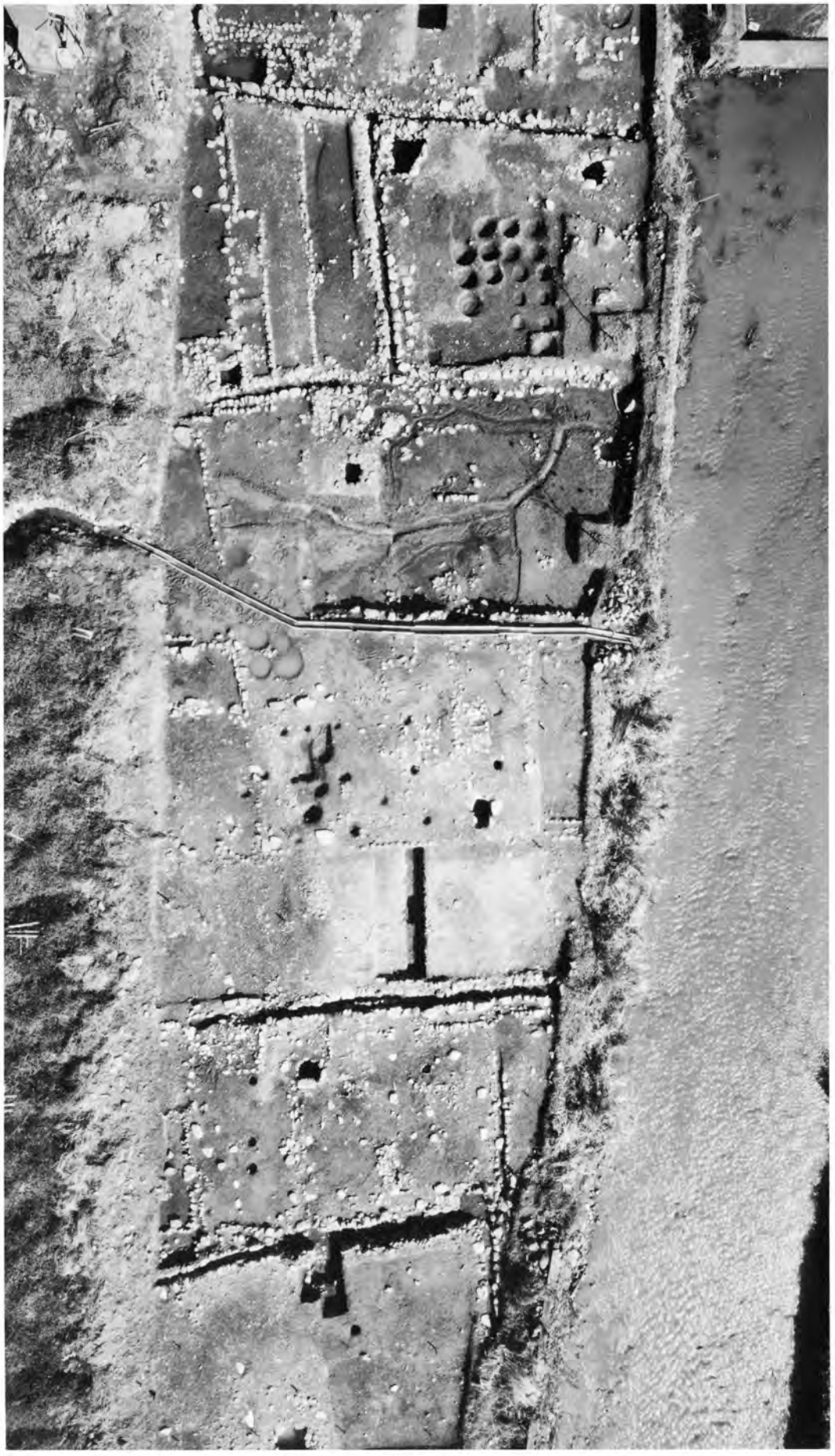
水晶製数珠玉工程（実大）



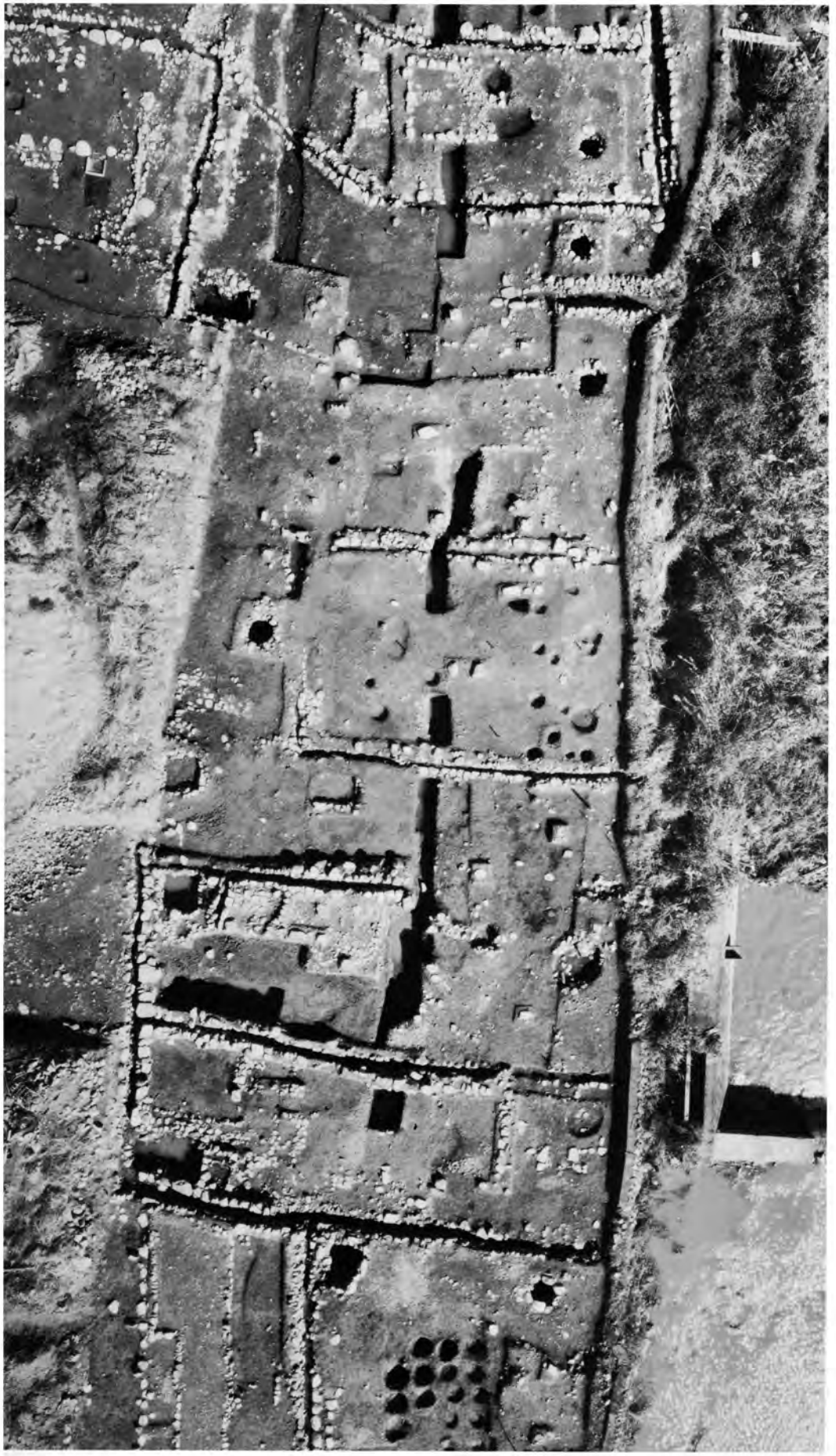
数珠玉用の玉砥石

調査区全景　　北西から

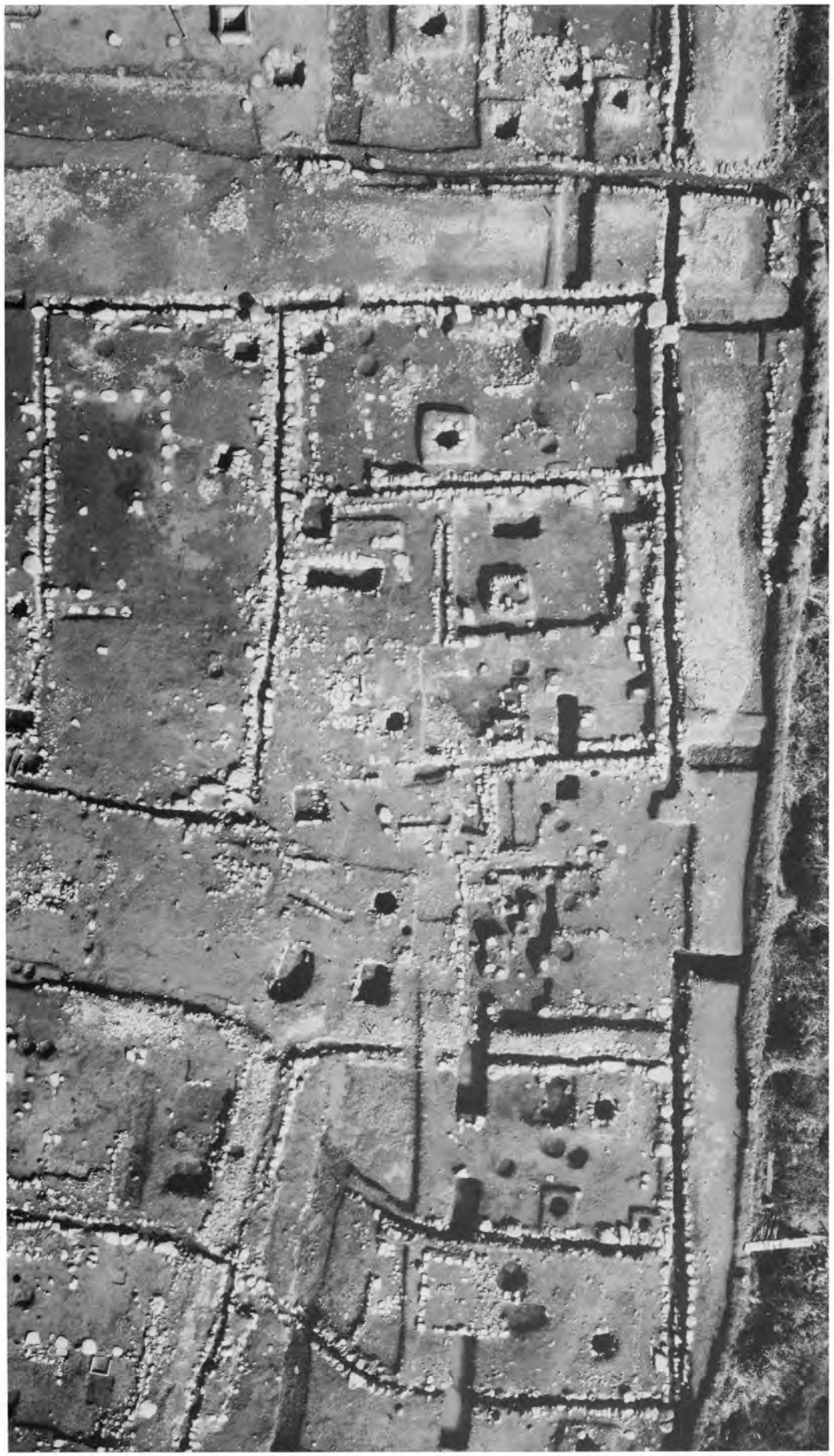
調査区全景　　南西から



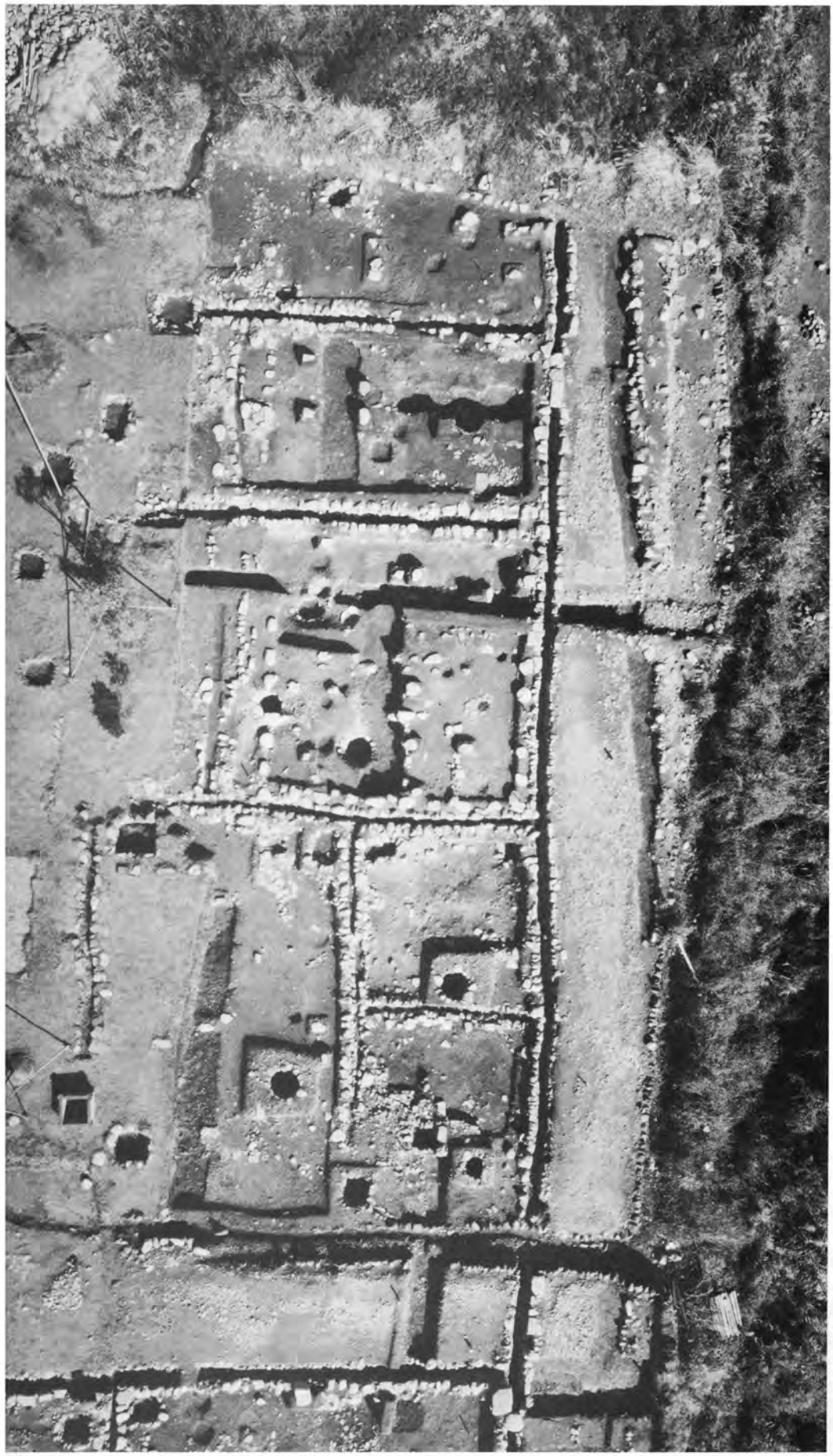
９ＭＩＬ－Ｏ・Ｐ地区



9MIL－O・N地区



９ＭＩＬ－Ｎ地区



9MIL－J地区

36－1　南から

36－2　西から

36－３道路ＳＳ2001　　北から

36－５　　西から

36－6　東から

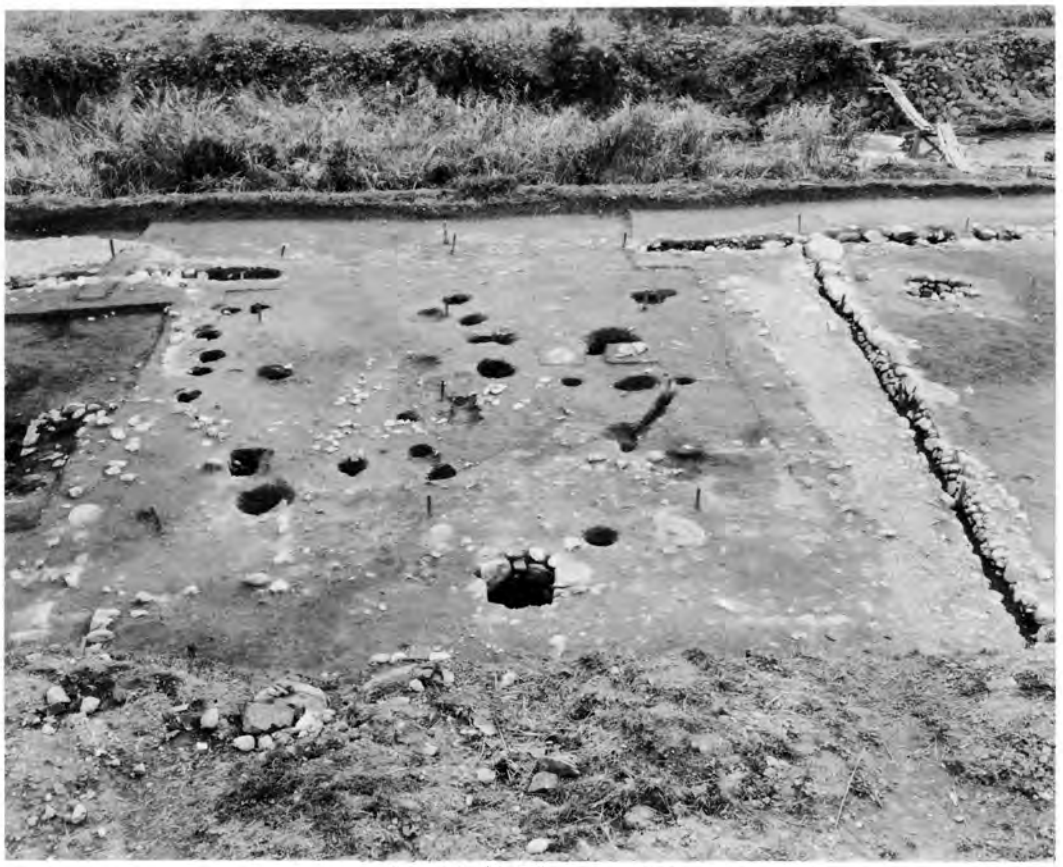
36－7　西から

36－8、36－9　　西から

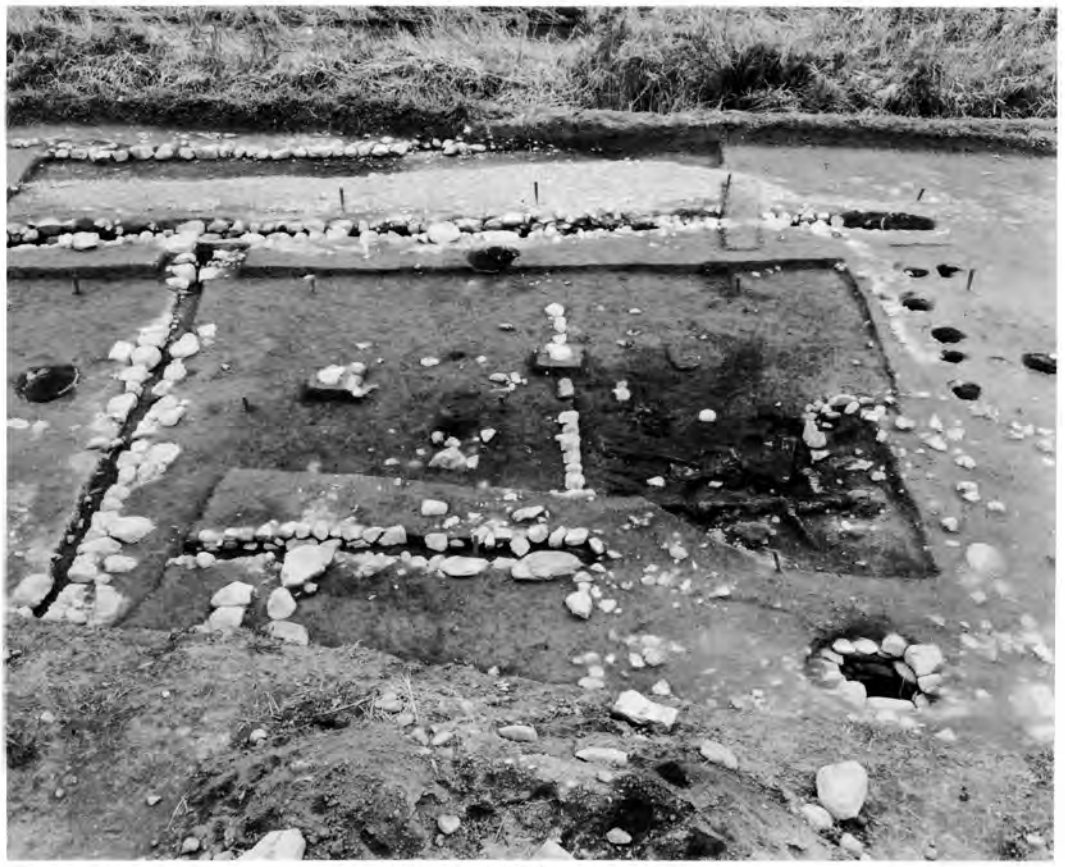
36－10、36－11　　西から

36－12
西から

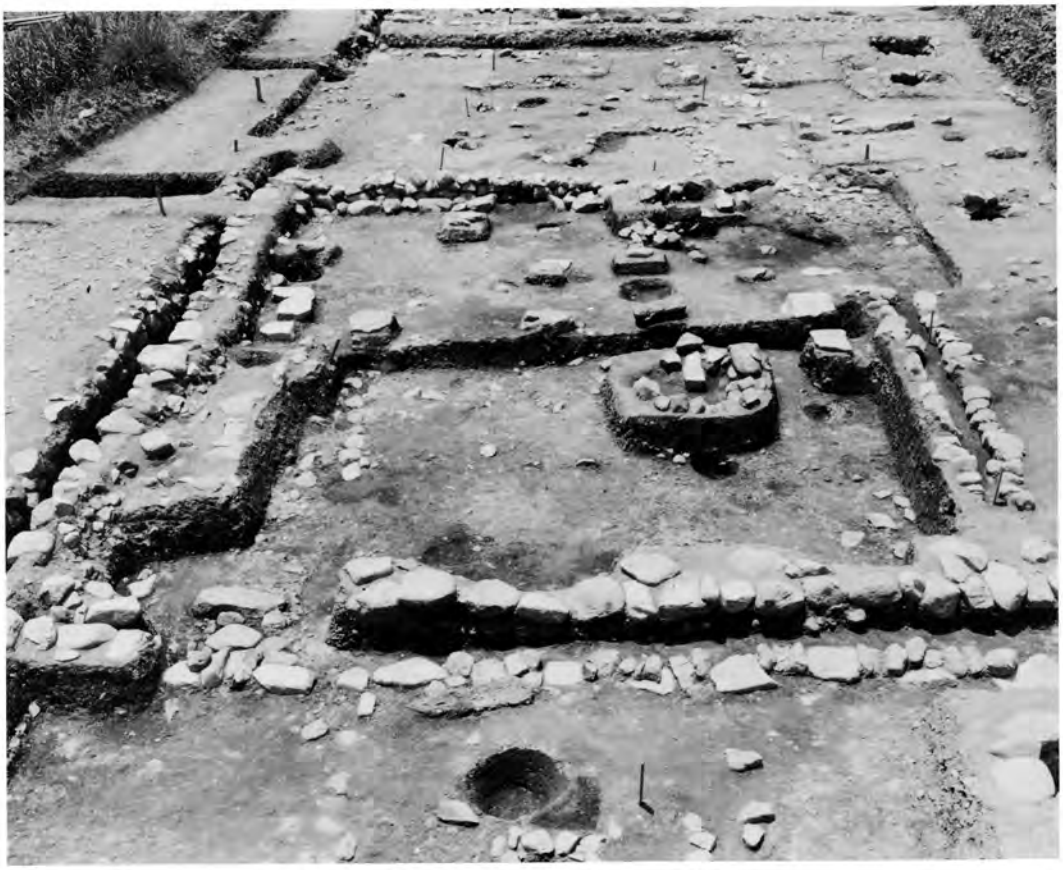
36－13
西から



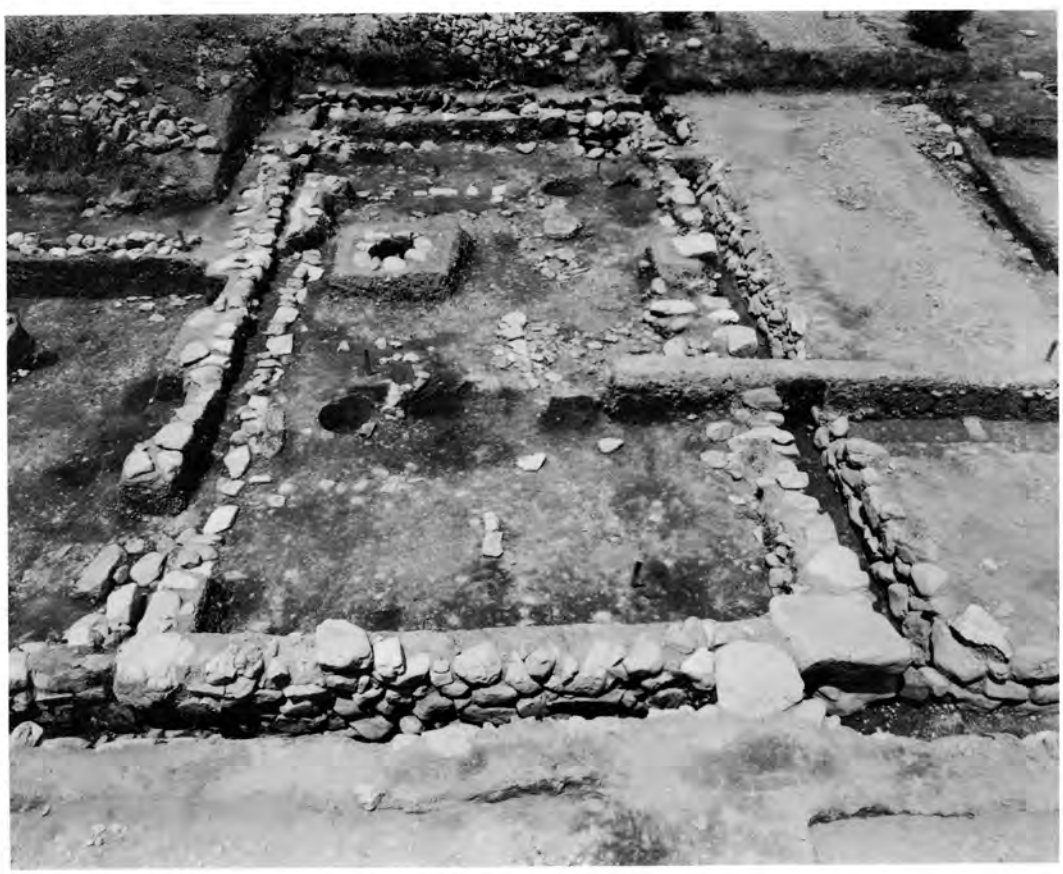
36－14（上層）　西から



36－15（上層）　西から



36－14、36－15（下層）　北から



36－16　東から

36－17、36－18（下層）　　東から

36－17、36－19（下層）　　東から

36－20（上層）　東から

36－20（下層）　東から

36－21
東から

36－22
西から

道路ＳＳ494・2000　　東から

カマド状遺構ＳＸ2195　　西から

SF2071周辺　東から

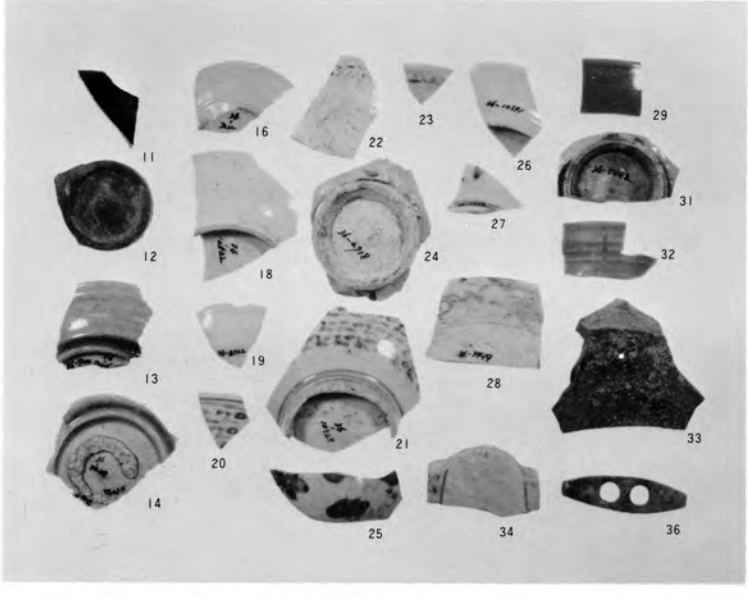
SF2072

SF2177

SF2180

SF2186

越前焼
- 1～3　甕
- 4　壺
- 7　擂　鉢
- 10　鉢



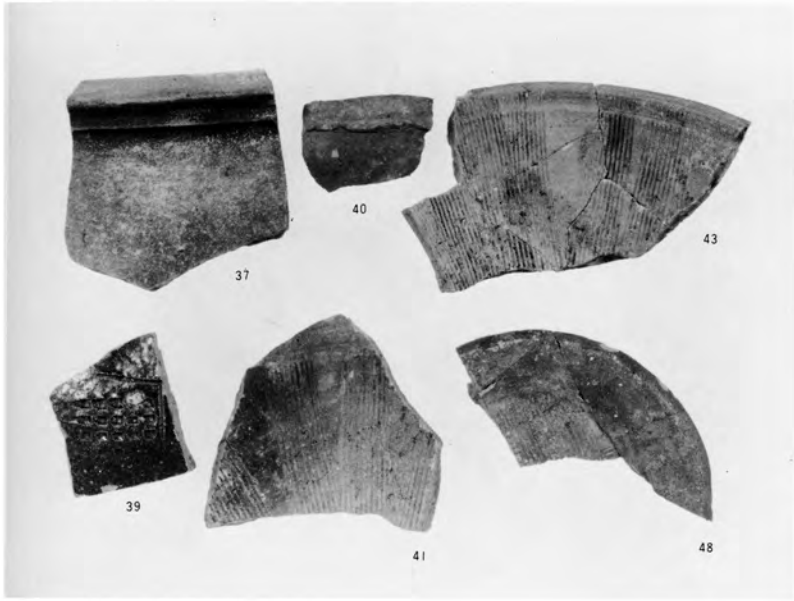
美濃焼
- 11・12　天目茶碗
- 13・14　灰釉皿

中国製陶磁器
- 16～19　白磁皿
- 20～25　染付碗
- 26～28　染付皿
- 29　青磁碗
- 31　青磁皿
- 32　青磁香炉
- 33　瓶

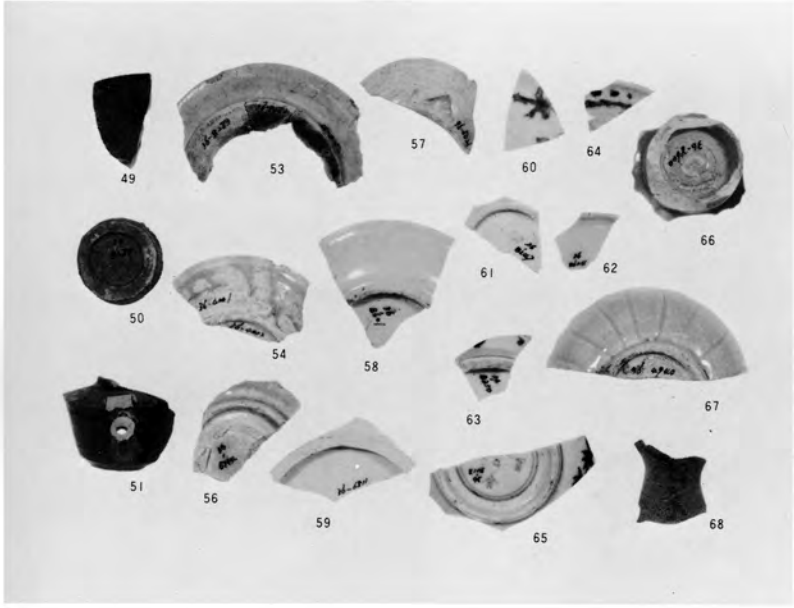
石製硯　34

銅製鞐　36

区画36－18・19　グループ1



越前焼
37・39　甕
40　壺
41～48　擂　鉢



美濃焼
49・50　天目茶碗
51　水　注
53～56　灰釉皿
中国製陶磁器
57～59　白磁皿
60　染付碗
61～65　染付皿
66　青磁碗
67　青磁皿
68　瓶

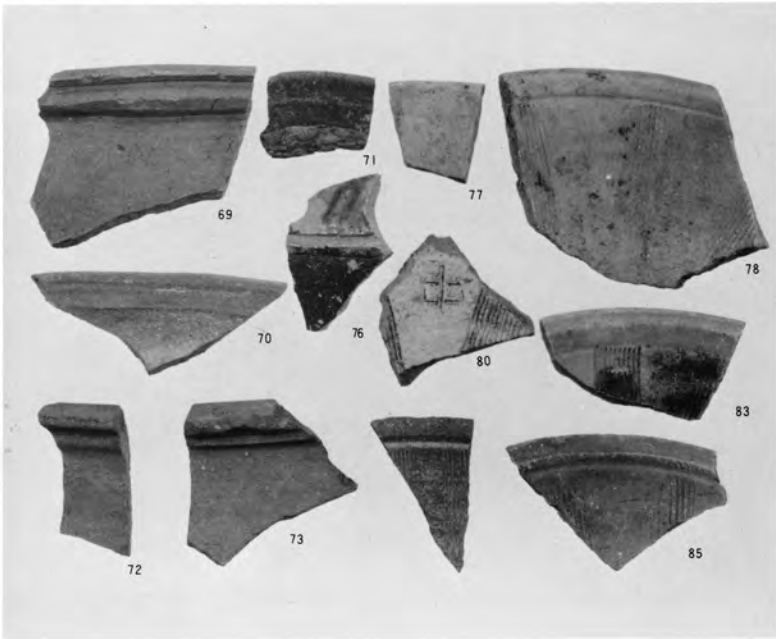
区画36－18　グループ2

区画36－18　グループ２

越前焼擂鉢　42
美濃焼鉄釉仏花瓶　52

区画36－18　グループ３

越前焼擂鉢　82
土師質土釜　100



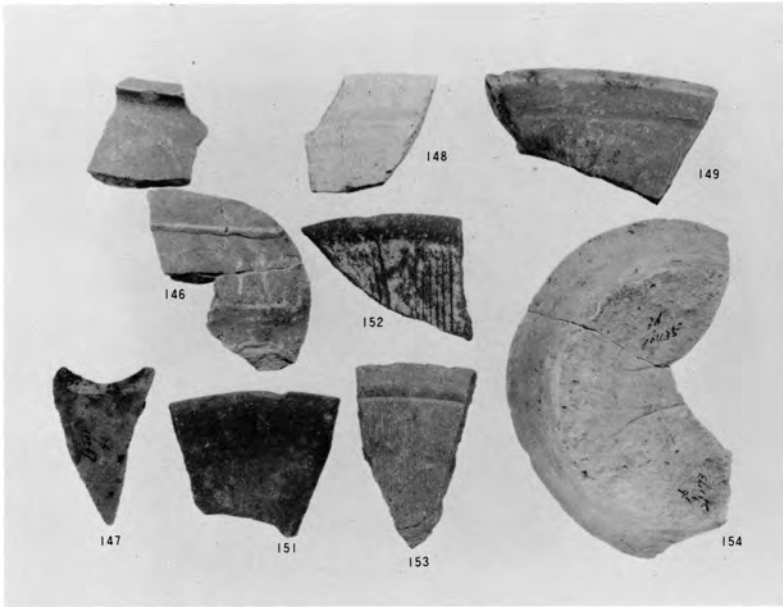
越前焼
- 69～73　甕
- 76　壺
- 77～85　擂　鉢

美濃焼
- 87・88　天目茶碗
- 89　灰釉碗
- 90～94　灰釉皿
- 97　灰釉瓶

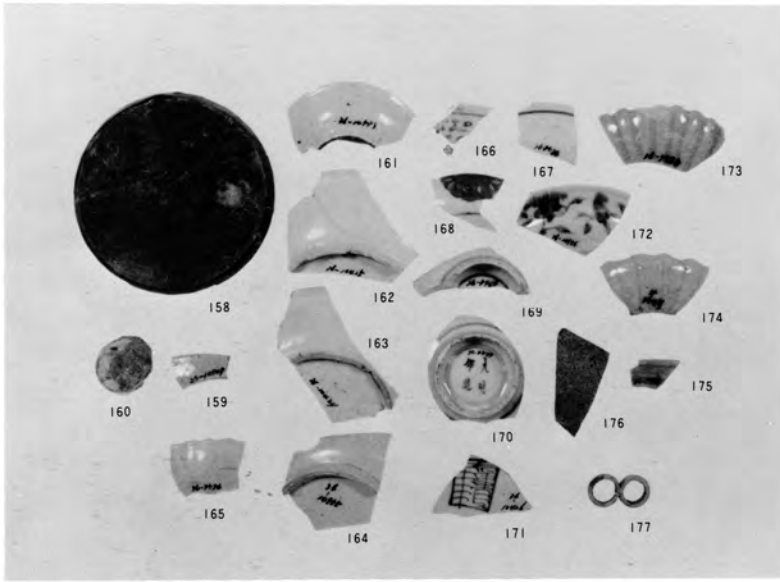
瓦質陶器
- 98・99　香　炉

中国製磁器
- 101・102　白磁皿
- 103・104　染付皿
- 105　染付瓶
- 106～109　青磁碗
- 110　青磁皿

区画36－18　グループ3

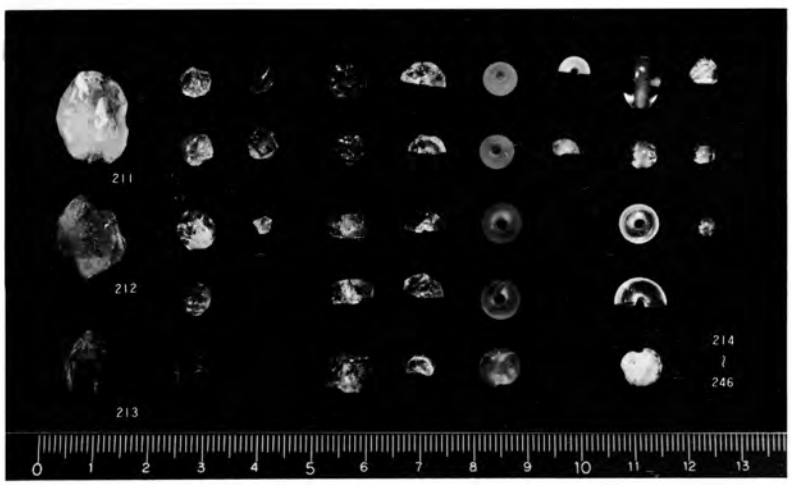


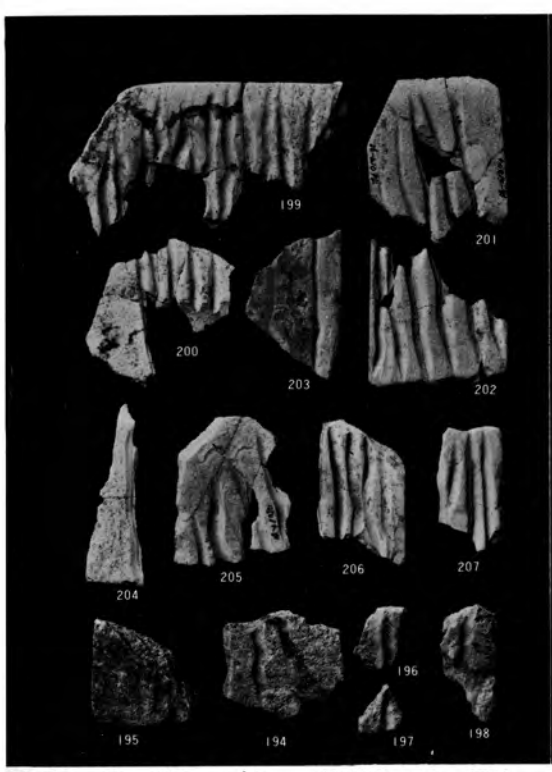
越前焼
146　壺
147　不　明
148～154　擂　鉢

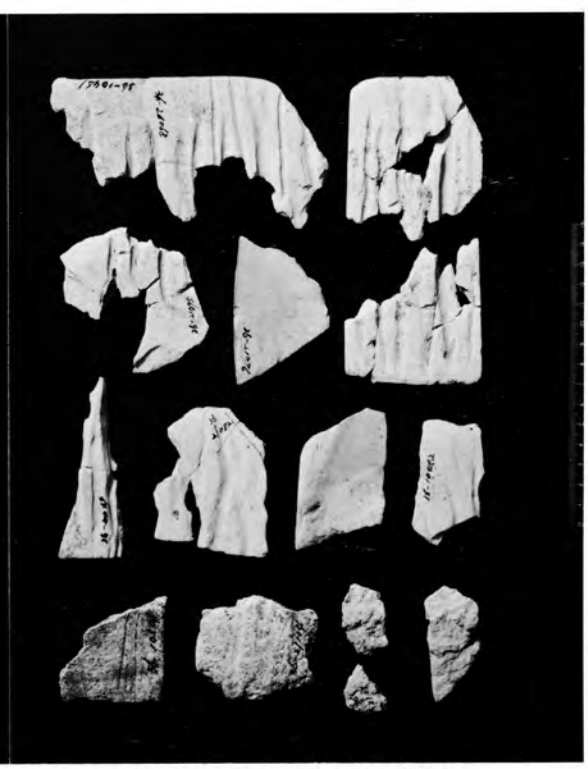


美濃焼
158　鉄 釉 瓶
159　灰 釉 皿
160　灰 釉 壺
中国製陶磁器
161～165　白 磁 皿
166～170　染 付 碗
171・172　染 付 皿
173・174　青 磁 皿
175　青磁香炉
176　瓶
銅製金具　177

区画36－19　グループ2

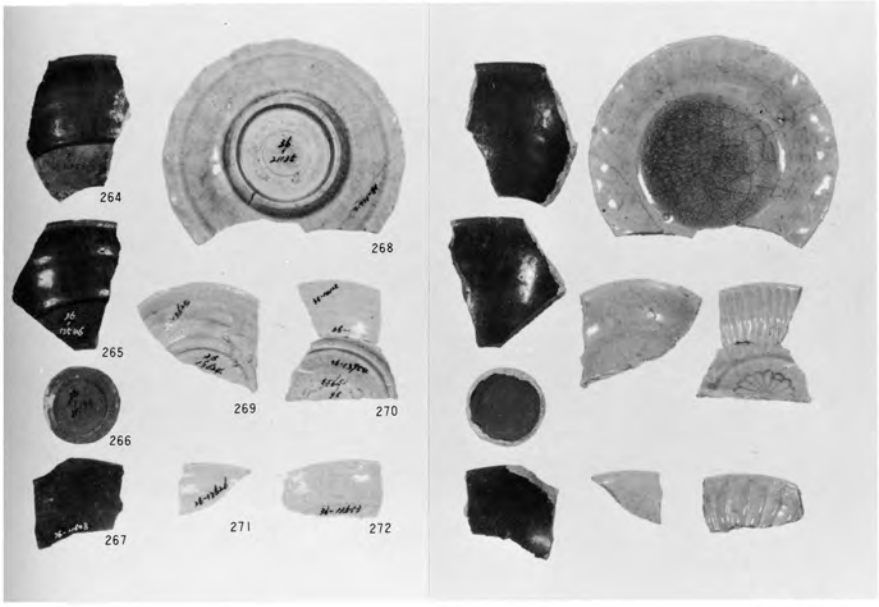






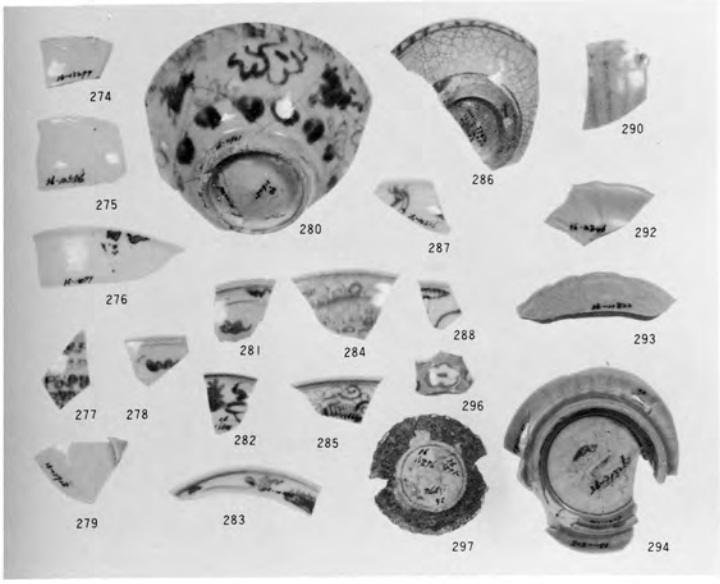
区画36−19　グループ3　　越前焼　180. 擂鉢　　美濃焼　182・183. 天目茶碗　184. 灰釉皿
瓦質陶器　185. 香炉　　中国製磁器　186・187. 白磁皿　188〜191. 染付皿　192. 青磁碗　193. 青磁皿
数珠製作関係遺物　211〜246. 水晶製数珠玉各工程　194〜207. 玉砥石　　銅製水滴　247.

区画36－20　グループ2・3　越前焼　261・262. 甕　256. お歯黒壺　257. 火桶
中国製染付碗　289.　銅製水滴　300



美濃焼

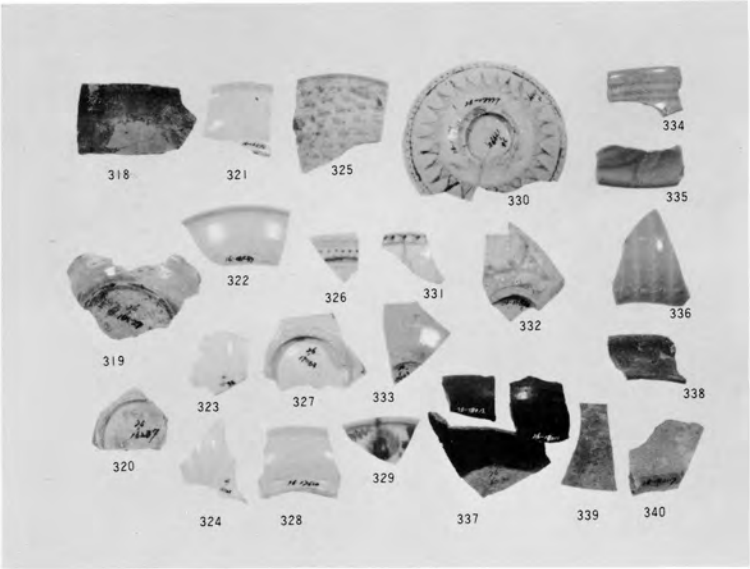
264～267　天目茶碗
268～272　灰 釉 皿



中国製陶磁器

274～276　白 磁 皿
277～280　染 付 碗
281～287　染 付 皿
288　染 付 坏
290　青 磁 碗
292～294　青 磁 皿
296　五 彩 坏
297　三 彩 皿

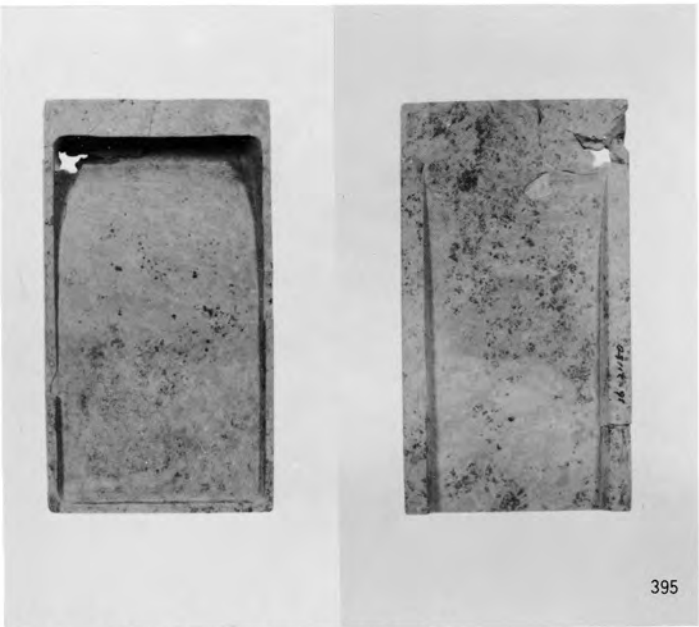
区画36－20　グループ2



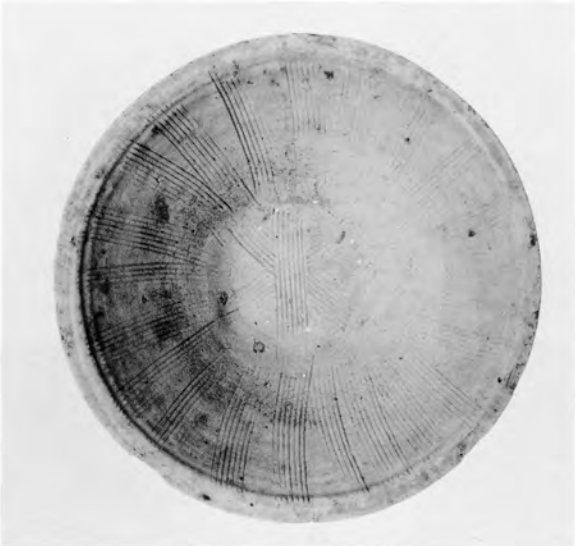
美濃焼
- 318　鉄釉瓶
- 319・320　灰釉皿

中国製陶磁器
- 321～324　白磁皿
- 325～327　染付碗
- 328～333　染付皿
- 334　青磁香炉
- 335　青磁壺蓋
- 336　青磁香炉
- 337　天目茶碗
- 338　焼締鉢
- 339　焼締瓶
- 340　碗

石製硯　395
銅製権　404

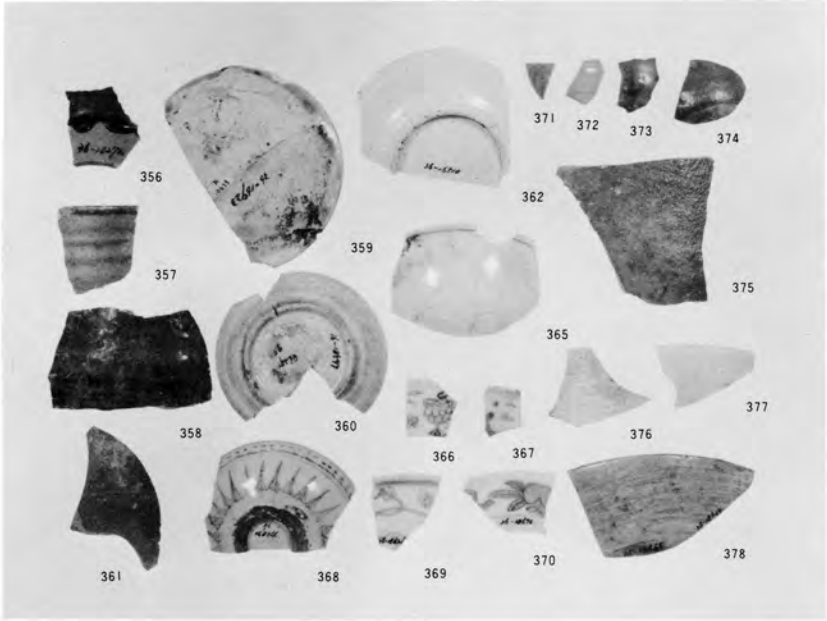


区画36－21　グループ1・2 (395・404)



区画36－21　グループ2　　越前焼　345．甕　347・348．壺　353・354．擂鉢　355．鉢

第36次調査・遺物 (11)



美濃焼

356	天目茶碗
357	鉄釉香炉
358	鉄 釉 瓶
359	灰釉卸皿
360	灰 釉 皿

備前焼

361	瓶

中国製陶磁器

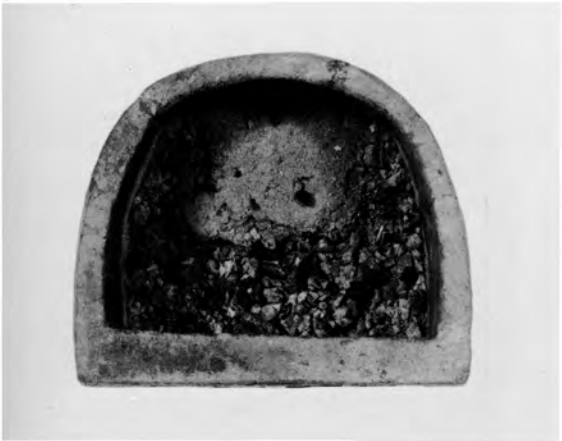
362	白 磁 皿
365～367	染 付 碗
368～370	染 付 皿
371	青 磁 碗
372	青磁香炉
373・374	鉄釉茶入
375	焼 締 壺

朝鮮製陶器

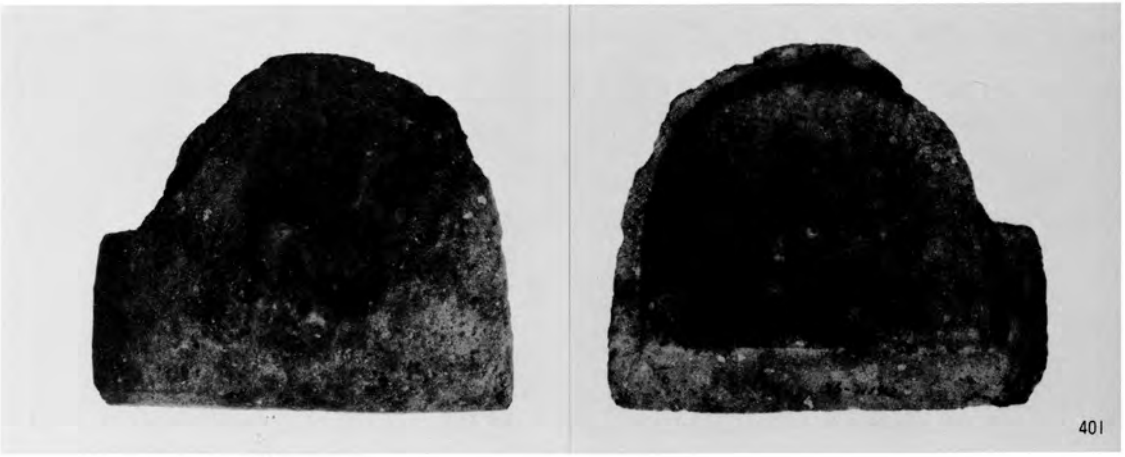
376～378	碗

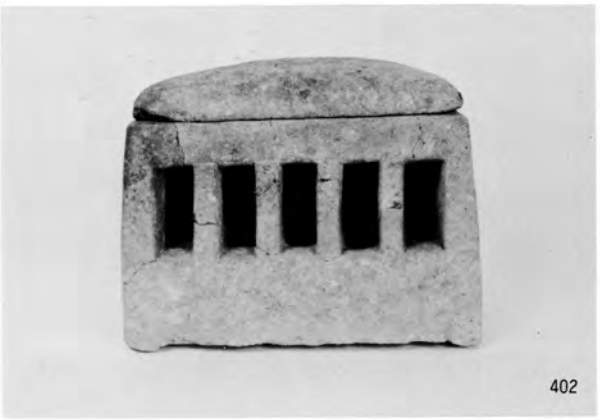
364. 染付碗

区画36－21　グループ2

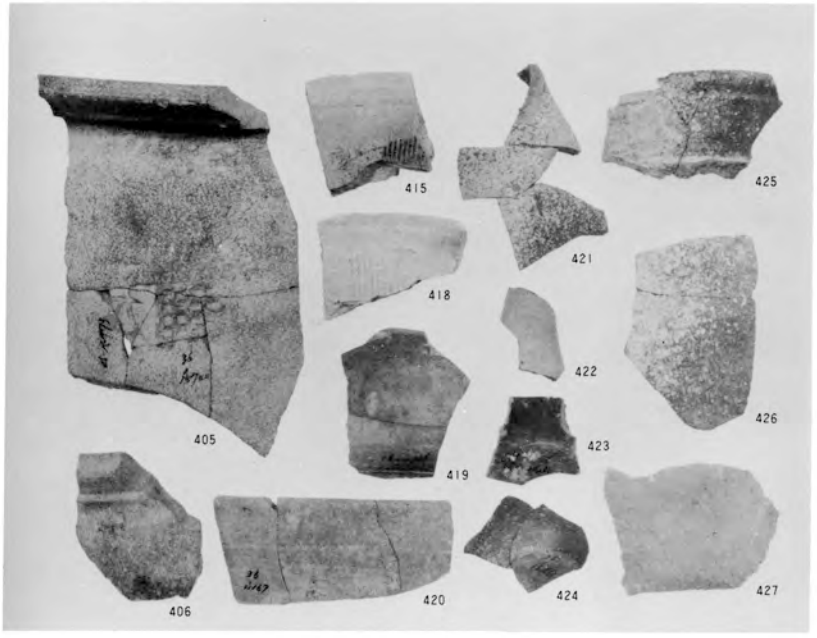


区画36－21　グループ2　　笏谷石製品　397・398．風炉　399．バンドコ蓋　400．バンドコ

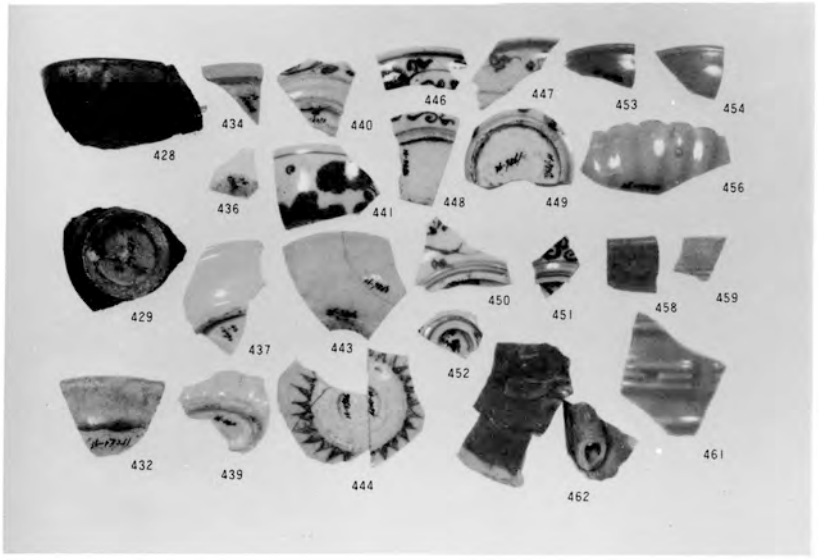




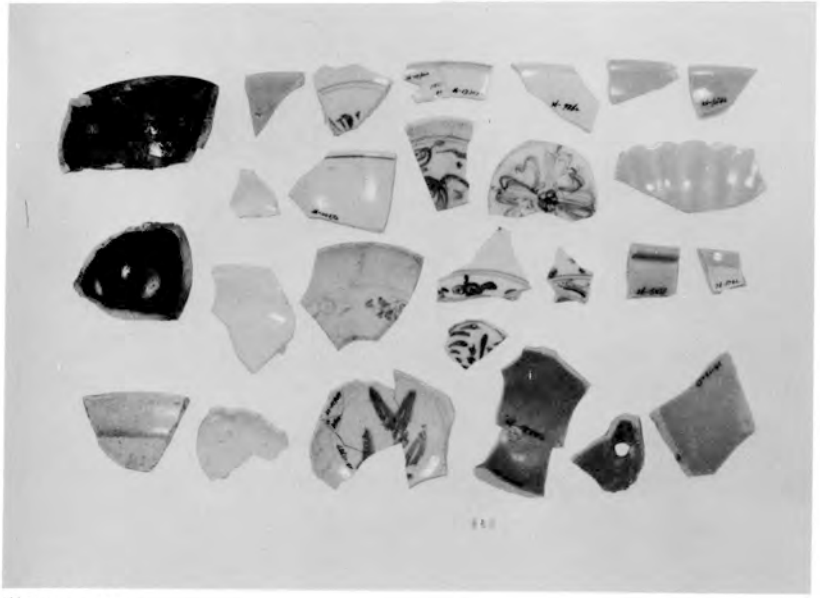
区画36－21　グループ2　　笏谷石製品　401．バンドコ蓋　402・403．バンドコ



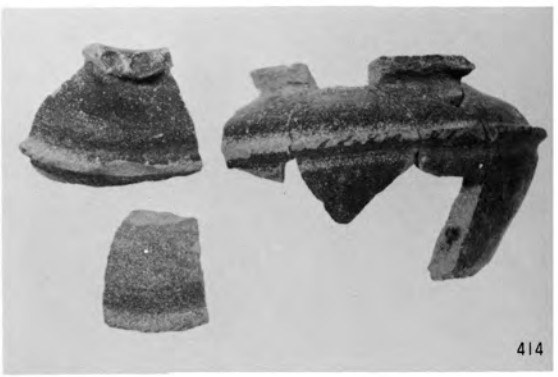
越前焼
405・406　甕
415・418　擂　鉢
419・420　鉢・火桶
備前焼
421～424　瓶
信楽焼
425～427　壺

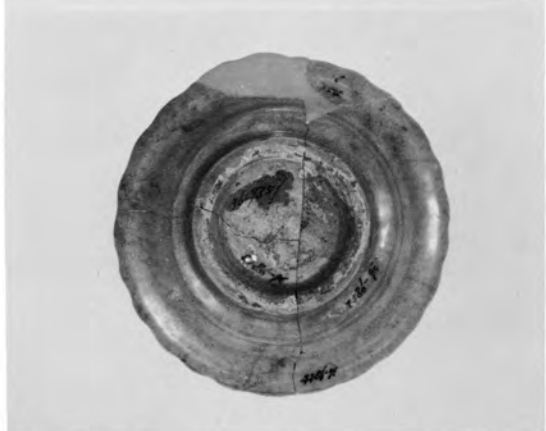


美濃焼
428・429　天目茶碗
432　碗
中国製磁器
434　白磁碗
436　白磁坏
437・439　白磁皿
440・441　染付碗
443～451　染付皿
452　染付坏
453・454　青磁碗
456　青磁皿
458～461　青磁香炉
462　青磁水注

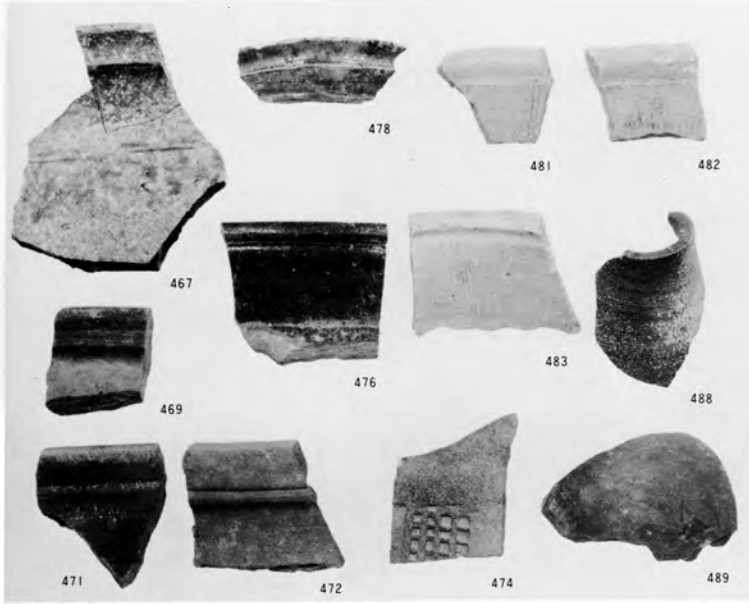


道路ＳＳ495

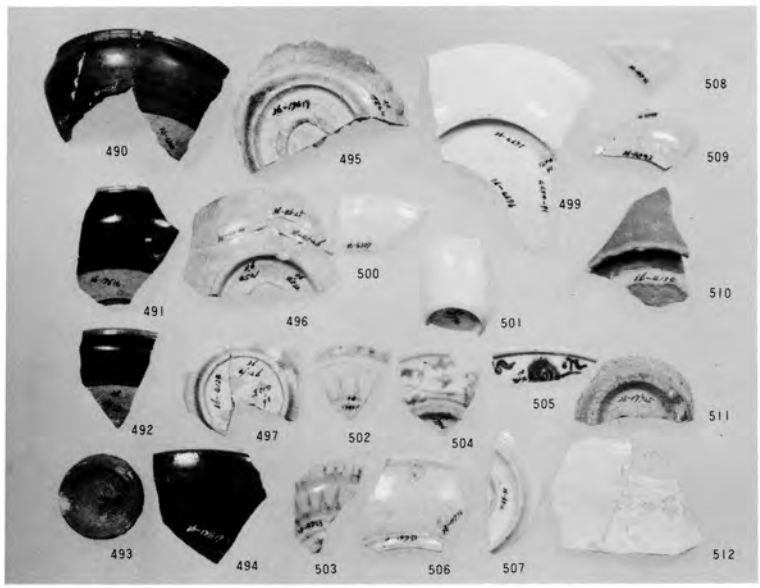




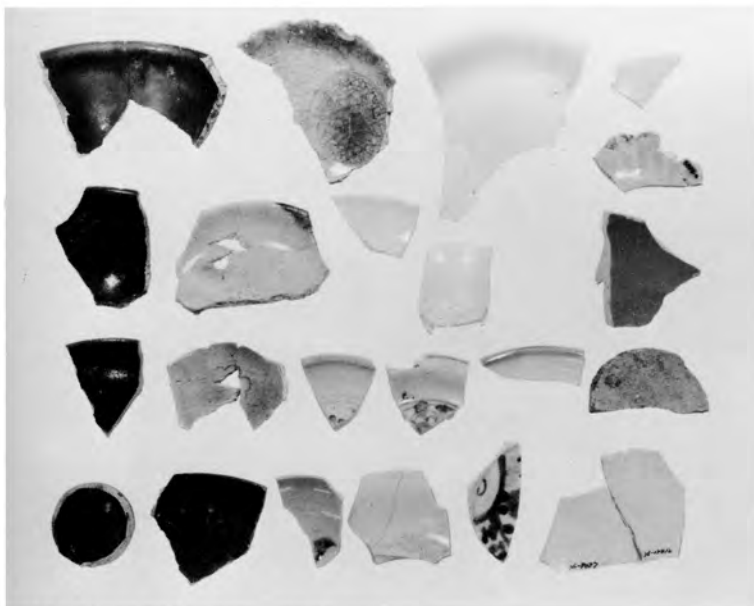
道路ＳＳ495　越前焼　414．壺　　美濃焼　431．壺　433．火桶
中国製磁器　454．青磁皿　460．青磁香炉　441．染付碗



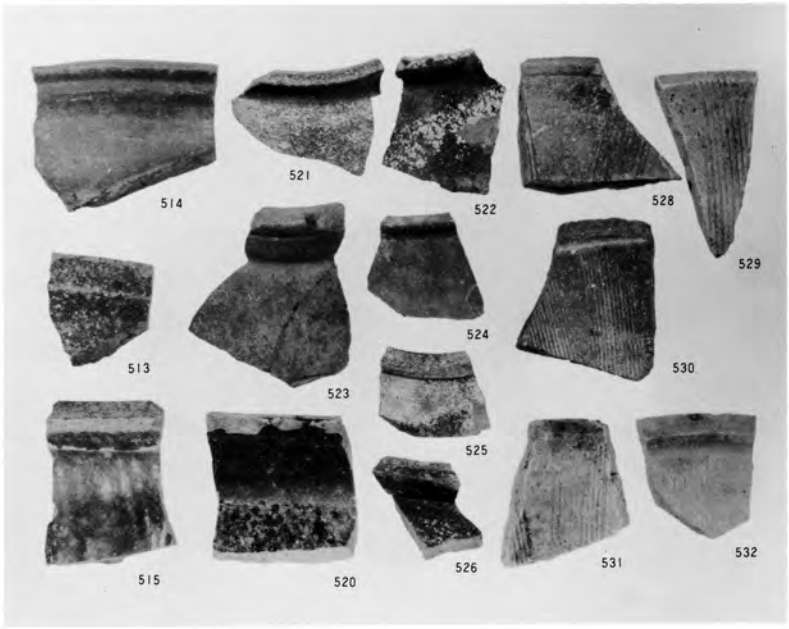
越前焼
467～476　甕
478　壺
481～483　擂　鉢
備前焼
488・489　瓶



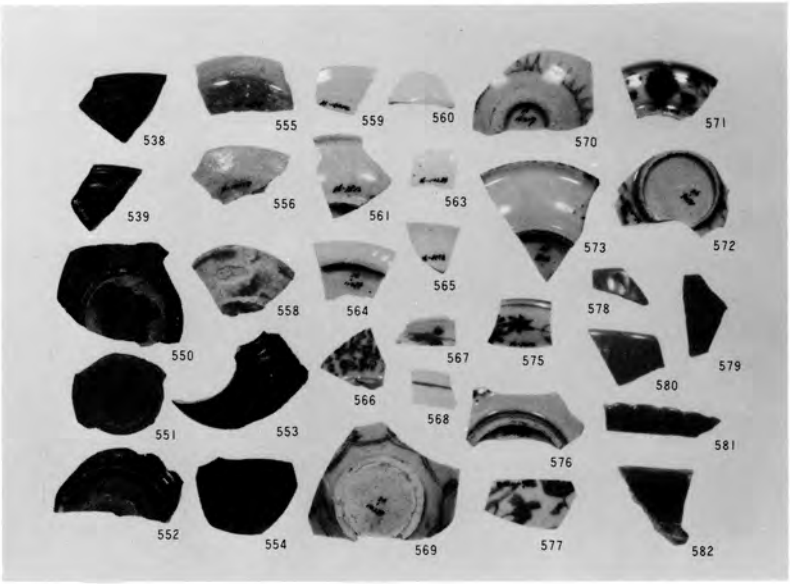
美濃焼
490～494　天目茶碗
495～497　灰釉皿
中国製磁器
499・500　白磁皿
501　白磁坏
502～507　染付皿
508　青磁碗
509　青磁皿
510　青磁盤
朝鮮製陶器
511・512　碗



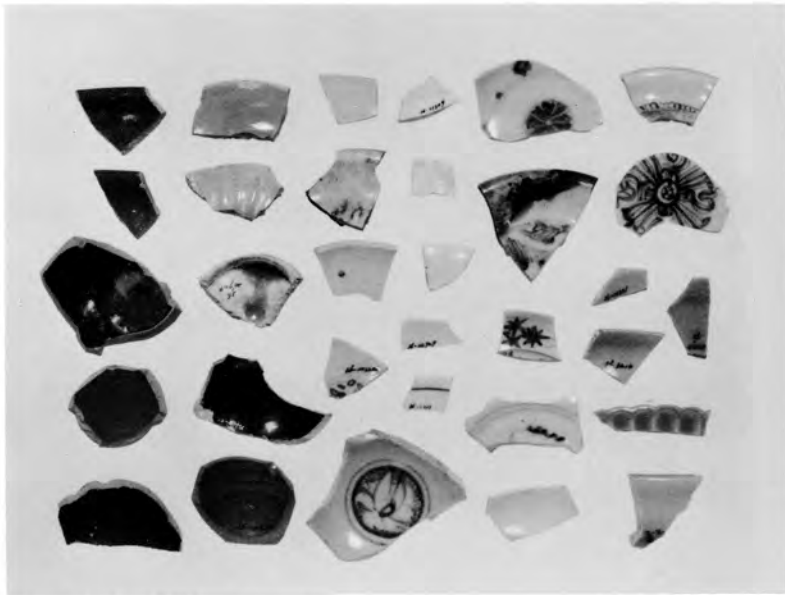
道路側溝ＳＤ518　グループ１



越前焼
513～523　甕
524～526　壺
528～532　擂　鉢

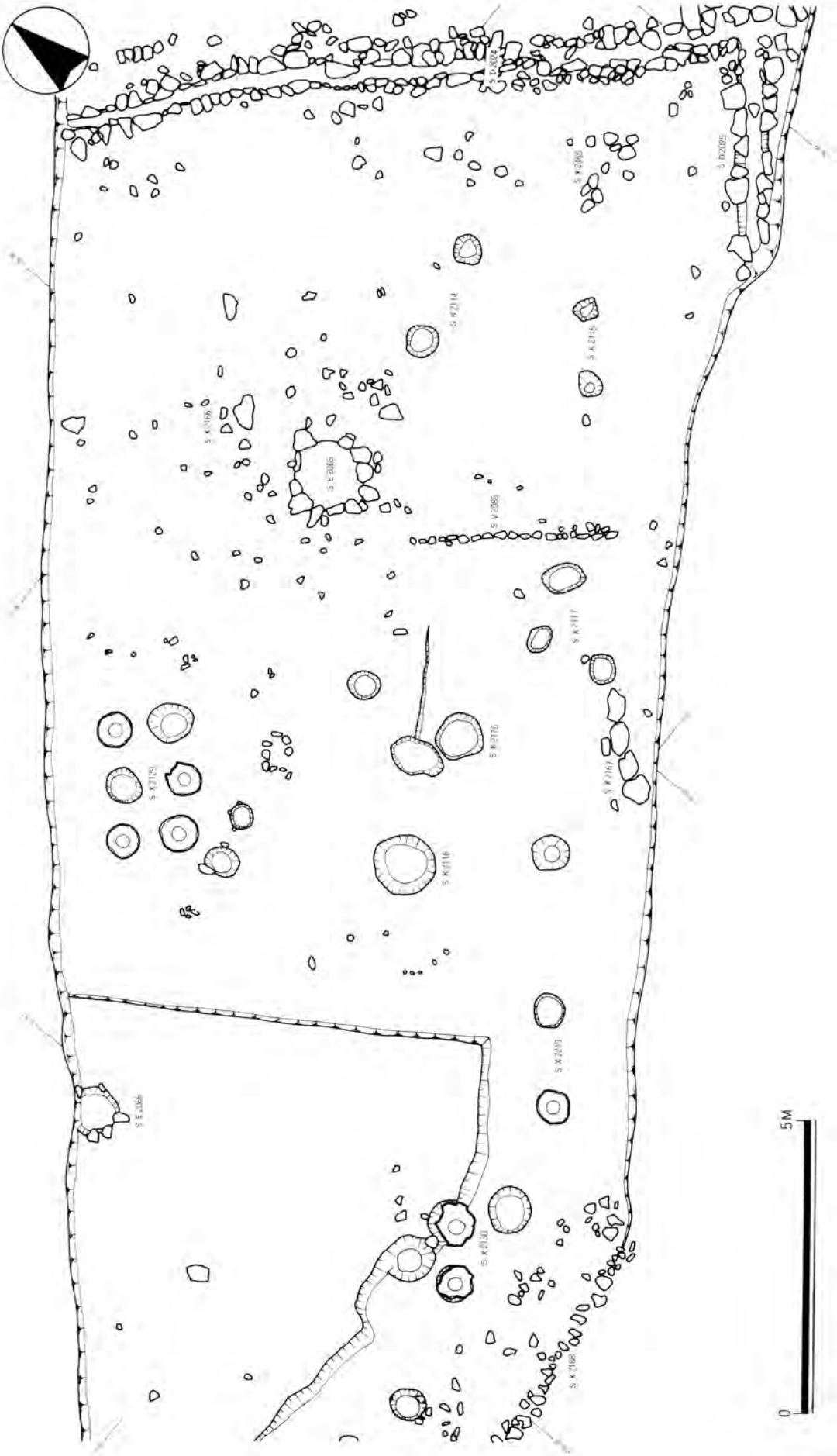


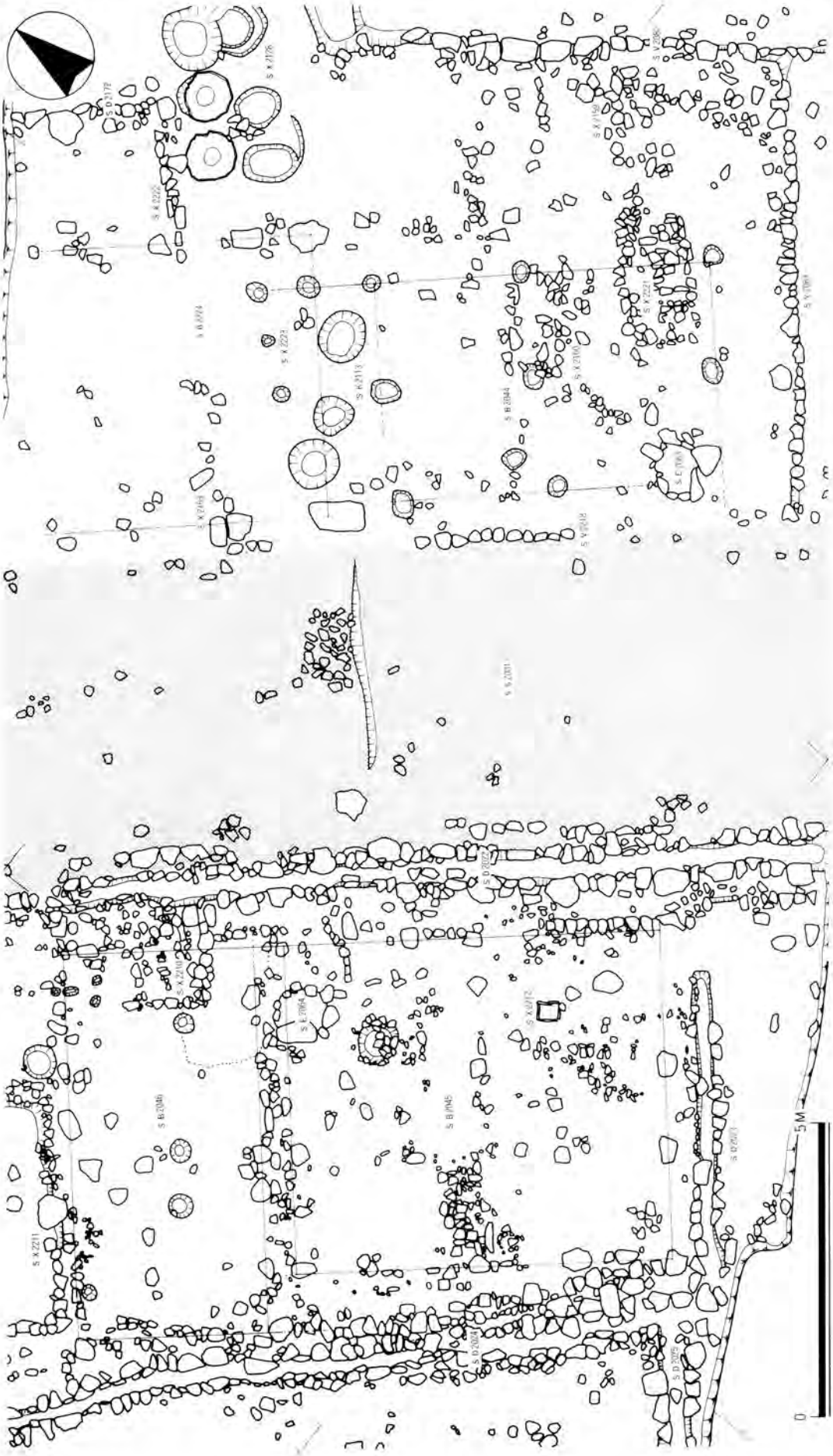
美濃焼
538～551　天目茶碗
552　鉄 釉 皿
553・554　鉄釉茶入
555・556　灰 釉 皿
558　灰釉小鉢
中国製磁器
559・561～564　白磁皿
560・565　白 磁 坏
566～569　染 付 碗
576・577　染 付 碗
570～575　染 付 皿
578～580　青 磁 碗
581　青 磁 皿
582　青 磁 壺



道路側溝ＳＤ518　グループ2

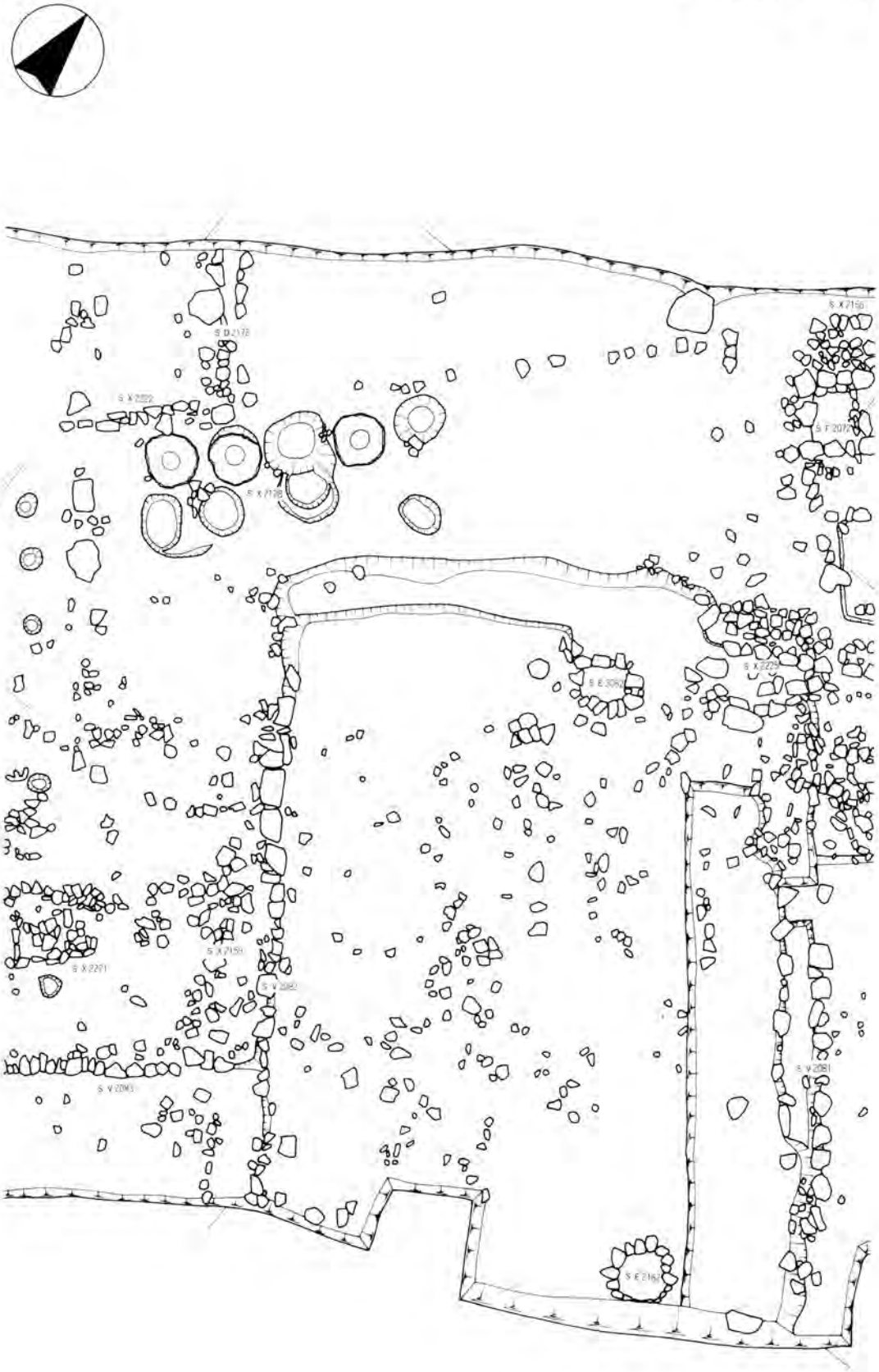
第17図　　第36次調査・遺構（1）



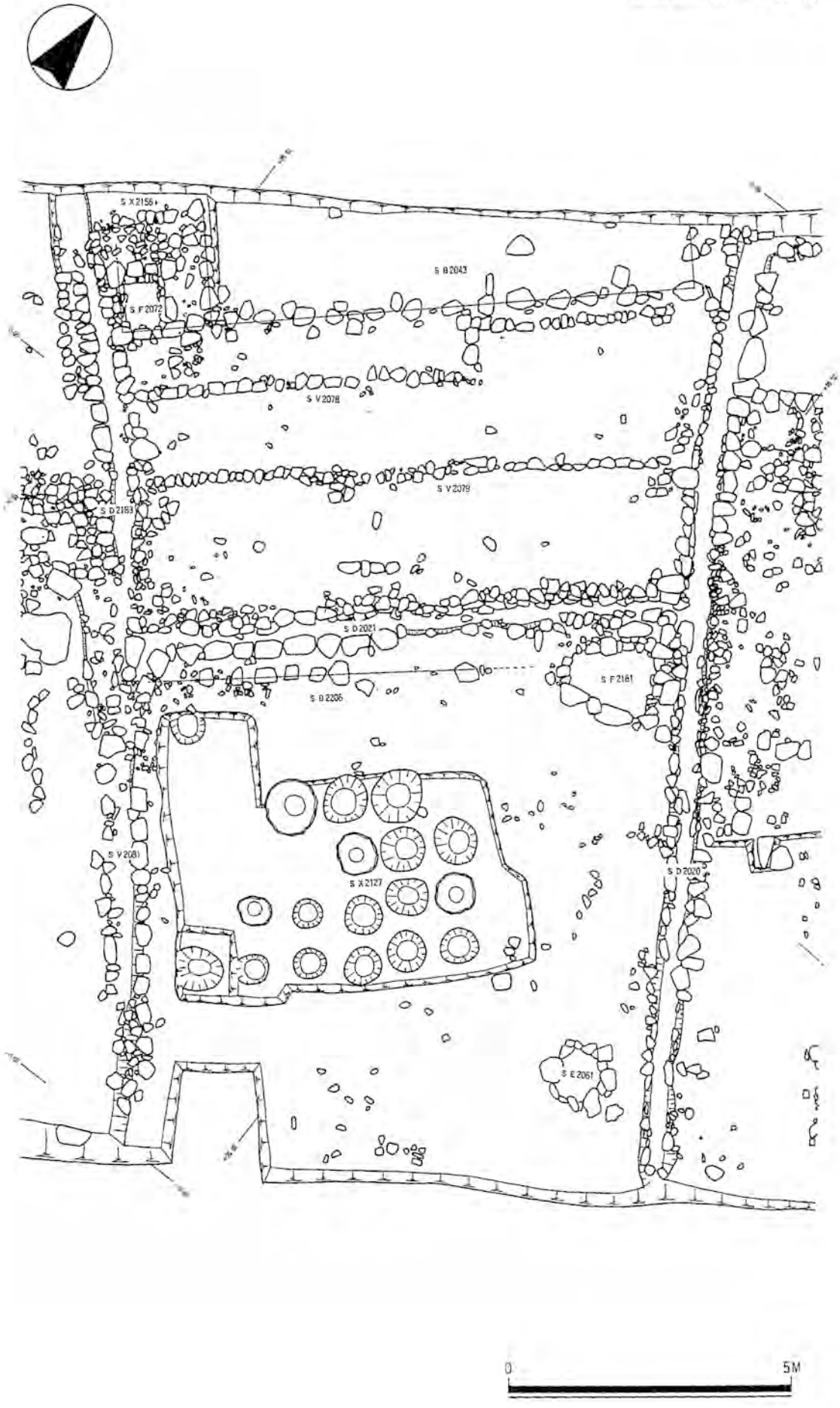

S X 2211
S B 2046
S X 2210
S E 2064
S B 2045
S X 2072
S D 2002
S D 2003
S D 2005
S D 2001
5 M
0

第19図

第36次調査・遺構（3）

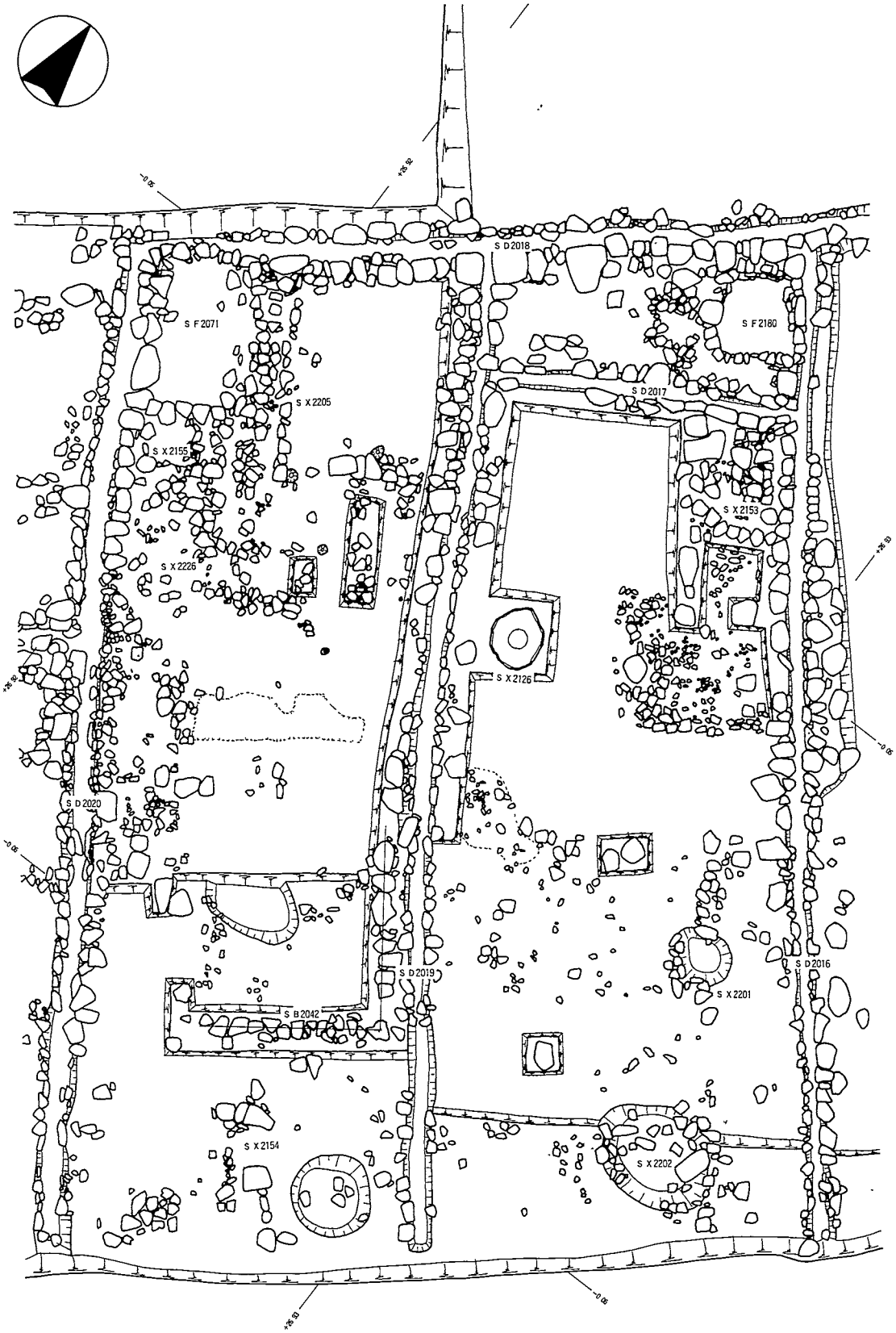


第20図


S X 2156
S B 2043
S F 2072
S V 2078
S V 2079
S D 2183
S D 2021
S F 2161
S B 2206
S V 2081
S X 2127
S D 2020
S E 2061
0
5M

第21図

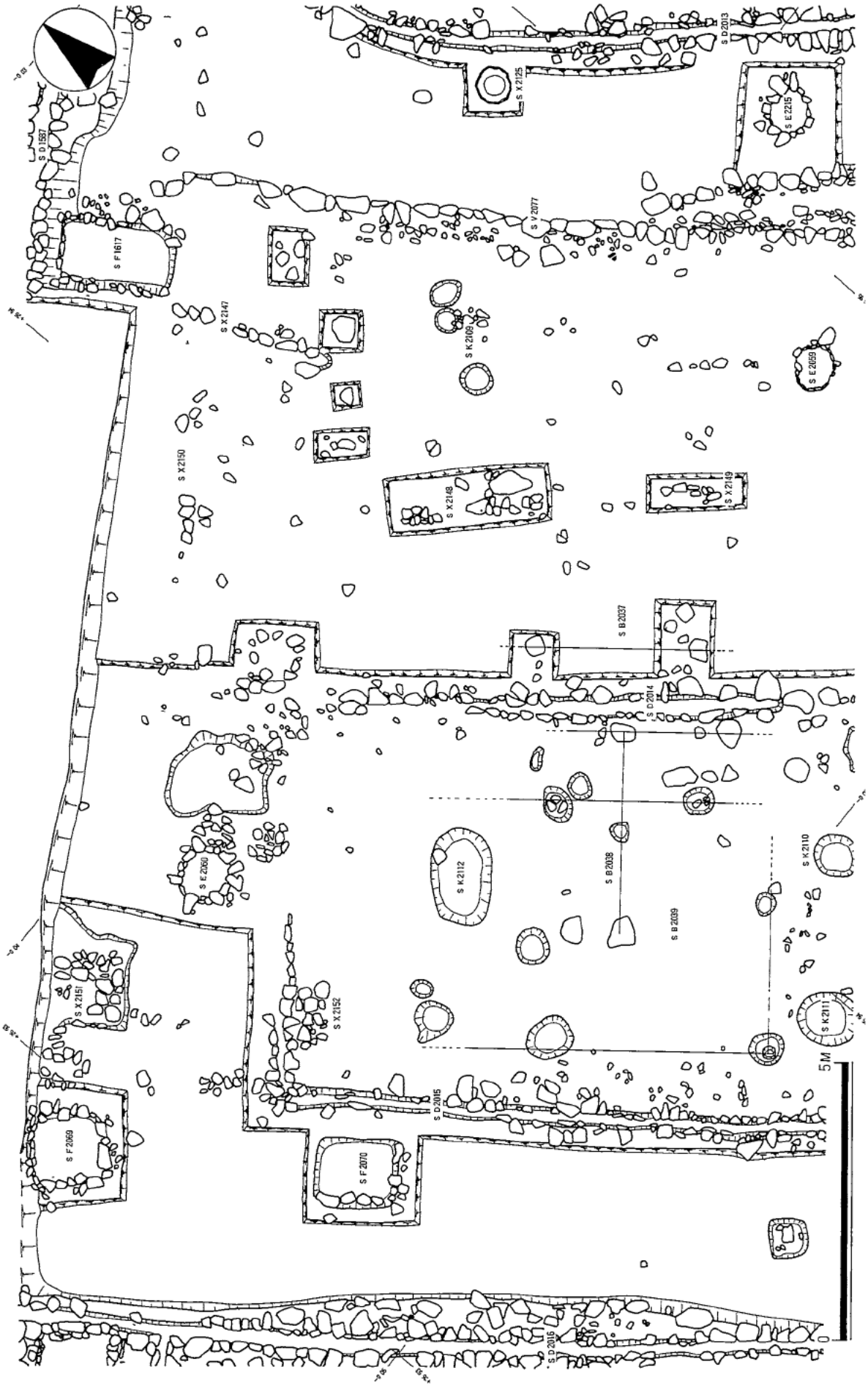
第36次調査・遺構 (5)



0 5M

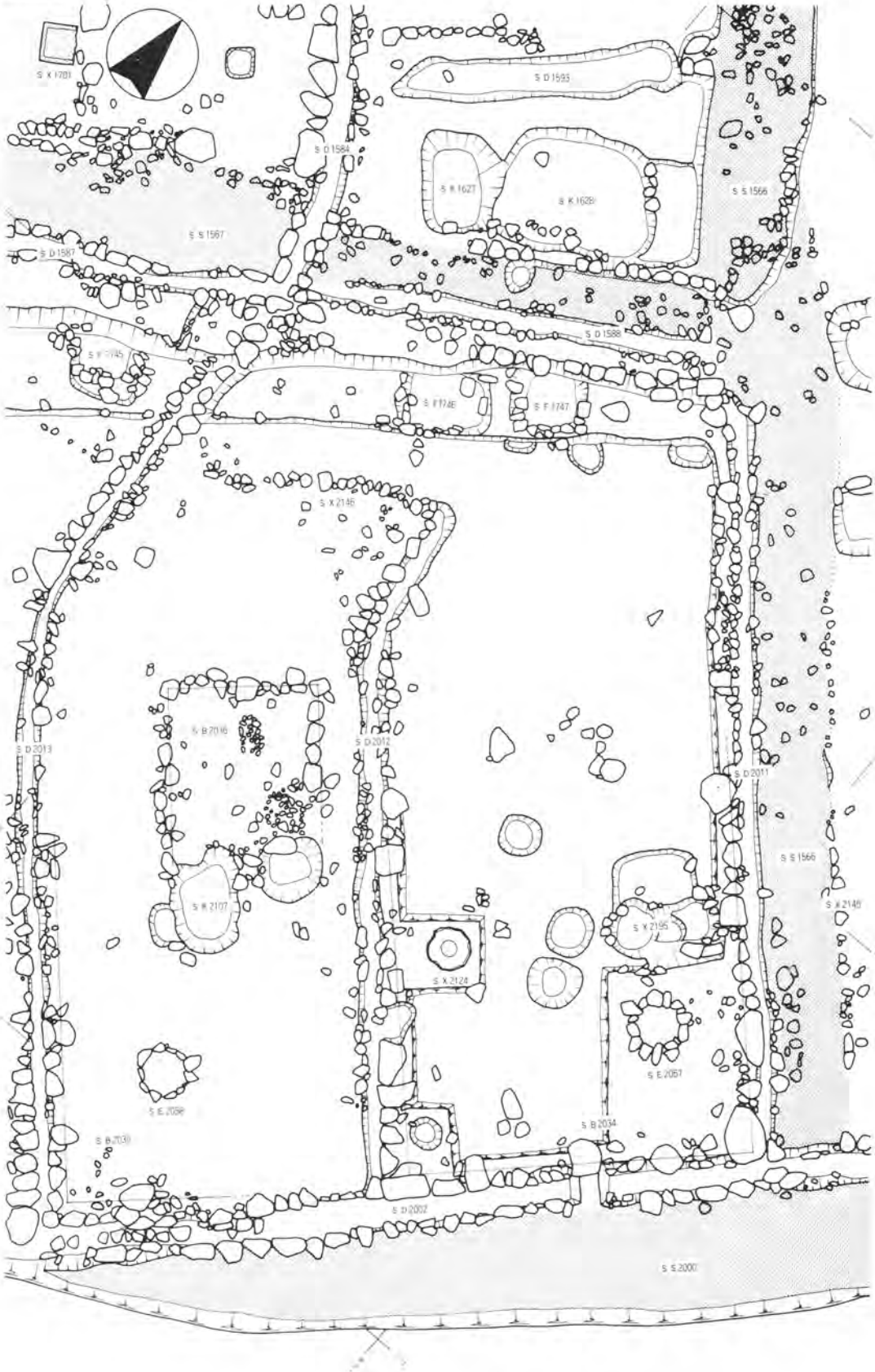
第22図

第36次調査・遺構 (6)

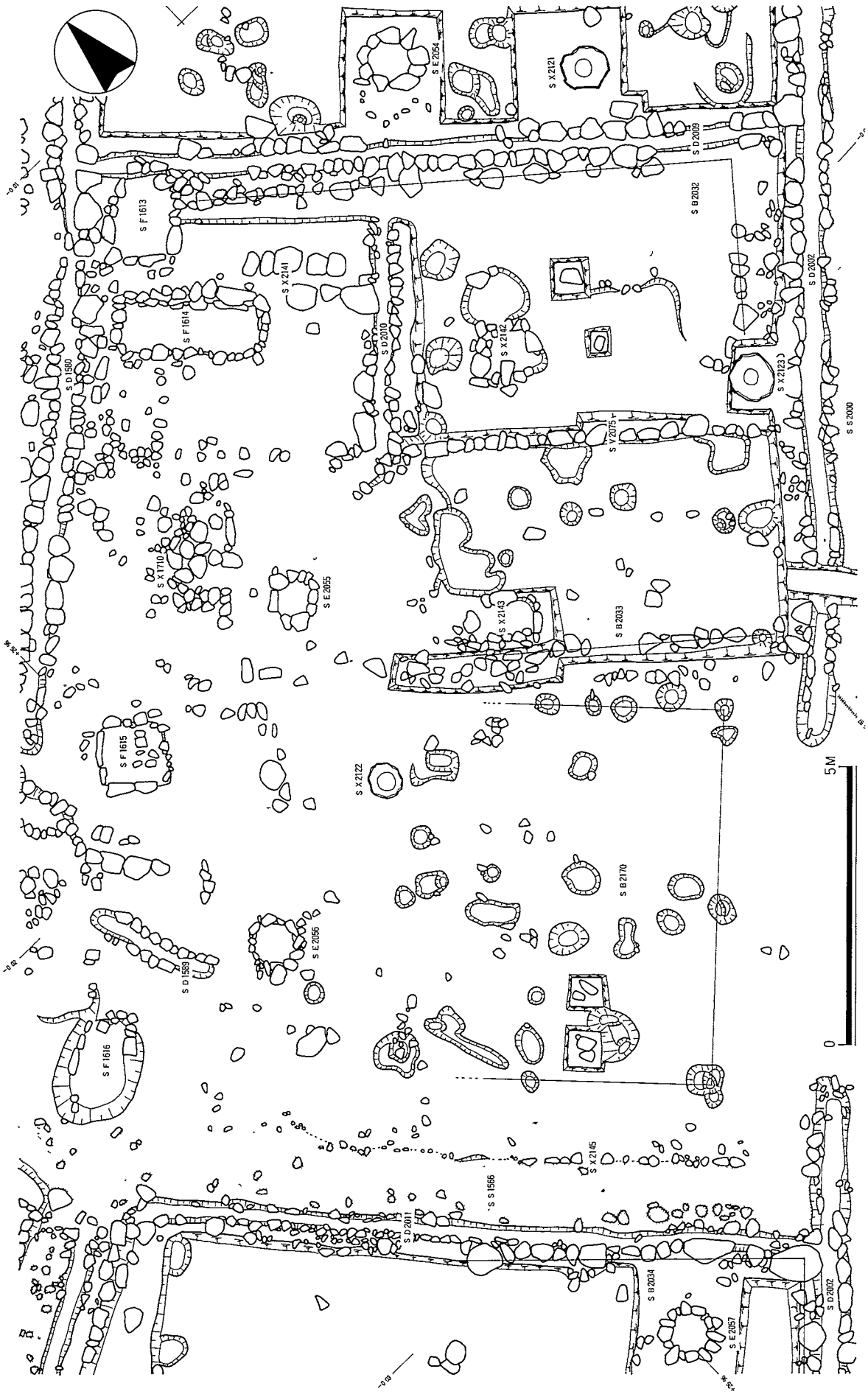


第23図

第36次調査・遺構（7）

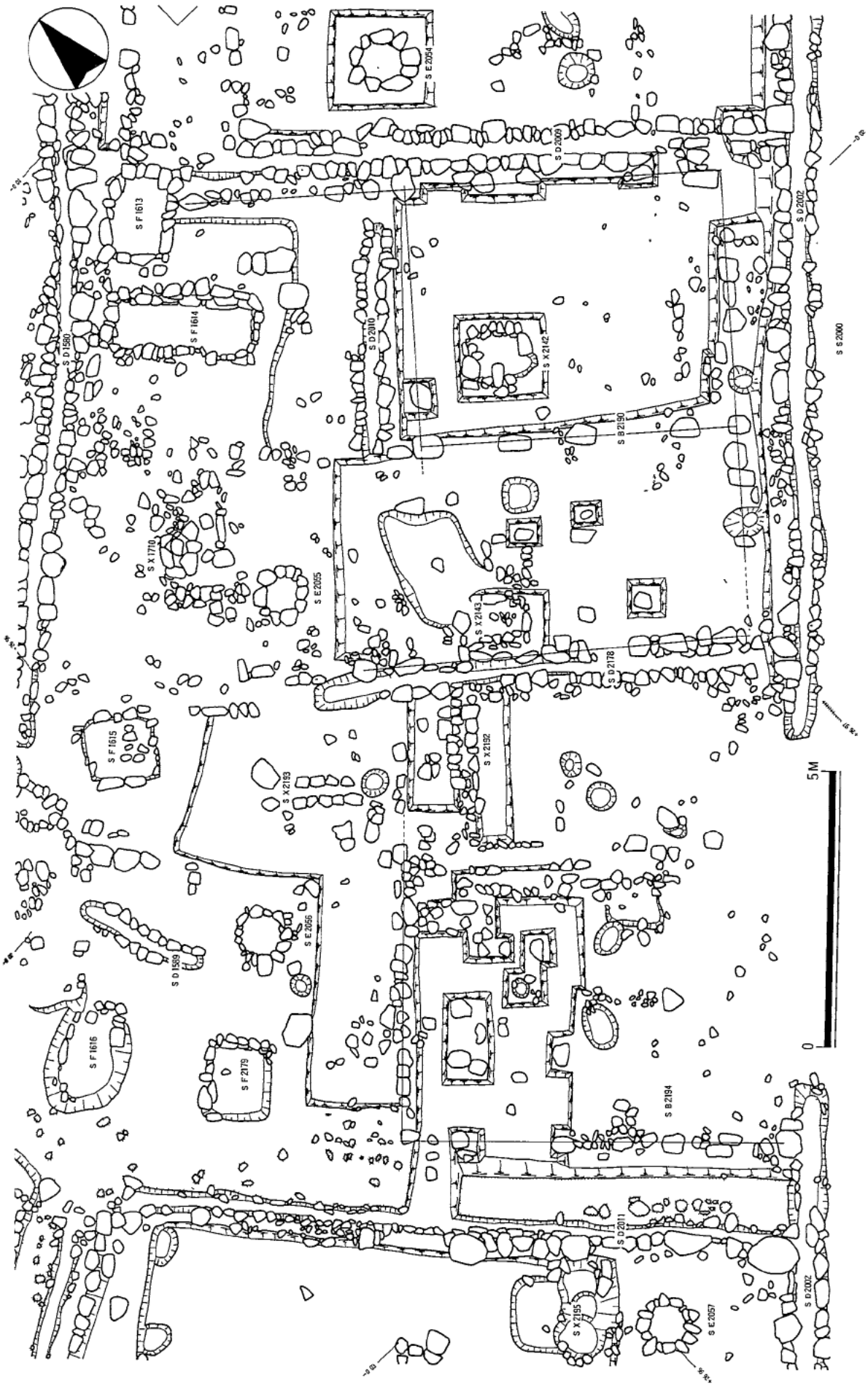


0 5M


S E 2054
S X 2121
S D 2009
S B 2032
S F 1613
S X 2141
S D 2002
S F 1614
S D 2010
S X 2142
S D 1580
S X 2123
S B 2000
S Y 2075
S X 1710
S E 2055
S X 2143
S B 2033
S F 1615
S X 2122
5M
S B 2170
S E 2056
S D 1589
S F 1616
S X 2145
S S 1566
S D 2011
S B 2034
S D 2002
S E 2057

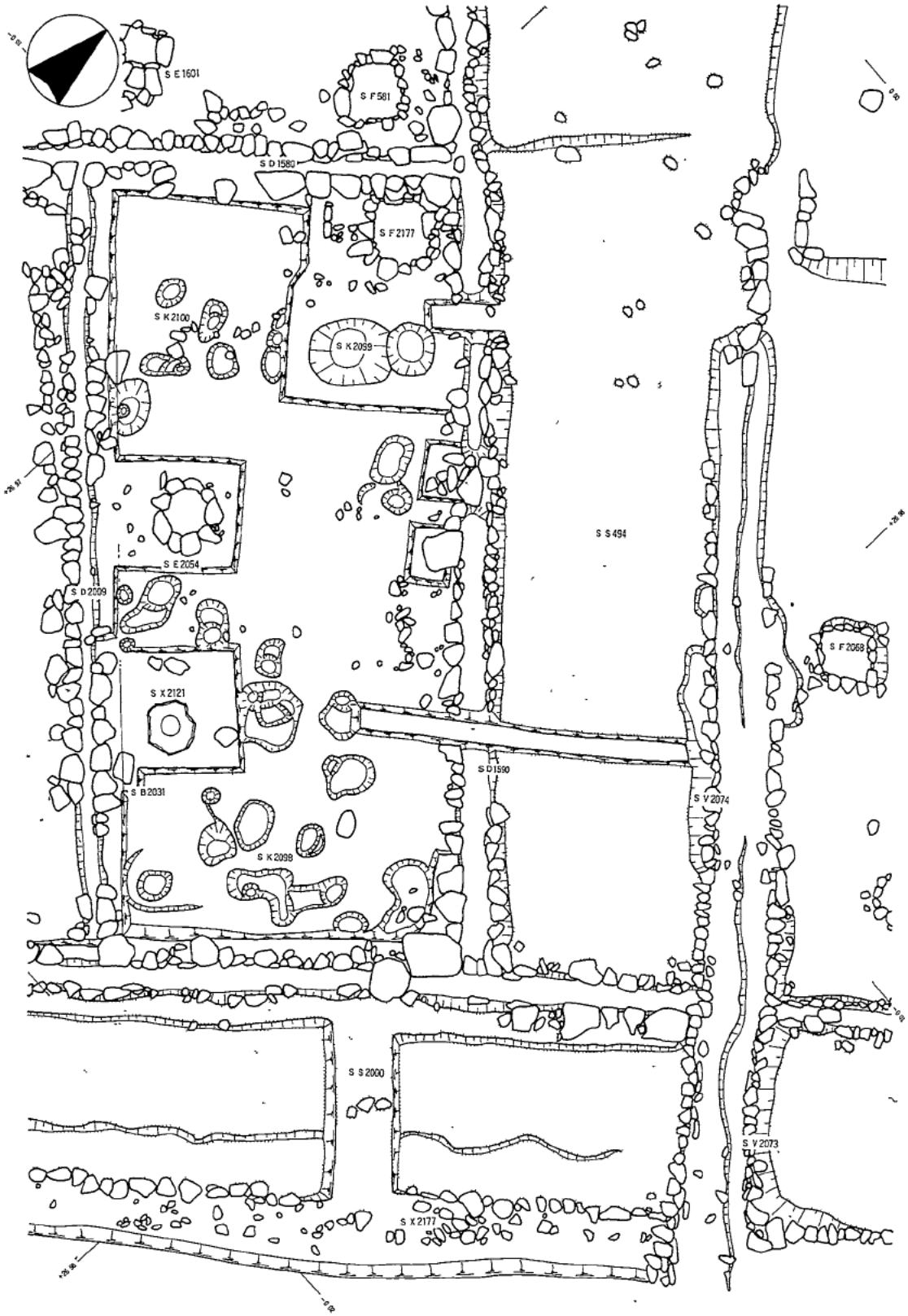
第25図

第36次調査・遺構 (9)



第26図

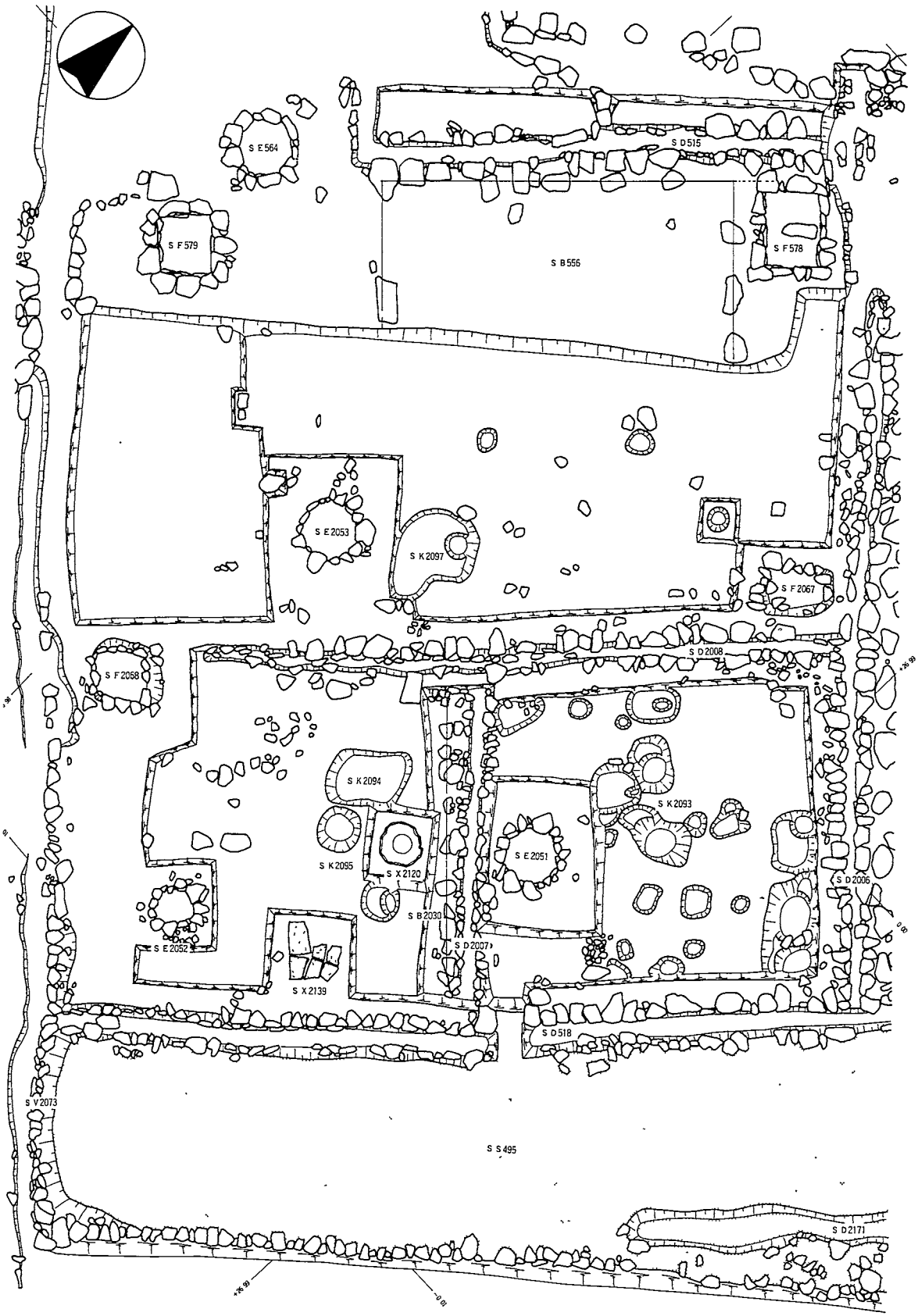
第36次調査・遺構 (10)



0 5M

第27図

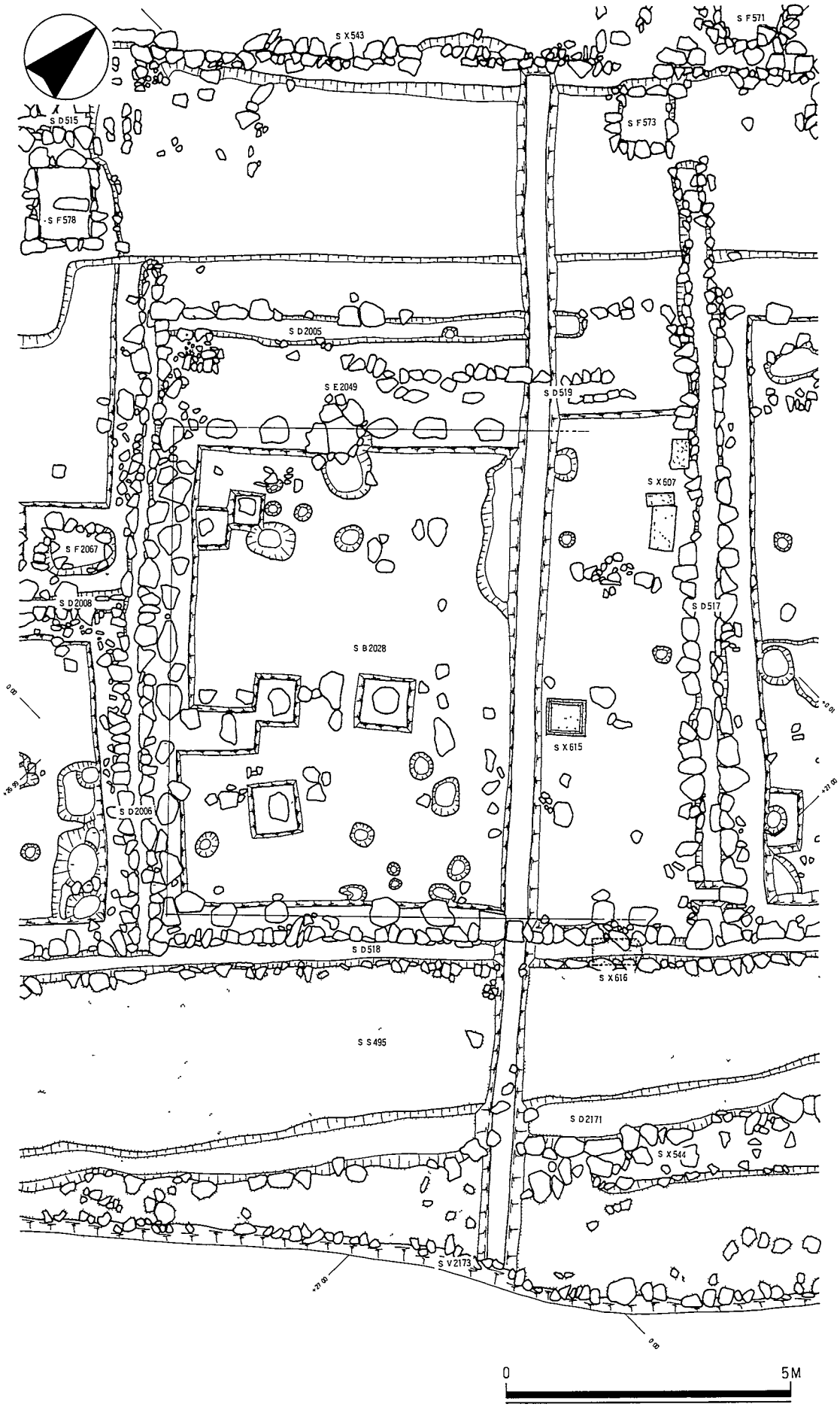
第36次調査・遺構 (11)

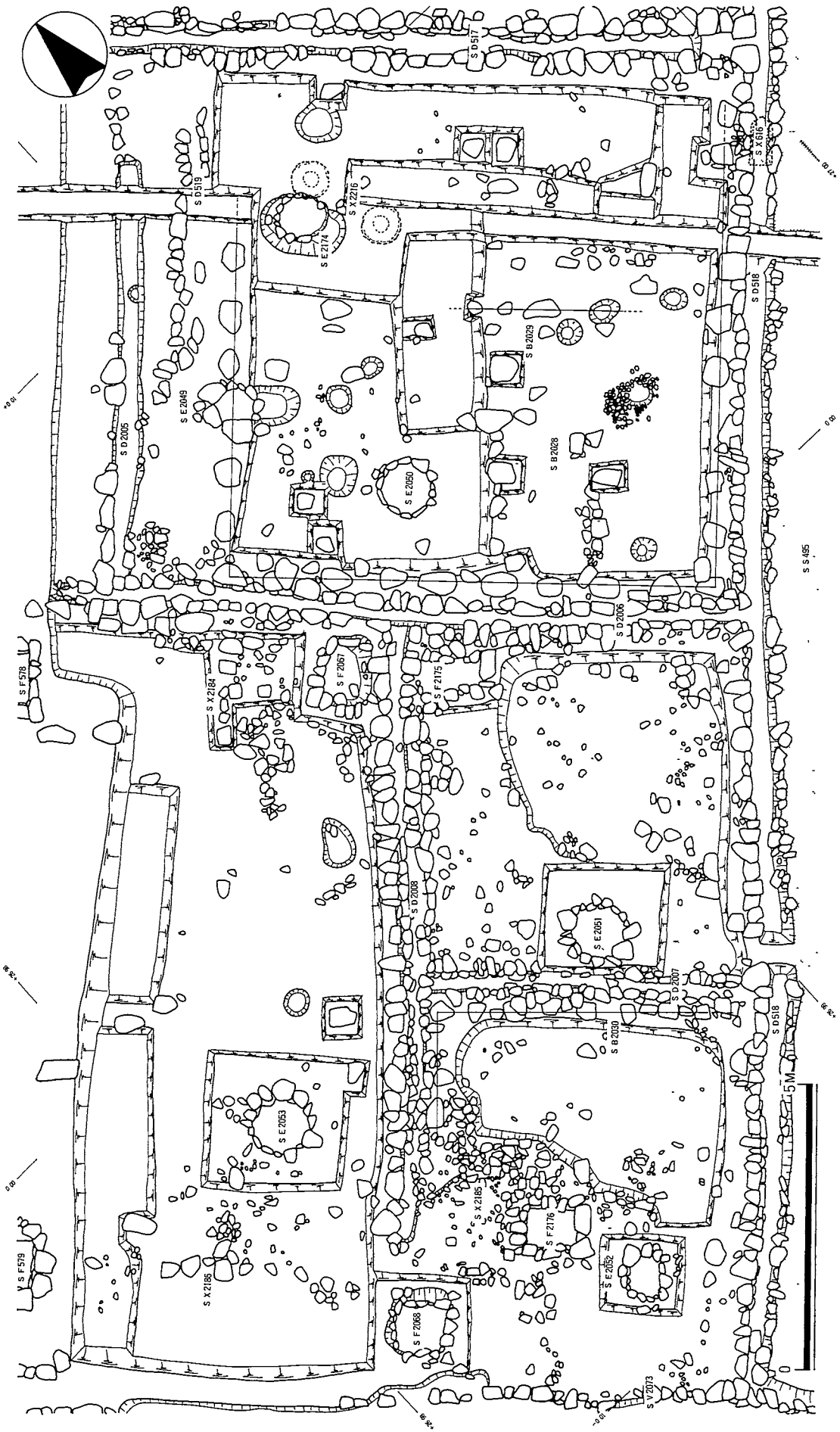


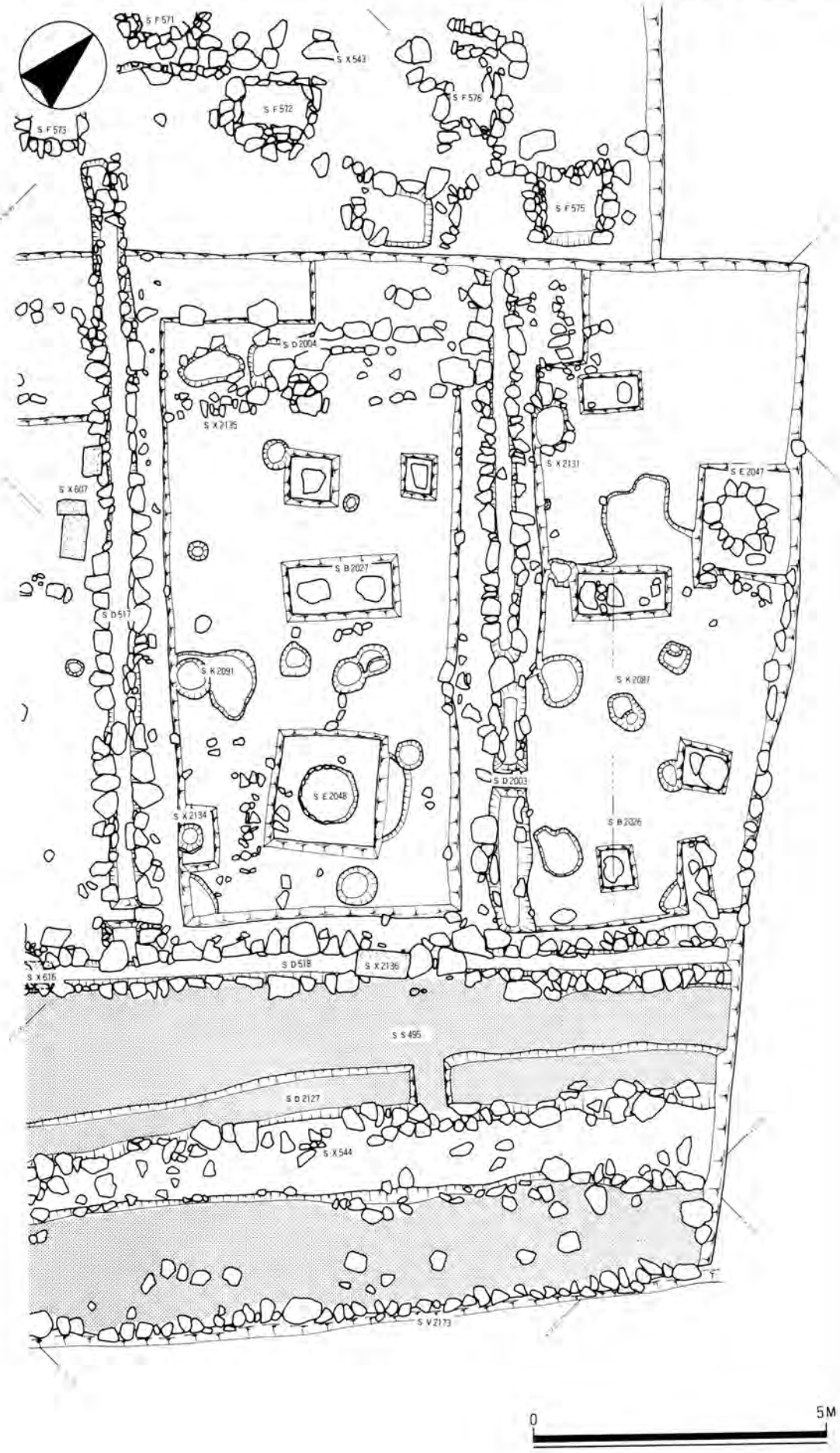
0 5M

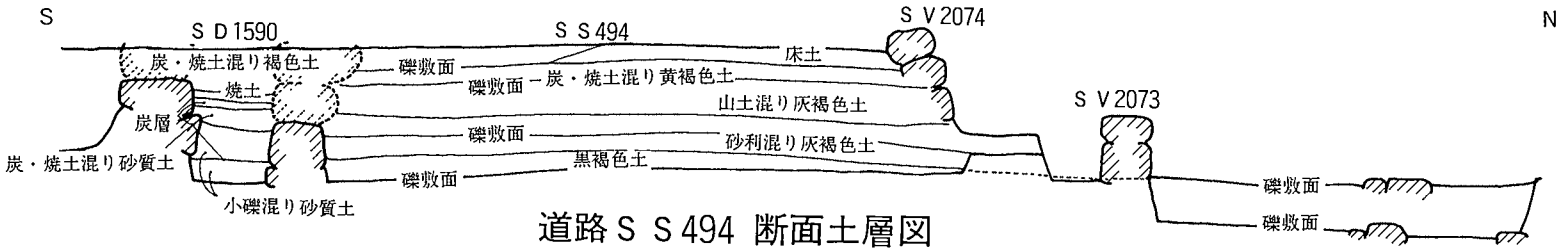
第28図

第36次調査・遺構 (12)

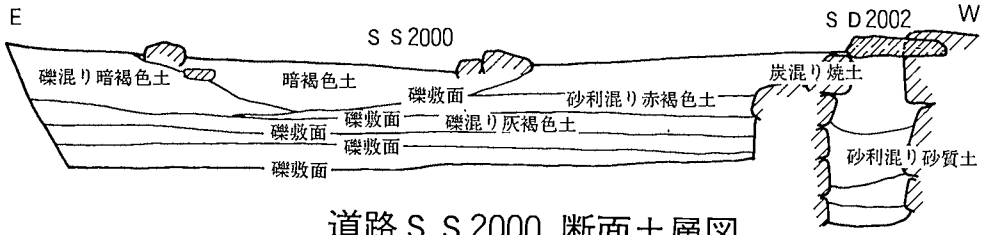



S D517
S X616
S D519
S X2216
S E2174
S D518
S B2029
S E2049
S D2005
S B2028
S E2050
S S495
S D2006
S F578
S X2184
S F2067
S F2175
S D2008
S E2051
S D2007
S B2030
S D518
5M
S E2053
S X2185
S F2176
S E2052
S X2186
S F579
S F2068
S V2073

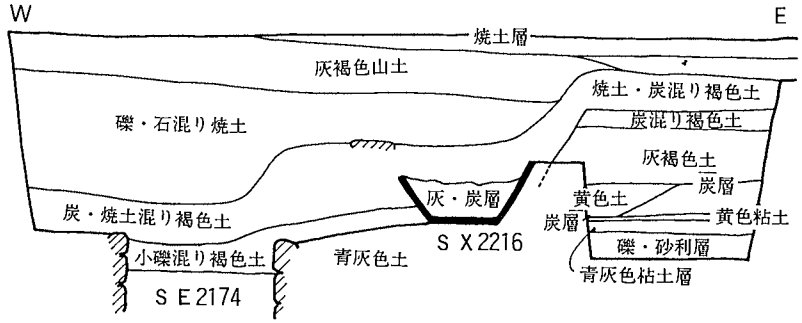

S F 571
S X 543
S F 572
S F 576
S F 573
S F 575
S D 2004
S X 2135
S X 2131
S E 2047
S X 607
S B 2027
S D 517
S K 2091
S K 2087
S D 2003
S E 2048
S X 2134
S B 2026
S D 518
S X 2136
S X 616
S S 495
S D 2127
S X 544
S V 2173
0
5M

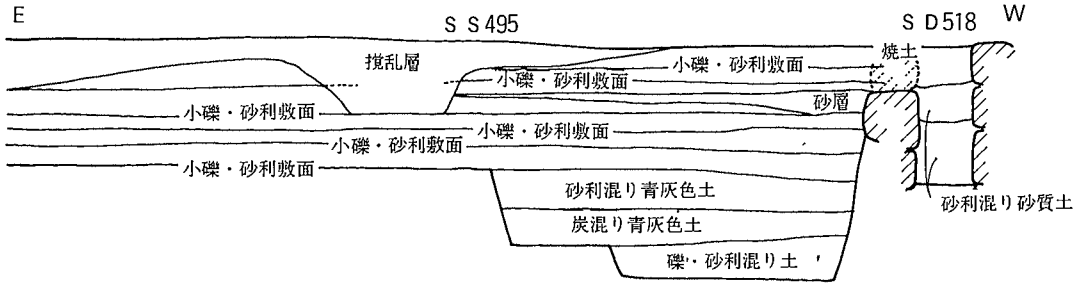


道路ＳＳ494 断面土層図

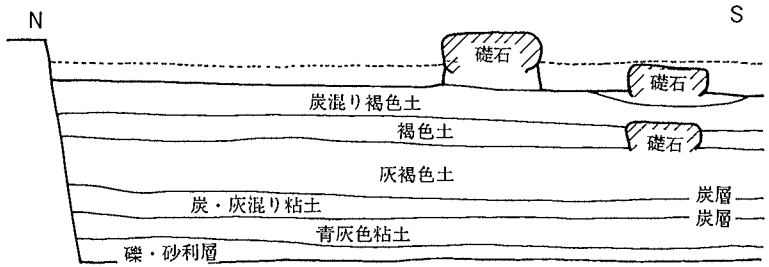


道路ＳＳ2000 断面土層図

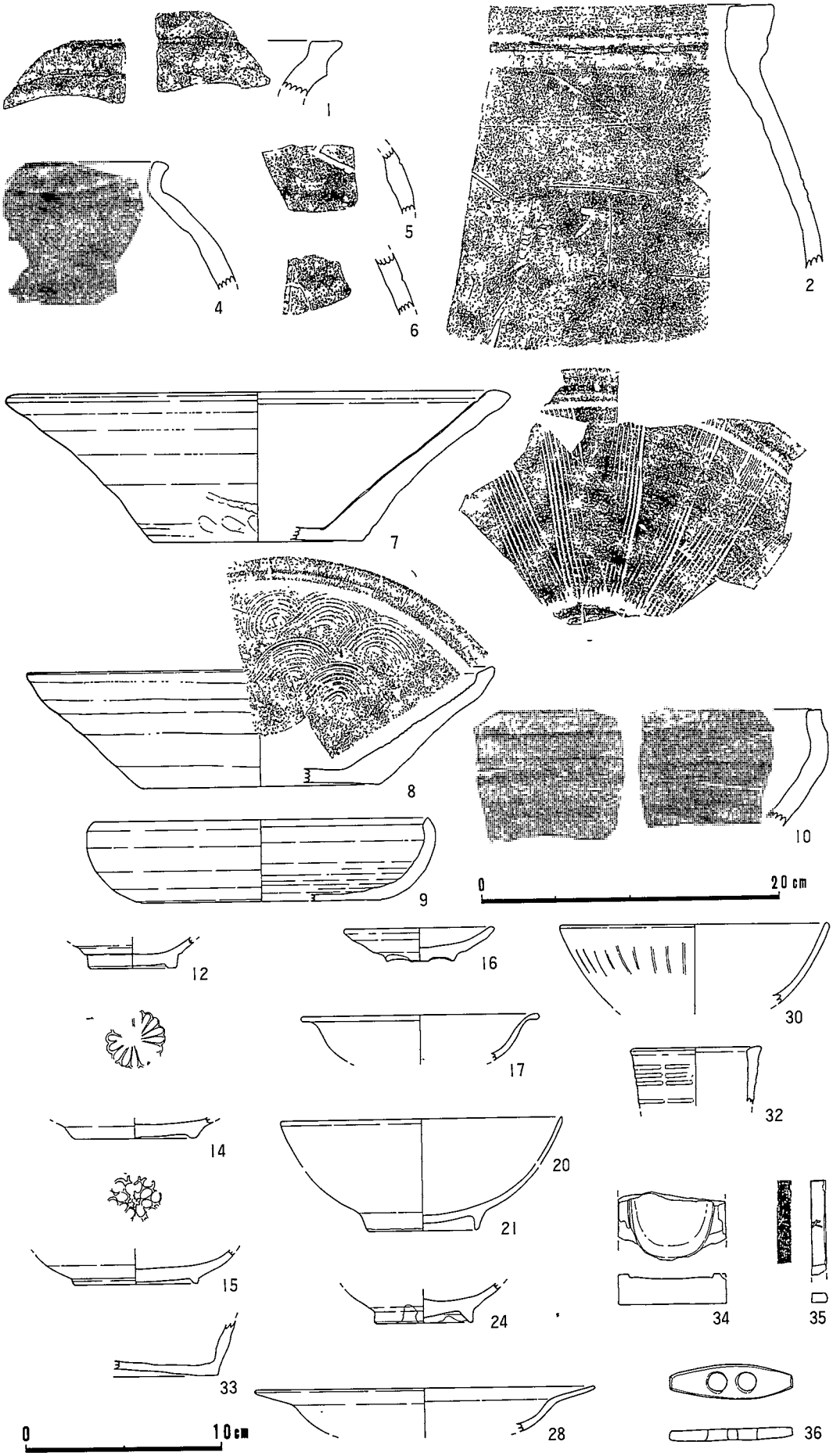




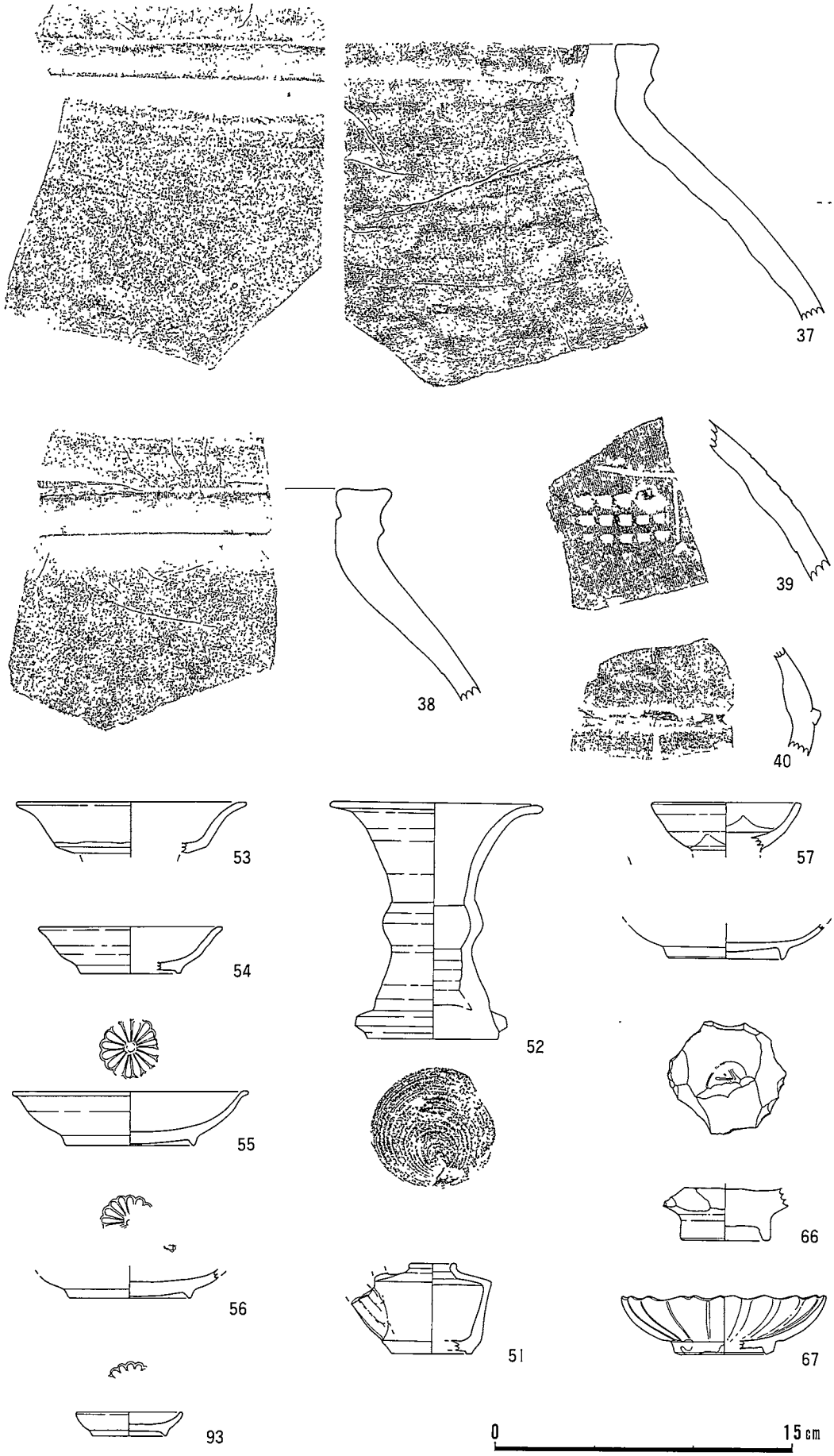
道路ＳＳ495 断面土層図



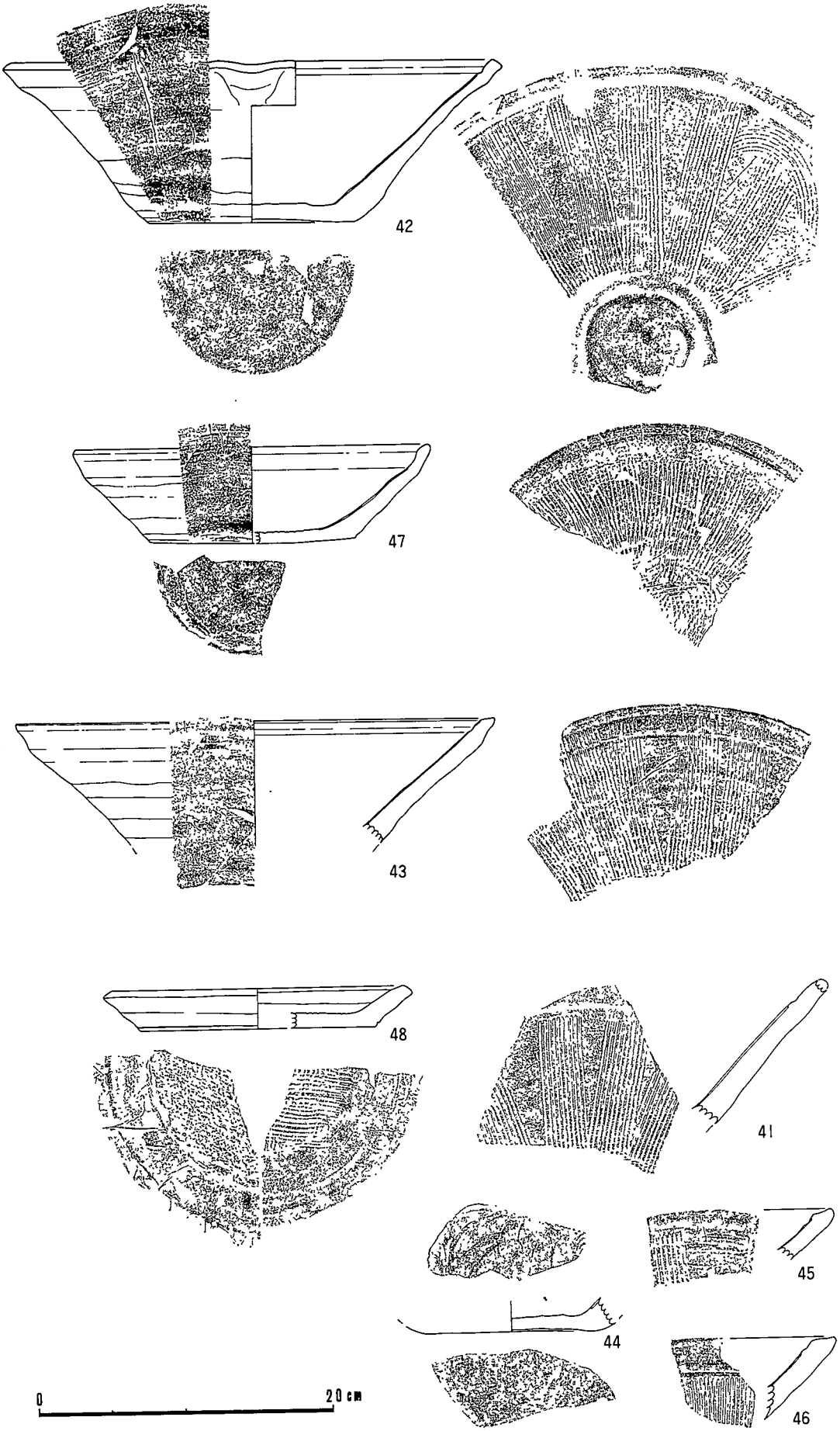
区画36－20 断面土層図



区画36―18・19　グループ1　　越前焼　1・2．甕　4～6．壺　7・8．擂鉢　9・10．鉢
美濃焼　12．天目茶碗　14・15．灰釉皿　　中国製陶磁器　16・17．白磁皿　20～24．染付碗　28．染付皿
30．青磁碗　32．香炉　　石製品　34．硯　35．硯破片再利用品　　銅製鞐　36



区画36—18　グループ2　　越前焼　37～39．甕　40．壺　　美濃焼　51．鉄釉水注　52．鉄釉仏花瓶
53～56・93．灰釉皿　　中国製磁器　57．白磁坏　66．青磁碗　67．青磁皿



区画36－18　グループ2　　越前焼　41～48．擂鉢

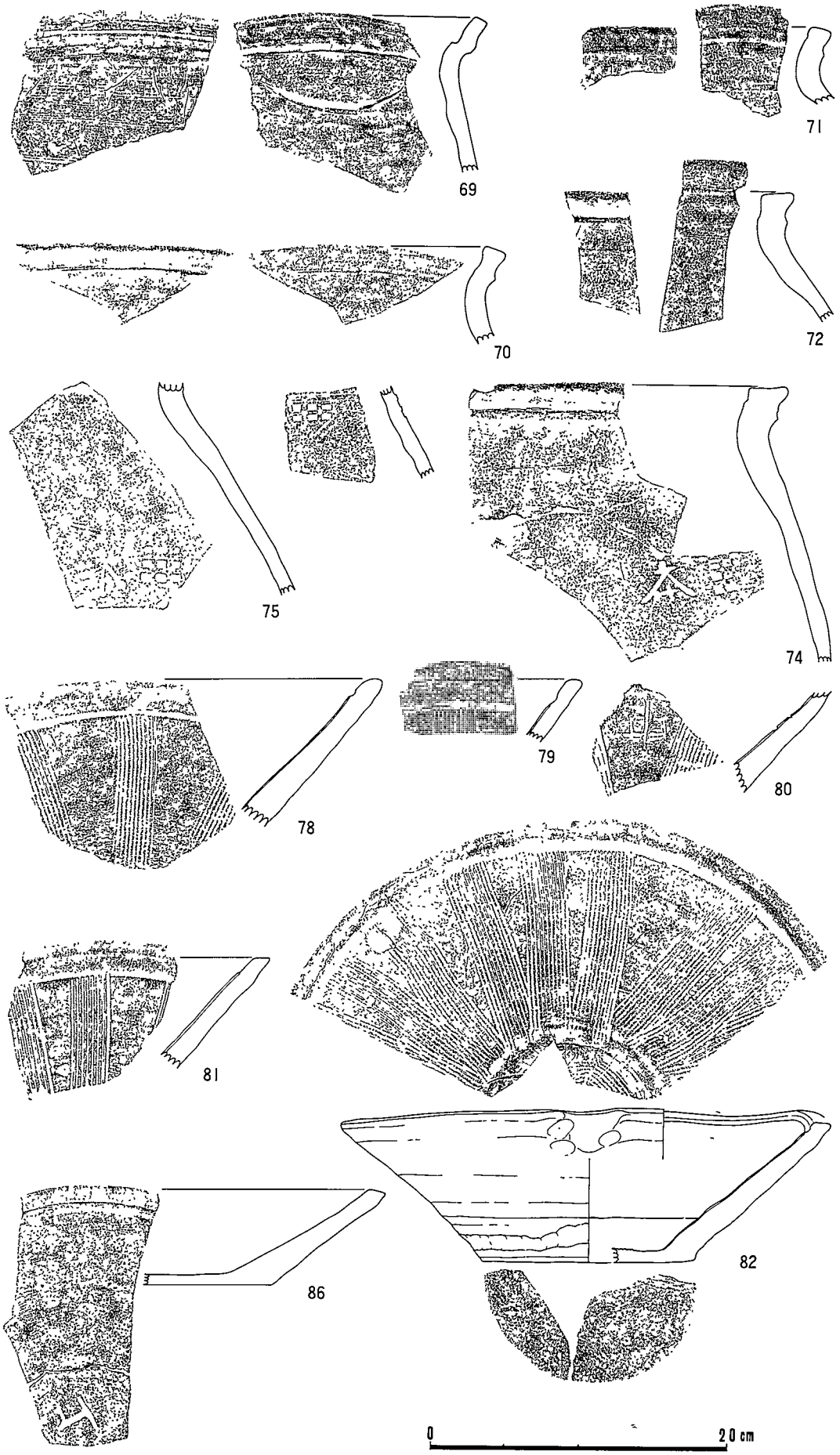
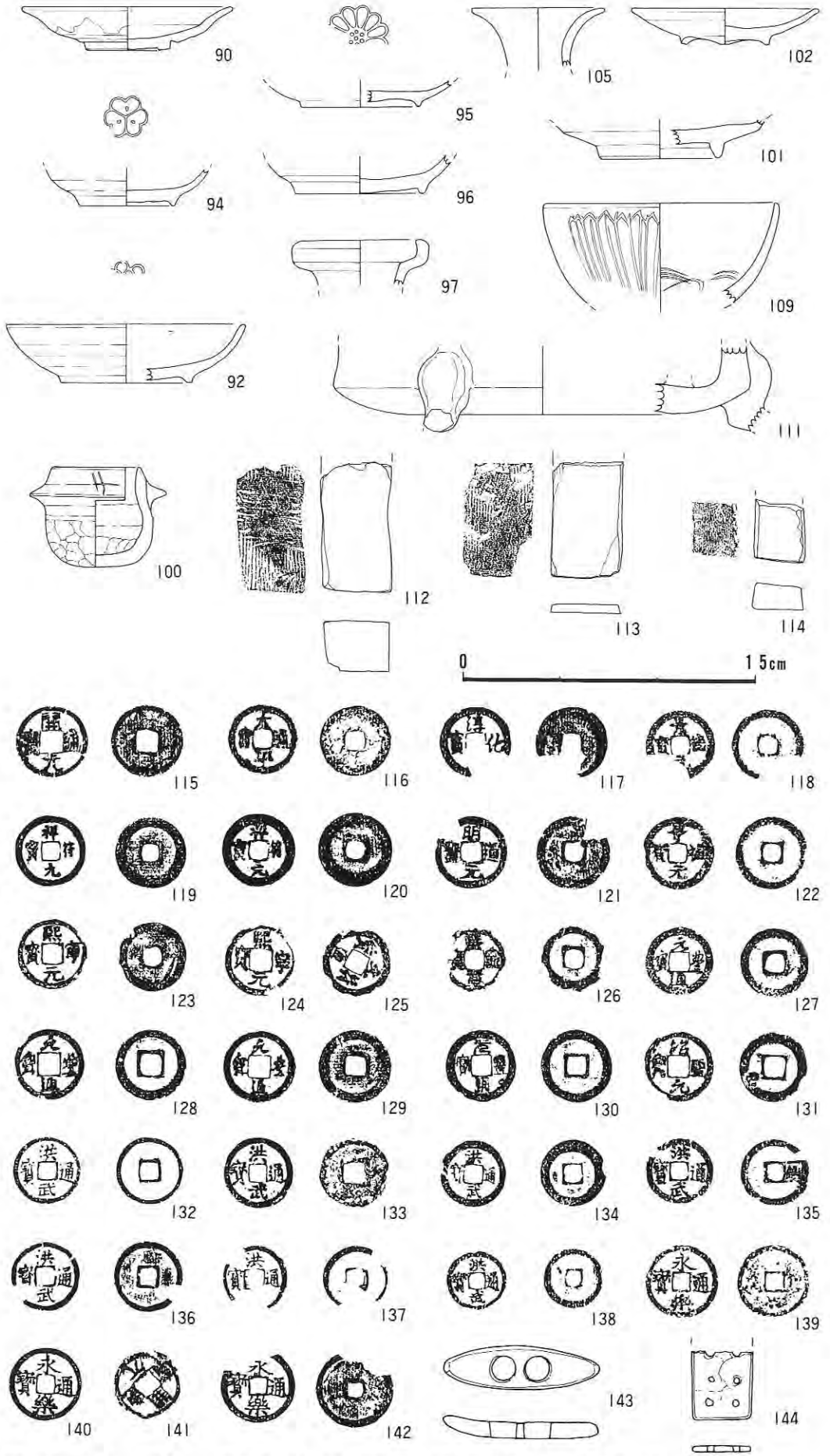
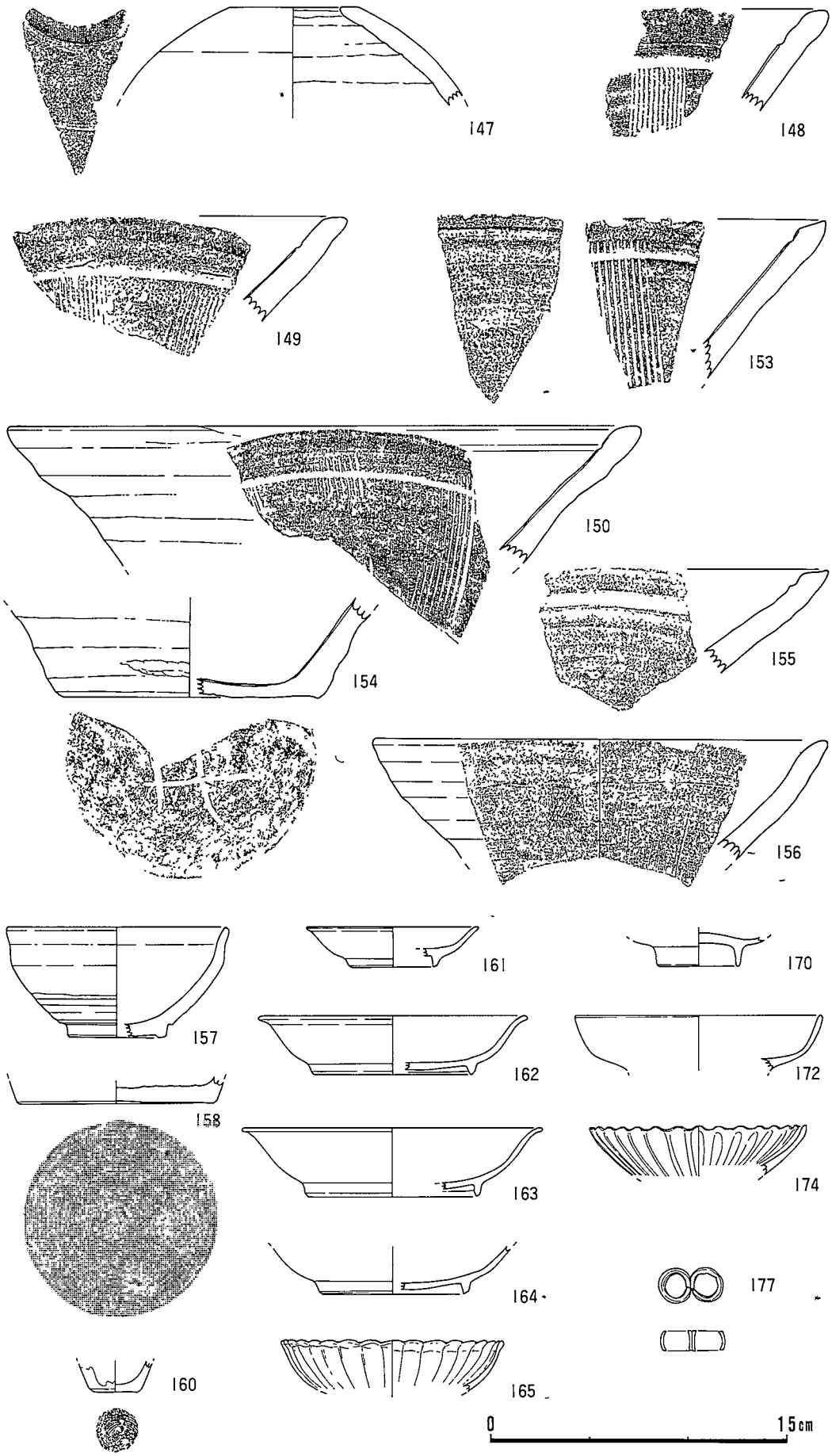


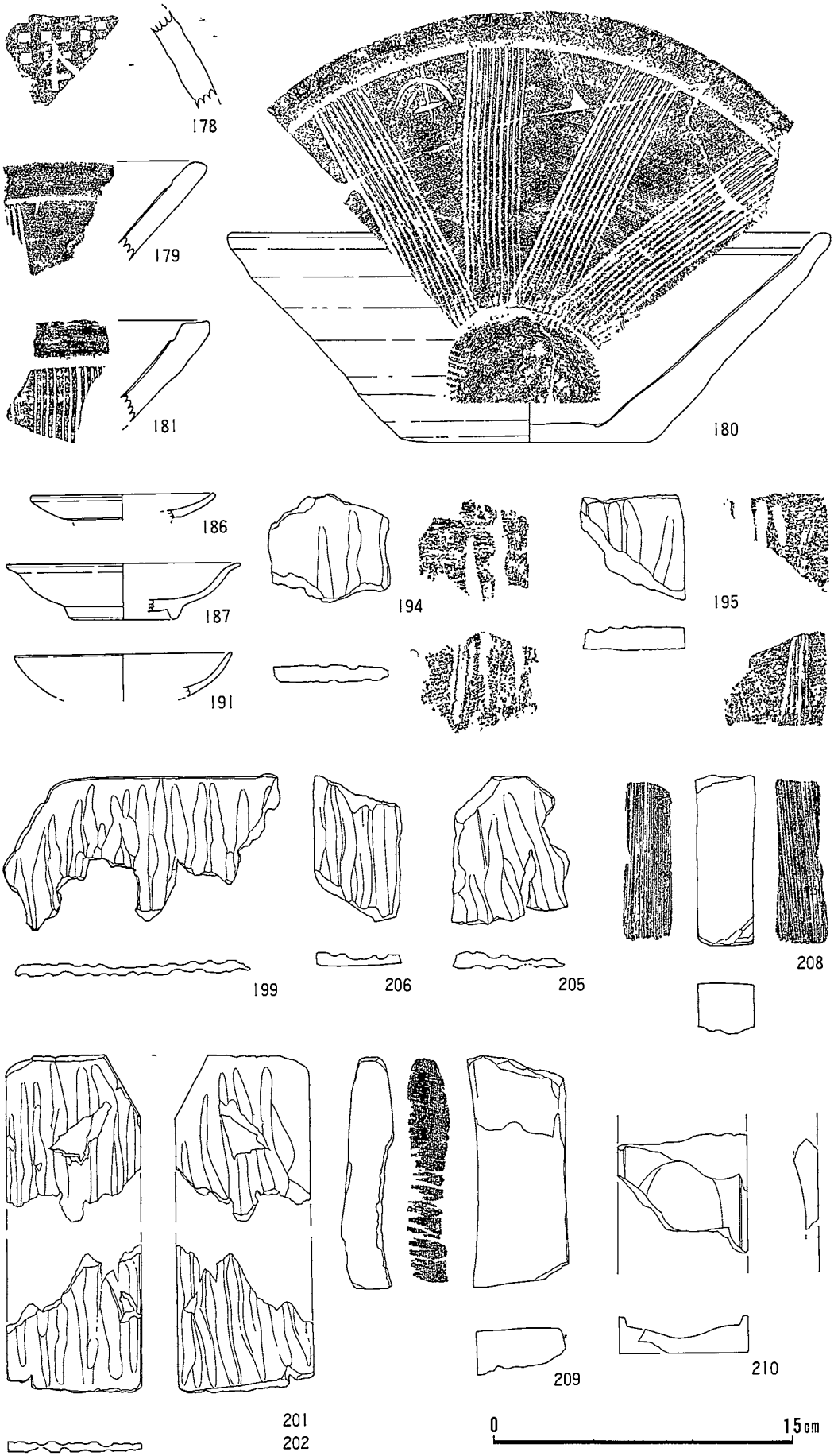
図36—18　グループ3　　越前焼　69～75. 甕　78～82. 擂鉢　86. 鉢



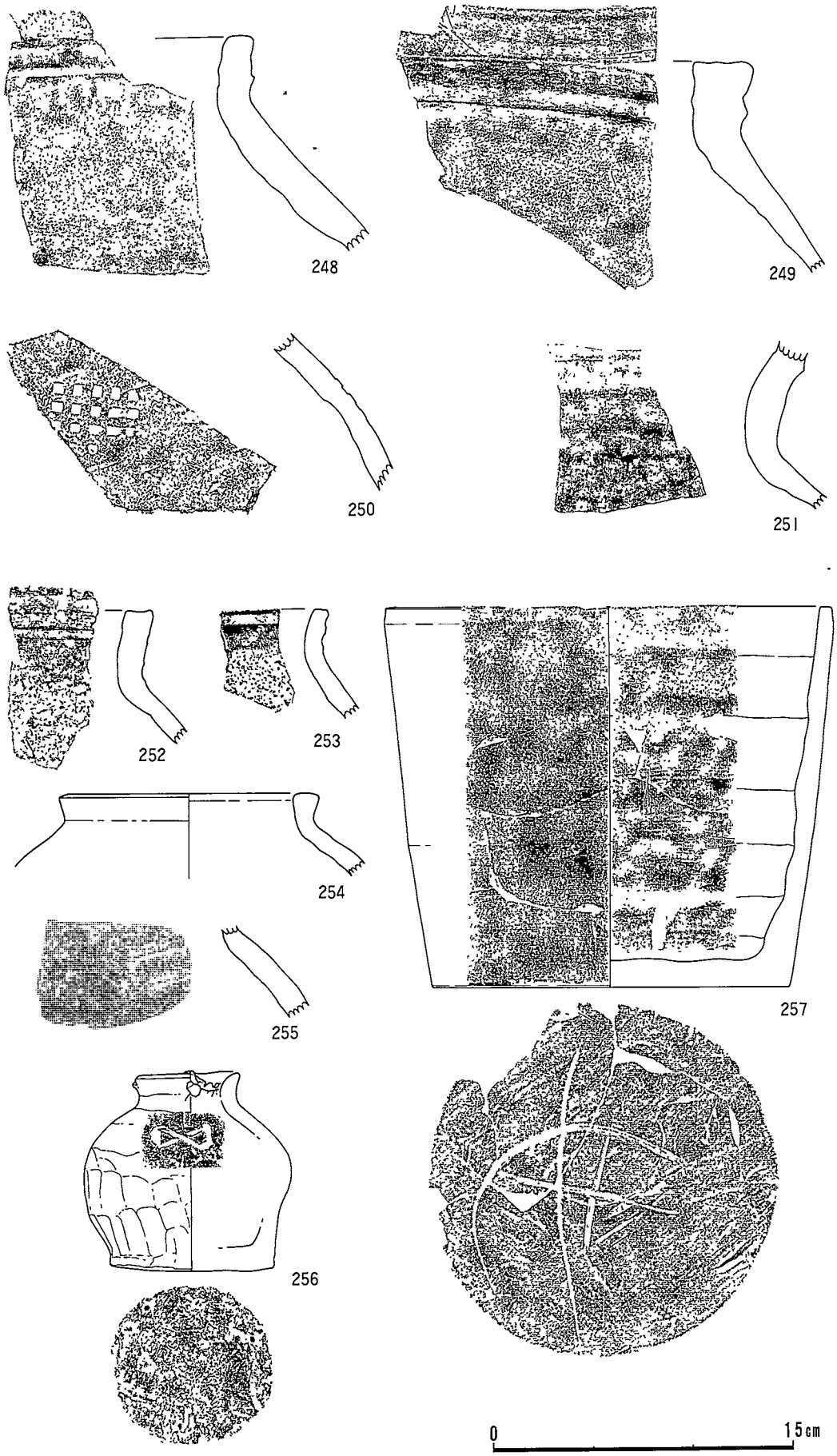
区画36－18　グループ3　　美濃焼　90～96．灰釉皿　97．灰釉瓶　　土師質土器　100．土釜
中国製磁器　101・102．白磁皿　105．染付瓶　109．青磁碗　111．青磁香炉　　砥石　112～114
金属製品　115～142．銅銭　143．鞐　144．小札　　(115～144は½大)



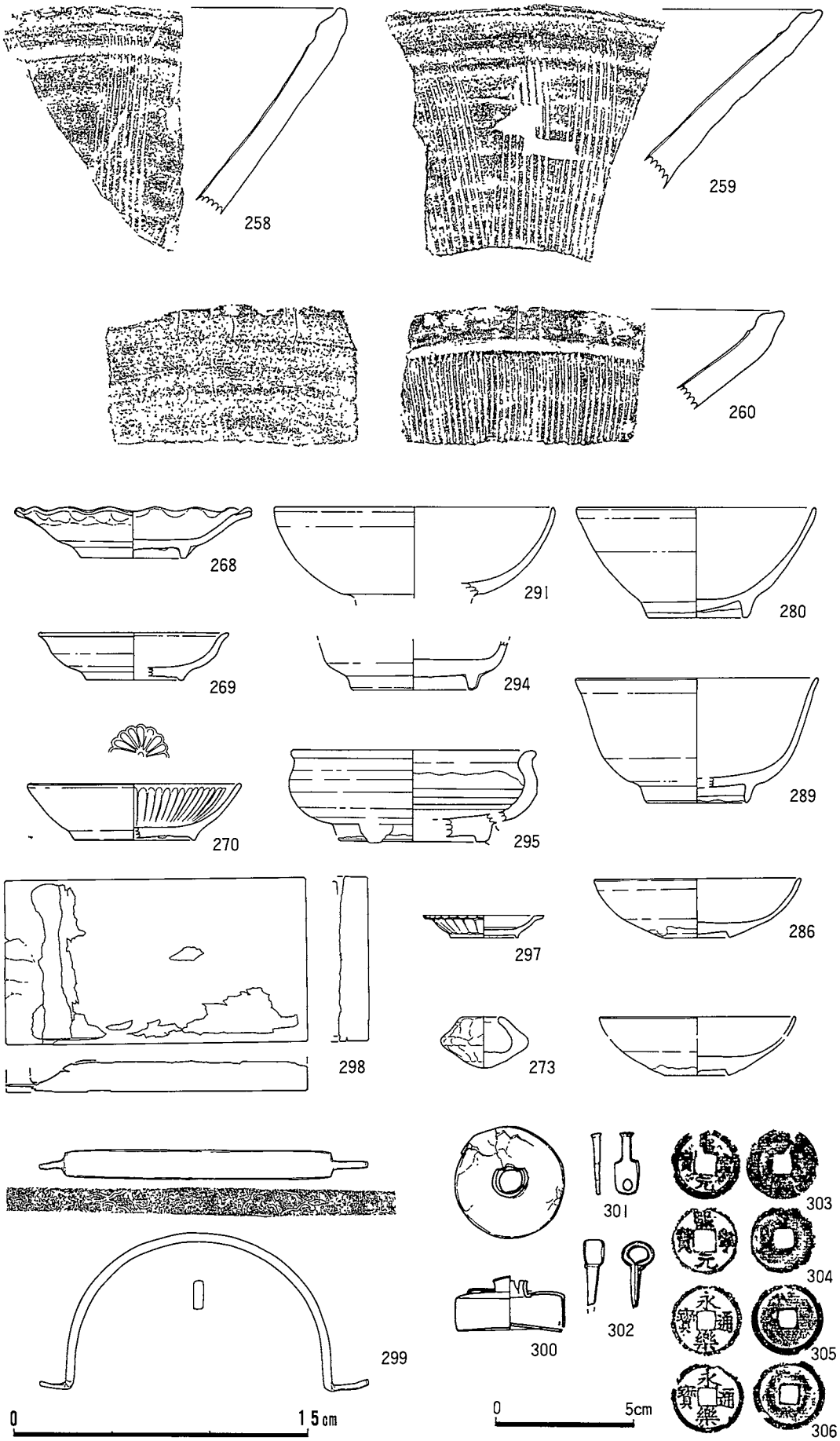
区画36—19　グループ2　越前焼　147．不明　148～154．擂鉢　155・156．鉢
美濃焼　157．天目茶碗　158．鉄釉瓶　160．灰釉壺か　中国製磁器　161～165．白磁皿　170．染付碗
172．染付皿　174．青磁皿　銅製金具　177



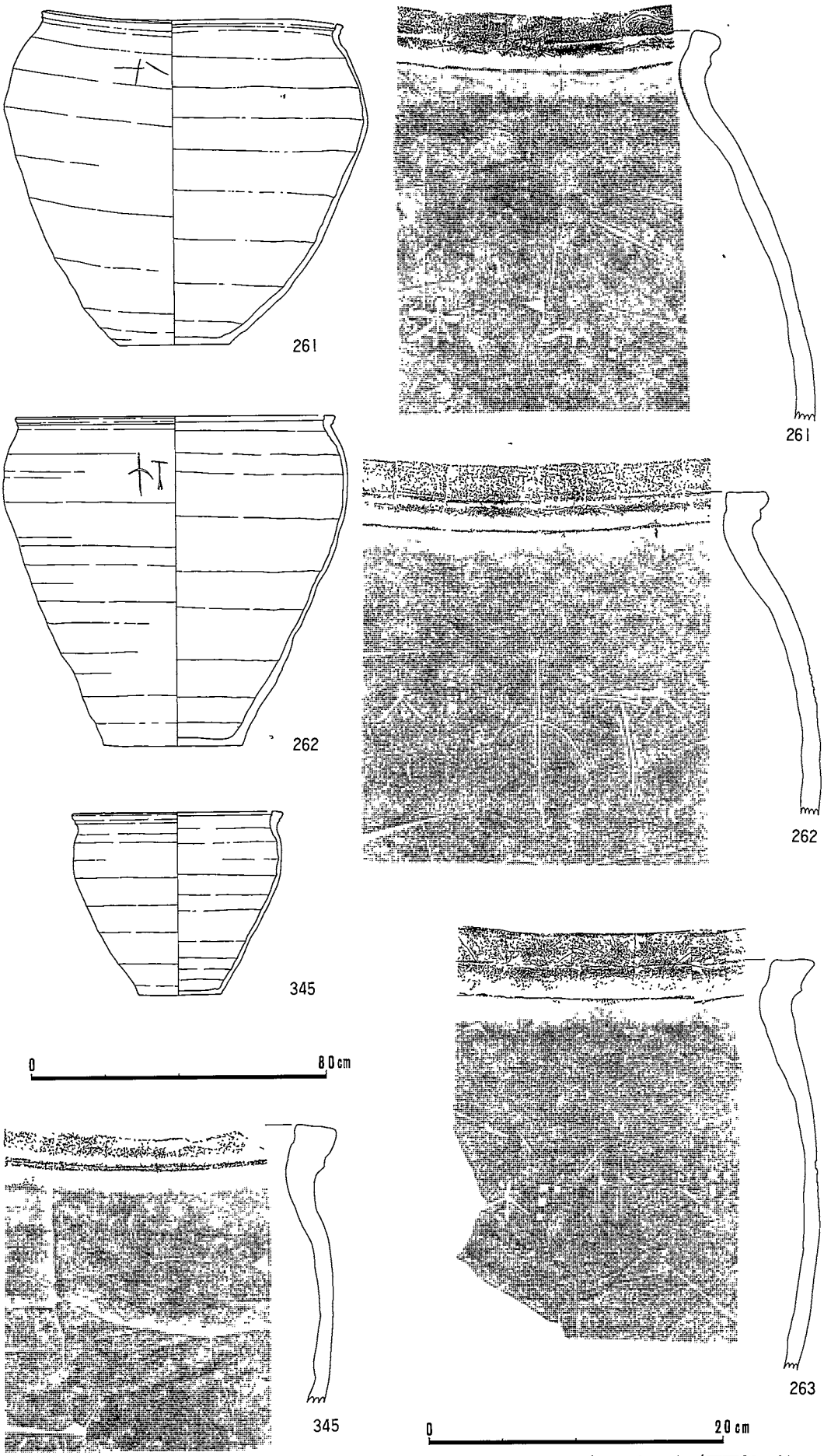
区画36—19　グループ3　　越前焼　178. 甕　179～181. 擂鉢　　中国製磁器　186・187. 白磁皿
191. 染付皿　　石製品　194～206. 玉砥石　208・209. 砥石　210. 硯



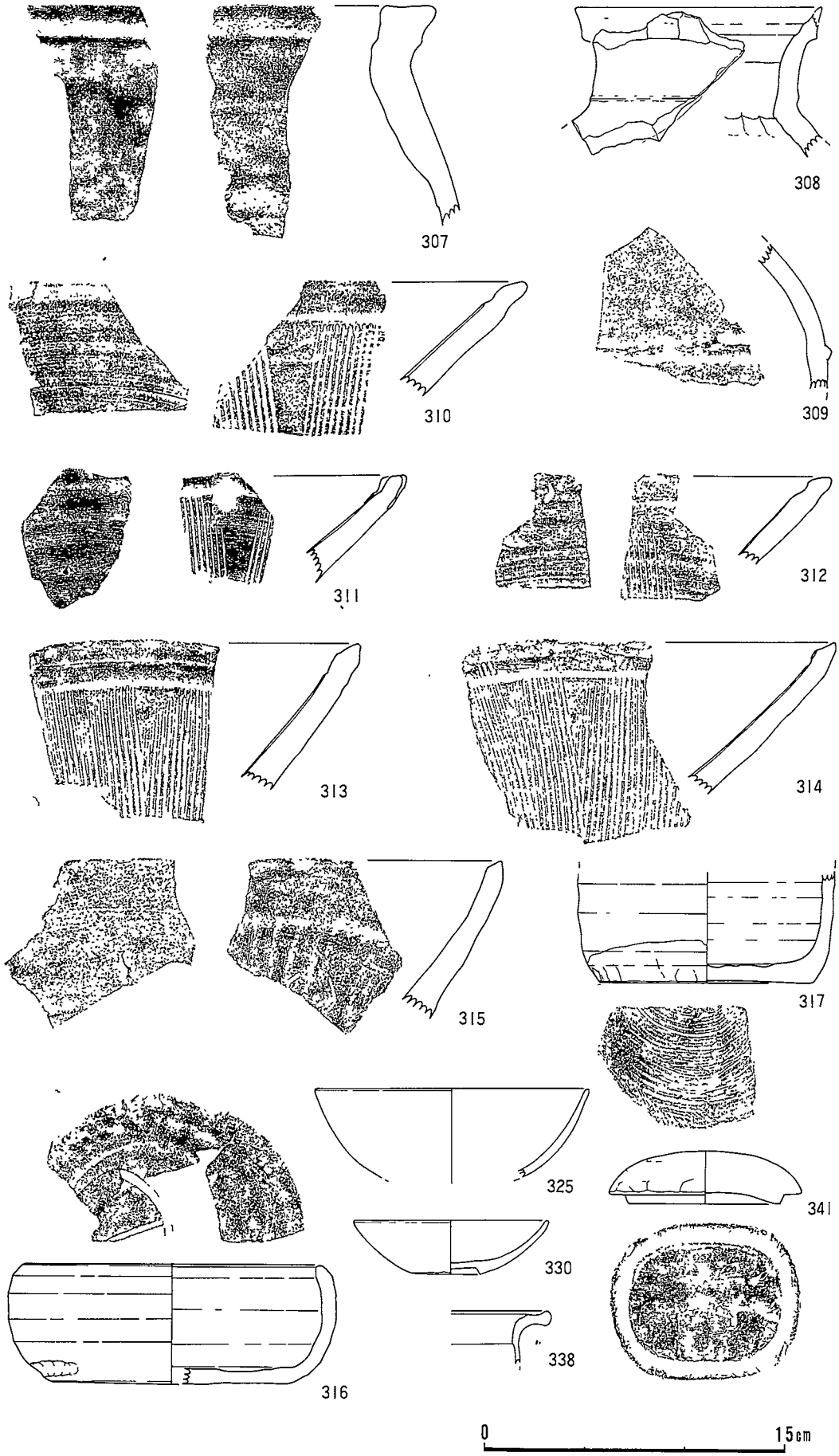
区画36－20　グループ2　　越前焼　248～251．甕　252～256．壺　257．火桶



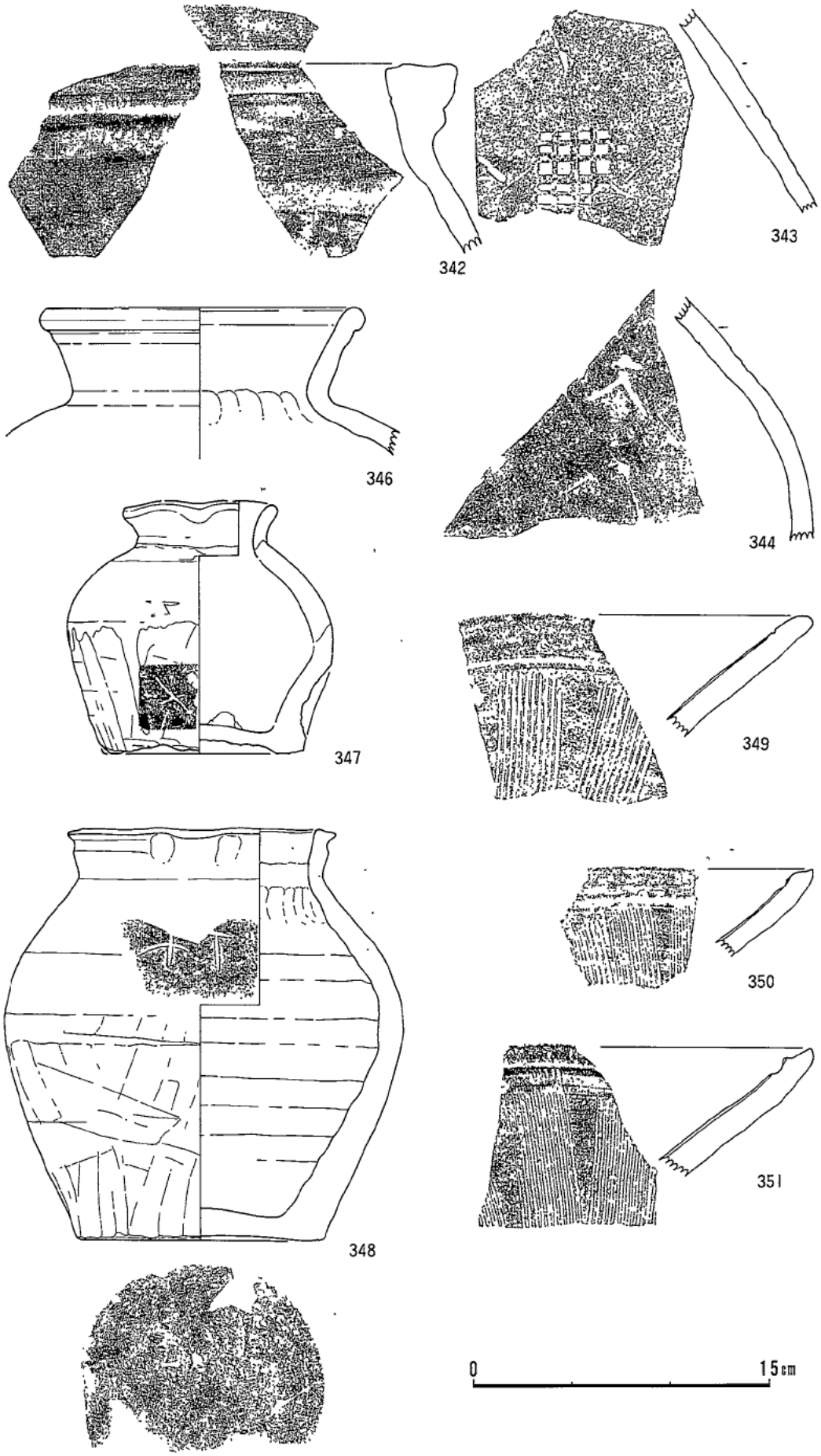
区画36—20　グループ2　　越前焼　258～260. 擂鉢　　美濃焼　268～270. 灰釉皿　　中国製磁器　291.青磁碗　294.青磁皿　295.青磁香炉　280・289.染付碗　286.染付皿　297.交趾三彩皿　　土師質土器 273.壺　石製硯　298　　金属製品　299.銅製吊手　300.銅製水滴　301.銅製不明　302.銅製金具　303～306.銅銭



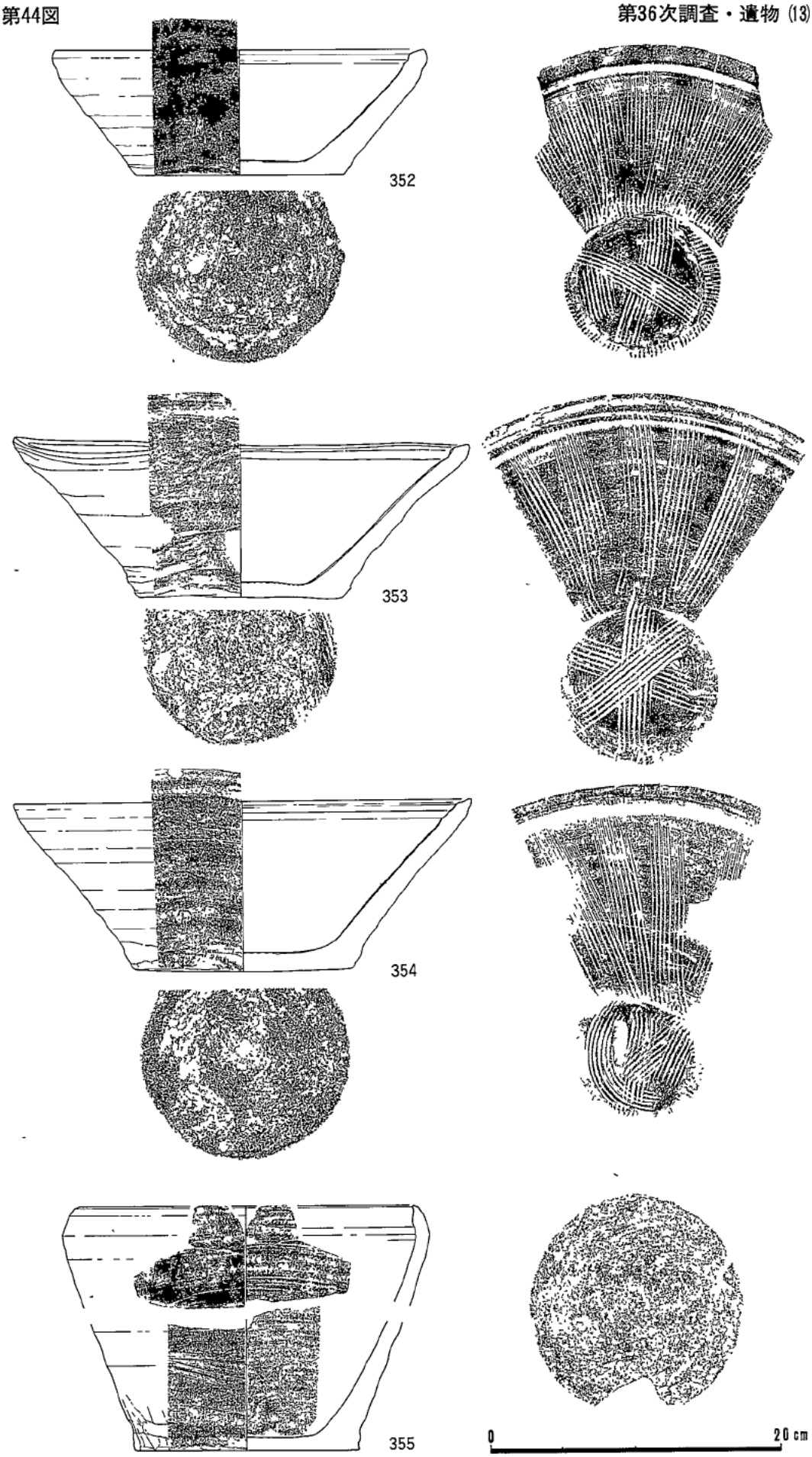
区画36—20　グループ3　　越前焼　261～263．甕（区画36—20　SX2216）　345．甕（区画36—21　SX2134）



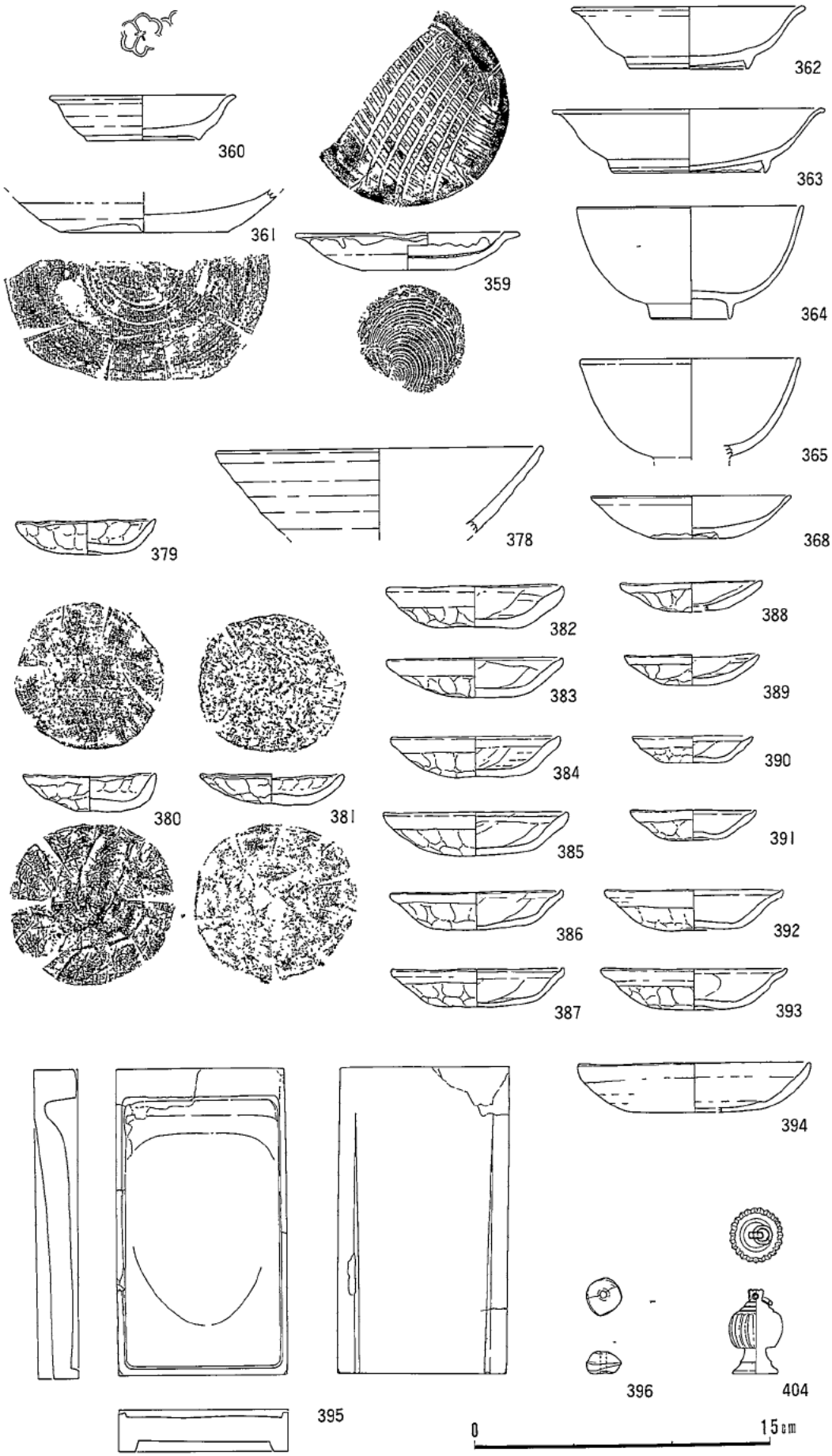
区画36—21　グループ1　　越前焼　307．甕　308・309．壺　310〜314．擂鉢　315・316．鉢
美濃焼　317．鉄釉壺か　　中国製陶磁器　325．染付碗　330．染付皿　338．褐釉鉢
石製バンドコ蓋　341



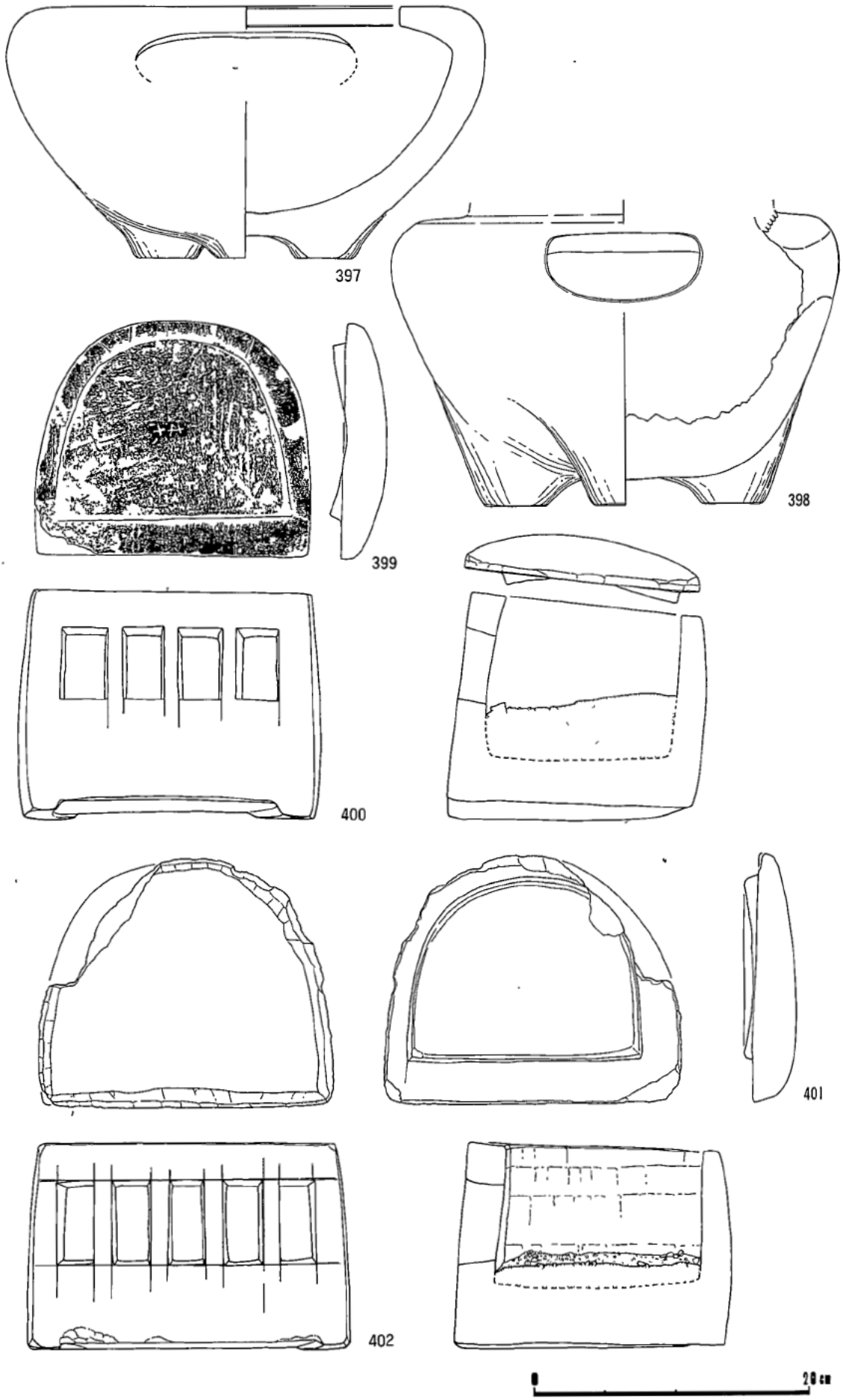
区画36－21　グループ2　　越前焼　342～344．甕　346～348．壺　349～351．擂鉢



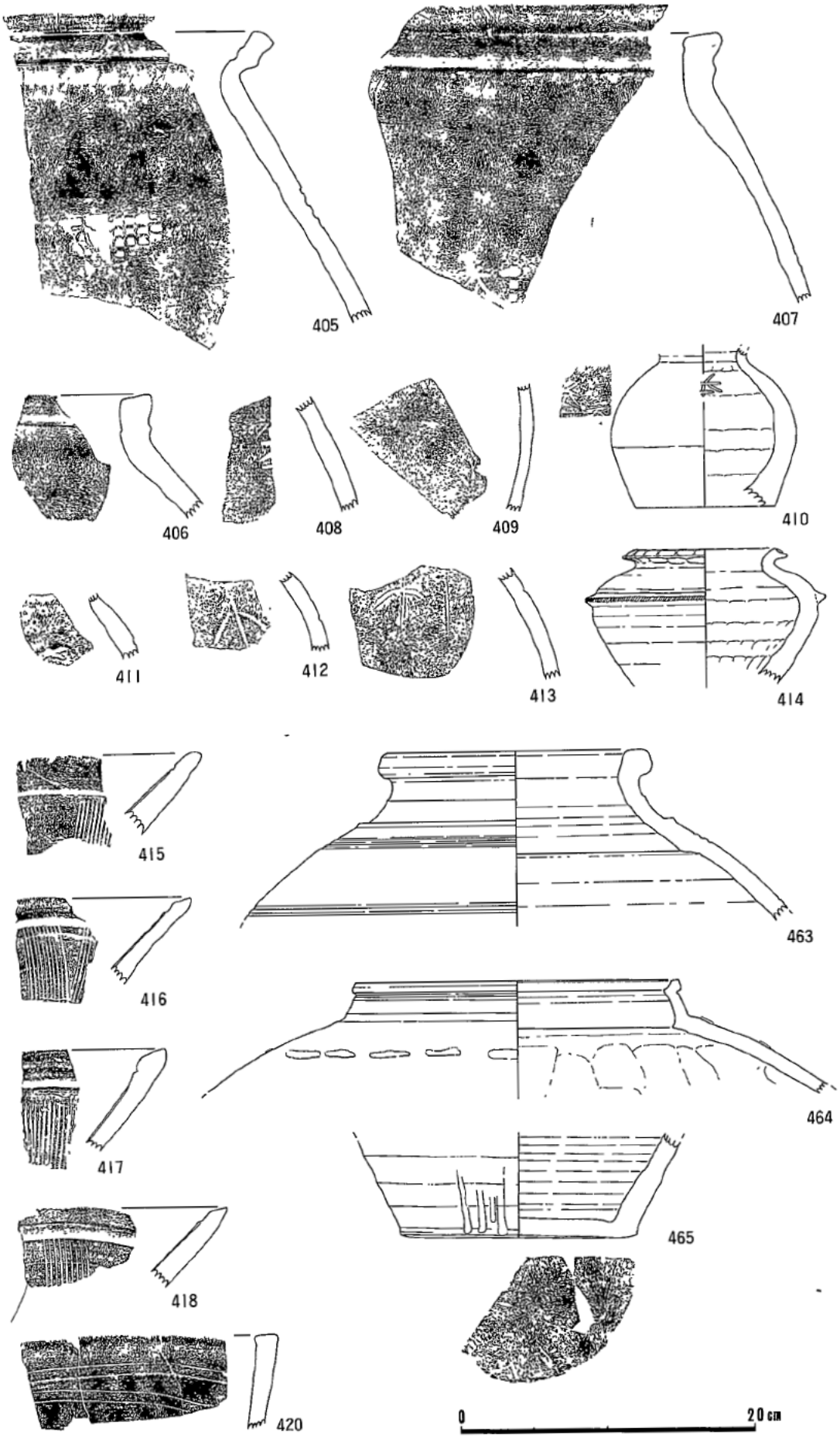
区画36ー21　グループ2　　越前焼　352～354．擂鉢　355．鉢



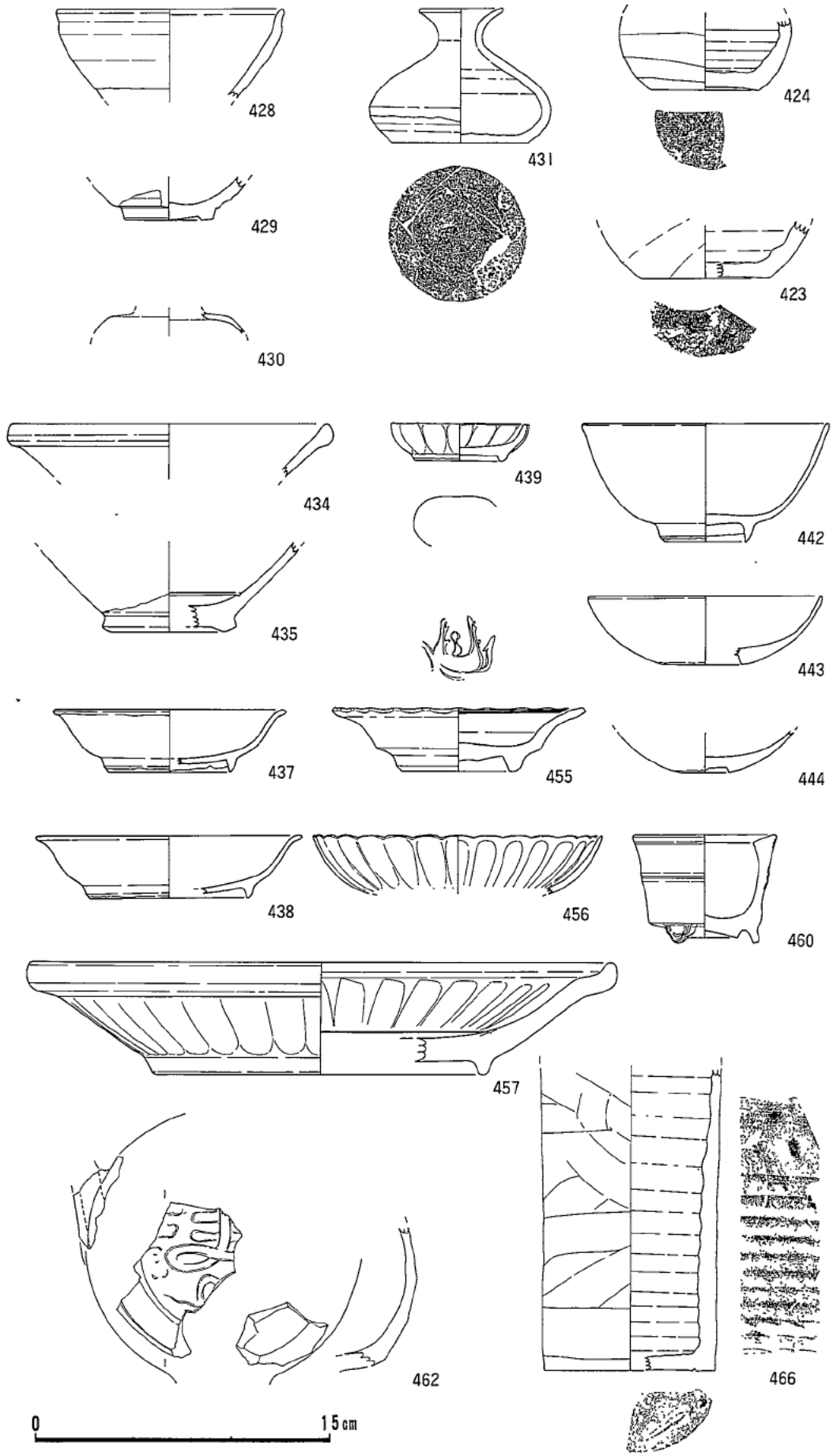
区画36－21　グループ2　　美濃焼　359．灰釉卸皿　360．灰釉皿　備前焼　361．瓶
中国製磁器　362・363．白磁皿　364・365．染付碗　368．染付皿　　朝鮮製陶器　378．刷毛目茶碗
土師質土器　379～394．皿　　石製品　395．硯　396．玉　　銅製権　404



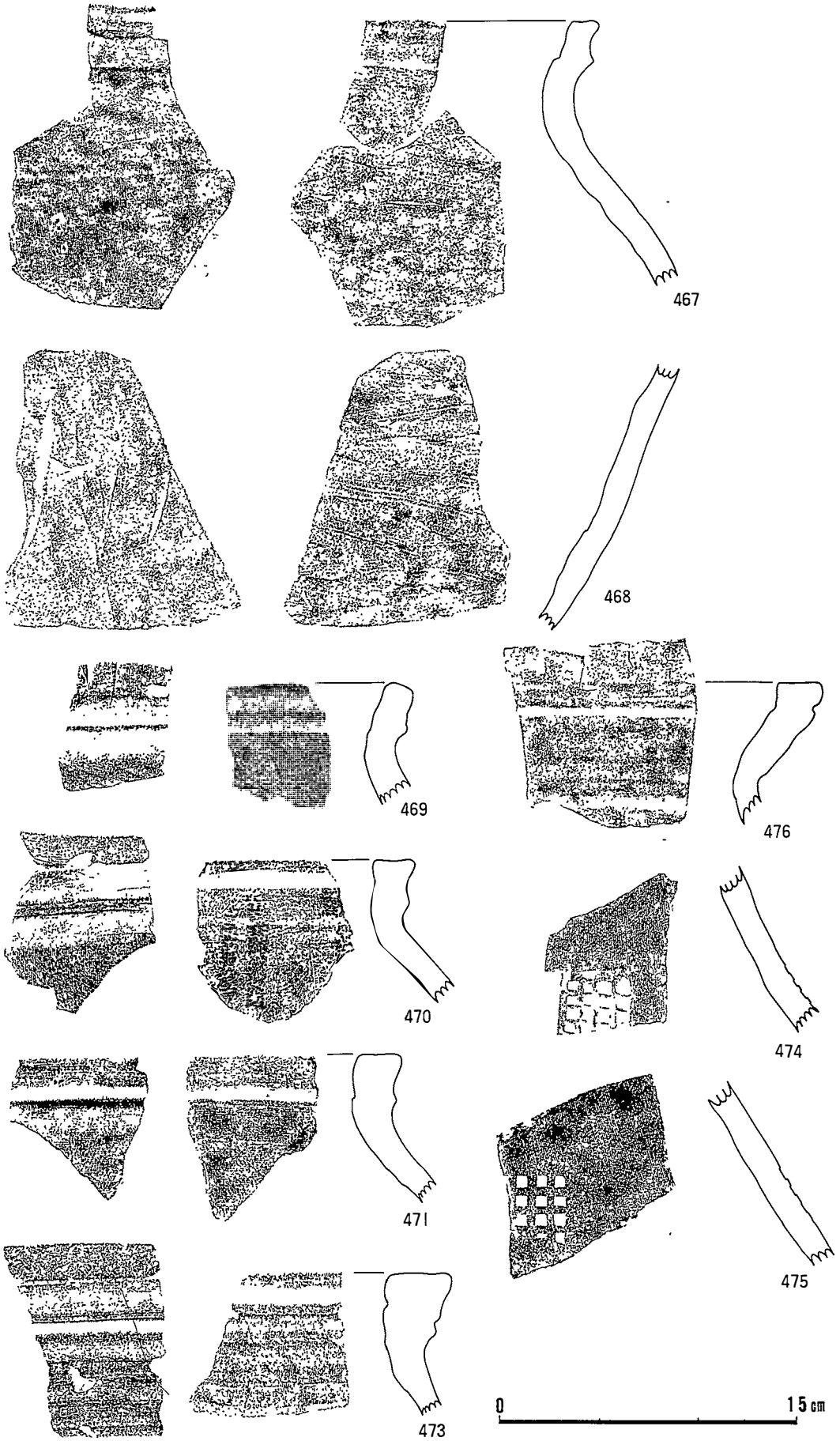
区画36—21　グループ2　石製品　397・398．風炉　399・400．バンドコ蓋・身
401・402．バンドコ蓋・身



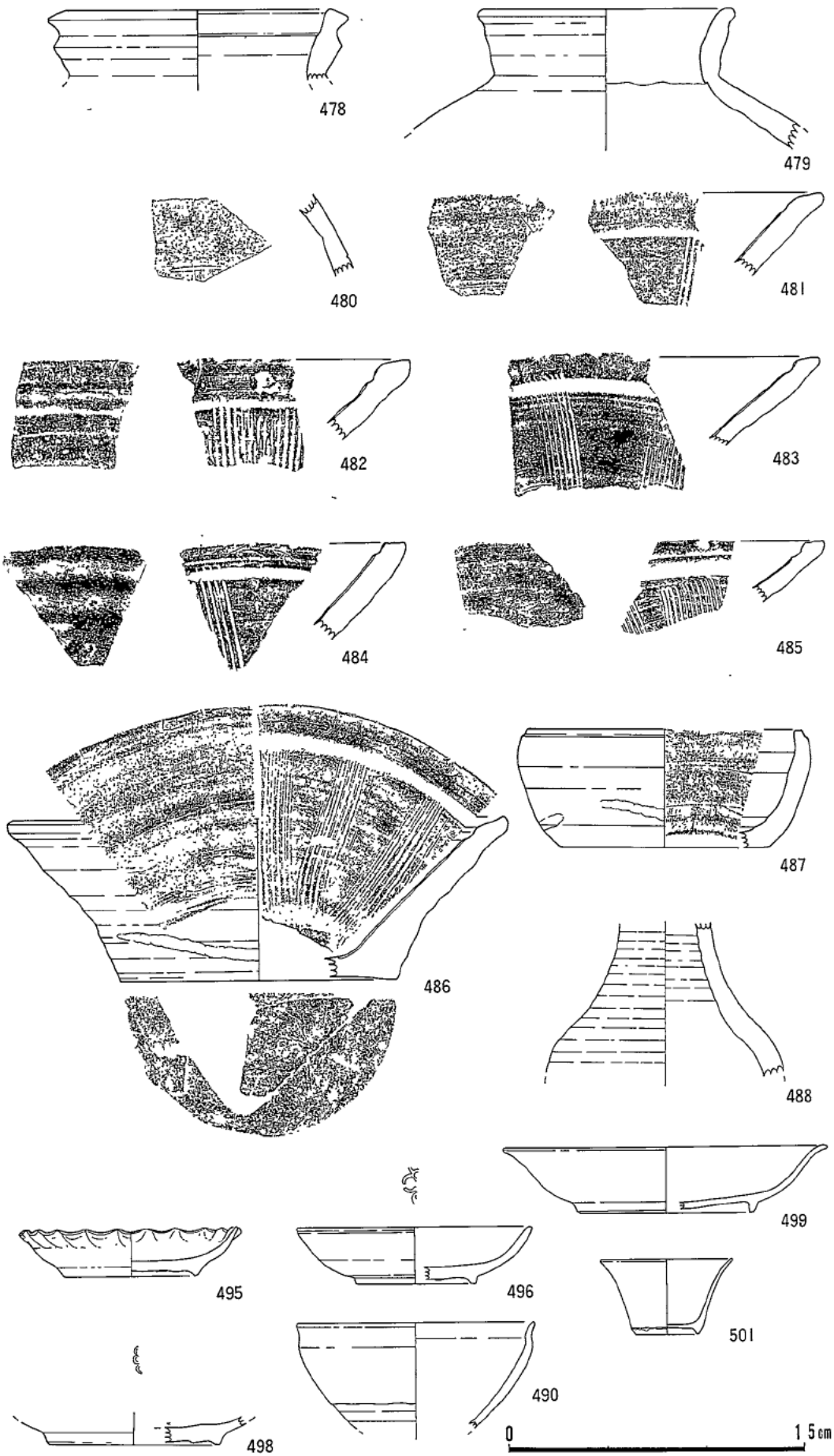
道路ＳＳ495　越前焼　405～409．甕　410～414．壺　415～418．擂鉢　420．火桶
中国製陶器　463～465．壺



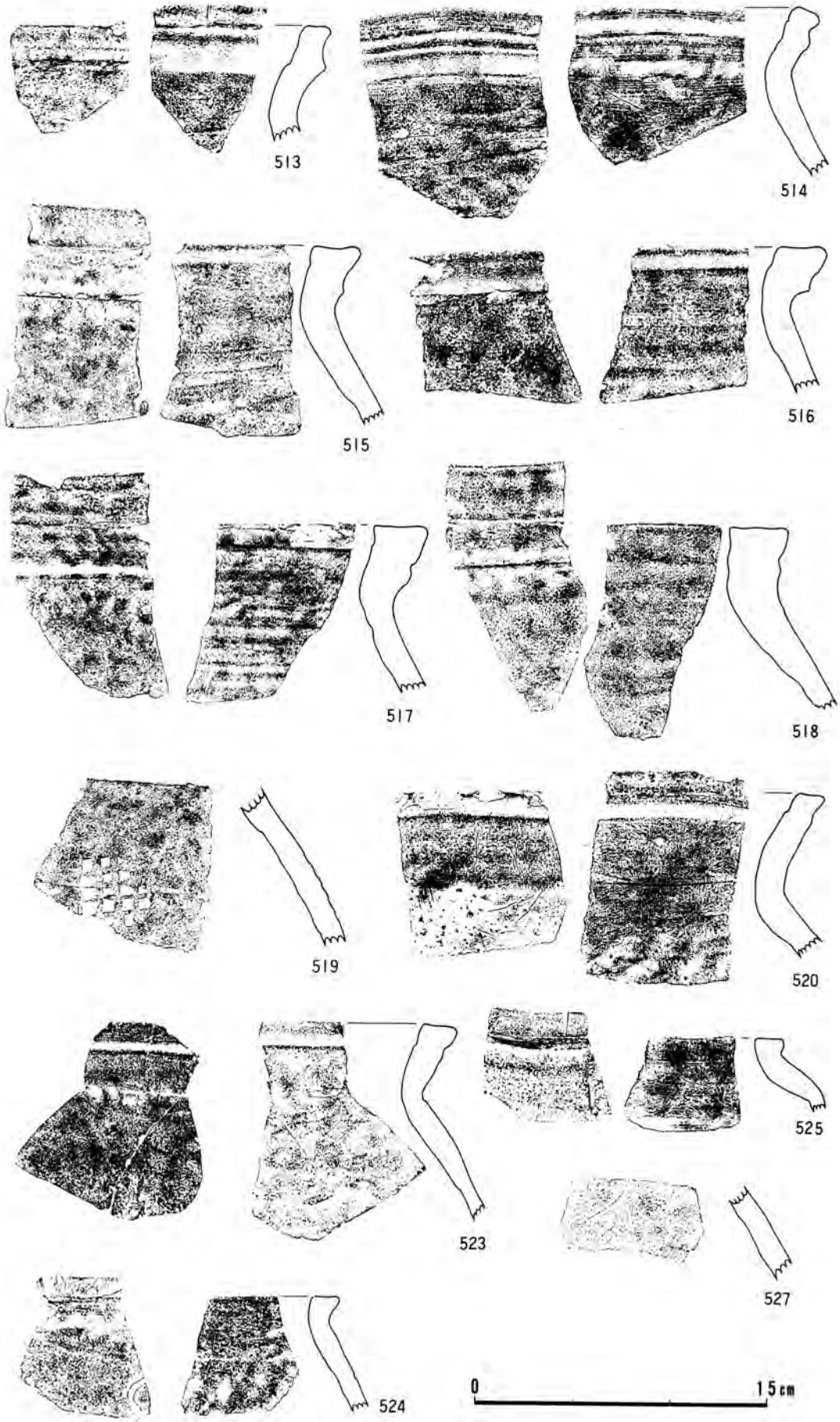
道路ＳＳ495　美濃焼　428・429．天目茶碗　431．壺　430．茶入　　備前焼　423・424．瓶
中国製陶磁器　434・435．白磁碗　437～439．白磁皿　442．染付碗　443・444．染付皿
455・456.青磁皿　457．青磁盤　460．青磁香炉　462．青磁水注　466．無釉花生か



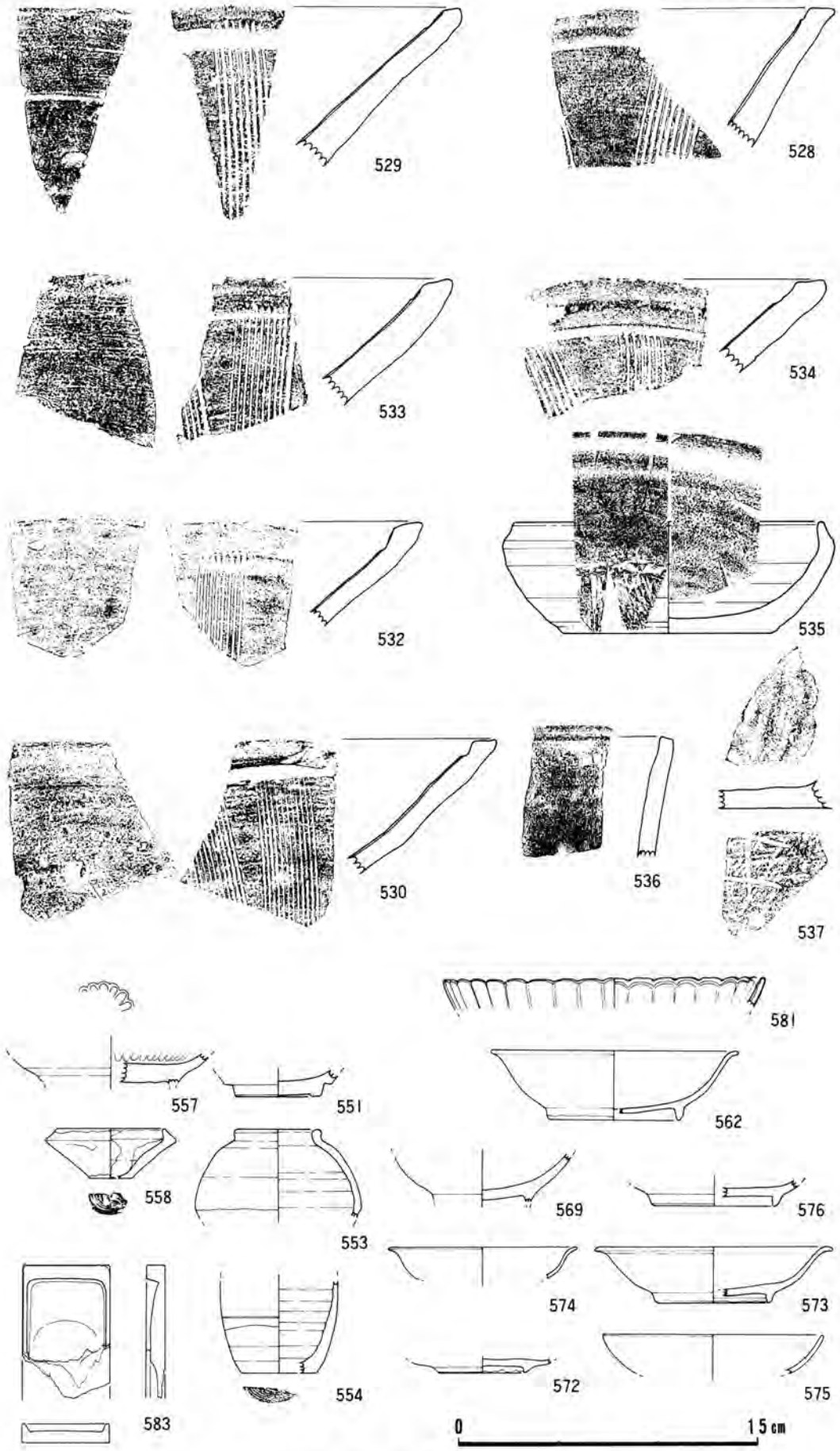
道路側溝ＳＤ518　グループ１　　越前焼　467～476. 甕



道路側溝ＳＤ518　グループ１　　越前焼　478～480．壺　481～486．擂鉢　487．鉢　　備前焼　488．瓶
美濃焼　490．天目茶碗　495～498．灰釉皿　　中国製磁器　499．白磁皿　501．白磁坏



道路側溝ＳＤ518　グループ２　　越前焼　513～520・523．甕　524～527．壺



道路側溝ＳＤ518　グループ２　　越前焼　528～534・537．擂鉢　535．鉢　536．火桶
美濃焼　551．天目茶碗　553・554．茶入　557．灰釉皿　558．灰釉小鉢　　中国製磁器　562．白磁皿
569．染付碗　572～575．染付皿　581．青磁皿　　石製硯　583

第43次調査報告

Ⅳ．第 43 次 調 査

昭和52年から始まった県道改良事業に伴なう事前調査は、この第43次調査をもってすべてを終了した。今回の調査地は、福井市城戸の内町字中惣（Ｔ・Ｑ・Ｐ地区）、瓢町（Ｌ・Ｋ地区）、下城戸（Ｉ・Ｈ地区）の３地籍に細長くまたがっており、幅約10m、面積にして4750㎡の範囲が対象となった。調査は昭和57年３月29日から開始し、８月16日に第１回目の写真撮影をおこなった。ついで９月末日までの期間を下層遺構の確認調査に費し、10月上旬に第２回目の写真撮影と土層断面図を作成した。その後アジア航測株式会社がヘリコプターによる空中写真撮影をおこない、委託した50分の１と 100分の１の平面図の図化を得ることによって、10月13日すべての発掘調査を終了した。

１．遺　構

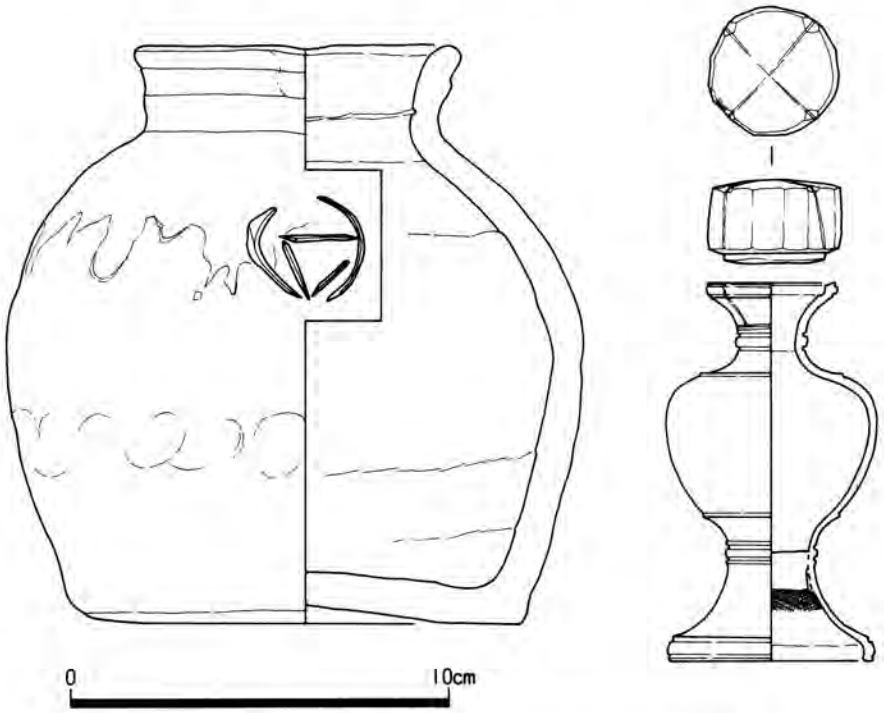
この調査区は、一乗谷の西北部にあたり、水田区画が狭くかつ不規則に配されているのが多くみられる点、他の地区に比べて注意される。地表観察の結果、当時の一乗谷川はこの付近では川幅約１本分ほど東側を流れていたことがわかったが、たび重なる浸蝕と堰を設けたことによって現在のような川筋になったことがうかがえるのである。調査区の北には「下城戸」の土塁と第35次調査で明らかになった「町屋群」が位置し、川をはさんだ東の山裾には第20次調査の「魚住出雲守」をはじめとする上級家臣の「館群」がみられ、西の山裾には「真正寺・本妙寺」等の高台や第18次調査の「町屋群」がそれぞれ配置されている。この地区一帯の地形は、西南から東北方向にかけてゆるやかに段差をもって傾斜している。先ほど述べた「Ｔ」以下７つの地区を設定する目安として、この段差や字界の石列・溝等が利用されたが、調査後遺構の性格等を検討する中で、ＱとＰ地区は１つにまとめて、またＩ地区は北と南の２つに分けるのが適当と考えられるにいたった。よって以下Ｔ、Ｑ・Ｐ、Ｌ、Ｋ、Ｉ南、Ｉ北、Ｈの７地区についてその概要を述べていくことにする。

発掘された遺構　　ＰＬ．57・59～69　第53～67図

Ｔ地区　この地区は、高さ約 2.5m に積まれた西側の石垣と一乗谷川とにはさまれた狭い所である。南端は、道福谷へ通じる現在の道路と接している。ここは第18次調査（瓢町地籍）で検出された東西道路ＳＳ 621から南へ約 150m、また第42次調査（川久保地籍）で検出された「上殿ノ橋ノ通」と推定される道路ＳＳ1850から北へ約 180m の地点にあたり、当然この付近に東西道路の存在が予想された。しかし発掘の結果、少なくとも地区内では道路遺構は検出されなかった。検出した主な遺構は、溝４、礎石建物１、井戸１、石積施設４、越前焼大甕埋設遺構１などがあり、この地区が従来の調査結果などから町屋群のあった所と想定された。しかしこの町屋群も、遺構面のすぐ下に地山と考えられる青色粘土層が続くことから長期間にわたって存続したとは考えられなかった。調査区の西南部にある0.5m ほど高くなった所には黒色土がみられ、少し掘り下げると掘立柱穴が５個検出された。また出土遺物が10～11世紀にかけての須恵器の坏や蓋が多くみられたことから、朝倉氏関係以前の遺構の存在が知られた。

Q・P地区　この地区は、地表観察で南北約 100m 、東西60～80m の規模をもつ大きな館跡ではないかと推定された。そして周囲にある細長い水田は、濠跡かもしれないと考えられた。『一乗谷古絵図』によれば、この付近に「朝倉式部大輔館跡」の文字が描かれている。絵図では、他の上級家臣の館を「……跡」と記しているのに比べて、ここだけが「……館跡」と特異な表現になっている点みのがせない。式部大輔とは大野城主朝倉景鏡のことであり、当時同名衆中実力ナンバーワンで、義景に次ぐ重要人物である。調査は、この推定景鏡館の西辺部を幅約12～15m で実施したため、遺構の配置等はあまり明確にはできなかった。検出した主な遺構は、道路２、外濠２、溝５、建物11、井戸２、石積施設３、庭１などであった。南端の外濠は、幅約 5.5m で他の遺構面より約0.9m高くなった段上の床土直下から掘られており、北端の外濠は、幅約 5.7m でＬ地区の東西道路ＳＳ621の下層約0.6m の所から掘られていた。南北２つの外濠の距離は97m を測るが、館の４周をめぐっていたのか、また同時期の外濠であるのか否かの問題は今後に残された。将来、この地区の全面発掘を期待したい。一乗谷で現在までに外濠を有する遺構が確認されたのは、上・下城戸と義景館、中の御殿、第28次字斉藤の館の５個所であったが、今回のこの館で６例目となった。さて館内の遺構面であるが、床土除去中の黄色土で上層遺構が検出されたが、後世の削平が著しかった。主たる遺構面は、暗褐色土と砂利敷の下層遺構であった。とくに上層の礎石建物ＳＢ2264に伴なったとみられる地鎮具の出土や、下層建物ＳＢ2265の南から検出された幾何学模様に石を敷きつめた平庭遺構などは、景鏡館に比定する有力な資料となろう。

Ｌ地区　この地区は、第18次調査区の東側に接しており、第７次調査区とも至近の距離にある。調査区の南端は東西道路ＳＳ 621であり、第18次調査の結果からこの道路の上層（第Ⅰ遺構面）砂利敷面はすでに削平されていることが判明した。先ほどの景鏡館の北辺外濠は、下層砂利敷面から掘られており、中層砂利敷道路に改修する際埋めたてられたようである。道路ＳＳ 621の北



挿図―11　　Ｑ・Ｐ地区建物ＳＢ2264出土の地鎮具

側には側溝ＳＤ 624、さらに北には土塁状遺構ＳＡ2312が平行してみられた。この地区は当初町屋地域と推定していたが、土塁状遺構の検出や、大きな区画をもっていることなどから、上級家臣の館と考えるのが妥当のようである。この館の北端は、石積施設ＳＦ2318～2320付近、または掘立柱建物ＳＢ2315・2316を含んだ溝 649・2310付近の２通が考えられる。検出した主な遺構は、道路２、溝５、土塁状遺構１、建物４、井戸１、石積施設３などであった。第18次調査の結果もふまえて考えれば、この地区の上層はすでに削平されており、検出した遺構のほとんどは、中層（第Ⅱ遺構面）としてとらえることができる。下層（第Ⅲ遺構面）の遺構は明確ではないが、中層の下にある茶褐色土あるいは茶褐色土混り粘土がそれに相当するものと思われる。さらに下にある青色粘土は、地山と推定された。

Ｋ地区　この地区は、瓢町地籍にあたる。水田の地割が一乗谷の中でもとくに小さく、かつ乱れており、その地形が瓢簞に似ている所から、あるいはまた酒を入れる容器としての瓢簞から転じて「歓楽街」を表わす語として「瓢町」と呼ばれるようになったのかもしれない。いずれにしても「……町」というのは、他に上城戸南方の「西新町・東新町」の２個所が知られているだけであり注目されるところである。この地区で検出された主な遺構は、道路１、溝10、建物３、石積施設１がある。この地区は、多く石組溝で区画されており、その短辺がほぼ６ｍを測ることから町屋群の遺構であることが容易に推察される。しかし、溝ＳＤ2344～2346で囲まれた広い区画も存在することから、一部町屋に混って武家屋敷もあった状況が推測された。道路ＳＳ2338の砂利面は、上・下２層にわたって確認された。しかし、その下はすぐに地山と思われる青色粘土層になっており、地形的にもこの付近が一番低くなっている。

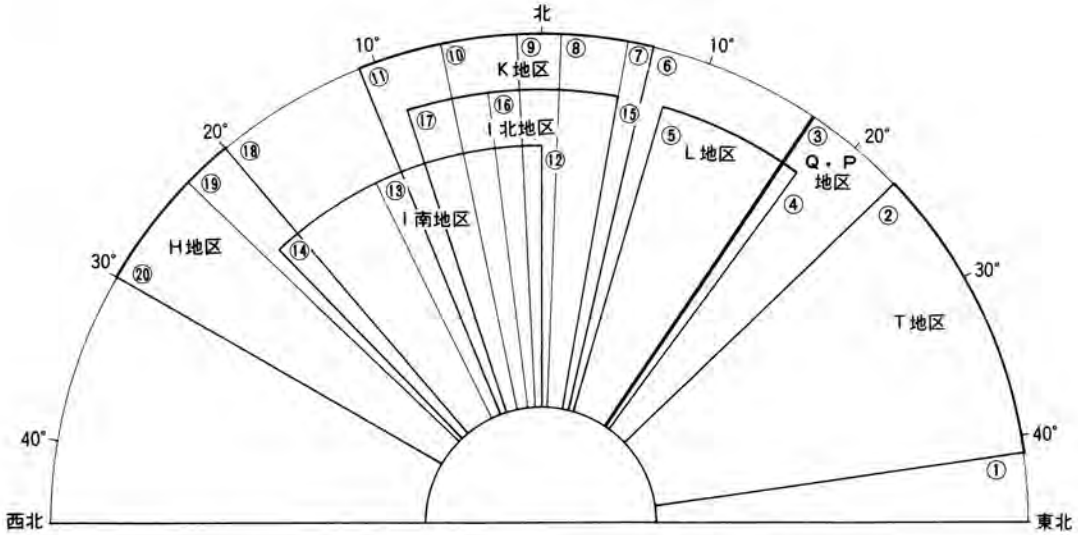
Ｉ南地区　この地区は、Ｋ地区の道路ＳＳ2338から北端で検出した道路ＳＳ2374までの狭い範囲である。検出した主な遺構は、道路１、溝７、建物１、井戸１、石積施設２などがある。Ｋ地区と同様町屋群としてとらえることができそうであるが、ただ礎石建物ＳＢ2382などは道路方位とずれをもっており、また建物面積も従来の町屋の規模よりも大きい点が異なっている。道路ＳＳ2374は南半分が削平されているが、幅約６ｍあり、Ｉ北地区の土塁ＳＡ2402との間に側溝がみられる。道路の砂利面は６層あるが、層ごとの厚さは約５㎝と薄く、短期間に幾度も砂利を敷く改修工事のおこなわれたことを物語っている。６層の砂利面の下は青色粘土層で地山と考えられた。石積施設ＳＦ2384、礎石建物ＳＢ2382、下層石組溝ＳＤ2375から、この地区は大きく３時期にわたる重複のあったことが知られた。

Ｉ北地区　この地区は、西側の一段高い区画と、東側の低い区画とからなり、その境に高さ約0.6ｍの石垣が弧状に積まれていた。南端では幅約 1.2m の土塁ＳＡ2402が、東西道路に平行してとりついている。土塁をもつこと、広い敷地をもつことなどから上級家臣の館と想定される。検出した主な遺構は、土塁１、溝３、石垣２、建物２、井戸１などがある。西側の区画は狭いため、あまり調査できなかったが、東側の区画では礎石建物ＳＢ2404・2405、溝ＳＤ2400、越前焼のⅡ群として編年される古式の大甕を据えたＳＸ2420などの遺構が、床土直下の黄土礫層から検出された。しかし、これら上層遺構はかなり削平されているものと思われた。次に、中層と考えられる炭混り暗褐色土層では、石組溝ＳＤ2401や畝状遺構ＳＸ2418などが検出されている。土塁ＳＡ2402もこの時期に築かれ、上層の時にはその痕跡をとどめるにすぎなくなっていたものと思われる。この地区の東北隅に設定した南北トレンチ内では、上層から約１ｍ下の赤褐色砂利、砂層か

ら掘り込まれた井戸ＳＥ2406が唯一の下層遺構として確認された。結局、大きくみて３時期にわたる遺構の重複が知られた。なお、ＳＸ2408付近の中層暗褐色土中から、元時代末から明時代初頭に編年される「釉裏紅鉢」の破片が検出されている。

H地区　この地区の北端は、第35次調査で検出した幅約 5.5m の湾曲した道路ＳＳ1340に接している。検出した主な遺構は、土塁２、溝９、建物３、石積施設７などである。まず道路ＳＳ1340の南約 7.5m の所で、道路に平行して走る幅約0.6m、高さ約0.8m の土塁ＳＡ2436が検出された。この土塁は、途中から南方へ折れてそのまままっすぐに延びている。この土塁の基礎は、地山と考えられる青色粘土の直上から石を積んでおり、下層遺構と考えられた。下層遺構としては、他に土塁の側溝ＳＤ2431・2432などわずかしか確認できなかった。しかし、いずれにしてもこの地区は、当初土塁をもつ大きな区画であったことがうかがえる資料であった。次に、下層土塁を全て埋めてから、溝ＳＤ2429、石積施設ＳＦ2448、建物ＳＢ2442、大甕埋設遺構ＳＸ2468などの中層遺構が作られていることも明確になった。その他の遺構は、ほとんど上層遺構と考えられた。このことは、中・上層遺構の時期に、下層の土塁で区画された上級家臣の館を廃棄し、整地しなおして、新しい町屋群を建設した経緯を物語るものであろう。

以上、各地区の概要を述べたが、次に各地区で検出された遺構の主な方位についてみていきたい（挿図12参照)。まず目につくのがＱ・Ｐ地区である。この地区内全体は北17度東の同一方位によって整然と作られており、１つの大きな館と考えることが可能であった。他の地区は、２ないし３本の方位がみられ、とくにＫ地区においては、雑然とさまざまな方位のあることがわかった。このことは、この地区が町屋群であり、各自がそれぞれの屋敷地を確保していった状況を示すものであろう。また、南のＴ地区から北のＨ地区までの方位が、Ｉ北地区を除いて順次北東方向から北北西方向に移行している事実は、狭い谷地形に影響されて変化せざるをえなかった町割であろうと考えられる。いずれにしてもこれらの方位の推移は、西側の山裾線と平行しており、また



①ＳＤ2230	ＳＢ2265	⑤ＳＤ 649	⑩ＳＤ2345	⑮ＳＢ2405	⑳ＳＡ2436
ＳＦ2241	ＳＢ2269	⑥ＳＤ2340	⑪ＳＤ2346	⑯ＳＡ2402	ＳＸ2460
ＳＸ2242	ＳＢ2271	⑦ＳＳ2338	⑫ＳＸ2386	⑰ＳＤ2401	
②ＳＢ2236	④ＳＤ 624	⑧ＳＤ2347	⑬ＳＤ2380	⑱ＳＢ2441	
③ＳＤ2259	ＳＦ2320	⑨ＳＤ2344	⑭ＳＢ2382	⑲ＳＢ2443	

・都合で角度を２倍にしてある。
・東西方位は、90度加えて南北方位に変更した。
・○内の数字は、南の地区から順次つけた。
・各地区の方位の推移がよくわかる。

挿図―12　各地区の主要方位

山裾に沿って湾曲して走る南北幹線道路の存在が予想できるものであった。

ＳＸ2242　越前焼大甕の埋設遺構であり、15個体分の抜き跡と破片が検出された。

ＳＳ2254　幅約 1.5m の砂利敷路で、両側に人頭大の縁石を並べている。Ｑ・Ｐ地区内ではこれだけが方位のずれをみせており、館内の通路と考えられた。

ＳＢ2265　東西4.72m（ 2.5間)、南北6.62m（ 3.5間）の礎石建物である。南の幾何学模様に砂利を敷きつめた平庭ＳＧ2295付近まで、建物が延びていたかどうかは不明である。北と西側は半間の庇になっている。建物の東辺やや北よりのＳＸ2298から地鎮具を発見したが、土層観察の結果、削平の著しい上層建物ＳＢ2264に伴なうものと考えられた。

ＳＢ2263、2267、2268、2269、2289　ＳＢ2265同様いずれも溝ＳＤ2259に平行して建てられている。ＳＢ2267、2269、2289の建物内部には砂利が敷かれている。ＳＢ2368は上層建物である。なお、Ｑ・Ｐ地区の建物は、全て同一方位で１間＝6.25尺の竿を使用している

ＳＢ2271　東西規模は不明であるが、南北11.34m（６間）を測る礎石建物である。中央にみられる南北方向の石列で東西２棟の建物に分けることも可能である。

ＳＢ2315、2316　ともに掘立柱建物である。ＳＢ2316は、東西6.62m（ 3.5間)、南北5.67m（３間）の規模であり、西・北・東辺に石組側溝をめぐらしている。なお東よりの溝ＳＤ2311の北にある幅 1.5m の砂利敷は、ＳＢ2316へいたる通路と考えることができる。

ＳＢ2382　東西11.34m（６間)、南北5.67m（３間）の礎石建物で、西辺に幅0.63m（３分の１間）の庇、孫庇があったようである。また、北辺には0.94m 幅の建物より少し高くなった通路状の庇がみられた。石敷ＳＸ2391は、土間の洗い場遺構と考えられる。

ＳＢ2389　この建物は、石列ＳＸ2386に平行して建てられた礎石建物であるが、東西2.83m（1.5間)、南北 7.6m（約４間）分を検出したにとどまった。

ＳＸ2468　壺や大甕の並んだ埋設遺構であるが、３個体のうち中央の１個は底部の残存しない信楽焼の壺であった。

ＳＤ2427、2428　いずれも上層と下層とで１本分のずれがみられた。ＳＤ2431の溝と接続していたのはＳＤ2427の下層の溝である。

ＳＢ2440、2441　ＳＢ2440は、東西・南北それぞれ 3.8m（２間）分を検出したにとどまった。ＳＢ2441は、東西3.78m（２間)、南北4.72m（ 2.5間）の礎石建物であり、いずれも同一方位を示す上層建物である。

ＳＢ2442　この建物は、東西11.34m（６間)、南北5.67m（３間）の礎石建物で、中層の時期に相当するものと思われる。建物は、ＳＳ1340に対して地口を広くとっており、東半分には砂利が敷かれていた。中央部には溝状石列もあり、これによって東西２棟の建物に分けられる可能性も残されている。また、この建物は、ＳＢ2440などの建物とは、３度前後の方位のずれを示している。

2．遺　物

第43次発掘調査の遺物整理は、遺構の地区割に従って、南からＴ地区、Ｑ・Ｐ地区、Ｌ地区、Ｋ地区、Ｉ南地区、Ｉ北地区、Ｈ地区に分け、さらに土層単位に整理した。しかし各土層の期間が短いため、一部をのぞいては遺物の形式変化が認められない。従って記述や図版作製にあたっては層単位には分けず、地区単位に作製した。ただ、越前焼の甕・擂鉢は形式の変化がある程度把握できたので、図と表にまとめた。

Ｔ地区　（ＰＬ．70　第68図）

これまで一乗谷内の発掘調査では、朝倉氏の館と、その城下町に伴う大量の遺物群を中心に、それ以前の遺構に伴う14世紀後半頃の少量の遺物群が確認されていたが、今回Ｔ地区の調査で古代に溯る遺物が出土した。

土師質土器では、１は粘土紐巻上げ後ロクロ回転によるナデ成形の皿で、口径が15.5cmと大きく口縁が内側に丸く肥厚する。２は手づくねによる成形で、口径 9.5cmの浅い皿である。やや丸味をもった底部から折れて立ちあがる胴部を有する。４・５は、おそらく回転糸切による底部を有する碗、６・７は、胴部は４・５と同じ器形で高台を有する碗であろう。なお３は、底部から口縁部まで変化の少ない皿で、近世の土師質皿と思われる。

須恵器では、欠失しているが宝珠つまみを持ち、端部を下に屈曲させた蓋（８）、それに伴うやや退化した高台を有する坏（12・13)。10は、粘土紐巻上げ後、ロクロ回転によるナデ成形の坏で、成形手法は土師質皿（１）と似ているが、口径が小さくやや深い。その他内外に叩目痕を残す壺・甕の破片が出土している。これらの遺物は、地山に掘り込まれた柵列ＳＡ2234のピットとその直上にある黒褐色有機質土層から出土した。遺物量が少なく、その多くは細片になっているが、豊原寺（伝）講堂跡[註①]や華蔵院下層出土遺物[註②]の組合せと類似し、石川県三浦遺跡上層出土遺物[註③]と対比することができる所から、10世紀後半を中心とする遺物と考えられる。

越前焼は、甕・壺・擂鉢の３種類が出土しているが、Ｔ地区に甕埋設遺構ＳＸ2242が在ったことから甕の出土量が多い。このＳＸ2242の甕はⅣｂ群に属するものばかりで、Ｔ地区の朝倉氏の時期に関する遺構は１面しかなく、最終の時期に属する。他にⅡ群に属する甕と擂鉢が出土している。甕は肩部に数条の十字形の櫛描きの記号がある。擂鉢は底部が出土しており、断面三角の付け高台が認められる。

瀬戸・美濃製品では、口縁下のくびれが強く、口径の割に高さの低い天目茶碗（14）。15は、口縁が大きく開いた碗で、腰部から高台にかけては鬼板が塗られ、形態も天目茶碗と同じである。16は鉄釉の小壺で、外側は薄く鬼板が塗られ肩から胴部にかけては数条の横線が入る。内側に鉄釉がかかり櫺座茶入を思わせる。鉄釉では他に、無文ながら瓶子の肩に似た破片や、徳利の底部などが出土している。18は、口径12～13cmの端反りの灰釉皿で付け高台を有し、一乗谷では最も普通に出土する。17は、腰から高台・底部にかけてが露胎の灰釉皿でやや黄褐色がかった釉調と共に一時期古いことを示している。

輸入陶磁器類では、青磁・白磁・染付などがある。19はやや彫りの深いしっかりしたへら描きの蓮弁文青磁碗で、20は蓮弁文が浅い青磁碗の高台で、施釉後高台内だけ輪状に釉を拭き取って

いる。21は雷文と蓮弁文の組合さった青磁碗で、22は青く深い釉調の碗である。畳付だけ釉を削り取っている。23・24は中国製の天目茶碗で、23は口縁部を欠いているが、口縁部下のくびれがあまり強くなく、高台脇が削られている。

Q・P地区　（PL．71～73　第68～71図）

Q・P地区は、東西の濠は確認されていないが、南と北に濠があり、おそらく4周を濠で囲まれた一辺90m程の大きい屋敷跡と考えられる。しかし、上層が削られていたためか面積の割には出土遺物の量が少なかった。

越前焼と土師質皿は後にまとめて述べるが、図示し得た壺（25）について記する。高さ11.7cmの小壺で、底部の径が高さの割に大きく丸い肩を持ち、頸部から口縁部にかけては軽く外反する。胴部にはヘラによる縦方向のナデ跡が見られる。肩には自然釉がかかり、一部はそれがかせている。内側には底から口縁まで酸化鉄が付着しており、大きさ、形からもお歯黒壺として使用されたのであろう。

鉄釉では、天目茶碗の出土量が多い。中でも、口縁下のくびれが強く、高さの割に口径の大きい26のような形態の天目茶碗が多い。27・28は高さ約6cm、口径約9cmと小形の天目茶碗で、口縁下のくびれがあまり顕著でなく、口縁に比して高さがやや高い。29は小形の片口で、全面に釉が施され内面と外側の腰より上の釉が厚く、2重掛けになっていると思われる。高台内には輪トチの痕が残っている。30は肩がなく腰部がふくらんだ小壺で、内面にも底まで釉がかけられロクロ成形時の跡がよく残っている。底は鬼板が塗られており、糸切りの跡が認められない。34はやや白味がかった茶色の鉄釉を全面（底部を欠く）に施した鉢で、口縁部は断面三角形を呈し内傾気味に立ち上がっている。35は口縁部が内側に厚く、腰部が丸い香炉である。

38～41は**灰釉**碗で、38は青磁碗を真似た線刻のヘラ描き蓮弁文が施されている。灰釉碗の高台は、内側に丸くおさまっている例が多い(39)。31は、やや下った肩に短い頸がつく灰釉小壺である。腰から底にかけては露胎になっており、底は厚くて、回転糸切りの痕をとどめる。36・37・42は灰釉の鉢で釉は口縁から少し下った所までかけられている。口縁内側に蓋受けのようなかえりを有し、底部は粘土を丸めた3～4個の脚を持つ。43は、口縁内側にかえりがなく、立ち上がった口縁が丸く内傾している点と、脚を持たない点が異っている。32は、灰釉鉢と同じく口縁内側にかえりを有する卸皿で、釉は口縁部だけに施されている。

青磁碗では線刻のヘラ描き蓮弁文碗(44)が多数を占る。線刻は彫りの深いものからほんの線だけのものまでバラエティーに富む。45はそうした碗の底部の1つで、径が小さくて厚い。畳付と高台内側が露胎になっている。片刃切彫の幅の広い蓮弁文碗（46）も極少数ではあるが出土する。47は、腰部で屈折して大きく外反する皿で、口縁部にヘラ描の文様がある。器壁は厚く、稜花皿と同じ系統の皿である。

白磁碗の出土例は皿に比較してかなり少ない。49は腰部にふくらみを持つ端反りの碗で、器壁は薄く、全面施釉後畳付だけ釉を削り取っている。白磁坏（50～52）は、ふくらんだ腰部から立ちあがり、口縁部がわずかに外反する。見込みは平らで、重ね焼きのための蛇目状に釉が拭き取れている。52にはそれがない。小さい高台が付き、内側に吉祥句が書かれる例もある。53は白磁菊皿で、これと同じ器形で、厚い貝殻を彫って作ったのではないかと推定される菊皿が2片出土

している。48は、ラッパ状に開いた口縁を有する瑠璃釉の碗である。

染付は碗が 123片、皿が90片出土している。皿ではＢ１群Ⅳ（小野分類[註④]）の端反りで外面は宝相華唐草文、見込みは十字花文の皿（58）が多い。谷内全体では比率の高い外面に波濤文と芭蕉葉文の組合さった碁笥底の皿（57）Ｃ群Ⅰは少ない。60は内湾する皿で、外面には瑞果を唐草文化した文様、内面には四方襷文が描かれている。Ｅ群に属し、一乗谷では新しい部類に入る。碗では、外面が波濤文とアラベスクの組合せたＤ群Ⅳと外面が唐草文のＣ群Ⅴが多い。ただＤ群Ⅳでは、見込みがねじ花（62）の例は少ない。64は端反りの碗であるいは雲堂手の系譜につながるのかもしれない。65は見込みが梅月文になっている。67や69の文様を持つ碗は少ない。

朝鮮製の陶磁器では、刷毛目の碗（33・54）が比較的多く見られる。浅くて口径が大きく、全面に白く刷毛目をつけた後、腰から下の刷毛目を削り取っている。56は口縁が外反した刷毛目の鉢、55は叩き締めの壺である。

石製品では、古形式の硯（70）が出土した。上面が９cm×６cm× 1.5cmの大きさで、縦横共に下がすぼまった逆台形をしている。14世紀頃の製品と推定され、側面と上端に漆が塗られ硯箱に納っていたものであろう。

地鎮具が出土した。出土状態は遺構の所で述べたが、越前焼の壺の中に木で栓をした銅製の仏花瓶が入っており、木の栓は糸でしっかり結びつけられていた。仏花瓶の中には、米・小麦・大麦・ゴマ・不明の小さい種子、金泥を塗った杉葉・琥珀等が入っていた（ＰＬ．58）。

71～76は、越前焼の甕・壺の破片を円板状に打ち欠いたもので、直径が５cm～12cm位まで大小様々である。43次調査全体で６点（75はＬ・76はＩ地区）出土している。出土状況に特徴は認められない。中世から近世初頭にかけての西日本各地の遺跡で数点づつ出土しているが、草戸千軒では出土数が多い。用途は信仰に関係したもの、玩具などが考えられるが不明である。

木製品は、Ｐ地区北端の濠から出土したものばかりである。77～81は漆塗りの椀で、多くは黒漆地に朱色の漆で扇（77）、樹木（78）、秋草（79）等が描かれているが、無文（81）のものもある。今回形のわかる椀５点のうち78だけが高台が低く、底部が薄い。他は高台が高く、内部の抉りが浅い。82は木地のままで、ロクロ挽きの痕が残っている。漆塗り椀の未製品なのか、これで完製品なのか体部を欠くせいもあって不明である。他に底を欠いた曲物（86）、筒状木製品（84）一ツ目下駄（87）、露卯下駄（88）などがある。85は、竹の節を貫き、一定の間隔で３個ほど穴を開けている。竹笛かとも推定したが、真竹で節の外側の部分は加工されてなく、断定できない。

Ｌ地区　（ＰＬ．73～76　第69・72・73図）

越前焼は甕・壺・擂鉢の基本３種類が大部分を占るが、Ｌ地区では擂鉢の比率が高い。89は、肩が下って算盤珠のような体部にわずかにくびれた口縁部を持ち、やや厚手で肩にはヘラ描きの窯印が刻まれている壺である。

土師質では灯明皿の他に、土釜（90）が出土した。口径11.5cm・高さ約８cmと小形で、手づくねによる体部に鍔を貼りつけ、全体にナデを施して整形している。また他地区出土のものも含まれるが、土鈴・ミニチュアの擂鉢、穿孔した土師質皿（挿図13）などがある。土師質皿は一乗谷内でも生産された痕跡があるが、ミニチュアの擂鉢の口縁が立ち上っており、越前焼の擂鉢ではなく、瀬戸・美濃のそれに似ている点が興味深い。

鉄釉では、高さの割に口径が大きい天目茶碗（91・92）が多数を占る。高台脇の削りからほぼ直線的に開く。92にその傾向が強く見られる。91は褐色をした鉄釉系の釉がかけられ、95も同じ釉が施されていたが、かせて剝げ落ちてしまっている。93・97は碁笥底の皿で、見込みには4個所により土の痕がついている。94は口径が28cm程の鉄釉鉢で、口縁部は三角になって立ち上る。内面に1個所数条の櫛目がついている。他地区出土の中に同じ器形をした鉄釉擂鉢の小片がある。これまで一乗谷では擂鉢は越前焼ばかりで鉄釉の擂鉢は始めての出土である。

挿図一13　土師質穿孔皿・擂鉢・土鈴

灰釉碗（101)には、口縁外面に細かい刻目がある。103～106は端反りの灰釉皿で、出土数が多い。見込みに菊（103)やカタバミの印花がある例も多い。102 は内湾する皿で、見込みにはカタバミの印花がある。内湾する皿の内面に縦の削りを入れた皿(107）もある。内湾する皿は少ない内側には全面に釉がかかっているが、外側は腰部から削り出しの底部にかけては露胎になっている皿（108・109）も出土している。見込みにはより土の痕がある。110は小壺､111・112は青磁香炉を写した灰釉香炉である。

青磁碗は線刻のヘラ描蓮弁文(113）が多く出土する。114はそうした碗の底部で､径が小さく厚い。高台内部は重ね焼きのために釉を拭き取ってあり､より土の痕がついている。 115は雷文とラマ式蓮弁文の碗、 116は片刃切の蓮弁文碗である。こうした14世紀後半～15世紀前半に中心をもつ碗類も線刻蓮弁文に混って少数ながら出土する。青磁皿(118）も釉が厚く、深みのある緑色をしており古い時期に属する。この他、大きい盤や鉢も出土しているが、それらは総じて釉調もよく、作りが丁寧である。117 は腰の所で屈折して大きく外反する稜花皿で、見込みには花文が刻まれている。釉色は半透明の緑色で、細い貫入に沿って鉄分が酸化され茶色くなっている。 120は、口縁部だけに灰色がった釉がかった皿で他は露胎である。121 は大きい花瓶の耳と推定される。両面に牡丹と思われる花と葉が刻まれている。釉調は半透明の青色をしている。

白磁皿は、器壁が薄い端反りの皿（123・124）が大多数を占る。大きさは直径が20cm近い大きい皿もあるが、11～20cm程の皿が最も多い。125 は腰部で屈折する浅い坏である。126 は内湾する皿で、細い貫入が走り釉色は灰色を呈する。127は碁笥底の皿、128は腰部で屈折して大きく開く皿で、見込みと畳付により土の痕があること、釉がややアイボリーがかった白色であることから朝鮮製と推定している。129～131は、14～15世紀の白磁皿である。129・130は胎土が灰白色の軟質のもので、釉調は黄白色を呈する。130 には高台に抉りが入る。131 は高台が小さく、胎土は堅緻である。

染付は皿109片､碗94片出土している。染付皿は、端反りで宝相華唐草文と十字花文のＢ１群Ⅵ（138）が多く、Ⅶや羯磨文（137）Ⅷがこれに次ぐ。Ｑ・Ｐ地区では少なかった碁笥底で芭蕉文のＣ群Ⅰ(135・136)の他Ⅱ～Ⅳ(134)の各類が出土している｡新しい時期のＢ２・Ｅ群(139・141)に属する皿の出土が少ない。染付碗では波濤文とアラベスク文のＤ群Ⅴ(142・143)が多く、蓮子

碗で芭蕉文のC群Ⅰ(144)とⅤ・F群Ⅶ(145)とⅨ(147)が次ぐ、染付碗(132)は外面と見込みに唐草文の退化した文様を有し口径に対して丈の低い蓮子碗（C群Ⅲ）である。133 は外面が唐草文、見込みが羯磨文の碁笥底の皿である。文様や呉須の色から明代前半の所産と思われる。

金属製品では、刀装具（150～152）が出土した。150 は鞘の責金具、151 は真鍮製の小柄の柄、152 は同じく小柄の柄の飾り金具と推定され、毛彫りをして渡金している。149 は小柄で保存がよく身に銘があり「兼常」と読める。中茎には細かいヤスリ目がある。

石製品では笏谷石（凝灰岩）製のバンドコ（行火）・炉・盤・石臼（花崗岩系の臼もある）等が出土しているが、整理が十分でないので割愛する。153～155は、底が平坦で脚を持たない硯である。

K地区　（PL．76～79　第74・75図）

越前焼では、高さ10cm程の二耳壺(156) が出土した。口縁部を欠いているが、肩がはり、その分底部がすぼまった形をしている。内側は粘土を押えた跡とナデの跡をよくとどめ、胴部は縦方向のヘラによるナデの跡が残っている。157 は擂目をつけた浅い皿で全体の作りは擂鉢と似ている。

土師質では土釜（158・159）が出土した。体部を手づくねによって作り、鍔を貼付けたものである。158 には口縁部と鍔の下に横ナデ調整の際の凹線が入り、159は、口縁の下に穴を穿つ。

鉄釉では、口径に対して丈の低い天目茶碗(160) が多い。高台脇から直線的に開き、口縁部は強くひねりかえされている。高台は27のように輪高台のものと 160のように椎茸高台のものと2種類ある。162～164は鉄釉皿で、いずれも底部は碁笥底に近い形をしている。162 は腰から下には鬼板を塗ってあり、163は輪トチの痕がついている。165は褐色の鉄釉がかかった内湾する鉢である。161 は口の部分を8面に削り、底は回転糸切りの跡をとどめている。胴部下半分と底が露胎になっており、つるが欠損している。水滴と考えられる。169 は口縁部がくびれて矢筈口になっている所から鉄釉の水指と考えられる。内側は口縁から少し下った所から露胎になっている。

170 は大きく開いた**灰釉**碗で、口縁部がわずかに内湾する。腰部に釉溜りがある。171 は外面に青磁碗を写した線刻のヘラ描蓮弁文があるが、釉色は褐色でむしろ鉄釉碗にした方がよい。なお釉はほとんどかせている。172～178は灰釉皿である。172 は腰があまり張らず、大きく外反した口縁はヒダ状になっている。見込みには菊の印花がある。灰釉皿の印花は菊とカタバミが多い。同じ菊でも弁の多い例(173) や、小菊(178) もあり、印花のない皿（174・175）もある。いずれも付高台で、高台裏には輪トチの痕がついている。179 は四耳壺の肩の部分、180・181は三(四)足盤の口縁と底の部分である。

183～186は**瓦質**の香炉である。口縁部がやや開いた筒形をしており、体部に巴の変形した文様が廻る例（183）や、口縁が外反する例（184)、体部に菊花文が廻る例（185）等がある。

187～190は、**産地不明**の製品である。187・188は口縁が肥厚し内湾する鉢で、胎土は赤紫色を呈し、水簸しているらしく堅緻である。表面には鉄が塗られている。189は､形は灰釉香炉に似るが無釉である。胎土は灰色を呈し、微細でよく焼きしまっている。190 も胎土は細かく、あるいは祖母懐壺の破片ではないかと推定している。

青磁碗は、線刻のヘラ描蓮弁文が多い。192 は線刻が浅く蓮弁が最も退化した形式である。高

台は小さくて厚い。釉は半透明の緑色で貫入が多い。見込みには「玉」の印字が押してある。193は丈の低い碗で無文である。釉は、半透明で青緑色である。194は稜花皿、195は 119と同じ形の菊皿の一種である。196 は端反りで体部に蓮弁文を持つ皿で、新安[注⑤]や尻八館[注⑥]などにも見られる。197は内面に菊花が陽刻された小坏で、大きさから紅皿の一種であろう。198・199は千鳥手の香炉で、198 は体部に3条の凹線が入り、小さい足は浮き上っている。199 は足がしっかりしており、釉調からも15世紀頃のものと思われる。

白磁は端反りの皿が多く、高台裏に呉須で吉祥句を書いた皿(200) も見られる。201 は白磁の端反りの皿の中にあっては、直径が20cmを超える大形品である。202 は高台から直接に大きく外反する皿の底部である。204～206は14世紀後半から15世紀前半に中心をもつ白磁群で、203 は釉がやや青みがかり、畳付と高台裏は削り取っている。206 は高台がやや厚く、全面に施釉した後見込み部分の釉を蛇目状に拭き取っている。204 は軟質のやや乳白色がかった白磁皿で、高台の4個所を抉り取っている。205 は碁笥底の白磁皿で、形は染付皿C群と同じである。

染付皿はB1群Ⅶ (208～210) も多い。Ⅶの中では、見込みが玉取獅子(208) のものが多く、草花文や竹文(209・210)の皿は少ない。212 は、文様構成からⅦの一種と考えるが外面の唐草文の描き方が少し異っている。214 は稜花状の外反する口縁を有し、外面は牡丹唐草文、内面は口縁部に四方襷、見込みには松と花の文様が認められる。215 は筒形をしており中央のふくらみから香炉とも考えられる。碗では芭蕉文(217)、牡丹唐草文(218)、退化した唐草文(219) など蓮子碗形のC群やアラベスク文(220)のD群が多く見られ、饅頭心のE群の中ではⅦ(220～222) が多い。223 は腰部に蓮弁文が廻り、胴部は波濤文になっており、やや古い文様構成を示すと考える。

朝鮮製では、刷毛目の碗 (224) や釉が縮んでかいらぎ状になった碗(225)、高台裏が兜巾状になった蕎麦茶碗 (226) があり、見込みには重ね焼きの痕が5個所ついている。他に器壁の薄い壺も出土している。

金属製器では、銅製の紅皿(227・228)がある。体部は菊花になっており、台部を鋲で留めている。内面には紅やお歯黒の跡が付着している例もある。229 は真鍮製の六器と考える。

石製品では硯(230) の他、砥石 (231～233) が出土した。231は中砥にあたり、7×7×25cm程の方柱状をしている。上部の　側は面取りしてあり1条の凹みがある。232 も中砥で両側は切り出したままになっている。

I南地区　　(PL. 79～81　第76図)

天目茶碗では丈が低く口径の大きい碗(234) が多い中で、口径の割に丈のやや高い碗 (235～237)もある。全体に丸味があり、口縁下のくびれも弱い。240・241は古い形の天目茶碗で、口縁部がくびれず腰から下は露胎になっている。

灰釉碗は全体に少ないが、青磁碗写しの蓮弁文を持つ碗(242) が数例出土している。243 は端反りの皿の底部・付高台で輪トチの痕がつく。245は青磁香炉の写しで、灰釉香炉はほとんどこの形式である。246 は底部が回転糸切になっている所から15世紀代の皿であろう。

247～251は、**産地不明**の製品で、247 は胎土が赤く中に少量の砂が混る。短い口縁はわずかに外反し、肩は丸い。器表には灰が降りかかっており、備前焼の壺であろう。248 は越前焼の火桶か、内面にヘラ記号がある所から水指とも推定される。249～251は、ロクロで薄く挽き上げられ、

胎土は赤紫色で細かい砂が混る。堅く焼き締り、器形は壺であろう。

土師質皿では、これまで出土していたB類（252・253)、C１類（254・255)、C２類（256・257)、D１類（260・261)、D２類（262・263）の他、新しくG類（258・259）が出土した。製作手法はC類とほぼ同じで、やや深目に作ったC類の口縁を内側からもう一度ナデて平坦にしている。

青磁は線刻のヘラ描蓮弁文碗(271)、や無文の碗が主体をなす。両方とも、小さくて厚い高台と丸い腰を持つ内湾する碗で器形はほぼ同じである。273 は５弁の輪花皿で、見込みは５弁形に一段低くなっており、高台裏は白磁釉がかかる。274 は青白磁梅瓶の体部と底部である。

白磁は端反りの皿が主体をなすが、ここでは15世紀以前と思われる白磁を図示した。275 は一乗谷で多数を占る端反り皿に似るが、高台が厚く断面三角になっている。釉もやや黄白色がかった例が多い。276・277は抉りを入れた高台に特色がある。胎土に軟質のものと硬質の２種類あるが、器形に変わりはない。278は底部から直接外反する口禿の皿である。釉はやや青みがかり、伏せ焼のため底部は畳付もふくめてすべてに釉が施されている。

染付皿は、見込みが十字花文(280）や玉取獅子(279）のB１群Ⅶ、Ⅷが主体を占る。C群Ⅰの見込みは捻花や花鳥文が多く、梅と人物？(281）の例は少ない。282 は八角の皿で四方襷が廻り、文様構成に碗E群Ⅶと共通する点がある。286は玉壺春で、おそらく唐草文が描かれていると推定され、釉調もやや黄色味を帯びて熊本県浜乃館出土のものに似ていたのだろう。

Ⅰ北地区　　（PL．81・82　第77図）

越前焼では、Ⅱ群に属する大甕(286)が据った状態で出土した。高さ約94cm、口径約80cmとこの時期の甕としては大型である。やや退化した口縁帯がつき、頸部は大きく屈曲する。肩は張り、体部との境は稜をなす。肩に凹字の「大」に格子の押印が廻る。粘土帯の継目は稜になっている。この時期の甕の破片は時折出土するが直接遺構に伴っていた例はこれまでない。擂鉢287は、見込みと内側全面に擂目がつく。口縁が内傾化し、そのすぐ下は凹線が廻る。口縁外側を強くナデて口縁の内傾化を強めている。

鉄釉では、腰部が丸味を帯び、口縁下のくびれの少ない天目茶碗(236）が４個体出土している。288・289はおそらく茶入れであろう。いずれも腰から下は露胎で、289 の底部には回転糸切りの跡がついている。

青磁碗写しのヘラ描蓮弁文(290）が**灰釉**碗の中では主体をなす。器壁はやや厚く、胎土もいわゆるもぐさ土のものが多い。同じ器形で無文のものもある。灰釉皿では端反りが多く、291 は無文、292 は見込みに菊の印花がある例である。293 は内湾する皿で一乗谷では出土例が少ない。295 は青磁香炉の写しで、245 の灰釉香炉より一まわり大きい。294 は小さい削り出し高台からほぼ直線的に大きく開く灰釉碗である。釉は灰緑色で薄く、見込みは拭き取られている。296 は卸皿で、目は荒く底は回転糸切りになっている。294・296は15世紀に主体がある遺物である。

297は、深掘りトレンチの底近くから出土した尊式の**瓦質**花瓶である。口頸部と脚部が朝顔状に開き、胴部は短い筒状になっている。頸部に雷文とそれを変化させた蓮弁文、胴部に雷文と三ツ巴文が印刻されている。

青磁碗は線刻のヘラ描蓮弁文が多く、刻みが浅い例(298）とやや深いものとがある。299は最も退化した片刃切蓮弁文碗である。300 は、灰釉香炉の手本となった青磁香炉である。

白磁では、端反り皿が大部分を占る。302 は小さい削り出し高台から大きく開く皿で、畳付と高台裏が露胎となっている他は、青味の強い釉が施されている。303 は一乗谷で最も多く出土する端反り皿に似ているが、やや黄色味がかった半透明の釉がかかっている。305 は、桜高台の皿の一種で、内面にロクロ挽きの跡が残る。

染付の出土点数は少なかったが、やはり皿ではＢ１群(306)、Ｃ群（307・308）の割合が高く、碗ではＣ群(310）やＤ群(309）の割合が高い。

土墨ＳＡ2402近くの下層から**釉裏紅**の破片が出土した。小片なので全体をとらえることはむずかしいが、他の例などから推定すると直径約20cm、高さ10cm程、腰に丸味があり、軽く外反する口縁と相まって懐の深い感じのする鉢であろう。内外の口縁部と高台側面には唐草文か雷文を廻らし、見込み中央に牡丹そのまわりに菊唐草、外側面には牡丹唐草を配する。わずかにくすんでいるが、にじみもなく発色は良好といえる。時期は、やや細い枝や空間から明初と考える。

Ｈ地区　　（ＰＬ．82～85　第78・79図）

越前焼では、大甕の外、高さ39cm、口径38cm、最大径47.5cmと丈が低くて口径が大きくずんぐりした甕が出土した。口縁部は断面が三角で頸部はない。内面は粘土帯を継いだ跡がよく残っているが、外面はナデ調整によって削られている。312 は、なだらかな肩に細い貼付突帯がつく壺で突帯から下はヘラによる縦方向のナデ跡が見られる。やや荒い胎土で焼成は甘い。313 は、いわゆるお歯黒壺で、高さの割に底部の径が大きく、口縁部や肩など全体に丸味がある。

鉄釉では、直線的で丈が低く口径の大きい天目茶碗(314）が多く、全体に丸味があり口縁下のくびれも弱い天目茶碗(315）は少ない。316 はおそらく灰釉端反り皿と同じ器形で、付高台を有し見込みには菊の印花がある。317 は碁笥底の皿で、鉄釉皿は全体に少ないが、灰釉端反り皿と同じ器形のものはほとんどない。318 はおそらく茶入となる小壺で、腰から下は鬼板が塗られ、底には回転糸切りの跡が残る。内面は底まで釉がかかり、ロクロ挽きの跡をとどめる。319 は口縁が外反し、腰が丸い筒形の香炉で、粘土を丸めた小さい足が回転糸切り跡を残す底部３個所につく。腰から下と内面の下３分の２が露胎になっている。

灰釉碗は青磁碗を写した腰の丸いヘラ描蓮弁文や無文の碗が大部分を占る。321 は口縁下に１条の沈線が廻り、線刻が浅く蓮弁文になりきっていない。皿では端反り皿（323・324)が多いが、削り出し高台を有し、外面の腰部からしたが露胎になっている腰折れの皿(322)も少量出土する。他に灰釉香炉(325)、水指？(326）も出土している。

瓦質では香炉（329・330）と火鉢(334）風炉(335）などがよく出土する。331 は燈火具の一種と思われ、短く小さい脚がつく。脚の裏から上皿にむかって小さい穴があけられ、その周囲にタールが付着している。332 は、Ｉ地区出土の尊式花瓶と同じ大きさや形だが、文様が少し異なる。頸部には蕨手文、胴部には雷文と蕨手文が印刻されている。333 は頭部・脚・尻尾を欠き胴体だけになっているが、瓦質の土馬と考える。

国産陶器では備前焼が初めて確認された。高さ約37cm、口径約30cmの水屋甕(328）である。ずんぐりした胴部中央に貼付け突帯が廻り、下った肩には不遊環が、底部には３個の小さい脚がつく。胎土は断面中央が赤く、両側は灰色をしている。全体に丁寧に作られ焼成もよい。他に信楽焼の壺(327)も出土した。口縁は二重口が退化した形をしている。丸い肩から胴部にかけて最大径

があり45cmをこえ、底部を欠いているが復原すると高さ50cm近い大壺になる。赤褐色の器体に白く硅石が吹き出し、肩には自然釉がかかっている。焼成がよく胎土は白く焼き締っている。

青磁碗では、線刻の蓮弁文の碗が多い。336 はやや浅く、充分に還元せず釉が褐色を呈する。見込みにはヘラ描の花文がある。337 は器壁が薄く、口縁が開いた形の碗で、二次的に火を受けてくすんでいるが、青白色の釉がかかっている。小さい高台がついていたのであろう。338 は5弁の輪花皿で腰から大きく開く。高台裏は白磁になっている。他に碁笥底風の六葉皿(339) や同じ底部をもつやや厚手の皿(340) なども出土している。341・342（同一個体）は、外側面が稿になった双魚文皿で、少し黒ずんだ緑色の釉がかかっている。

白磁の大部分を端反りの皿（343～345）で占るが、345 はその底部で、吉祥句が書かれている。346 は高台部から大きく外反する皿、暗花文が刻まれ青味の強い釉がかかった皿(347) などが出土している。348 は乳白色の釉に抉高台をもつやや軟質の皿、352 は青味がかった釉の硬質の皿である。いずれも14世紀後半から15世紀前半に中心がある。白磁坏は二種類ある。354は高台から直接朝顔状に開きやや深目、355 はやや浅くて見込みは蛇目状に釉を拭き取っている。

染付皿ではＢ１群Ⅶ(357)・Ⅷ(361) の割合が高い。358 は直径約20cmの内湾する大皿で、外側にやや硬直化した宝相華唐草文、見込みには十字花文、その周りに草木の文様を配する。高台は薄くて高い。359 はさらに大きい盤と推定され、断面三角のしっかりした高台をもつ。文様は外面に宝相華唐草文が廻るようだが、二次的な火を受けて不明である。碗ではＣ群・Ｄ群(363) よりＥ群(356・365・366) が多い。356 は饅頭心の見込みに人物文、高台裏に「永保長□」の吉祥句が入る。Ｈ地区では染付坏が10数点出土した。やや腰のふくらんだ端反り（367・368）で、外面は草花文、見込みには人物文に類似した文様が多い。他に内湾する坏もある。

369 は、黒褐色の鉄釉がかかった四耳壺で、口縁部は外反し肩は下る。中国の南方で生産されたと考えられる壺類は、この他、口径が25cm近くもある褐色の鉄釉がかかった大壺やいわゆる呂宋壺など43次調査全体で10数個体出土している。370 は高麗青磁香炉で、深い青緑色をしている。上に反った鍔の上面には雲文が刻まれ、胴にも文様がある。欠失しているが、獣足が３個所につき、動物の形をした蓋が伴っていたと推定される。

結びにかえて　　（第80～82図）

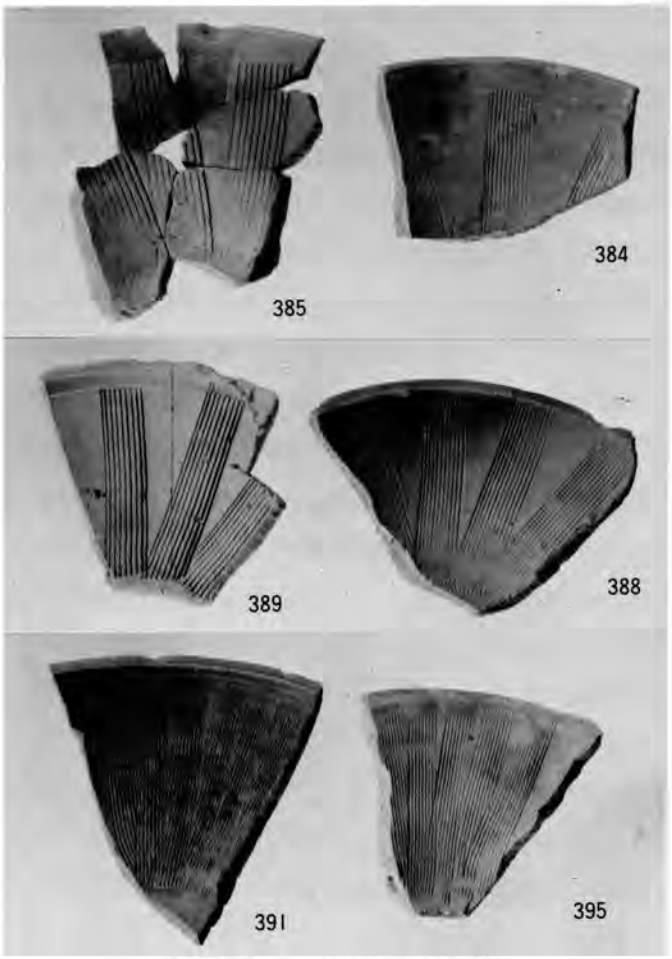
出土遺物の総破片数は42,783点で、その割合は越前焼30.8%、土師質60.2%、鉄釉 1.5%、灰釉 1.2%、青磁 1.6%、白磁 1.8%、染付 1.2%、その他 1.2%であった。これを地区別に見ると、武家屋敷地区であるＱ・Ｐ地区、Ｉ北地区は土師質の割合が82%、71%と高く、越前焼の割合が９%、23%と低い。これに対して町屋地区ではこうした傾向はない。またこれまで調査した武家屋敷でも土師質の割合が特に高い地区はなく、遺構遺物の残存状態にも左右される。

群 / 地区土層	越前焼甕						越前焼擂鉢			
	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅳa	Ⅳb	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb
Ｑ Ⅰ	1				2	6	3	5	4	5
Ｑ Ⅱ					1	3	1	2	1	3
Ｉ北 Ⅰ	1			1	1	10	7	8	9	13
Ｉ北 Ⅱ			1		2	2	2	17	3	3
Ｈ Ⅰ	1		1	2	4	18	3	12	9	7
Ｈ Ⅱ	1		3	1	2	5	3	5	2	3

表－8　越前焼甕・擂鉢　土層別出土表

越前焼擂鉢の編年を試みた。口縁部の変化と擂目の密度の組合せを基本に分類した。Ⅰ群(381～385)口縁部は丸味をもっておさまり、口縁内面の段の下った位置にある。擂目は間隔が広く口縁下の段で止る。指でつまんだ片口がある例が多い。Ⅱ群（386～389）口縁上端が水平になる。口縁内面の段が上昇し、段が凹線に変りつつある。擂目は底部で少し重り合う程度で間隔が広い。片口や半円形の擂目を有するものがある。Ⅲ群ａ（390・391）口縁が水平で、口縁内面の段は凹線になり上昇しきる。擂目の間隔が密になり見込みに擂目のある例が増える。擂鉢が大形化する。Ⅲ群ｂ（392～396）口縁が内傾化し、口縁外側に強いナデが廻る。擂目の間隔は密で見込みに擂目が入るものが多い。表－８は各群の擂鉢の個体数を、各地区の層別に表わしたものである。なお、土層については床土直下の遺構面をⅠ層、整理の都合上それより下層をⅡ層としてまとめた。Ⅱ層にⅠ・Ⅱ群が多く、Ⅰ層になるとⅢ群ａｂが多いことがわかり傾向としてⅠ群からⅢ群ａｂへ変化していったことが読み取れる。

口縁の変化がたどりやすい甕についても、同様の方法で表－８を作成した。分類については『豊原寺跡Ⅱ　華蔵院跡第２次発掘調査概報』（丸岡町教委1981）を参照。甕の場合もⅢ群ｂからⅥ群ｂまで連続的に変化がたどれる。擂鉢と甕とのセット関係については一応擂鉢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂの各群と甕Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅳａ・Ⅳｂの各群が対応すると考えておくが、もっと厳密な資料操作が必要である。擂鉢Ⅰ群、甕Ⅲ群ｂの年代については、一乗谷に城下町が形成され始めた15世紀末までかなりの頻度で使用されていたと考える。



挿図－14　越前焼擂鉢

註① 丸岡町教委1982「豊原寺跡Ⅲ(伝)講堂跡第１次発掘調査概報」

註② 丸岡町教委1980・1981「豊原寺跡Ⅰ・Ⅱ華蔵院跡第１次・２次発掘調査概報」

註③ 石川考古学研究会1967　「加賀三浦遺跡の研究」

註④ 小野正敏1982　15・16世紀の染付碗・皿の分類とその年代「貿易陶磁研究№２」

註⑤ 韓国国立中央博物館1979「新安海底文物」

註⑥ 青森県郷土館1978「尻八館第２次調査概要青森県郷土館年報４」

Ｔ地区全景　　南から

Ｔ地区　　埋甕遺構ＳＸ2242

ＱＰ地区　　庭ＳＧ2295

ＱＰ地区　　建物ＳＢ2265

ＱＰ地区　　全景　北から

井戸　ＳＥ2275
石積施設　ＳＦ2277

井戸　ＳＥ2274
石積施設　ＳＦ2276

Ｌ地区　　北から

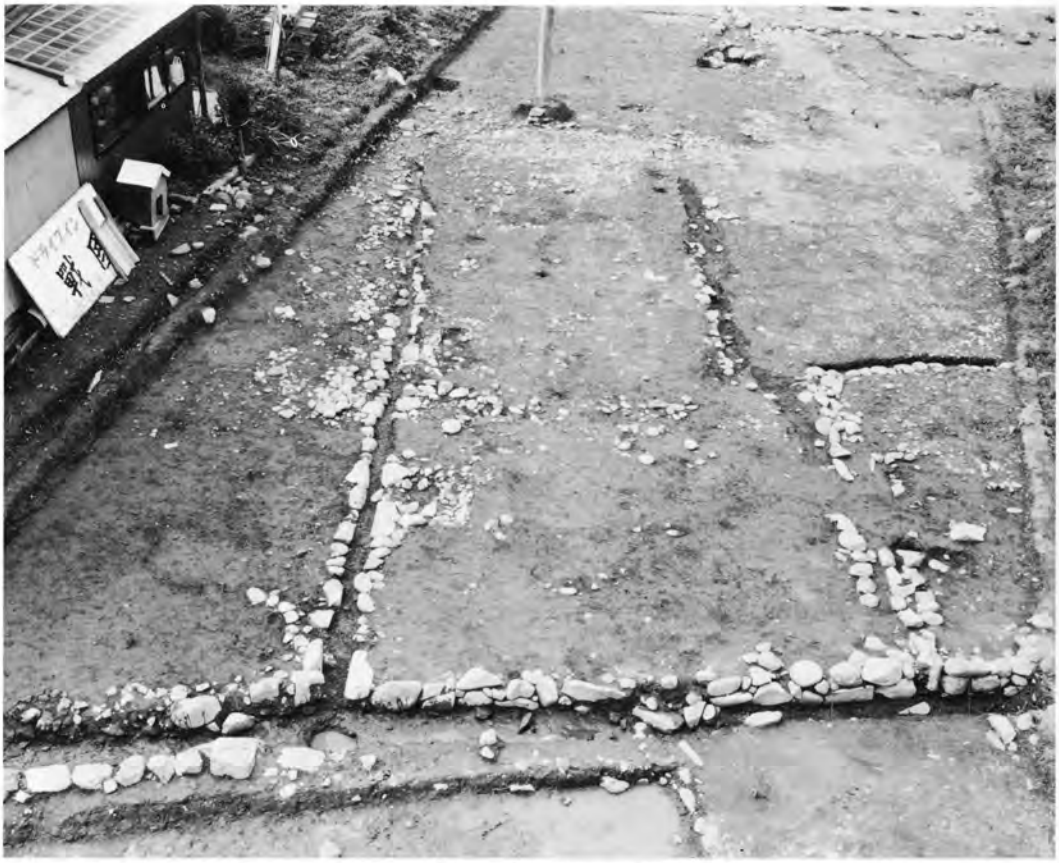
Ｌ地区　　建物ＳＢ2316

PL. 63

ＱＰ地区　外濠ＳＤ2261

Ｌ地区　井戸ＳＥ2317

Ｌ地区　石積施設ＳＦ2318～2320



Ｋ地区　南半分　　北から

Ｋ地区　　ＳＸ2366

Ⅰ南地区　　建物ＳＢ2382

Ⅰ南地区　　溝ＳＤ2376

Ⅰ地区　　道路ＳＳ2374

Ⅰ地区　　土塁ＳＡ2402

Ⅰ北地区　　下層溝ＳＤ2401

Ⅰ北地区　　建物ＳＢ2405

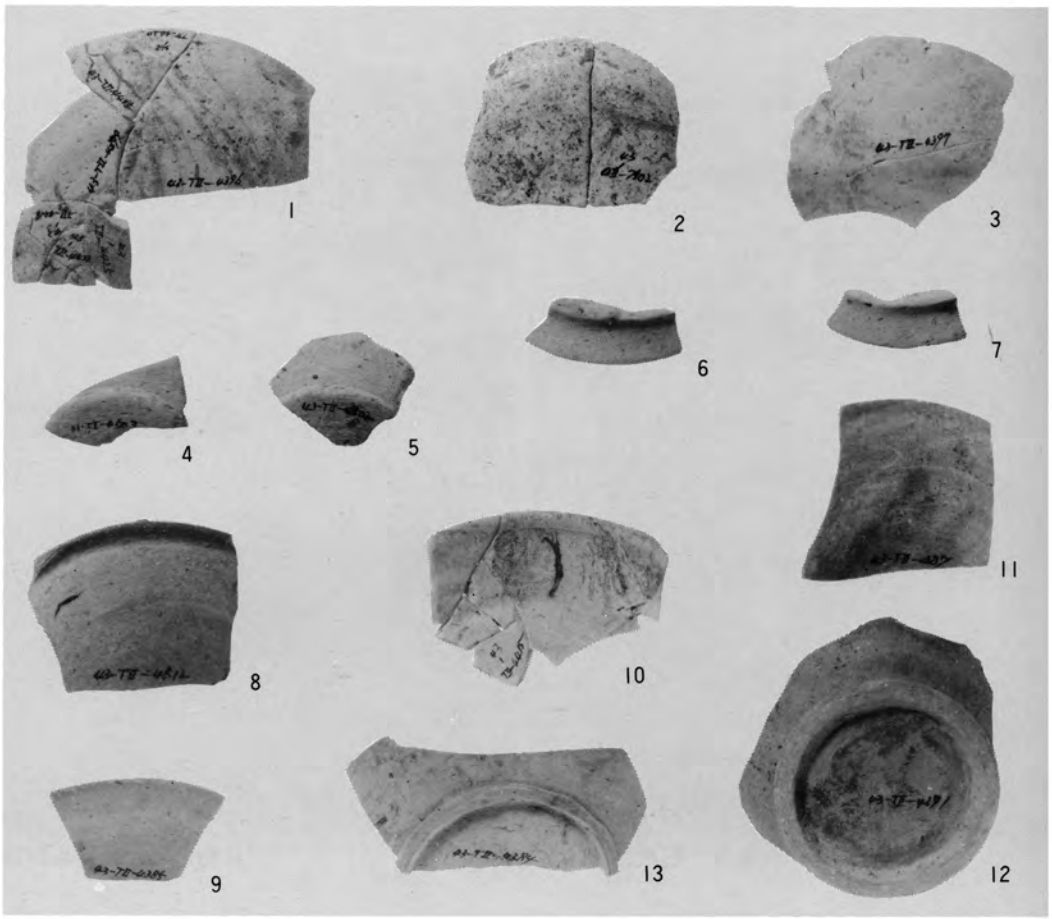
Ｈ地区　北半分　　南から

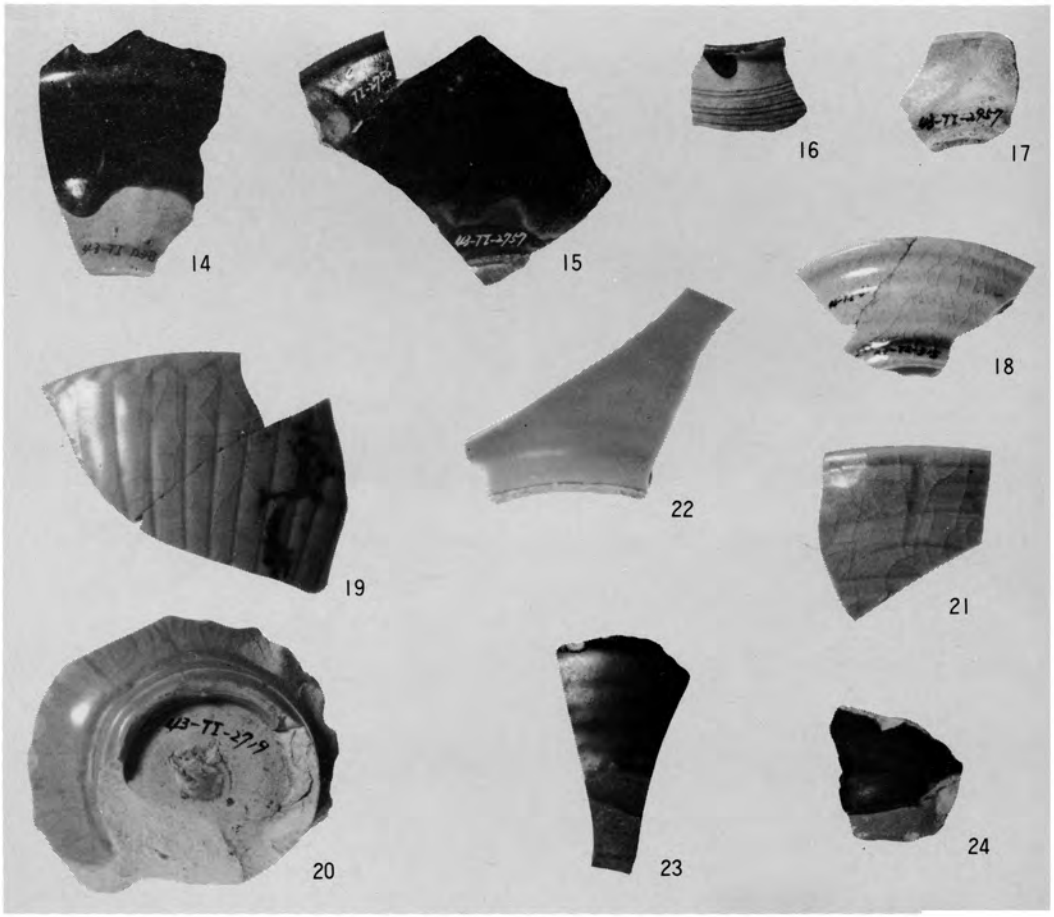
Ｈ地区　　土墨ＳＡ2436

Ｈ地区　石積施設2448

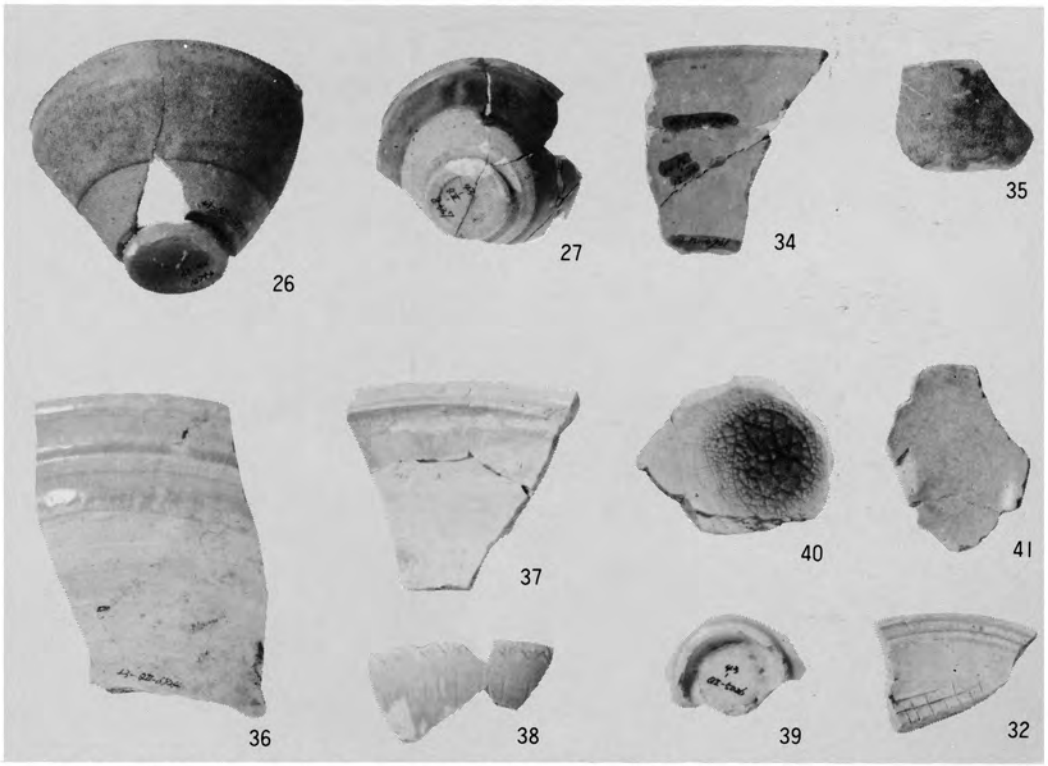
Ｈ地区　土塁ＳＡ2436

Ｈ地区　石積施設ＳＦ2450・2445　　埋甕遺構ＳＸ2468

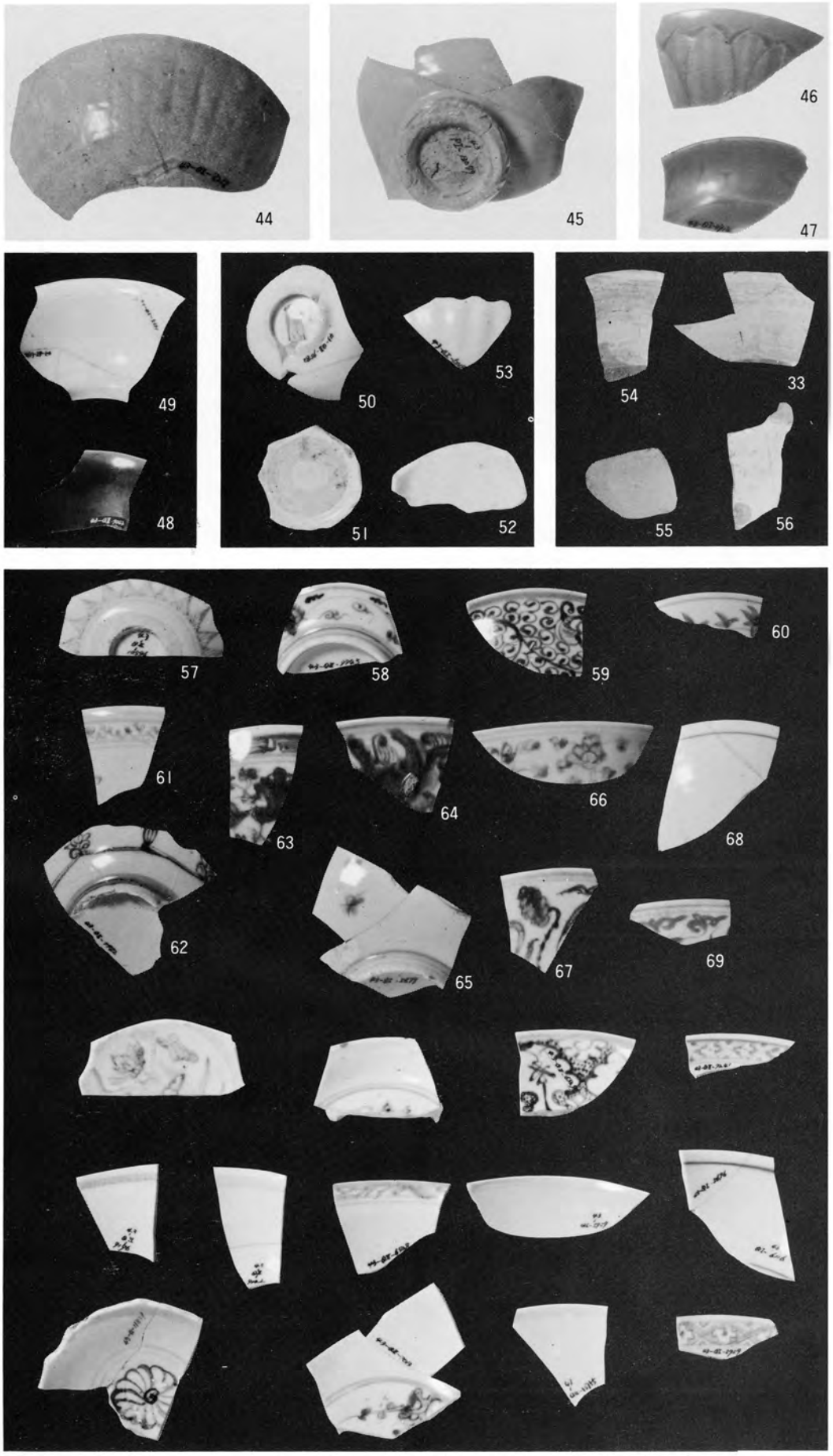




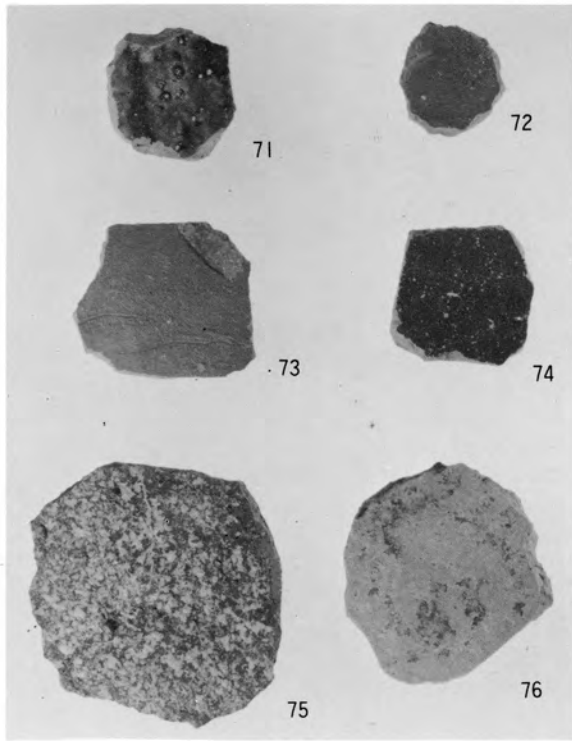
(T地区出土)　1～3. 土師質皿　4～7. 土師質碗　8. 須恵器蓋　9～13. 須恵器坏
14. 天目茶碗　15. 鉄釉碗　16. 鉄釉小壺　17・18. 灰釉皿　19～22. 青磁碗
23・24. 中国製天目茶碗

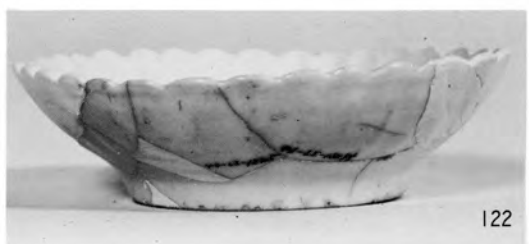


(Q・P地区出土)　25. 越前焼壺　26～28. 天目茶碗　29. 鉄釉片口　30. 鉄釉小壺　34. 鉄釉鉢
35. 鉄釉香炉　31. 灰釉小壺　36・37. 灰釉鉢　38～41. 灰釉碗　32. 灰釉卸皿

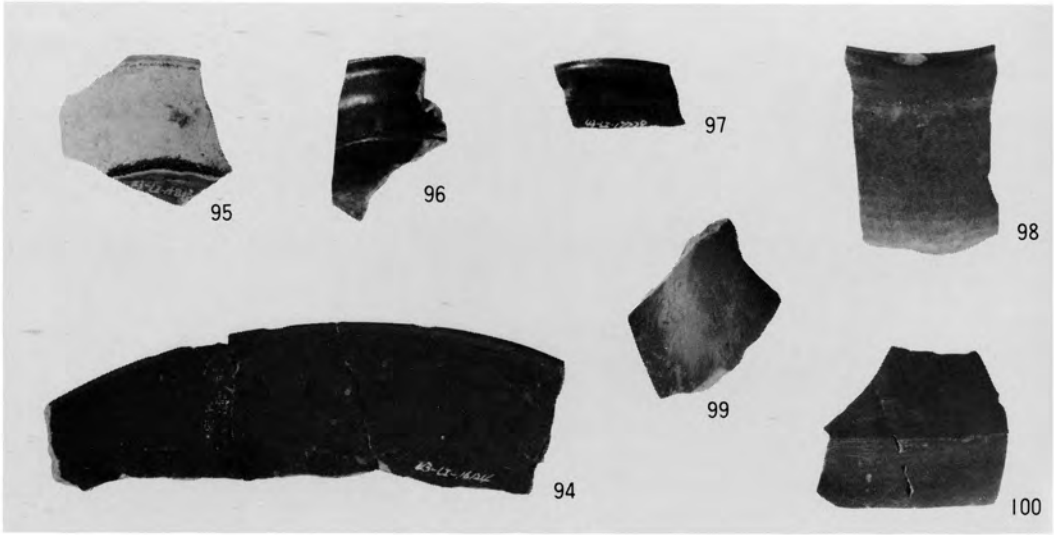


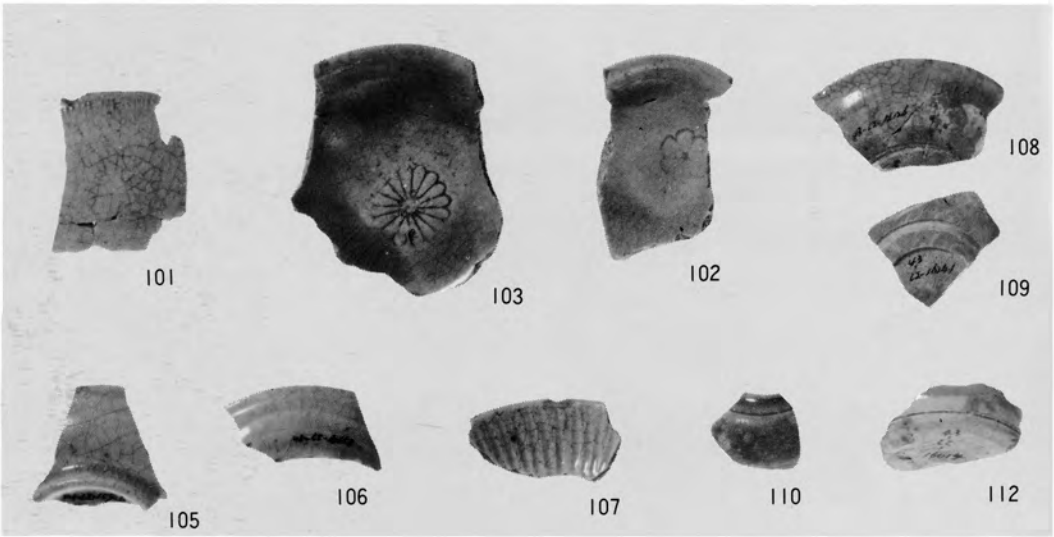
44～46. 青磁碗　47. 青磁皿　48. 瑠璃釉碗　49. 白磁碗　50～52. 白磁坏　53. 白磁菊皿
33・54・56. 刷毛目碗　55. 朝鮮製壺　57～60. 染付皿　61～69. 染付碗

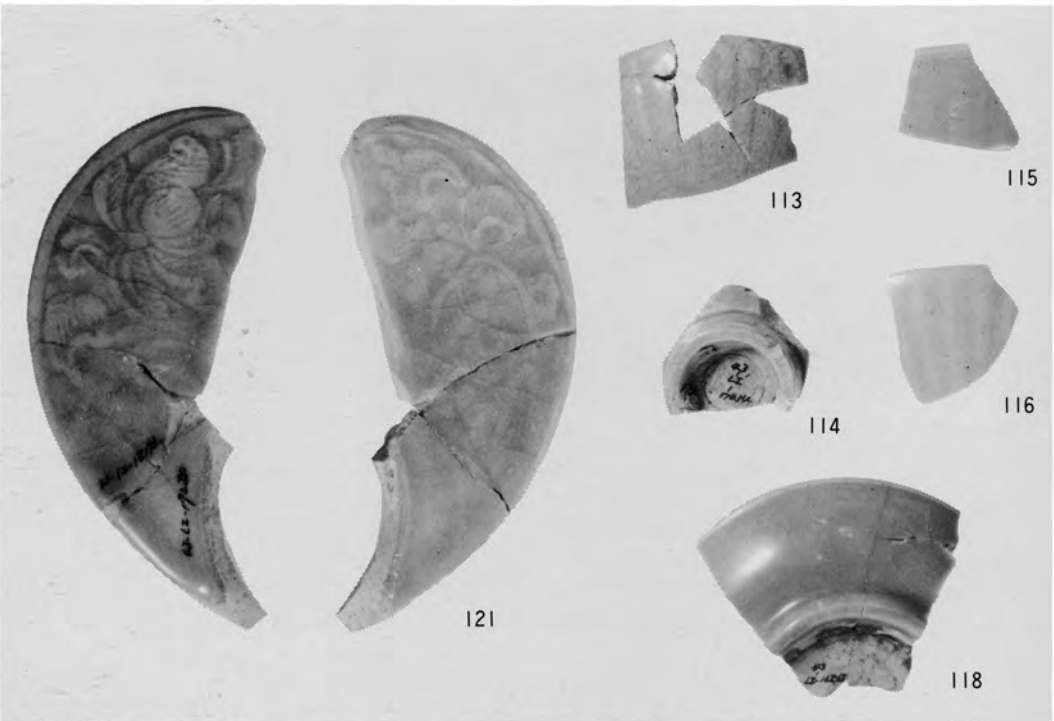




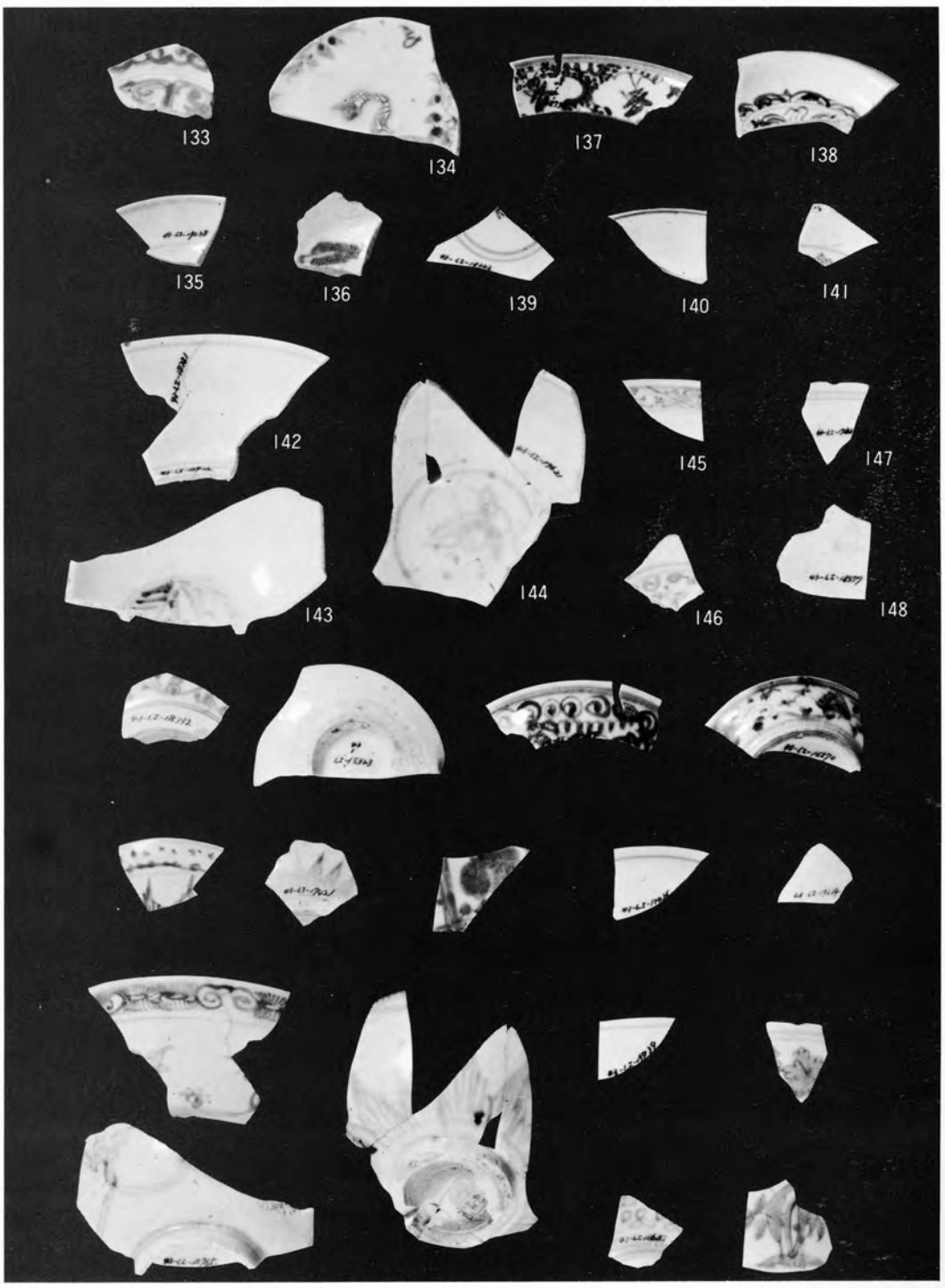
70. 硯　71～76. 円板状陶製品　（L地区出土）　90. 土師質土釜　91. 天目茶碗　111. 灰釉香炉
117・119. 青磁皿　122. 白磁菊皿　132. 染付碗



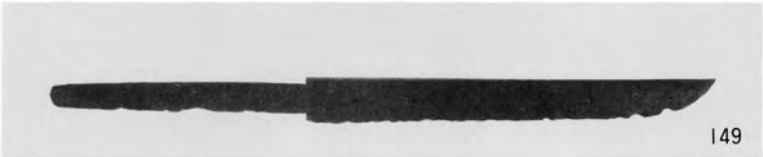


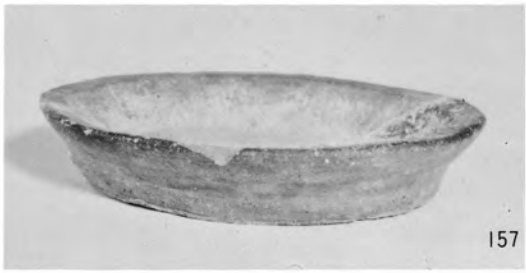


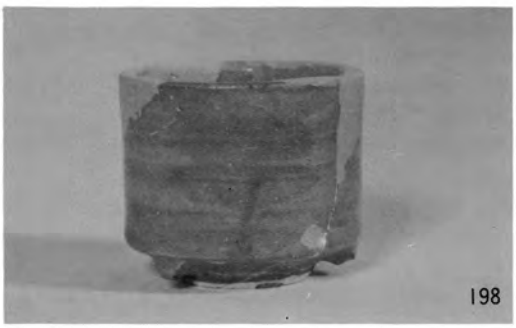
95・96. 天目茶碗　97. 鉄釉皿　98. 鉄釉壺　99・100. 鉄釉徳利　101. 灰釉碗
102・103・105～109. 灰釉皿　110. 灰釉小壺　112. 灰釉香炉　113～116. 青磁碗　118. 青磁皿
121. 青磁花瓶



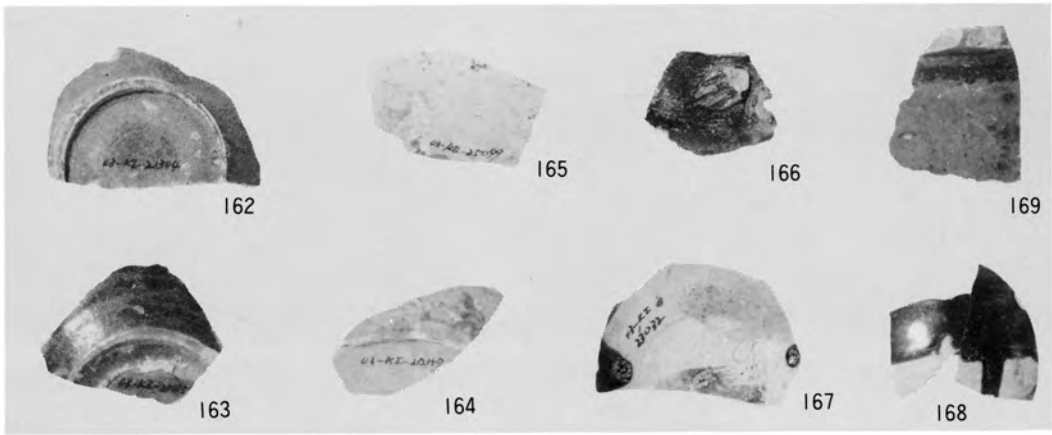
123・124・126・127・129～131. 白磁皿　128. 朝鮮製白磁皿　133～141. 染付皿　142～148. 染付碗

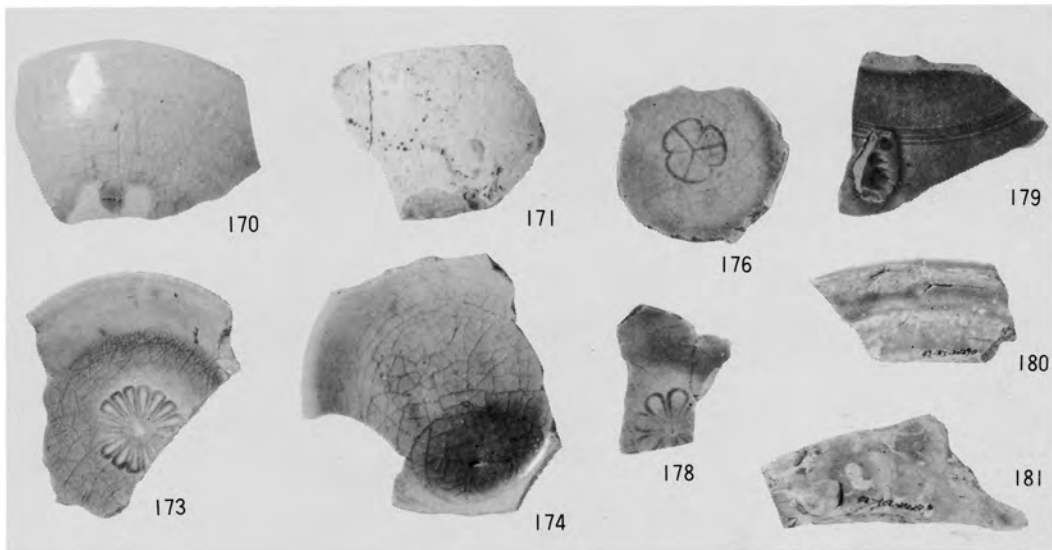


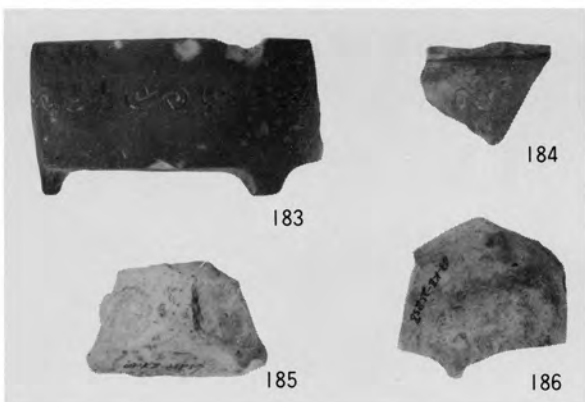


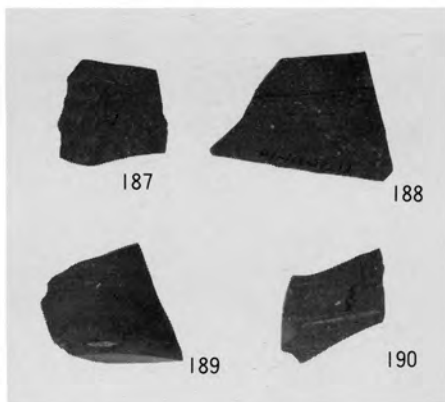


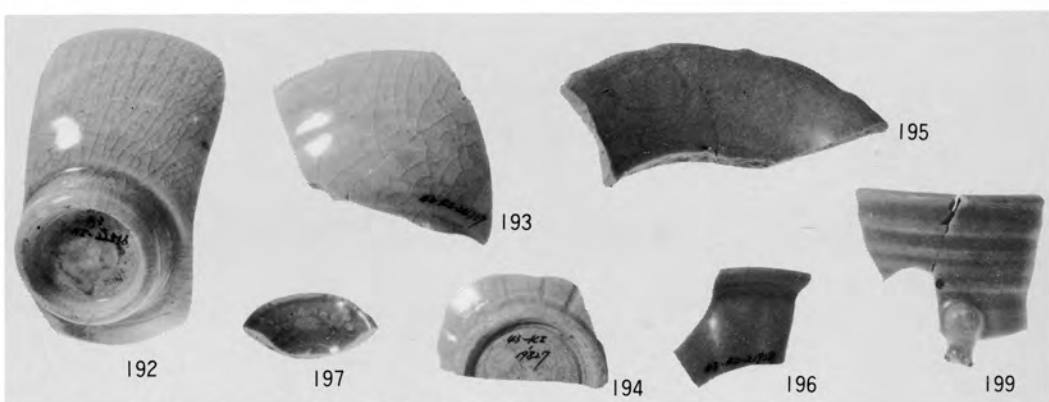
149・151. 小柄　150・152. 刀装具　153～155. 硯　（K地区出土）　156. 越前焼壺
157. 越前焼卸皿　172. 灰釉皿　191. 皿　198. 青磁香炉　207. 染付皿



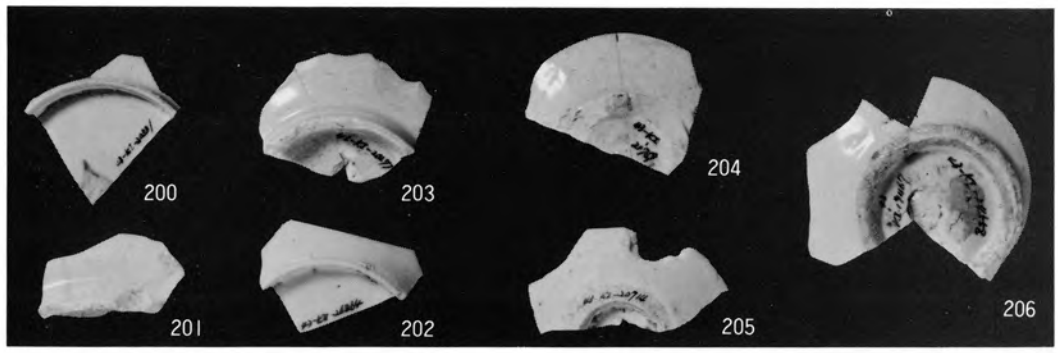


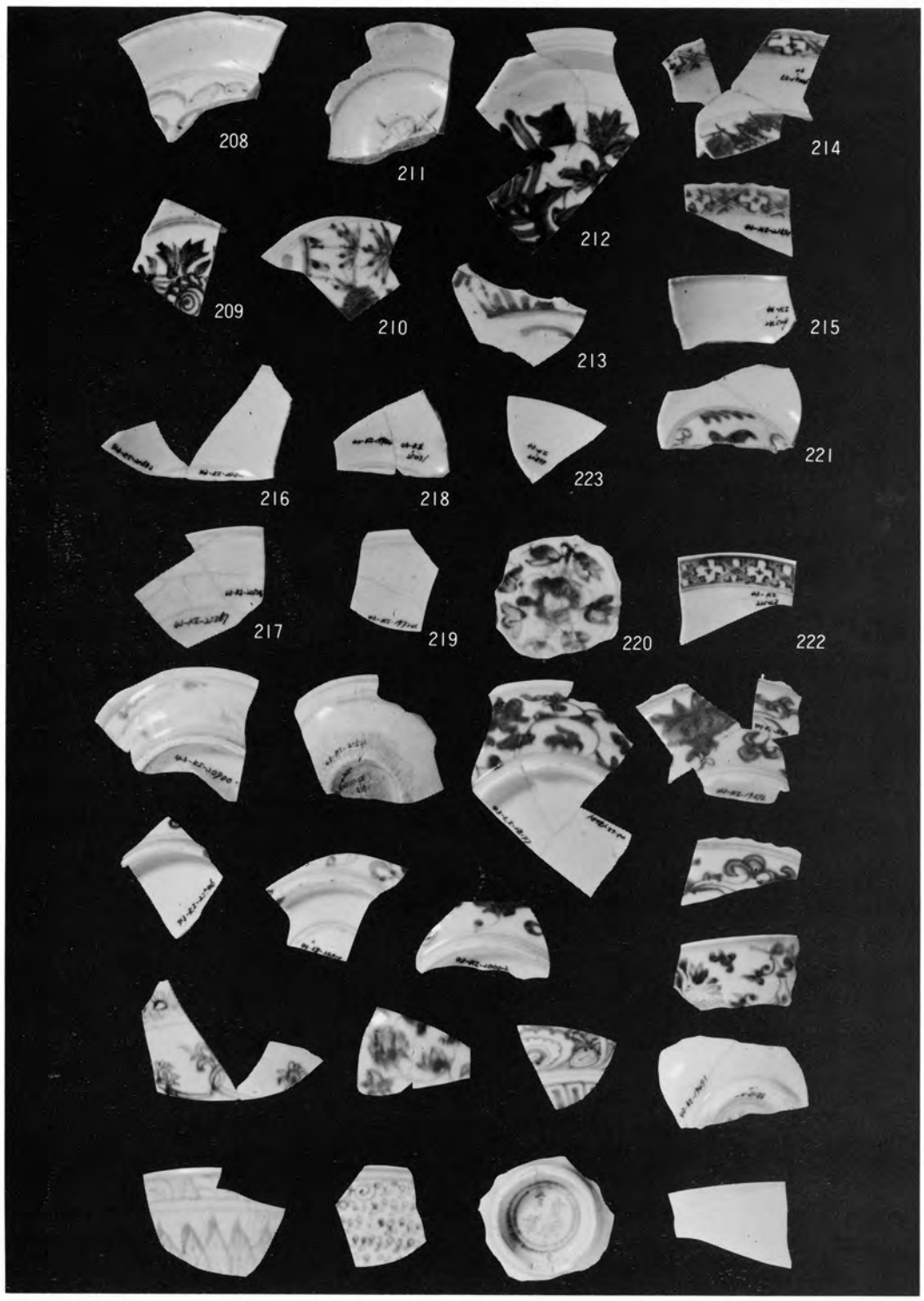




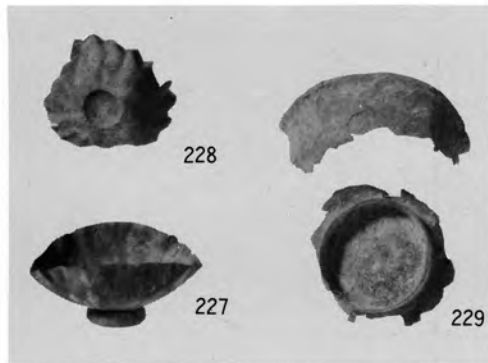


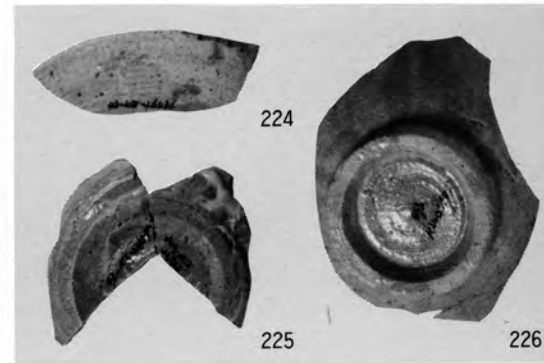
162～165. 鉄釉皿　166～168. 鉄釉茶入　169. 鉄釉水指　170・171. 灰釉碗
173・174・176・178. 灰釉皿　179. 灰釉四耳壺　180・181. 灰釉盤　183～186. 瓦質香炉
187～190. 産地不明　192・193. 青磁碗　194～196. 青磁皿　197. 青磁坏　199. 青磁香炉

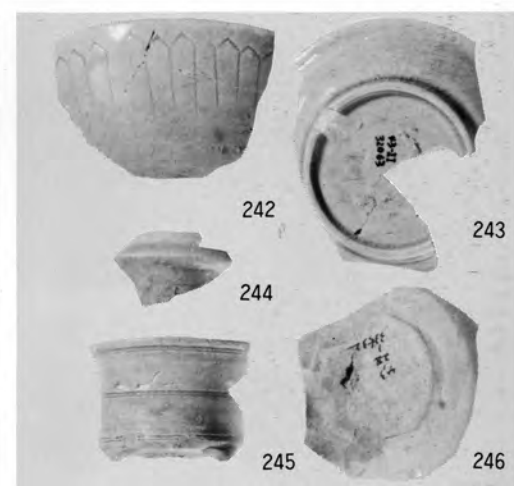


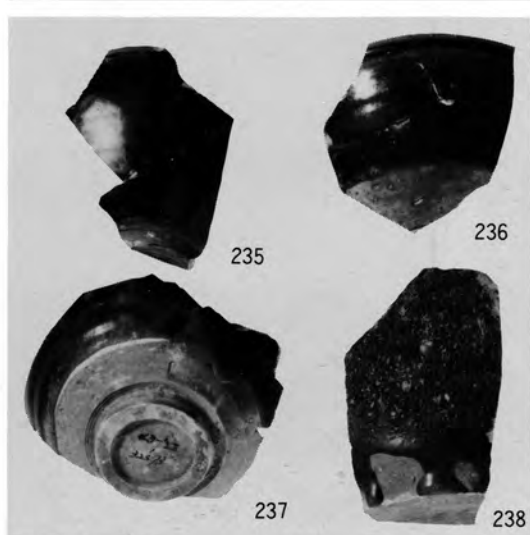


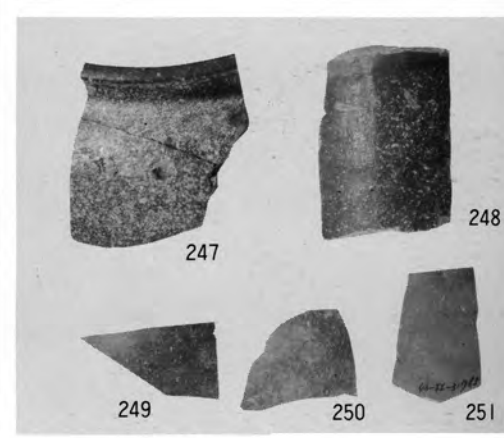
200～206. 白磁皿　208～214. 染付皿　215. 染付香炉？　216～222. 染付碗



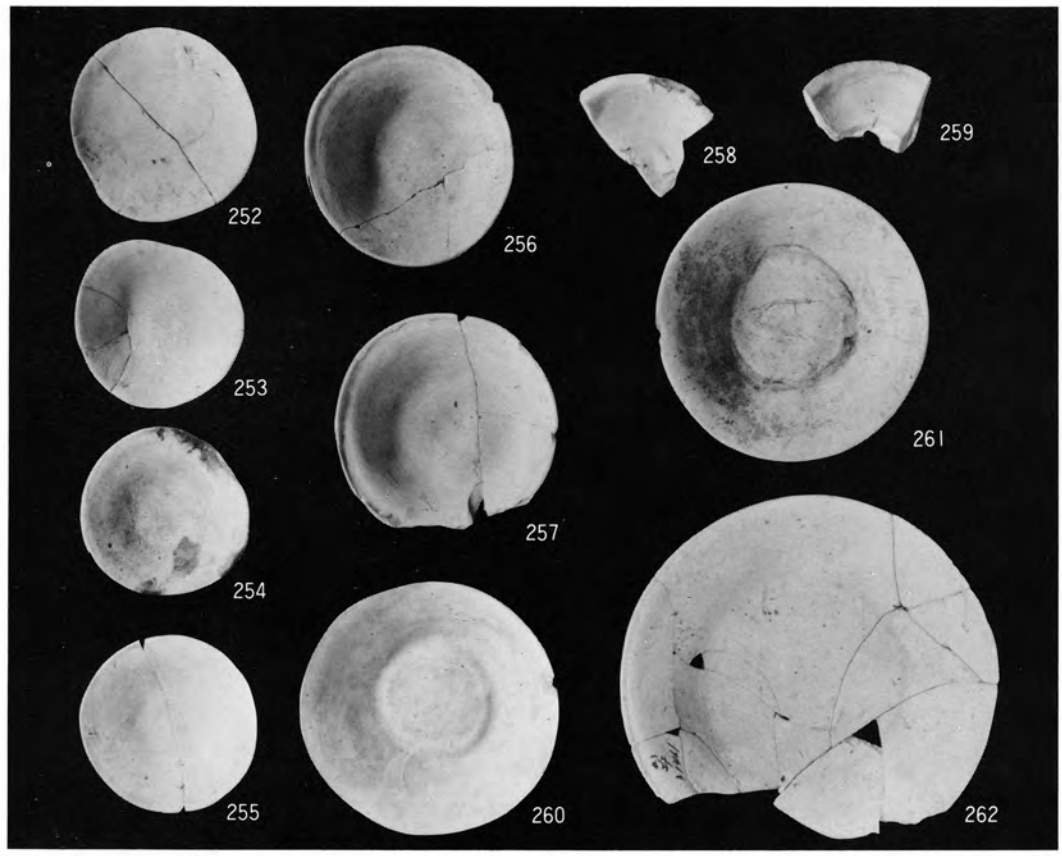


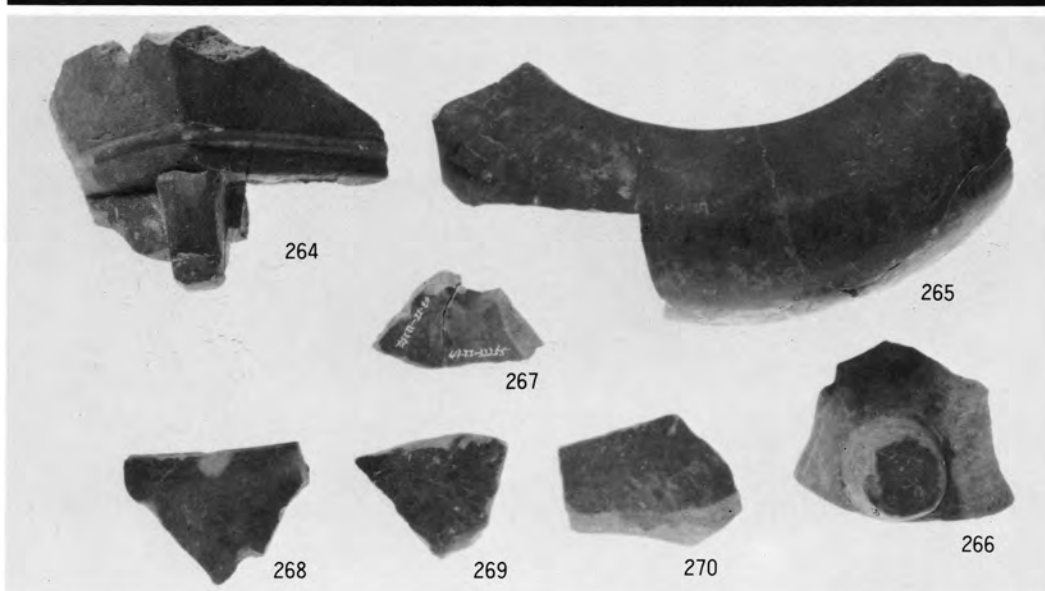


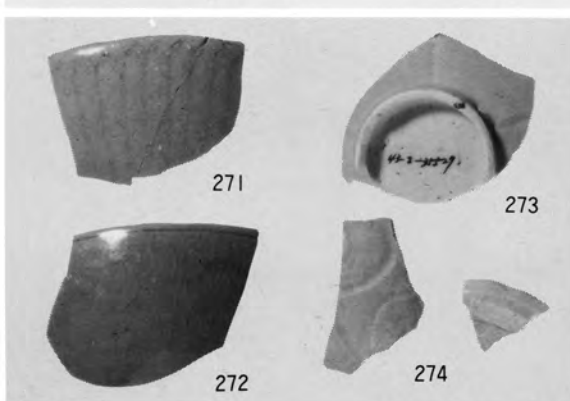


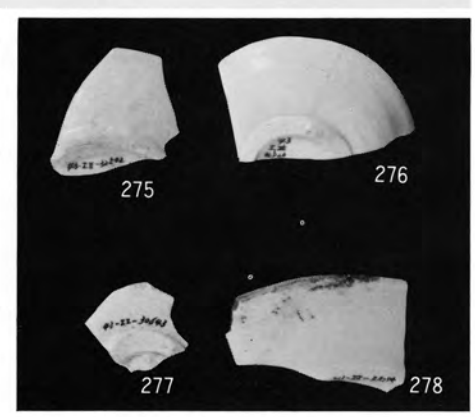


224～226. 朝鮮製碗　227・228. 紅皿　229. 六器　230. 硯　231・232. 砥石
（Ⅰ南地区出土）　234～237. 天目茶碗　238. 鉄釉壺　242. 灰釉碗　243・246. 灰釉皿　244. 灰釉坏
245. 灰釉香炉　247～251. 産地不明

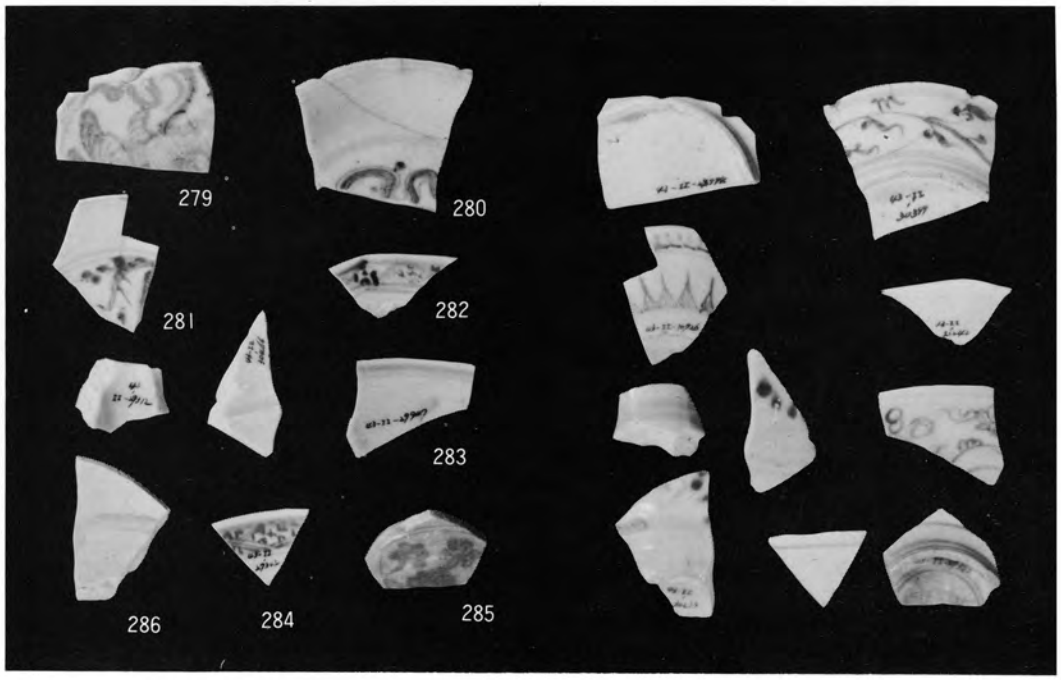


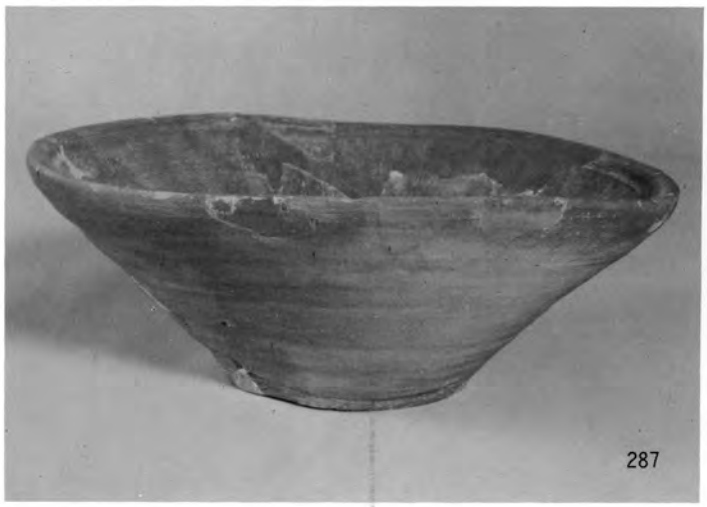


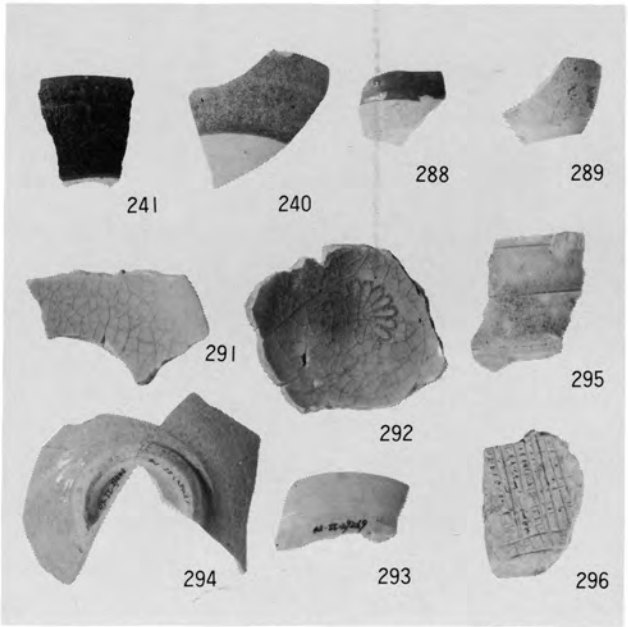


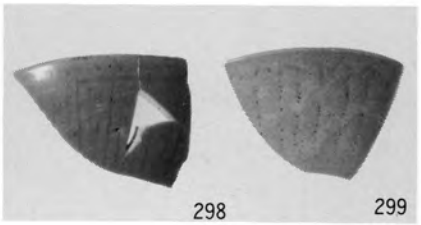


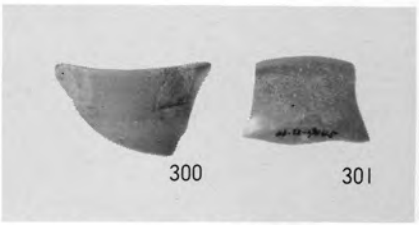
252～262. 土師質皿　264. 瓦質盤　265～267. 瓦質風炉　268～270. 瓦質火鉢　271・272. 青磁碗
273. 青磁皿　274. 青白磁梅瓶　275～278. 白磁皿



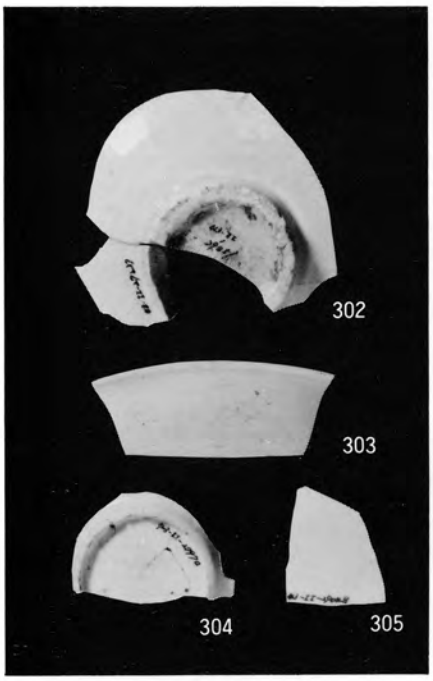


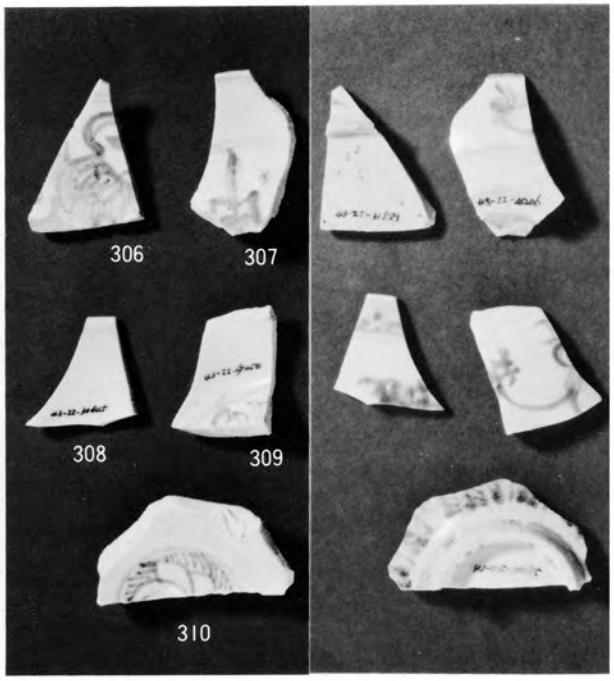




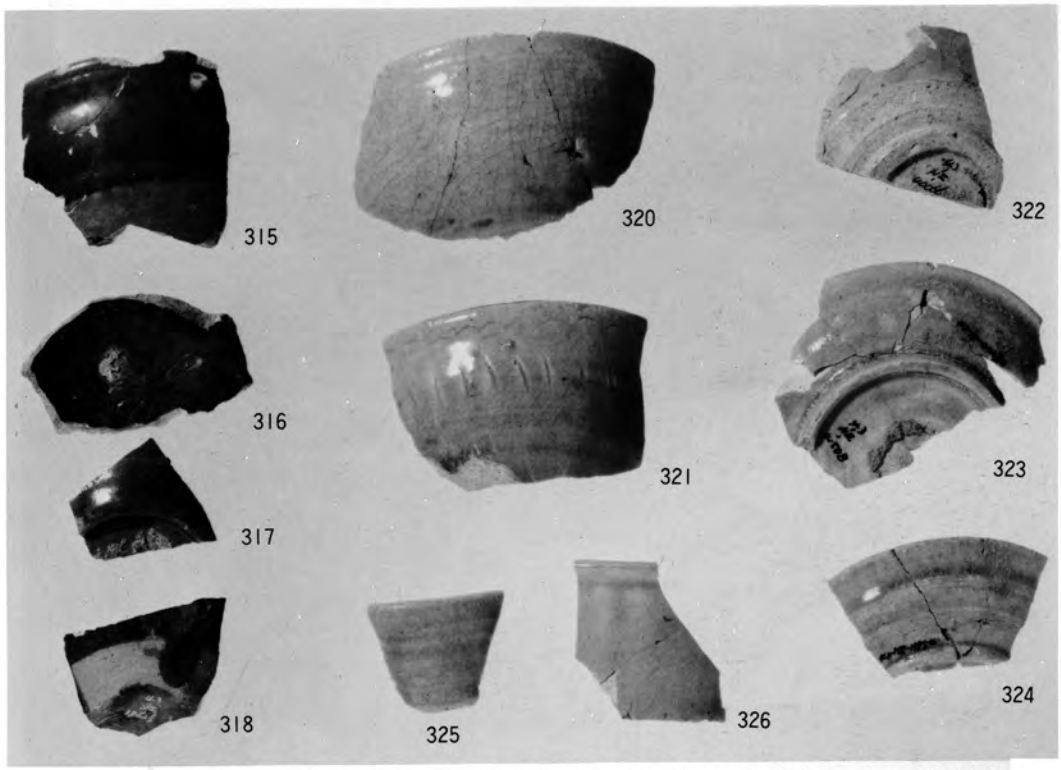


279～282. 染付皿　283～285. 染付碗　286. 染付壺　（Ⅰ北地区出土）　287. 越前焼擂鉢
297. 瓦質花瓶　240・241. 天目茶碗　288・289. 鉄釉茶入　291～293. 灰釉皿　294. 灰釉碗
295. 灰釉香炉　296. 灰釉卸皿　298・299. 青磁碗　300. 青磁香炉　301. 青磁皿

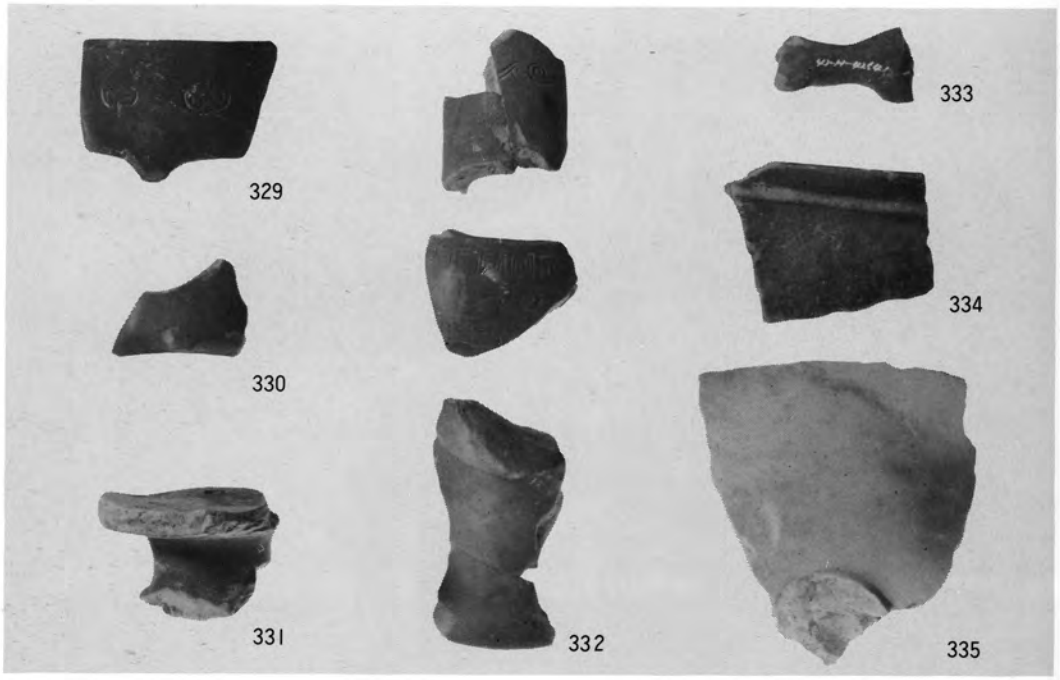


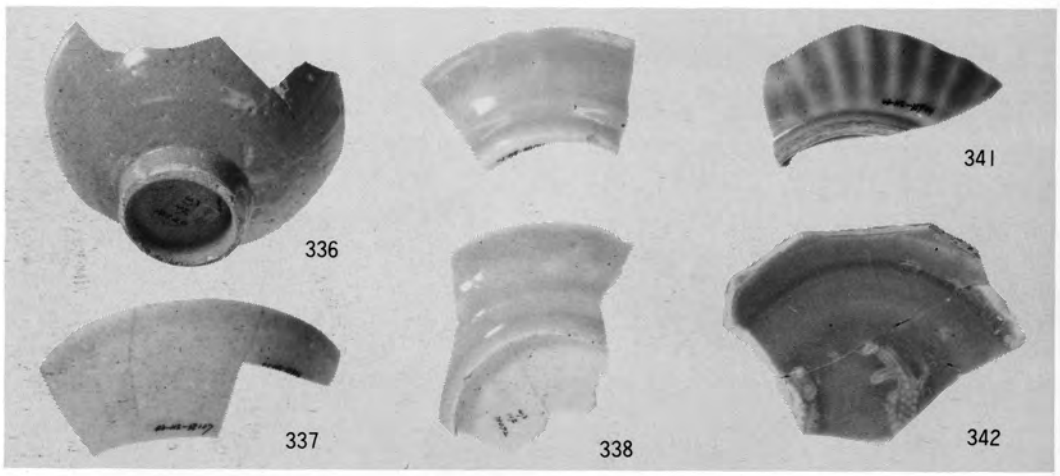


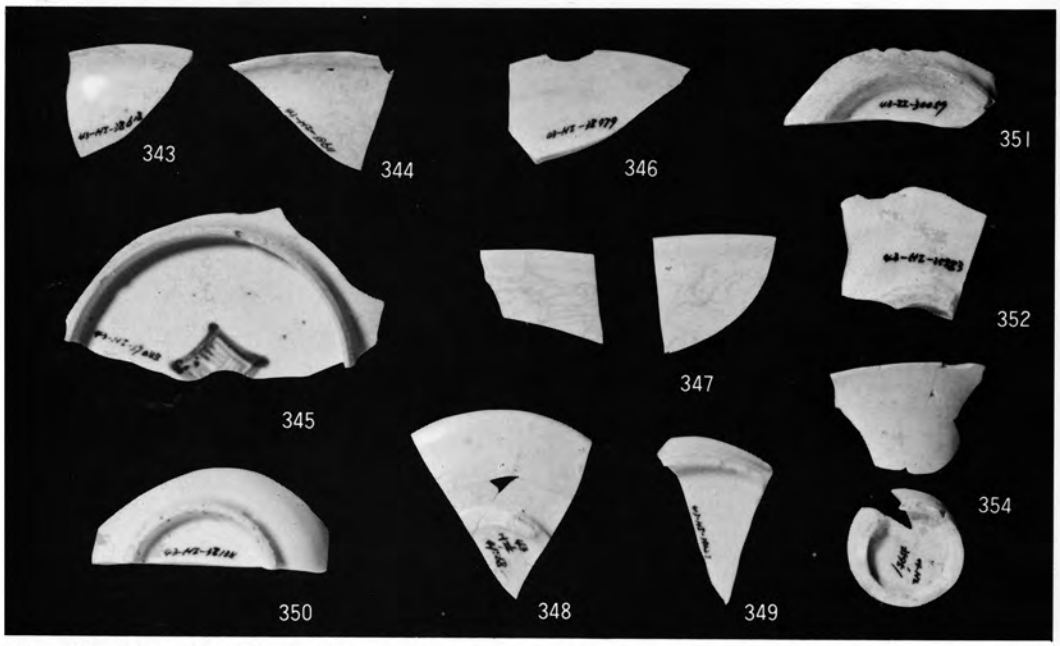
302～305. 白磁皿　306～308. 染付皿　309・310. 染付碗
（H地区出土）311. 越前焼甕　312・313. 越前焼壺　314. 天目茶碗



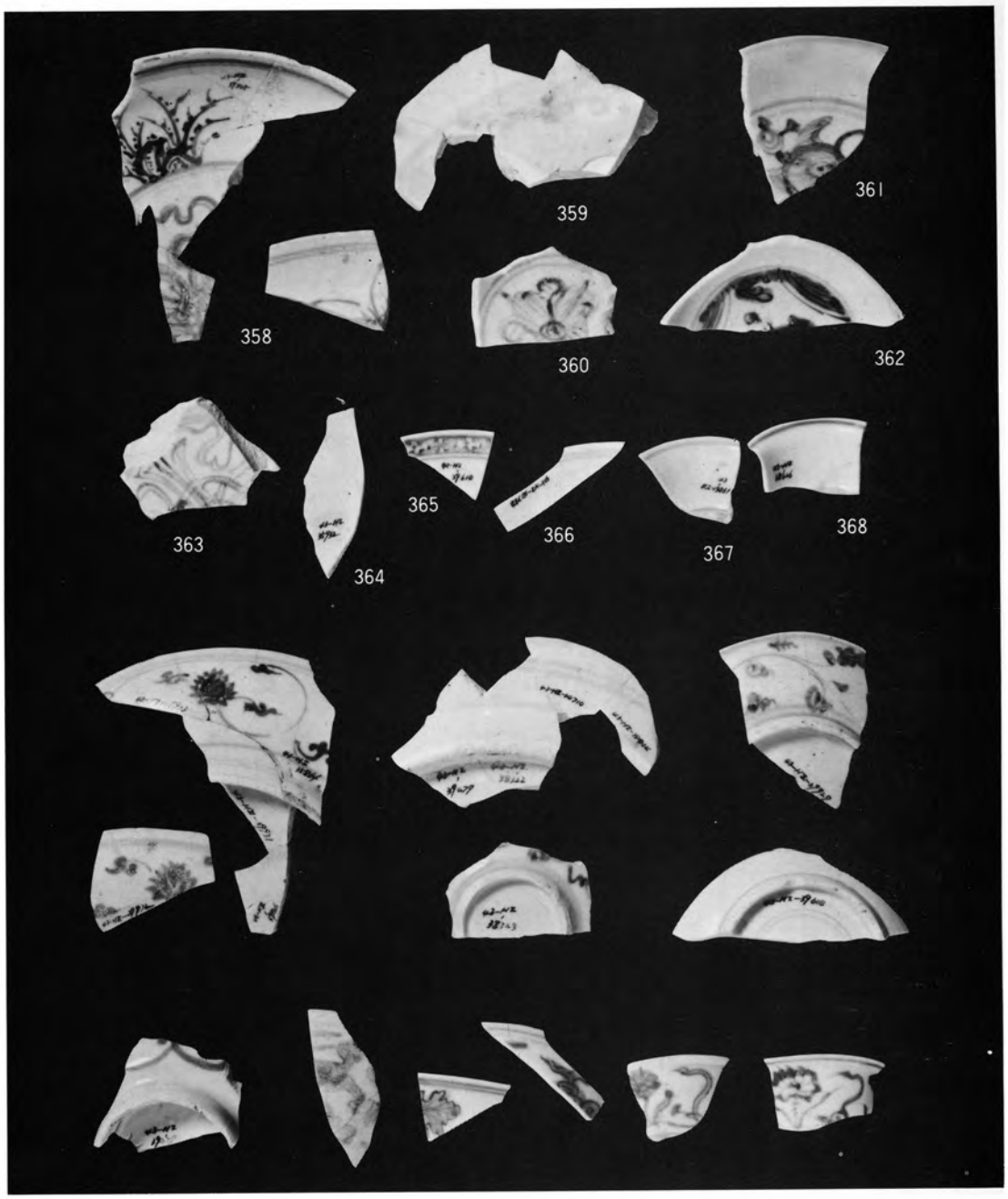
327. 信楽焼壺　328. 備前焼甕　339・340. 青磁皿　347. 白磁坏　357. 染付皿　315. 天目茶碗
316・317. 鉄釉皿　318. 鉄釉小壺　320・321. 灰釉碗　322～324. 灰釉皿　325. 灰釉香炉
326. 灰釉水指？





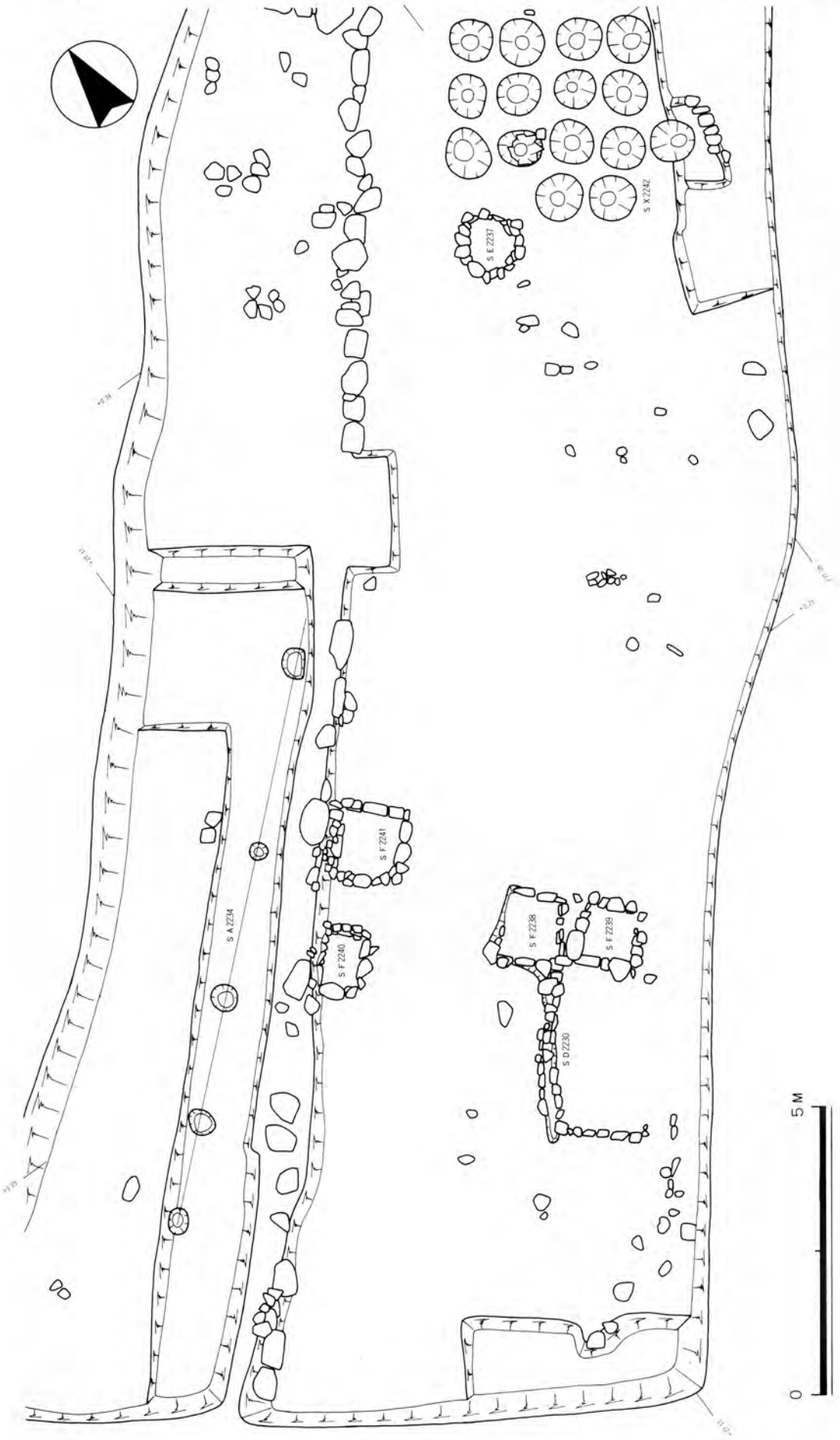


329・330. 瓦質香炉　331. 瓦質燈火具　332. 瓦質花瓶　333. 瓦質土馬　334. 瓦質火鉢
335. 瓦質風炉　336・337. 青磁碗　338・341・342. 青磁皿　343～352. 白磁皿　354. 白磁坏

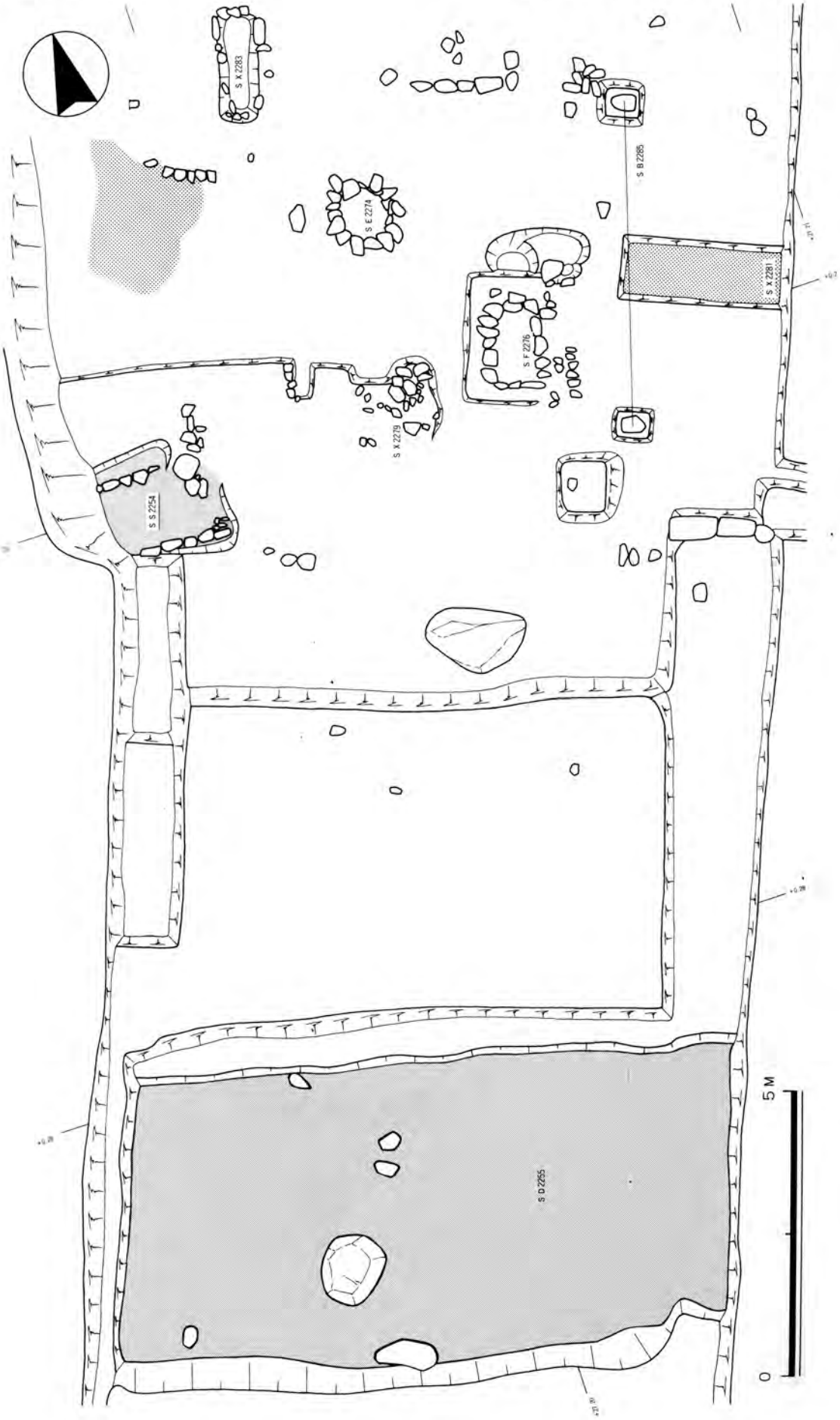


358～362. 染付皿　363～366. 染付碗　367・368. 染付坏　369. 褐釉壺　370. 高麗青磁香炉

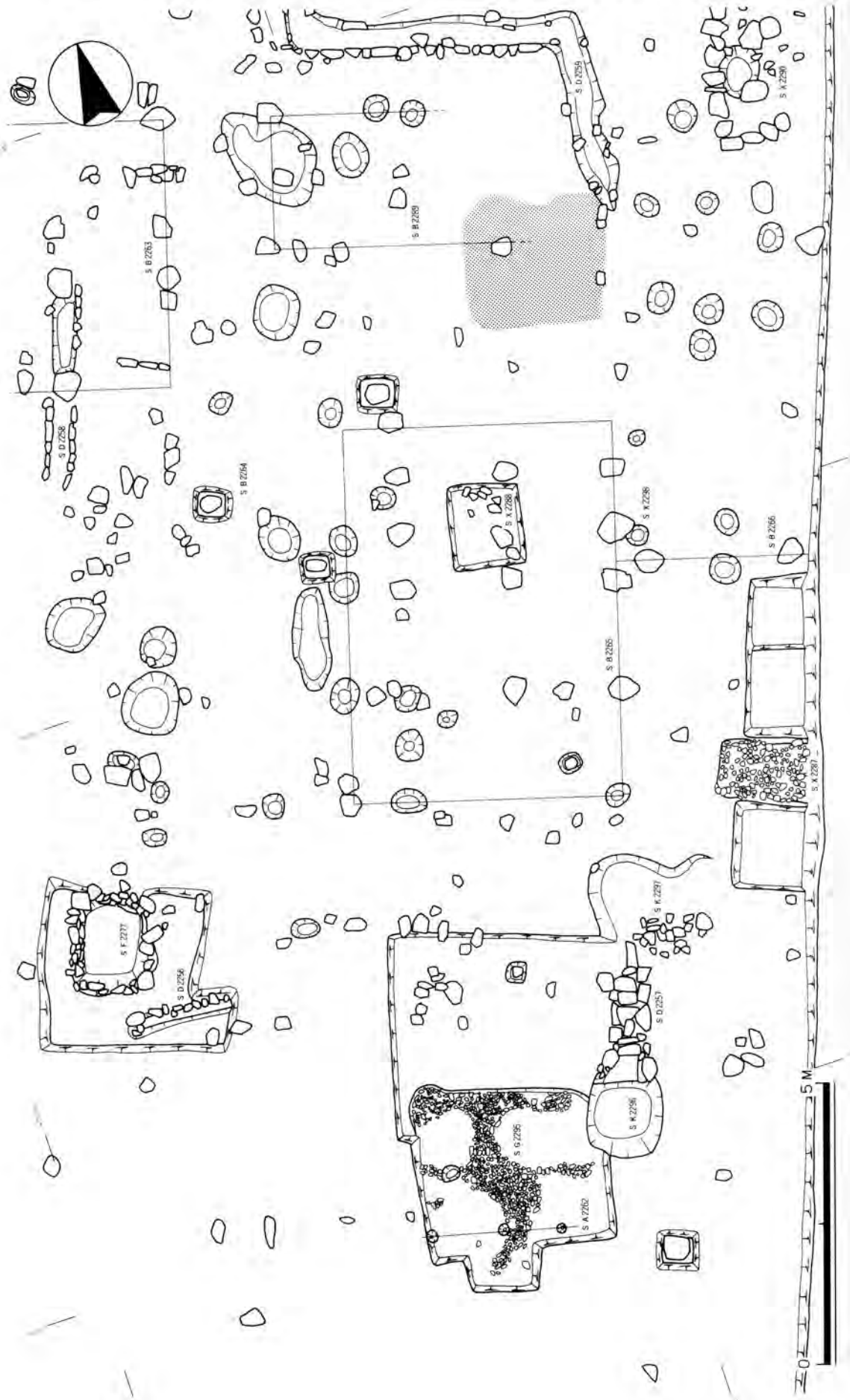
第53図　　第43次調査・遺構(1)　T地区



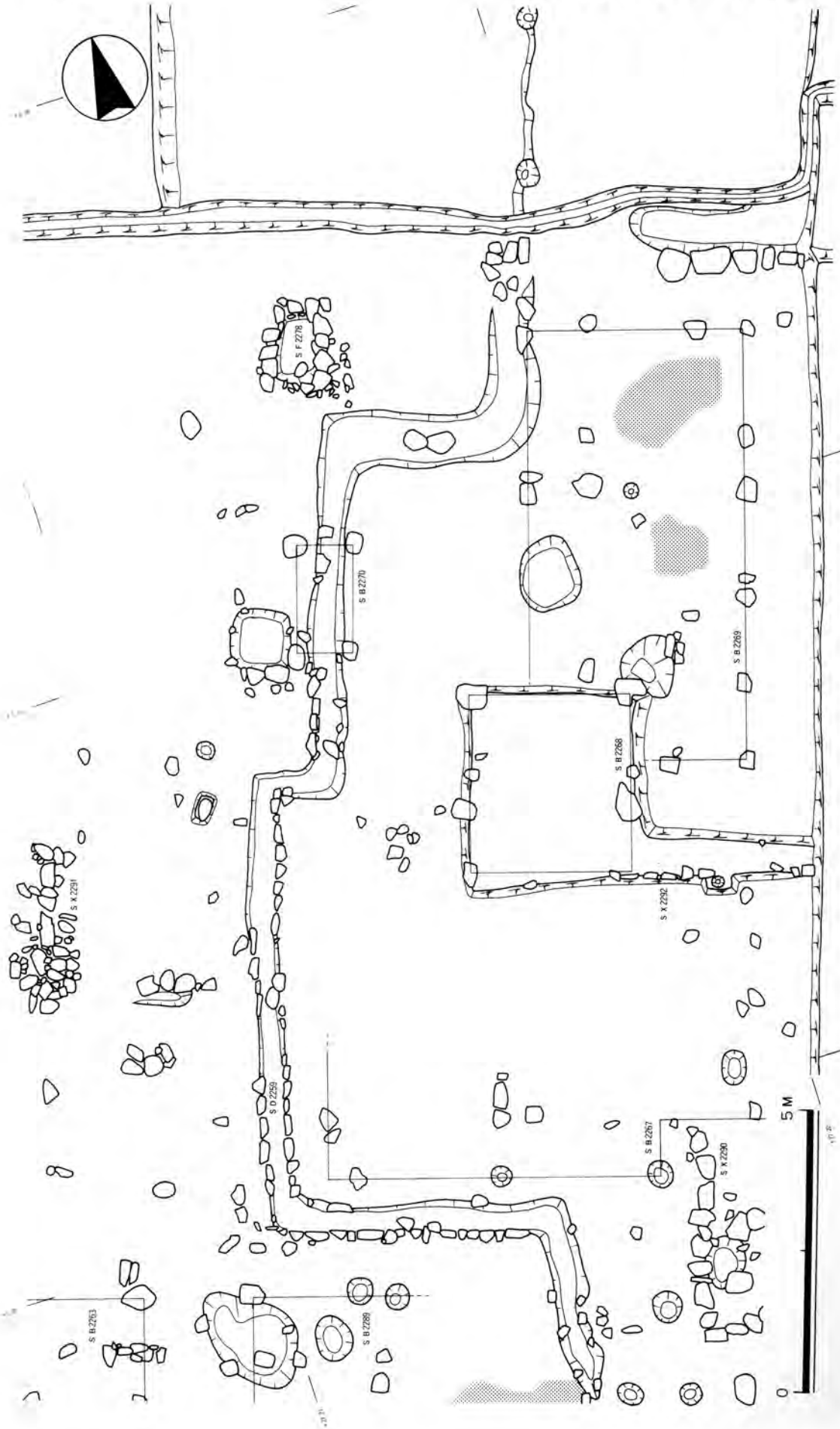
第54図　　第43次調査・遺構(2)　Q・P地区



第55図　　第43次調査・遺構(3)　Q・P地区

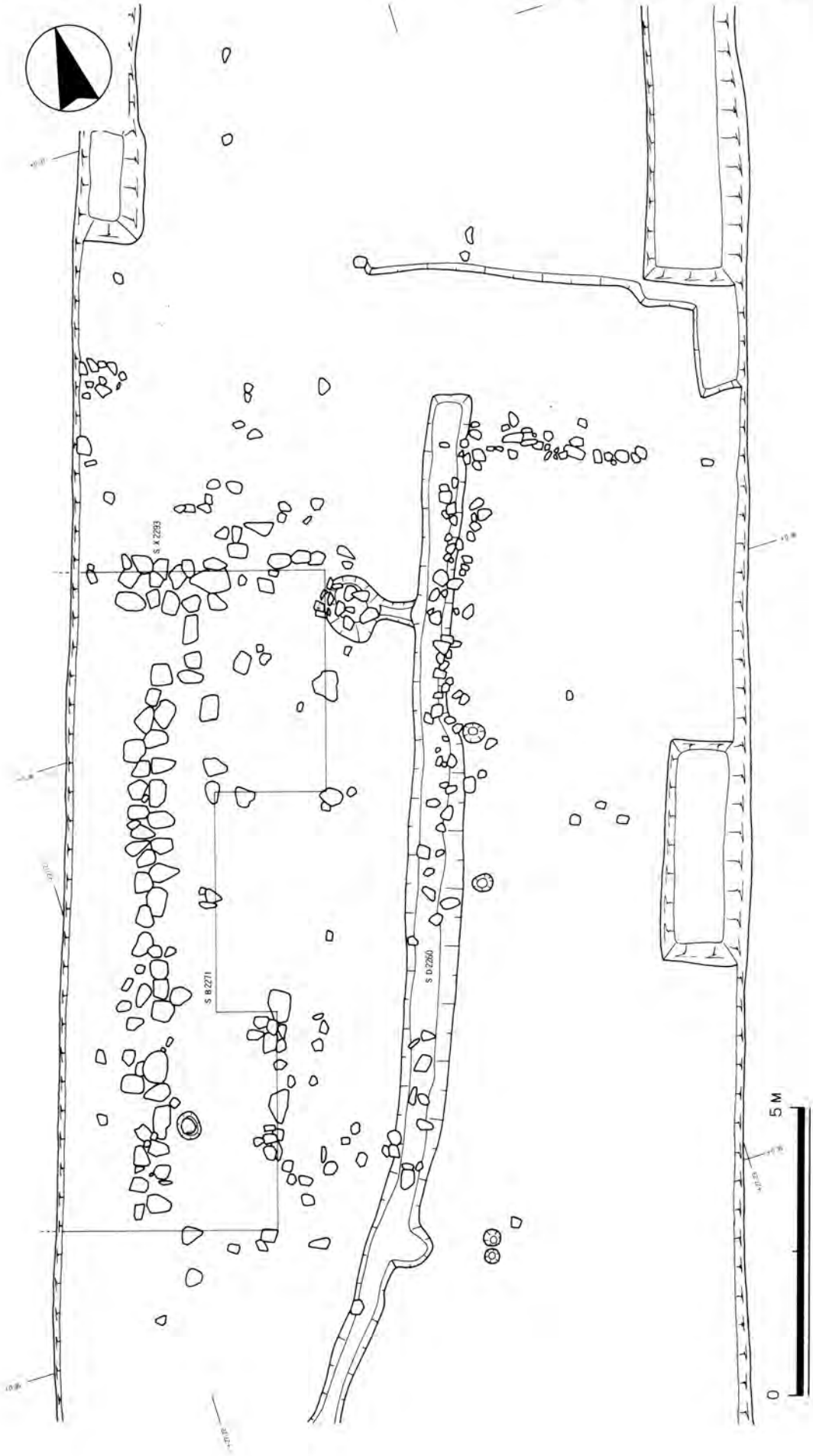


第56図　　第43次調査・遺構(4)　Q・P地区

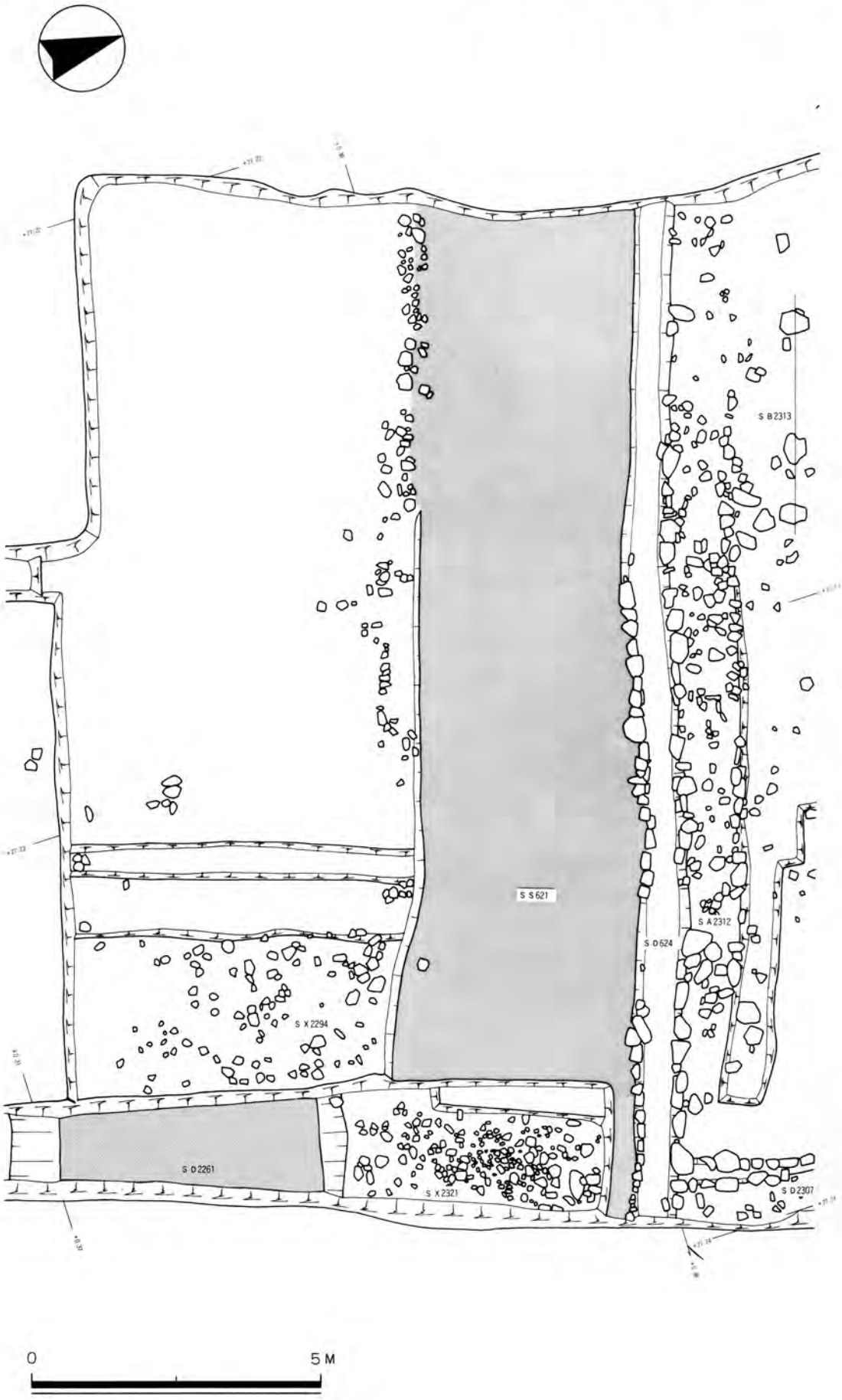


第57図

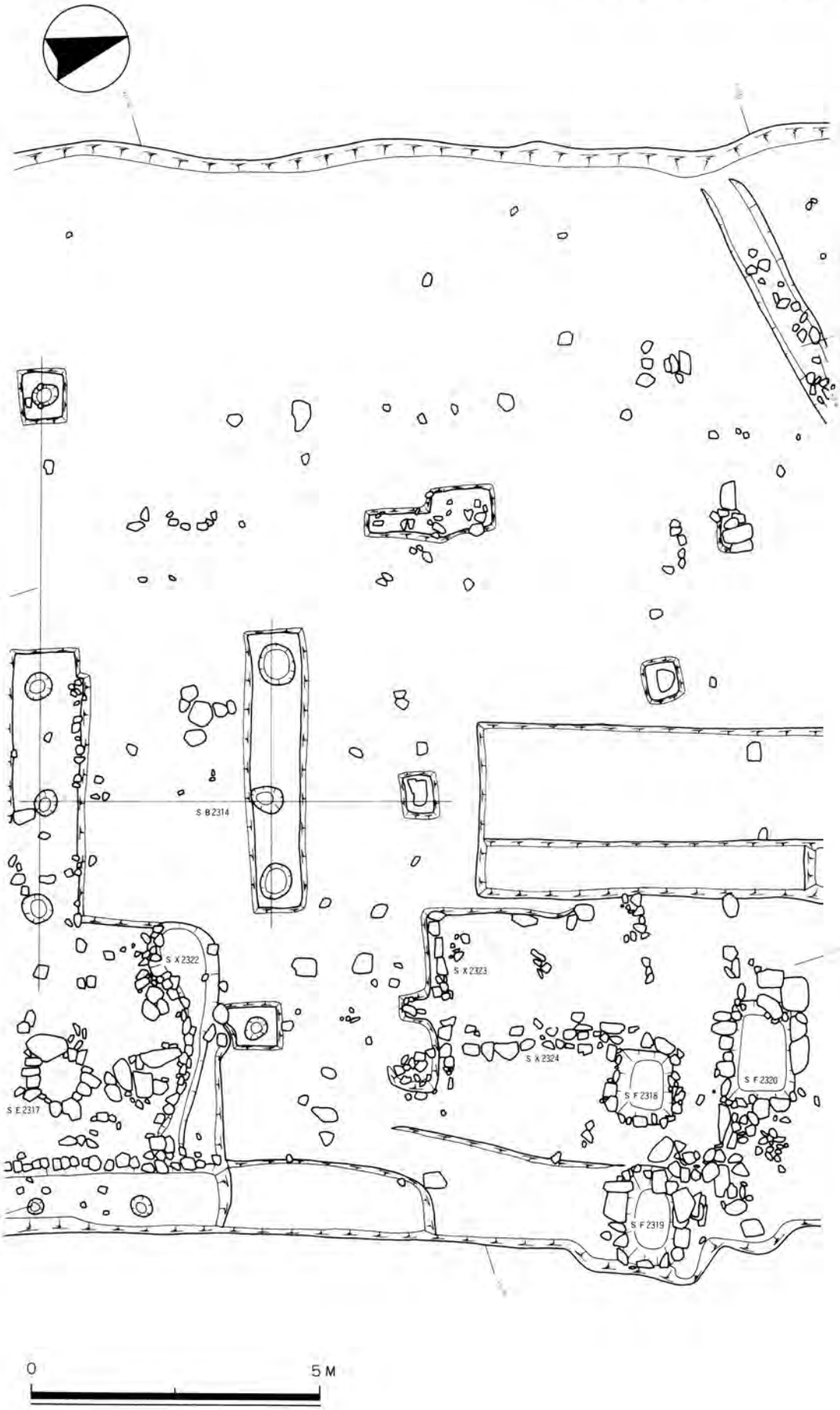
第43次調査・遺構(5)　Q・P地区



第58図　　第43次調査・遺構(6)　Q・P、L地区



第59図　　第43次調査・遺構(7)　L地区

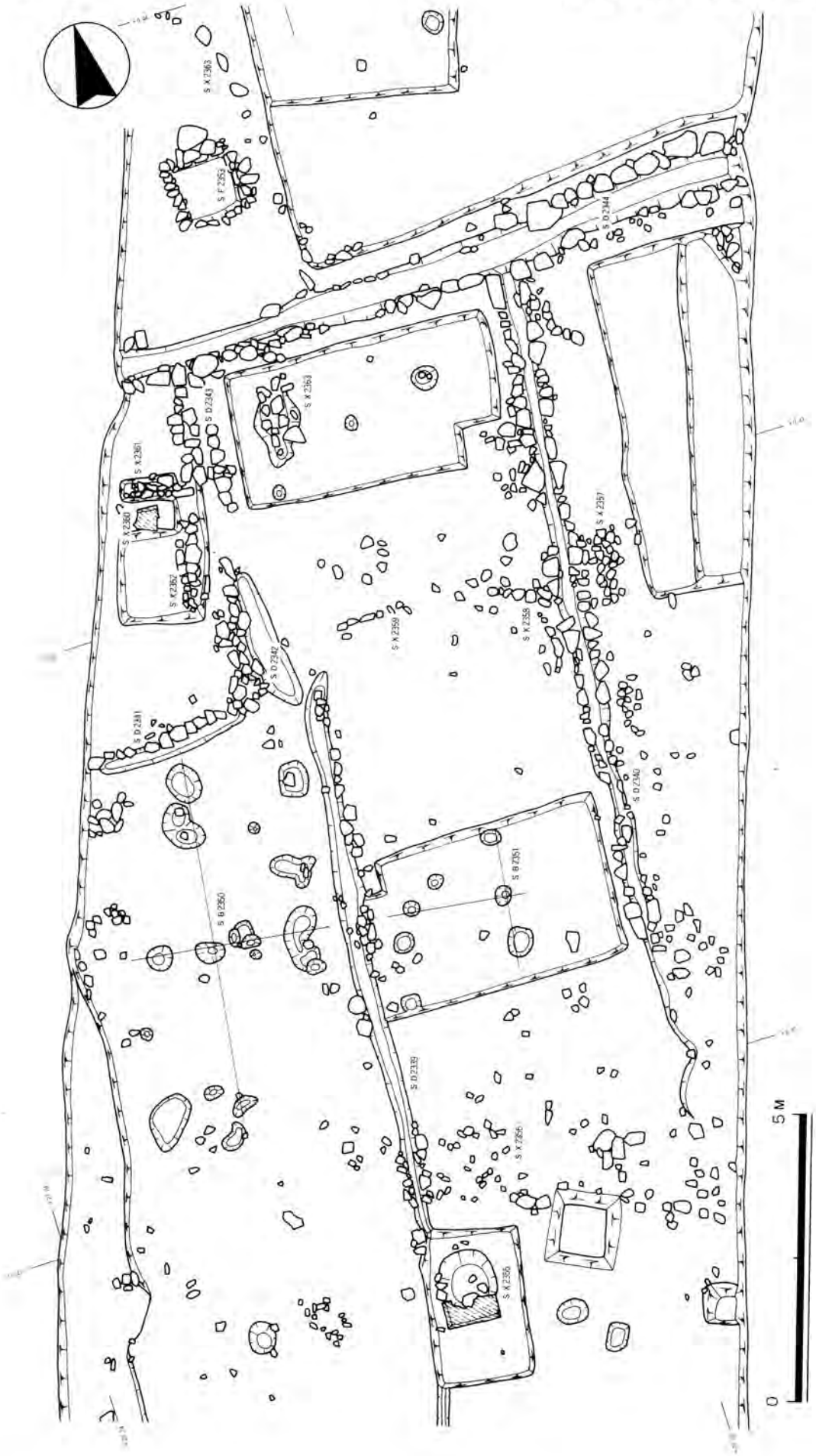


第60図

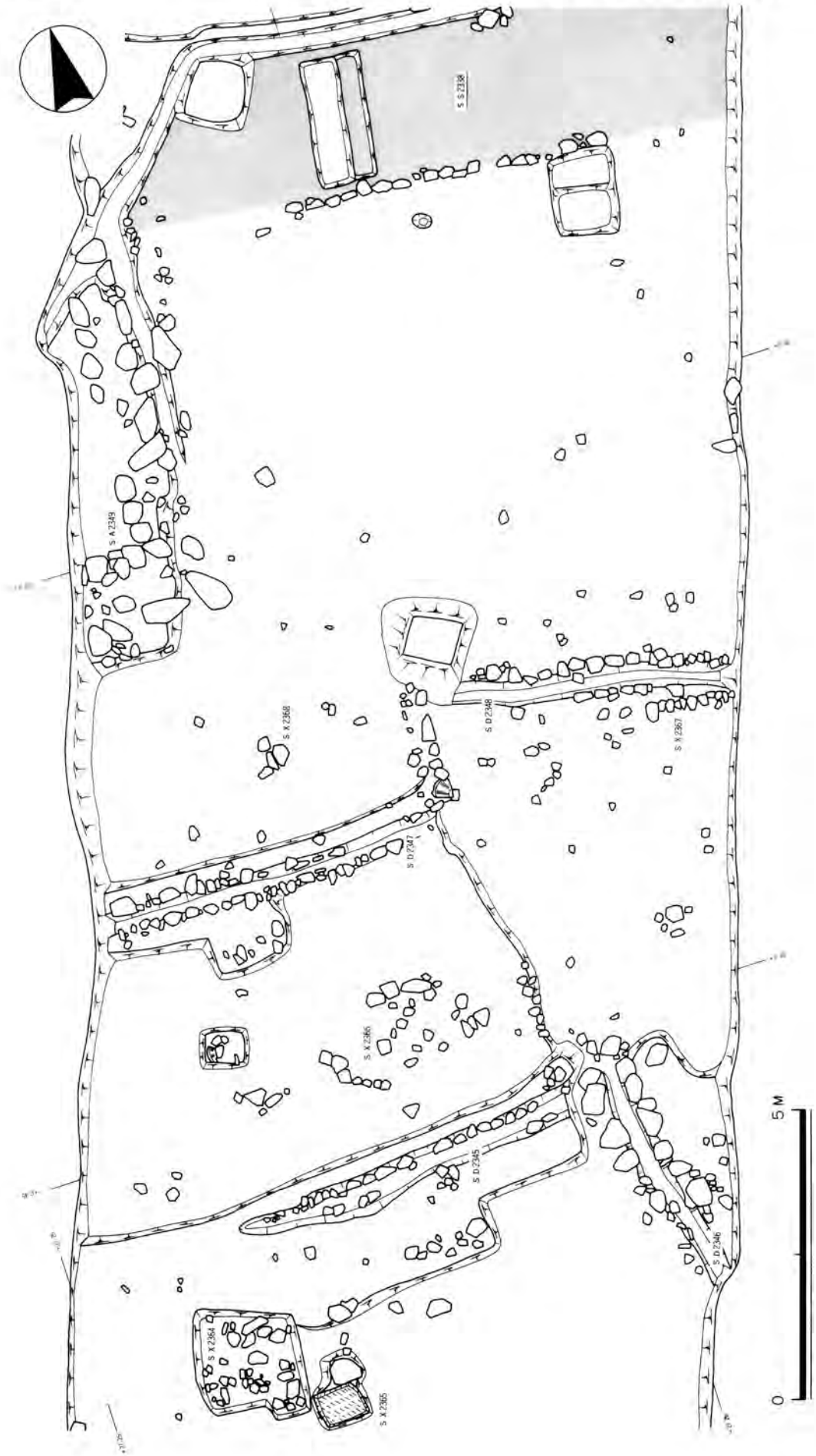
第43次調査・遺構(8)　L地区

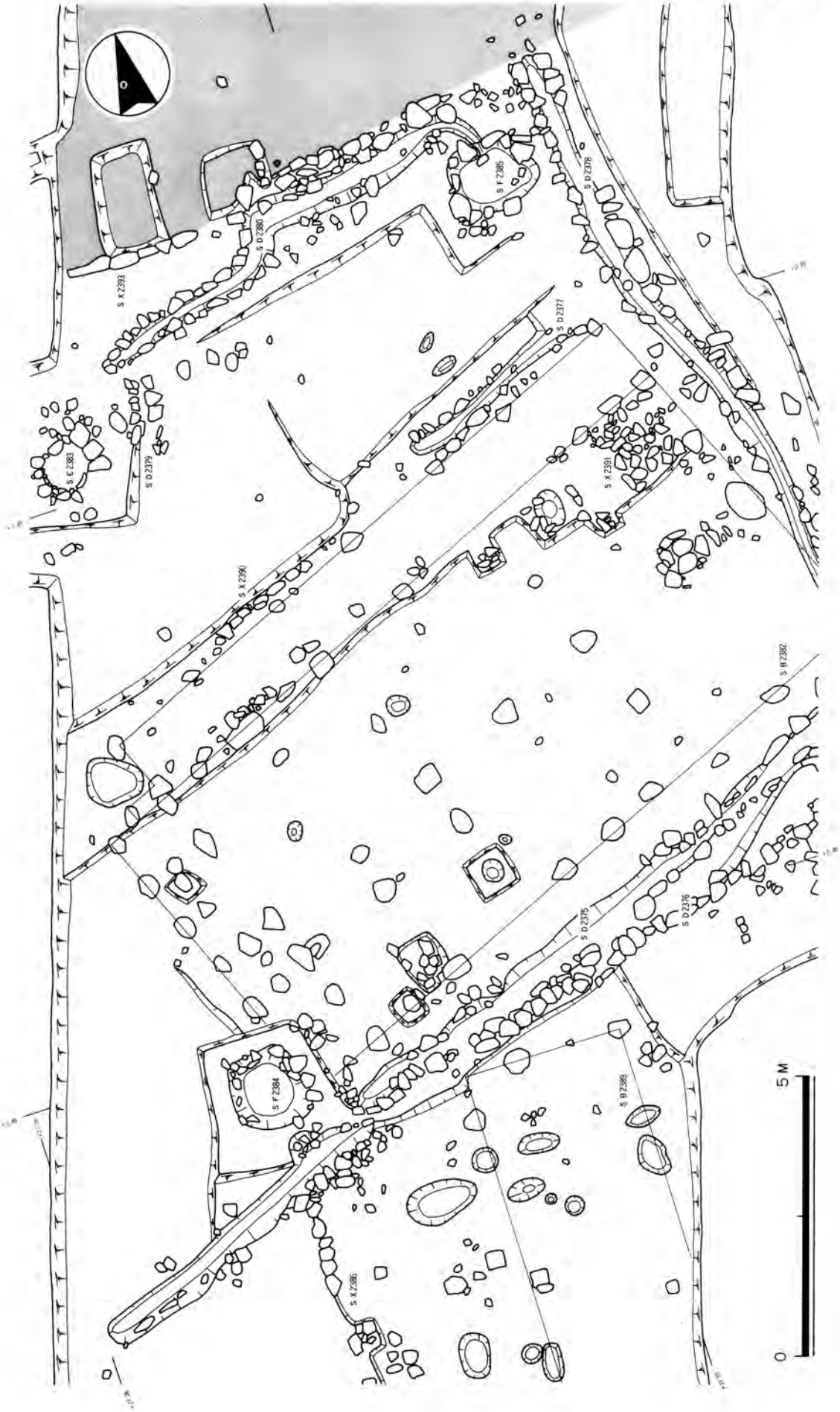
第61図

第43次調査・遺構(9)　K地区

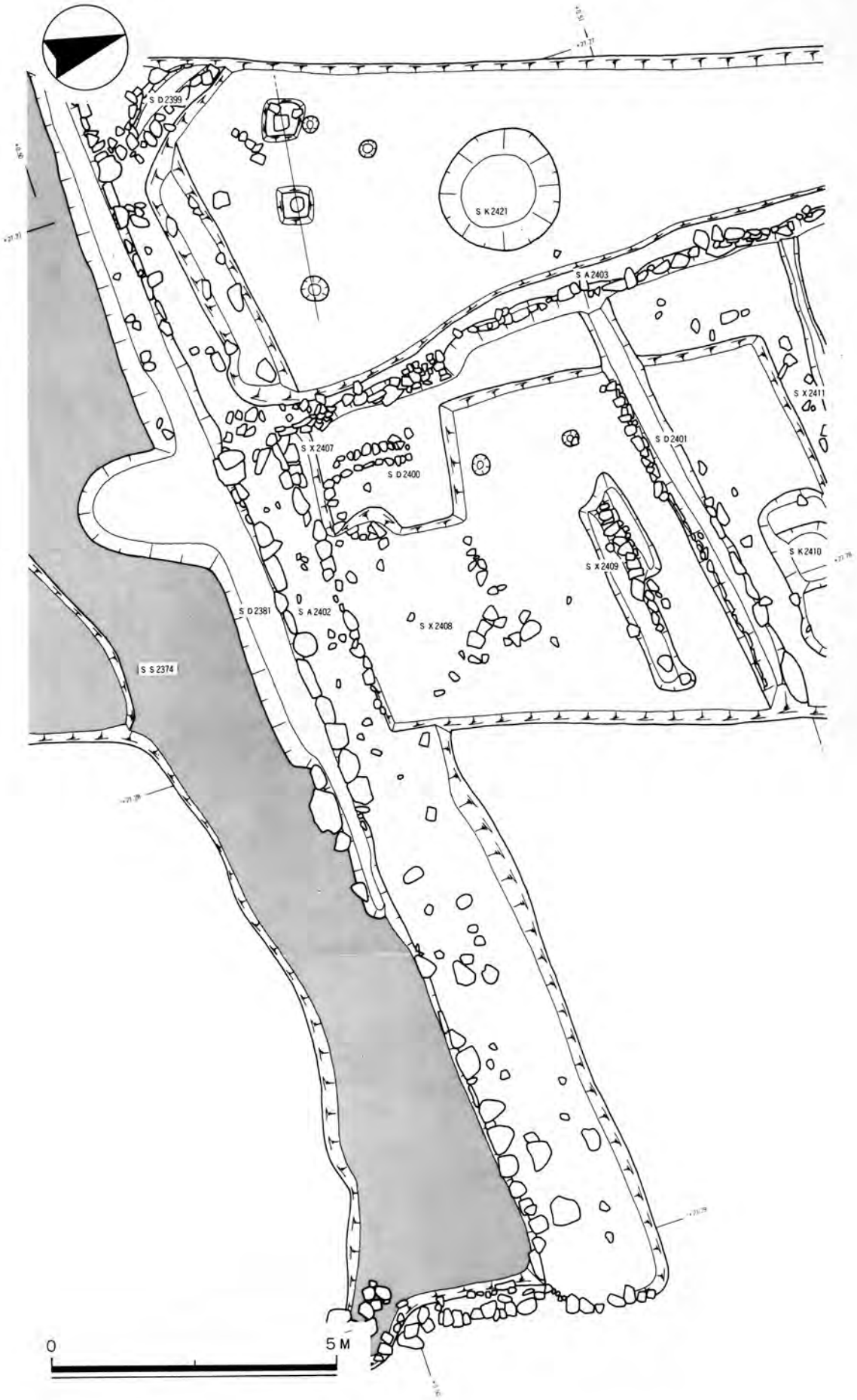


第62図　　第43次調査・遺構(10)　K地区



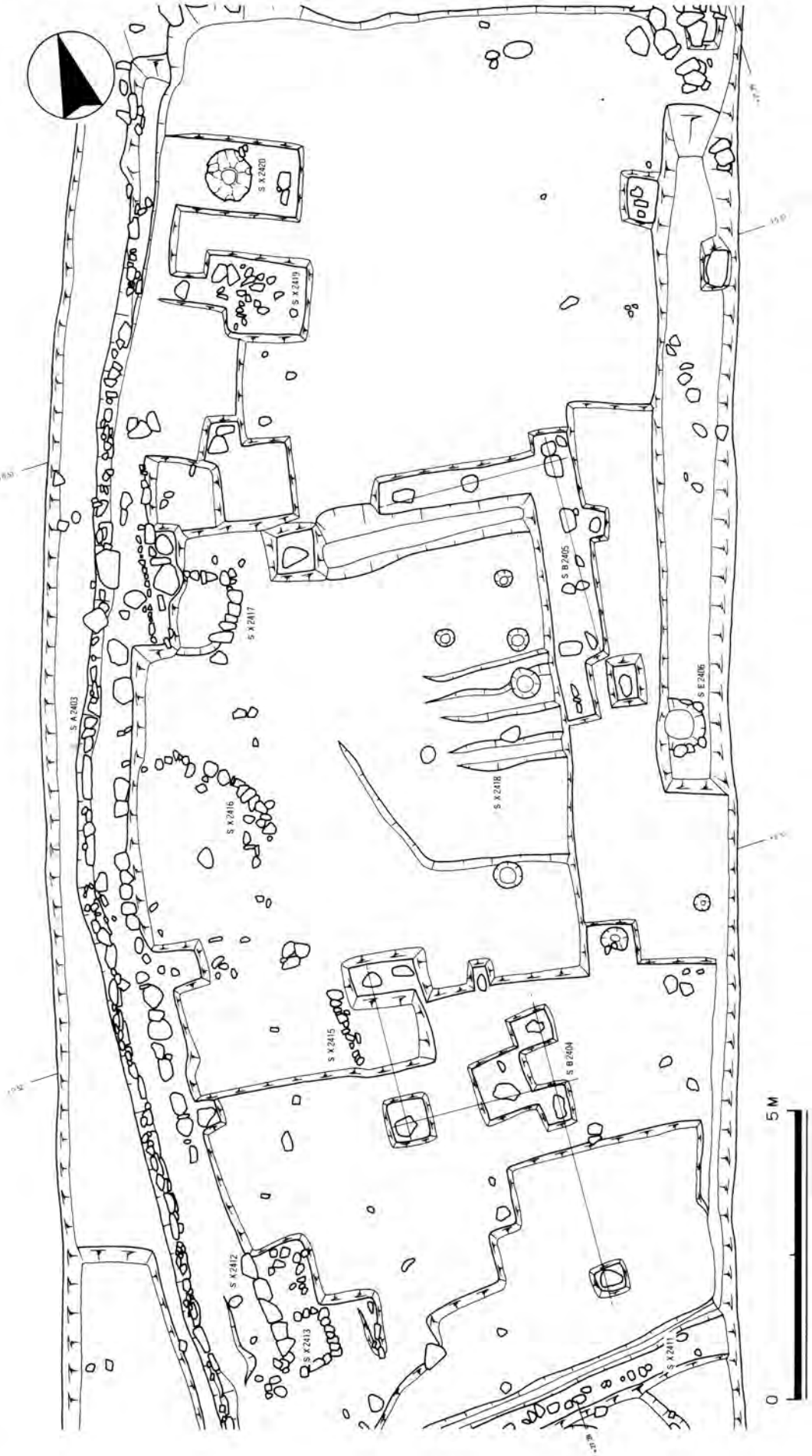

S X 2393
S D 2380
S F 2385
S D 2378
S D 2377
S E 2383
S D 2379
S X 2391
S X 2390
S B 2382
S D 2376
S D 2375
S F 2384
S B 2389
S X 2386
5 M

第64図　　第43次調査・遺構(12)　Ⅰ北区



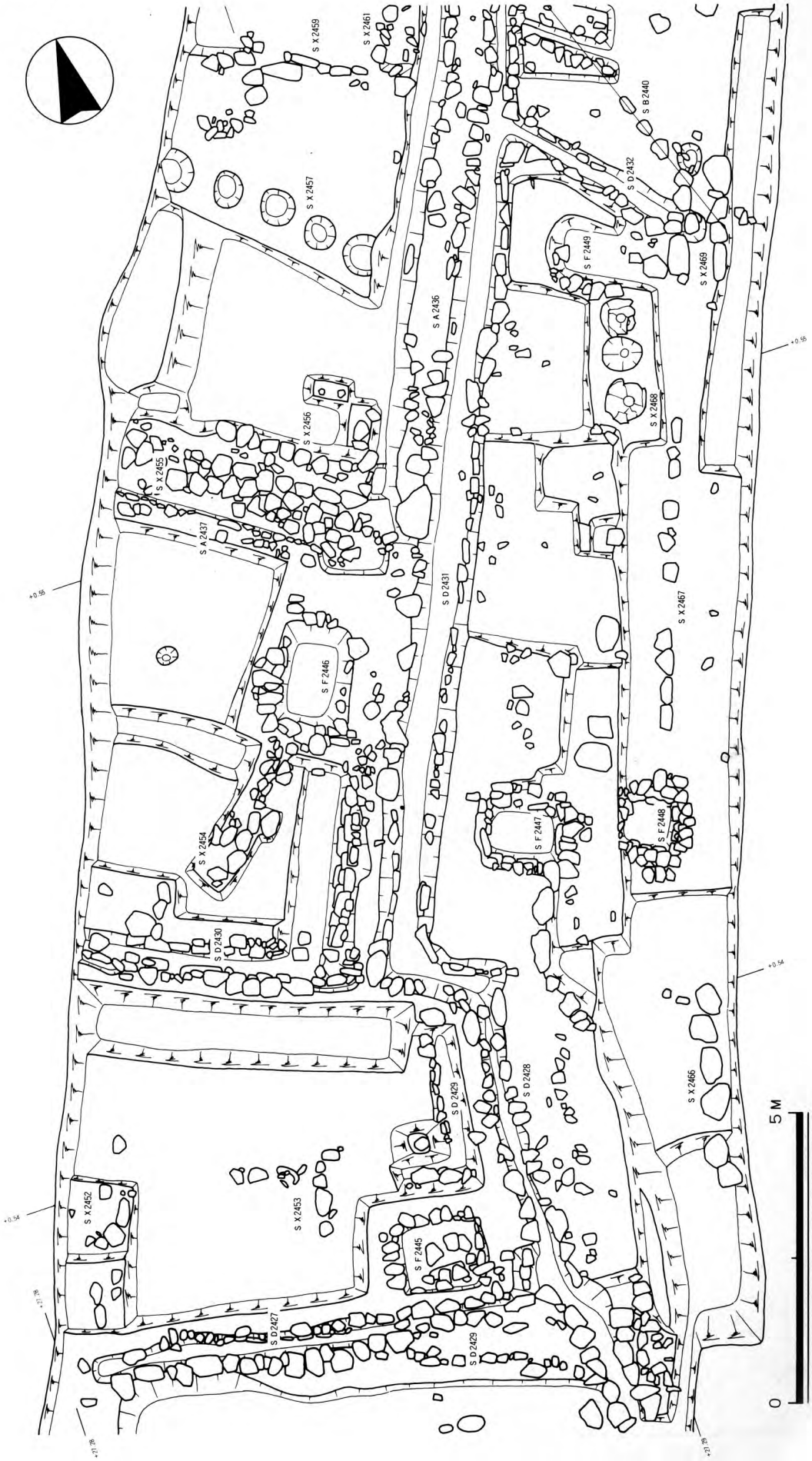
第65図

第43次調査・遺構(13)　Ⅰ北区

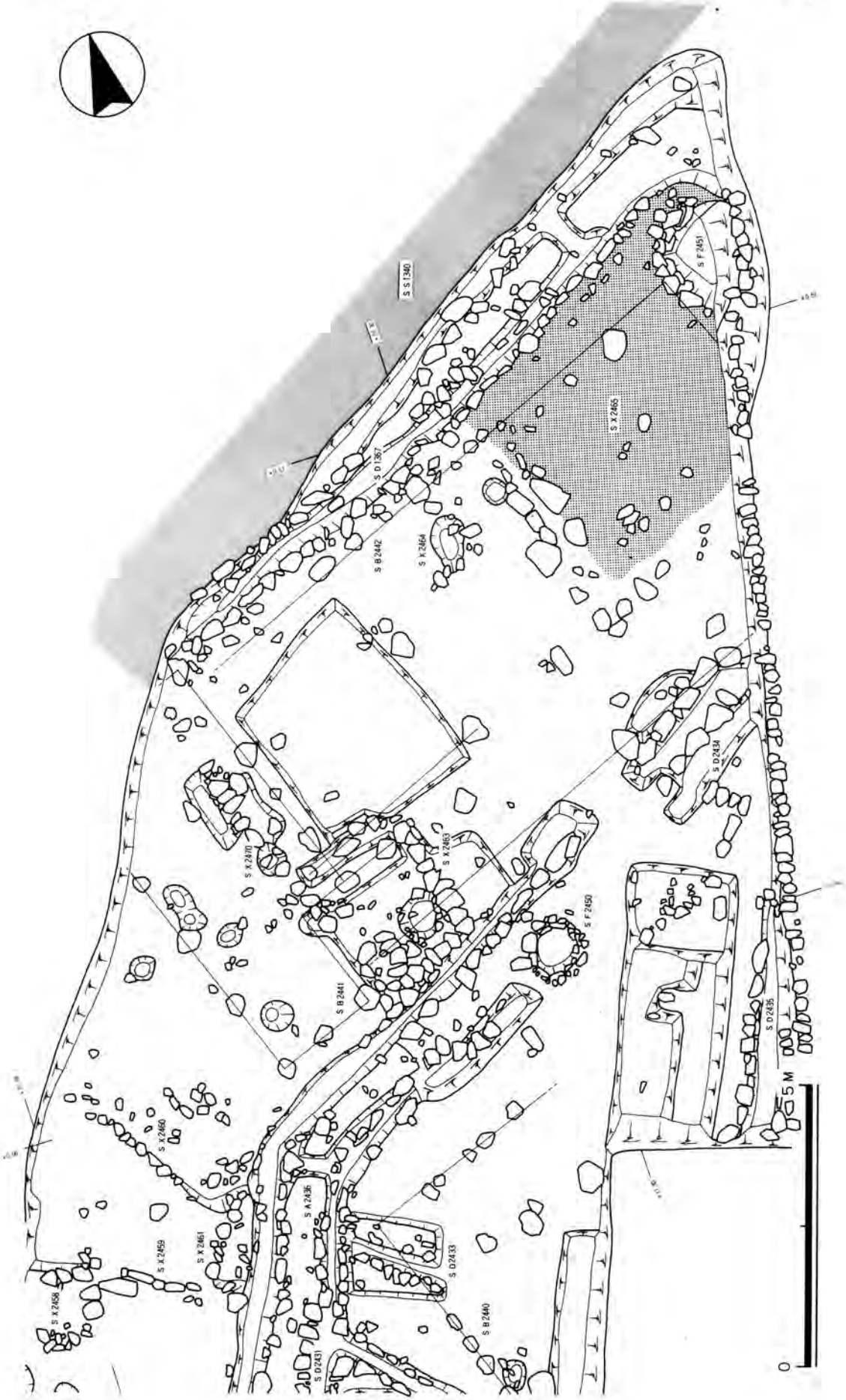


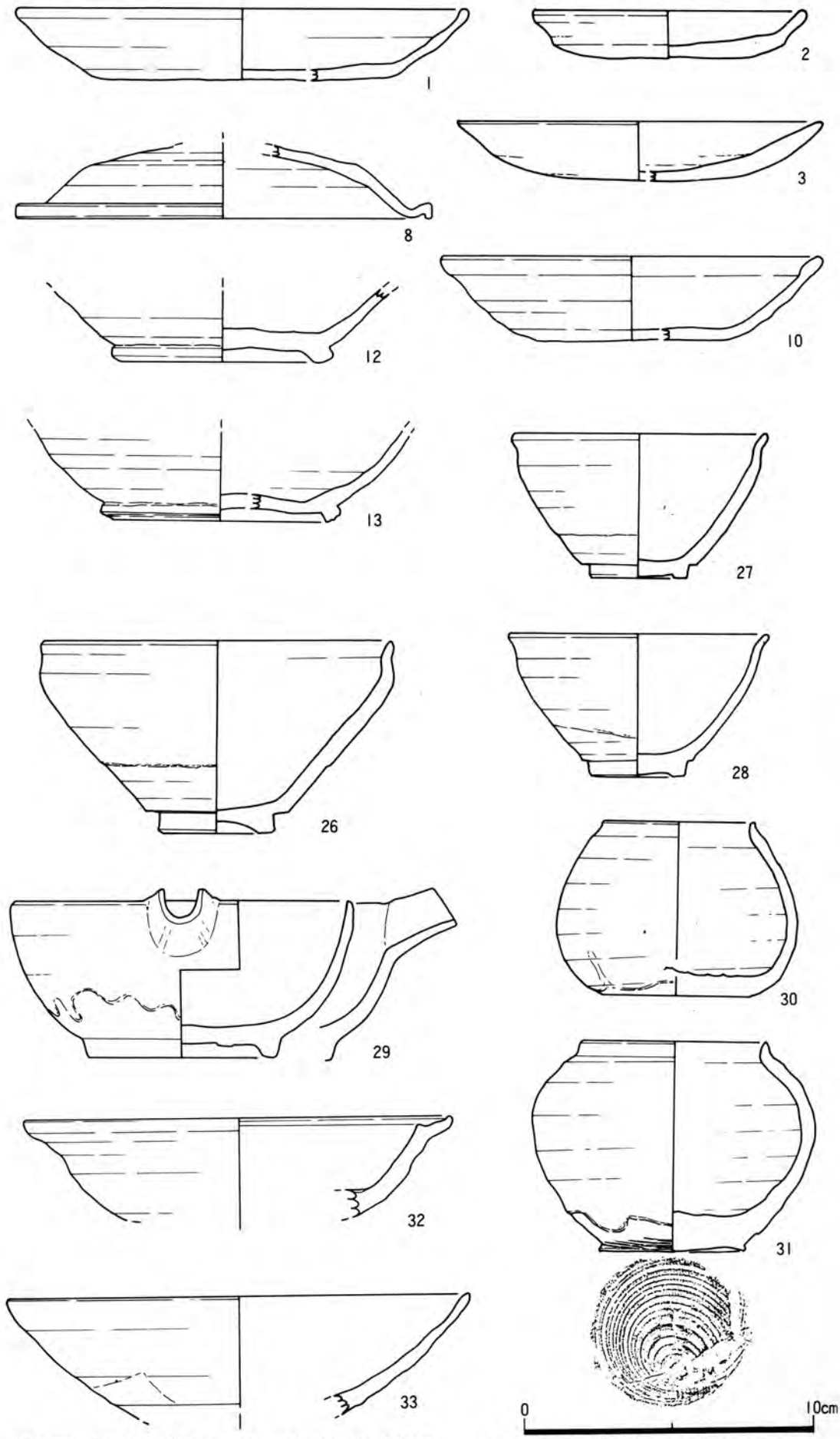
第66図

第43次調査・遺構(14)　H地区

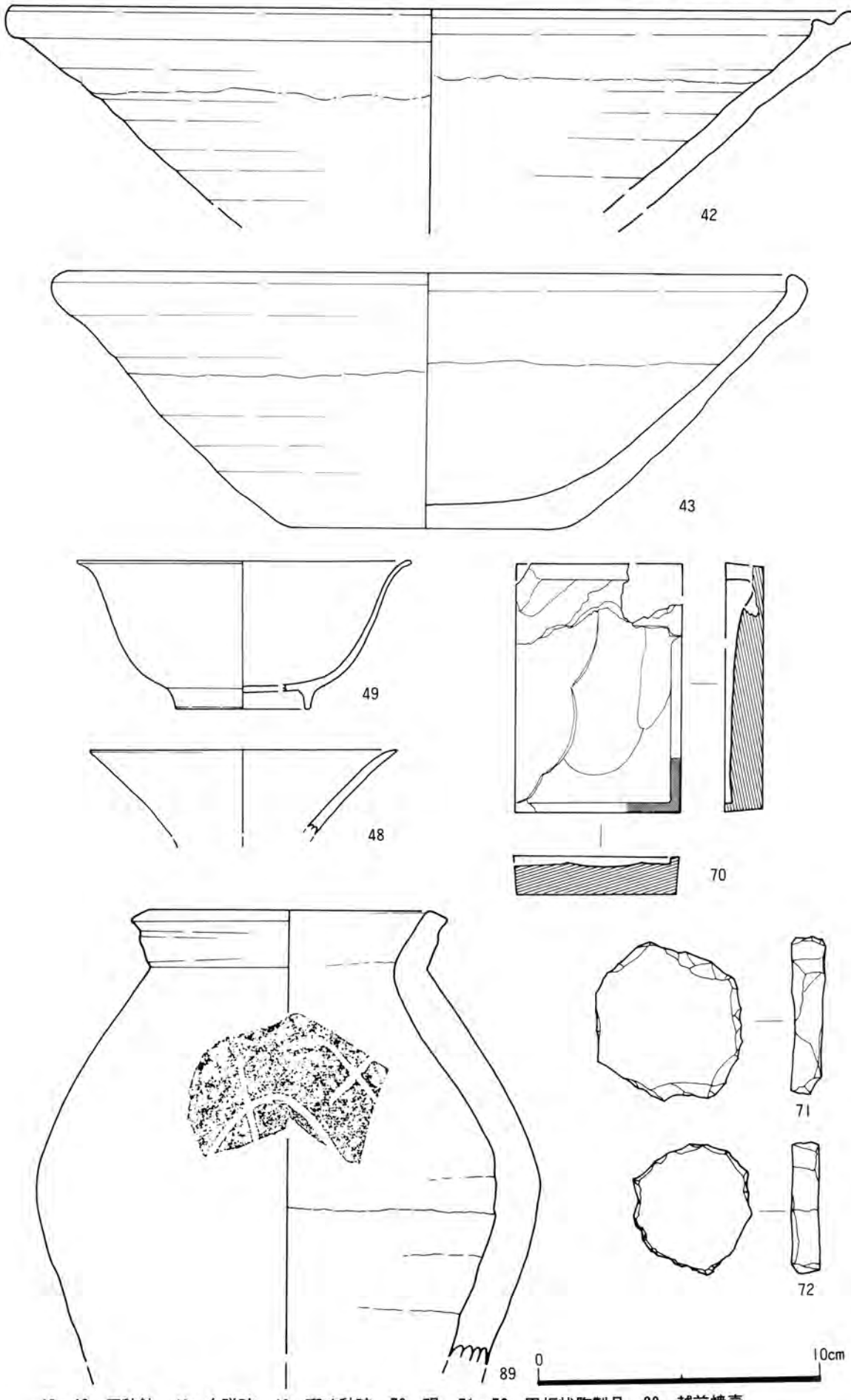


第67図　　第43次調査・遺構(15)　H地区

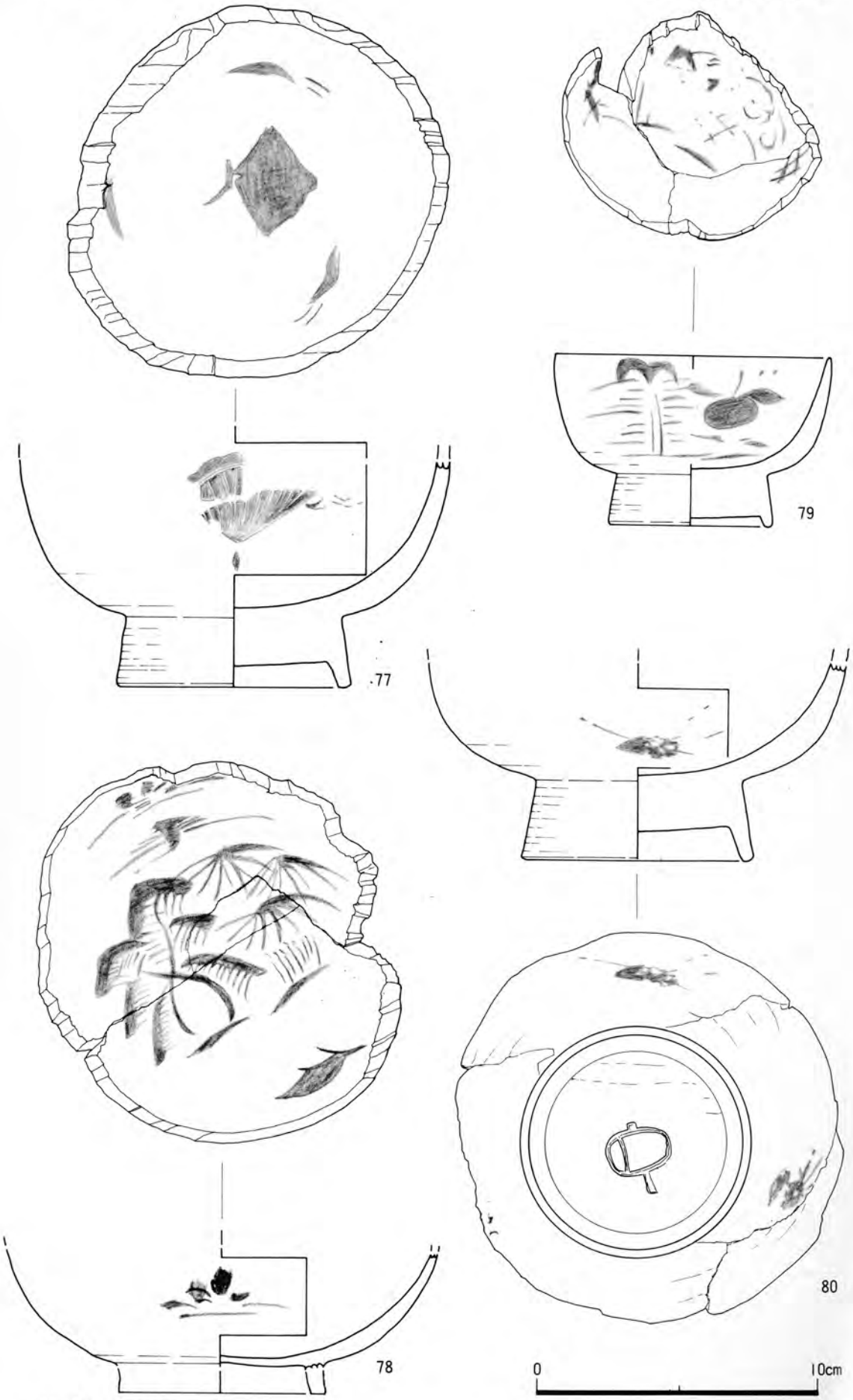




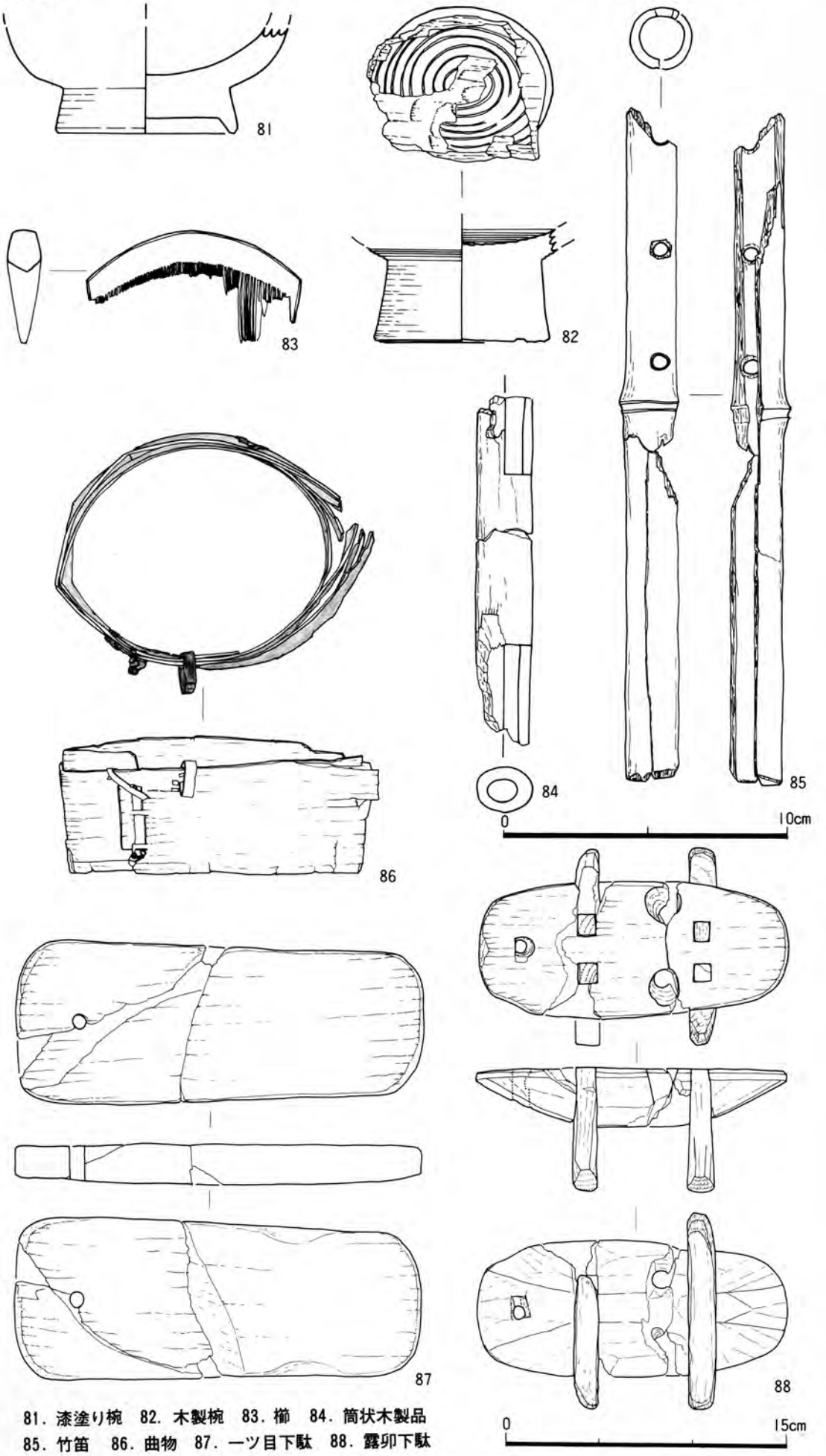
（T地区）1～3．土師質皿　8・10・12・13．須恵器　（Q・P地区）26～27．天目茶碗
29．鉄釉片口　30．鉄釉小壺　31．灰釉小壺　32．灰釉卸皿　33．刷毛目碗



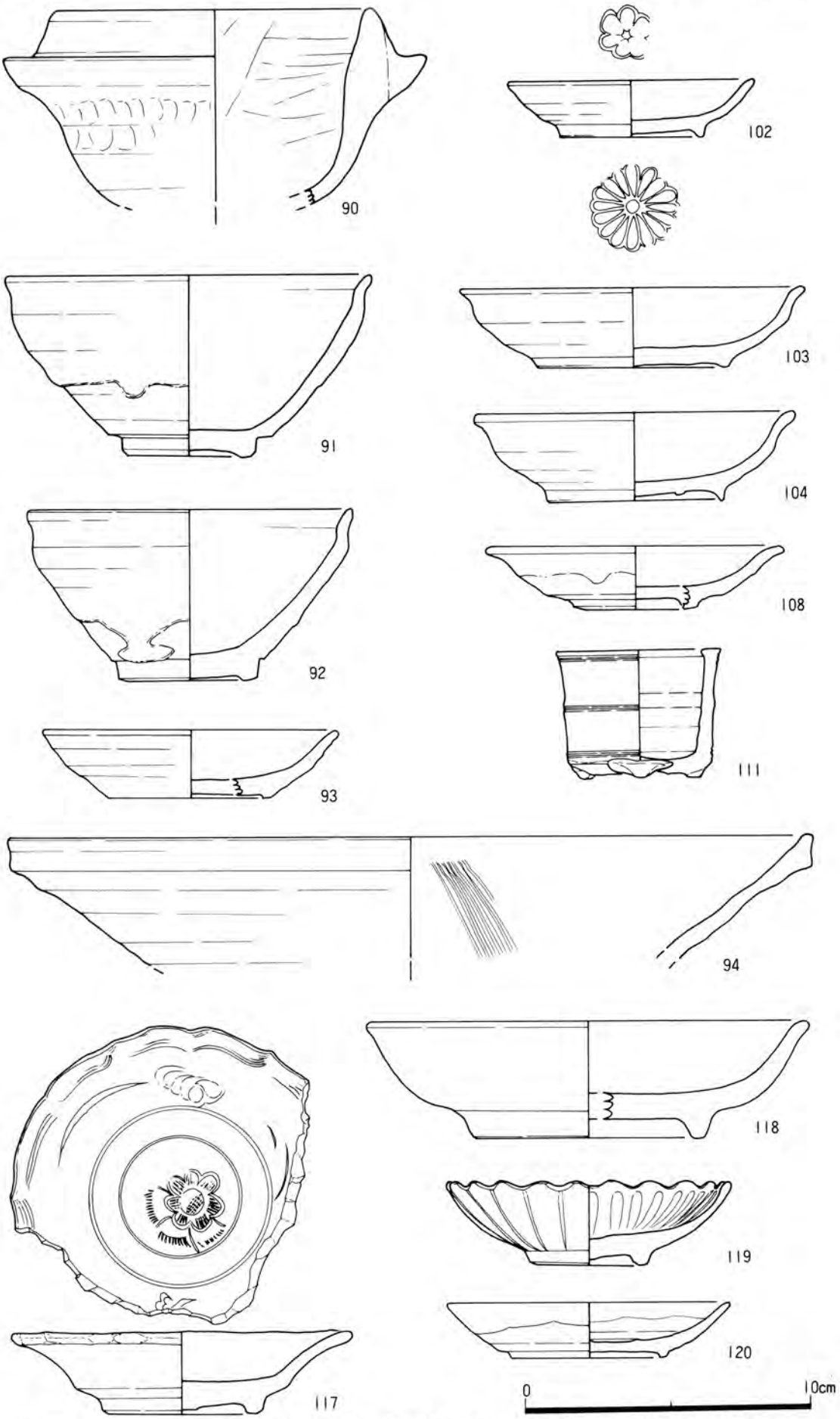
42・43. 灰釉鉢　49. 白磁碗　48. 瑠璃釉碗　70. 硯　71・72. 円板状陶製品　89. 越前焼壺



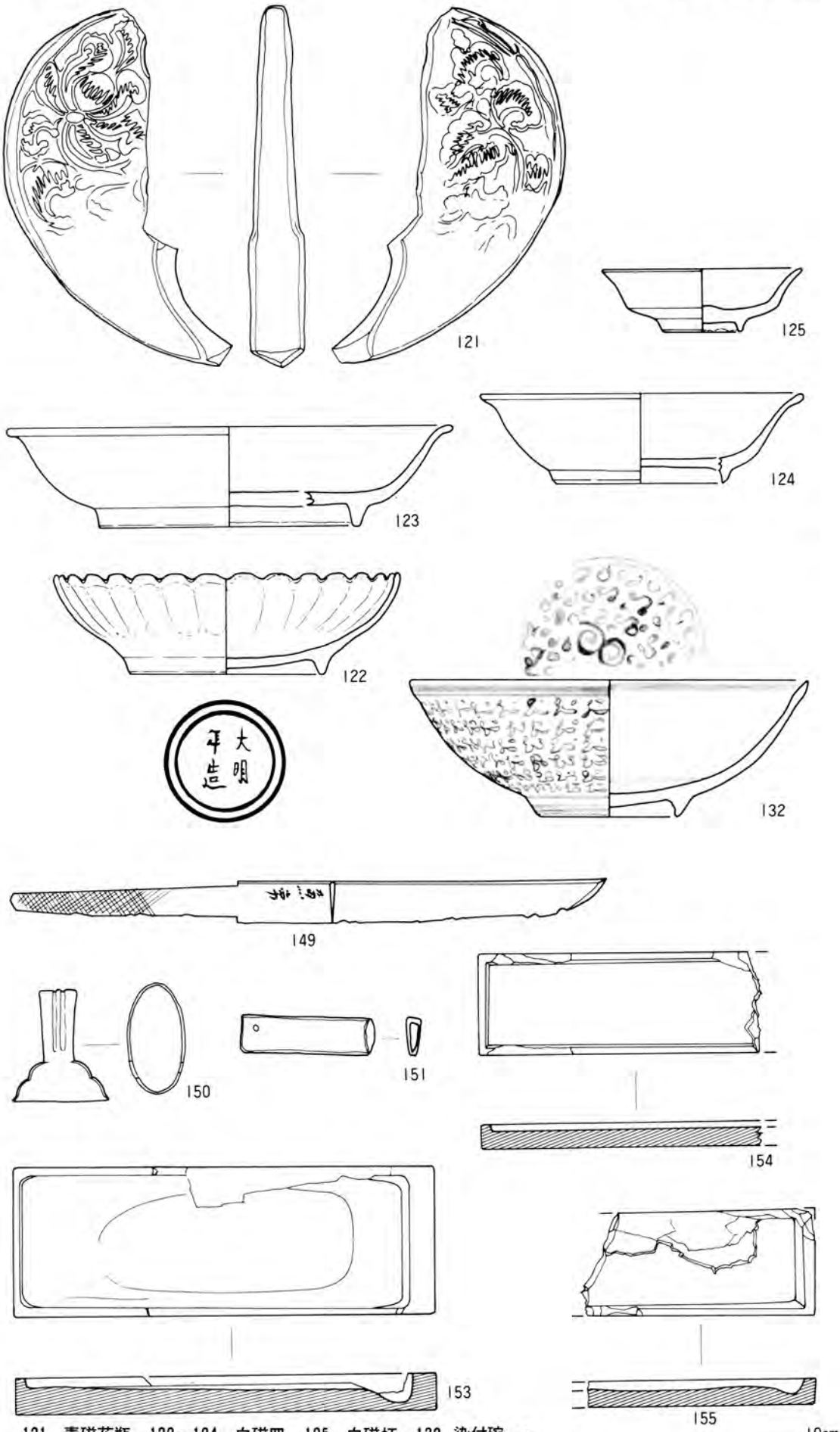
77～80．漆塗り椀



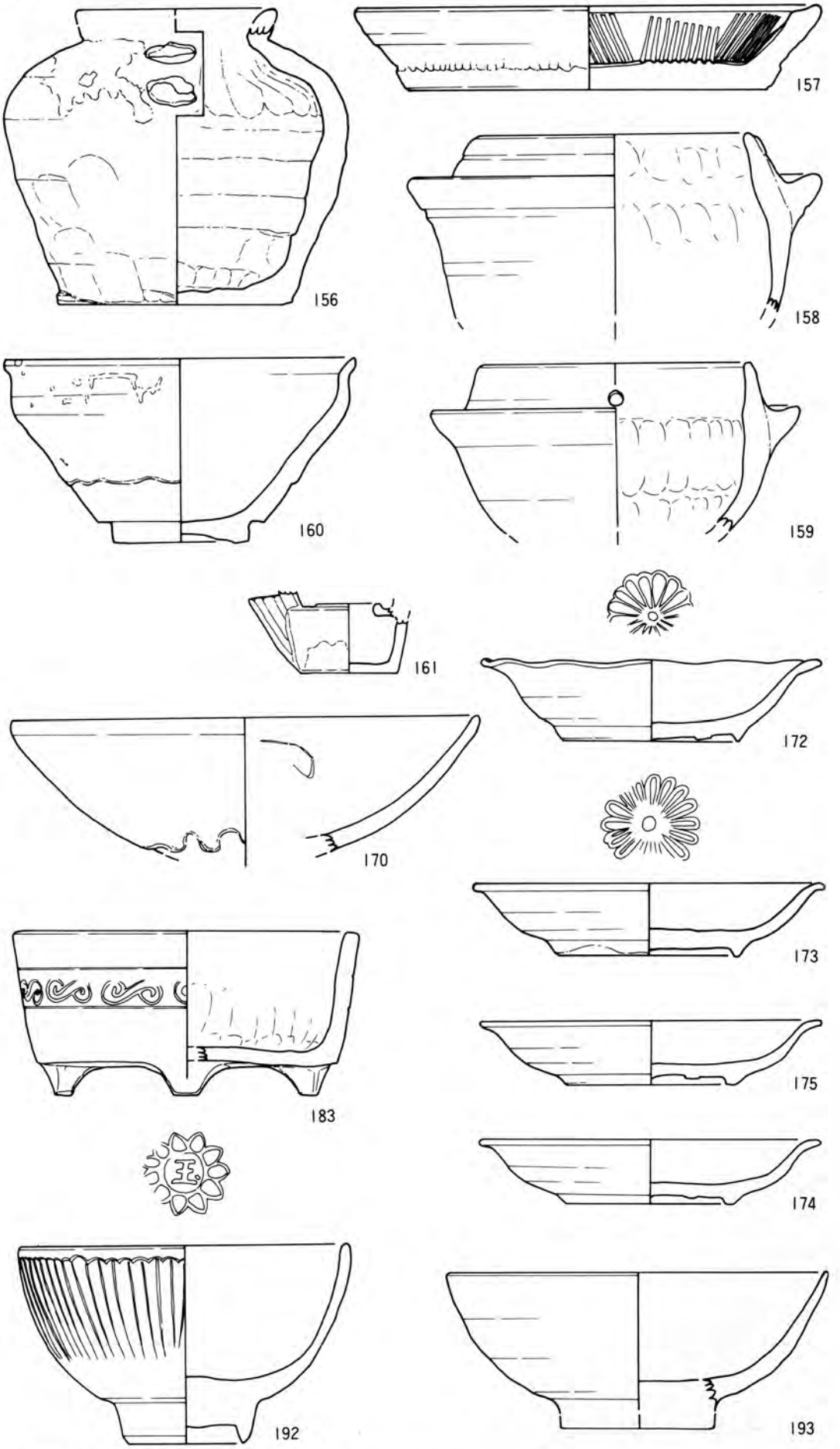
81．漆塗り椀　82．木製椀　83．櫛　84．筒状木製品
85．竹笛　86．曲物　87．一ツ目下駄　88．露卯下駄



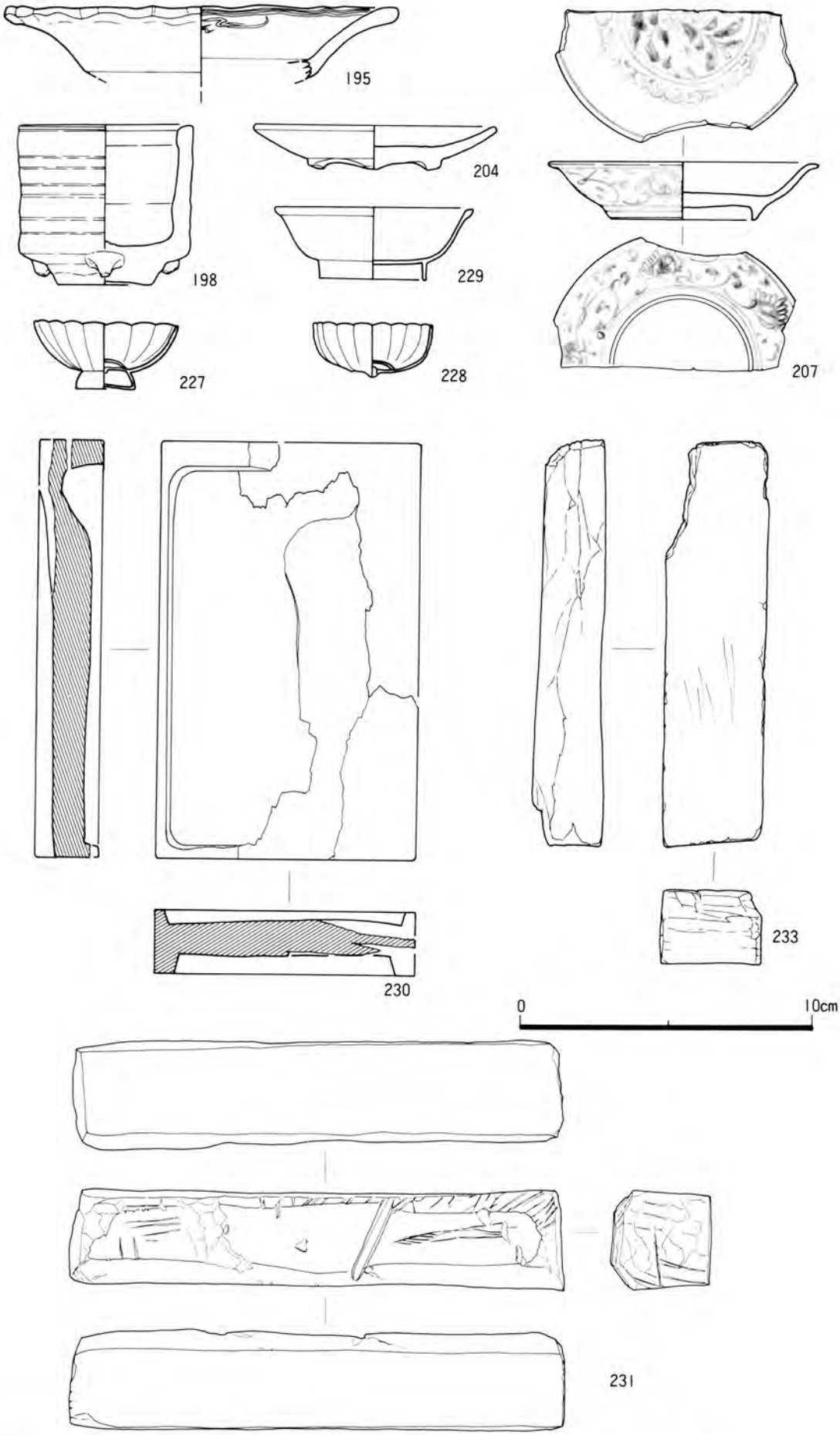
(L地区)　90. 土師質土釜　91・92. 天目茶碗　93. 鉄釉皿　94. 鉄釉鉢　102～104・108. 灰釉皿
111. 灰釉香炉　117～120. 青磁皿



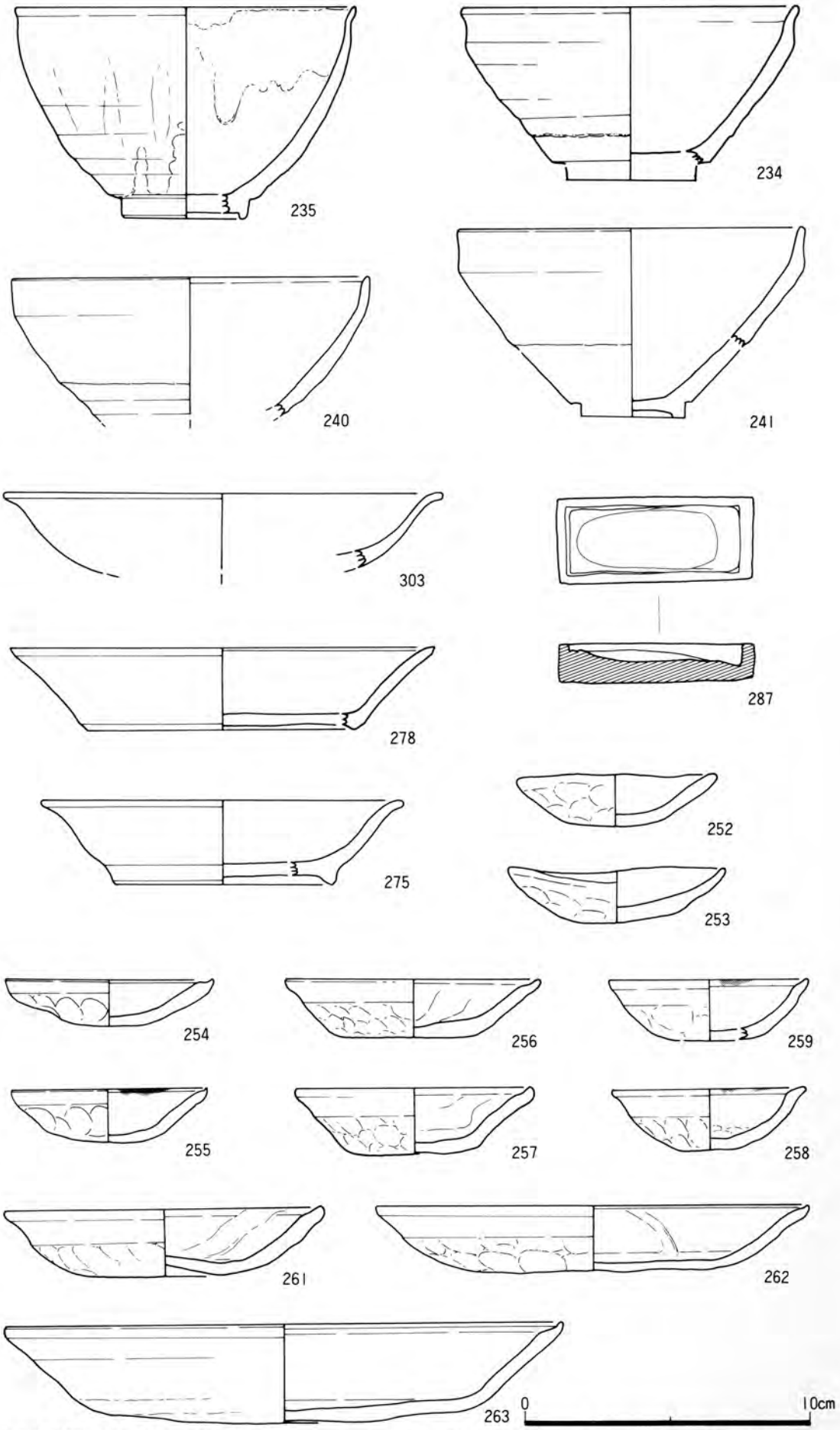
121．青磁花瓶　122～124．白磁皿　125．白磁坏　132．染付碗
149・151．小柄　150．刀装具　153～155．硯



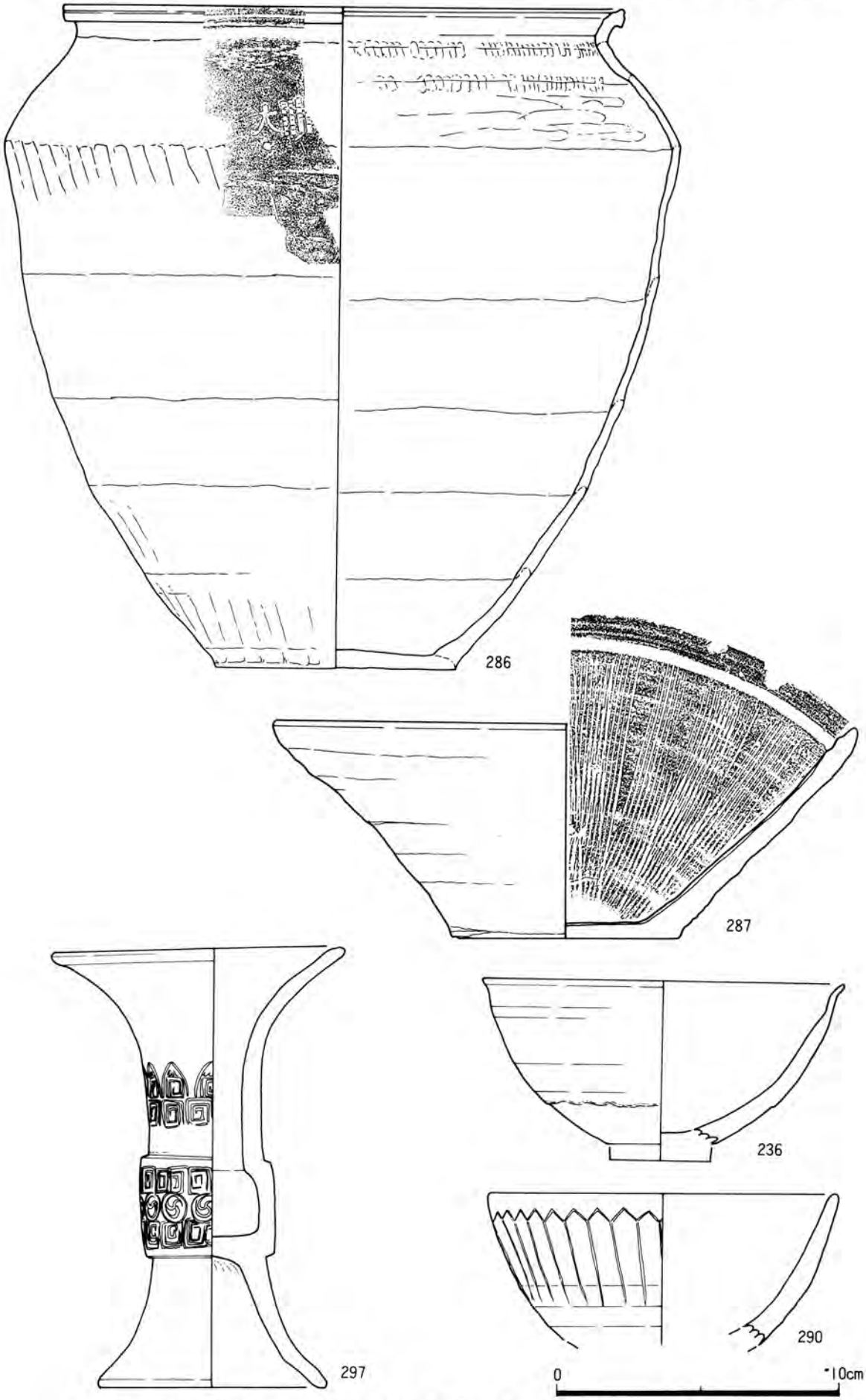
(K地区) 156. 越前焼壺　157. 越前焼卸皿
158・159. 土師質土釜　160. 天目茶碗　161. 鉄釉水滴
170. 灰釉碗　172～175. 灰釉皿　183. 瓦質香炉　192・193. 青磁碗



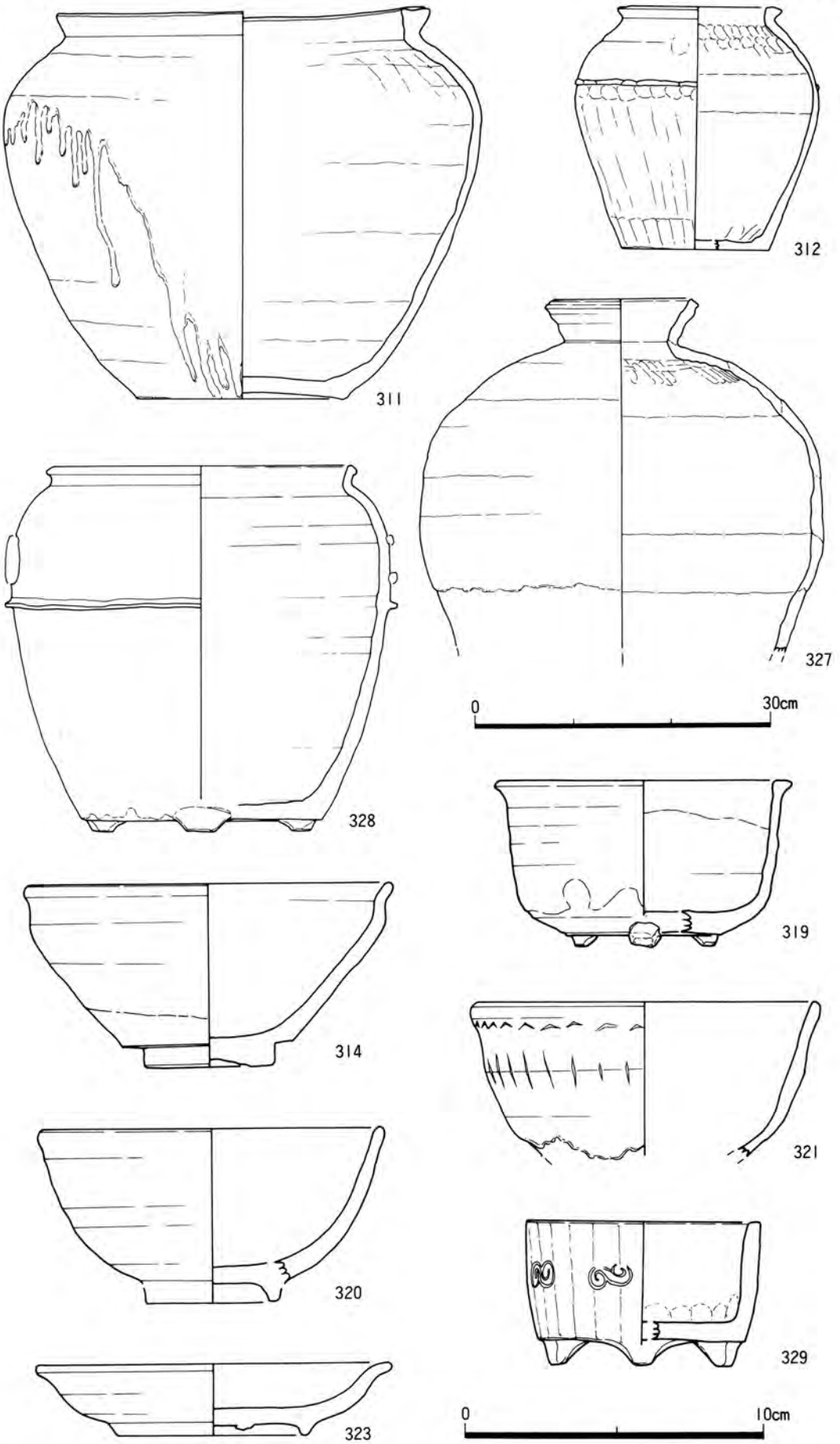
195. 青磁皿　198. 青磁香炉　204. 白磁皿　207. 染付皿　227・228. 銅製紅皿　229. 真鍮製六器
230. 硯　233・231. 砥石(1/3)



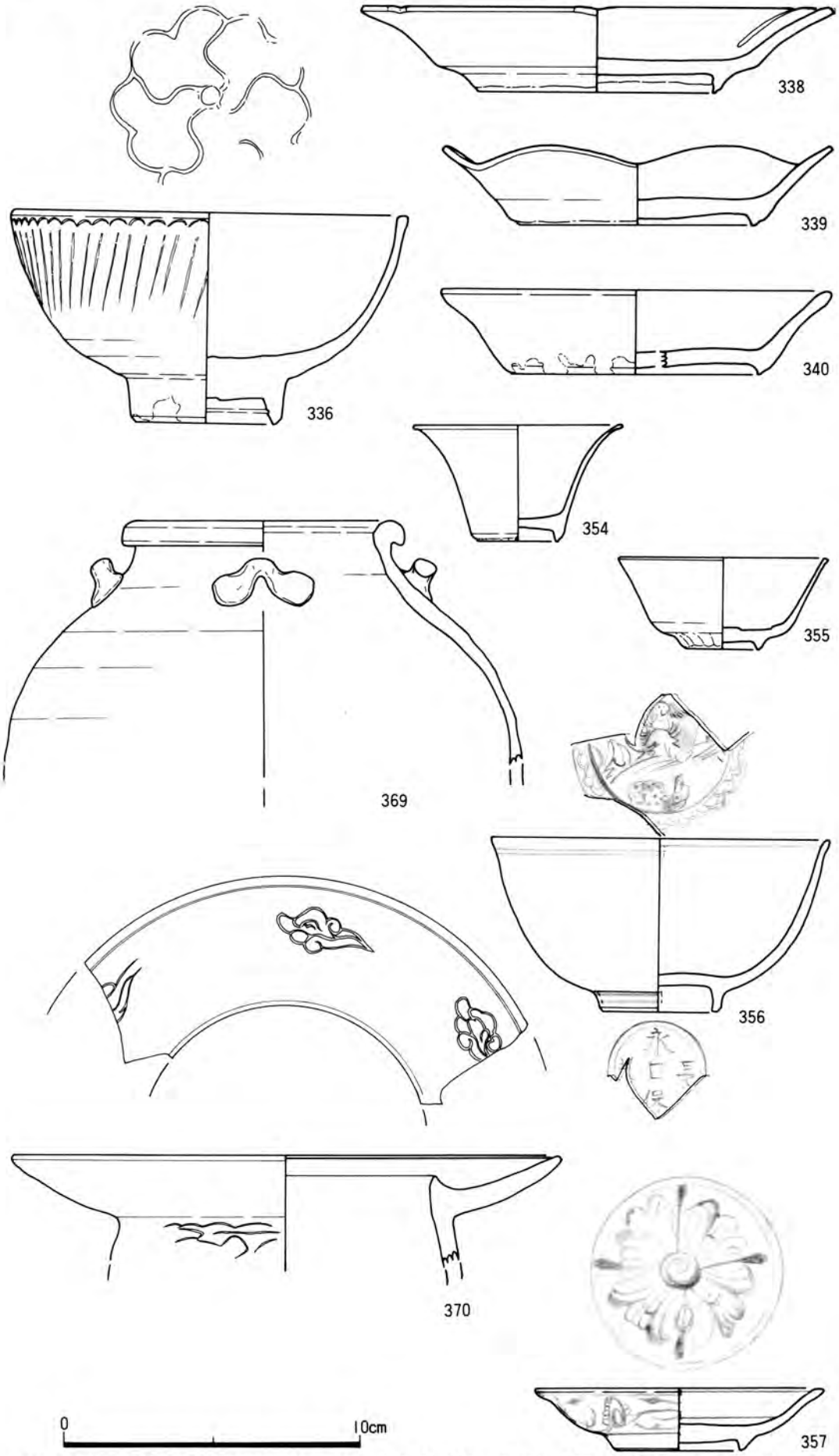
(Ⅰ南地区) 234・235・240・241. 天目茶碗　275・278・303. 白磁皿　土師質皿　B類. 252・253
C類1. 254・255.　C類2. 256・257　G類. 259・258　D類. 261～263　287. 硯



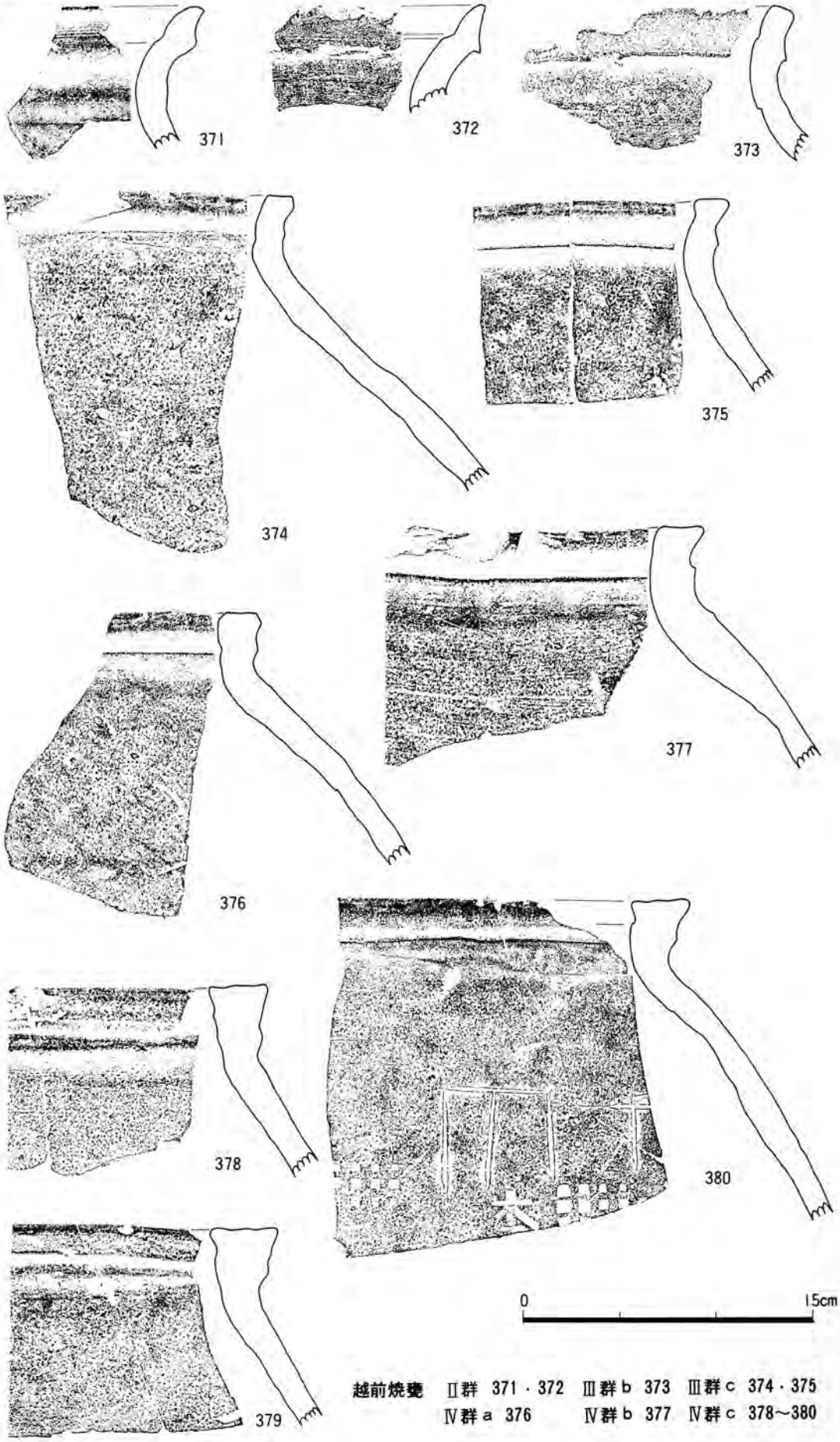
(Ⅰ北地区)　286. 越前焼甕(1/8)　287. 越前焼擂鉢(1/4)　236. 天目茶碗　290. 灰釉碗　297. 瓦質花瓶



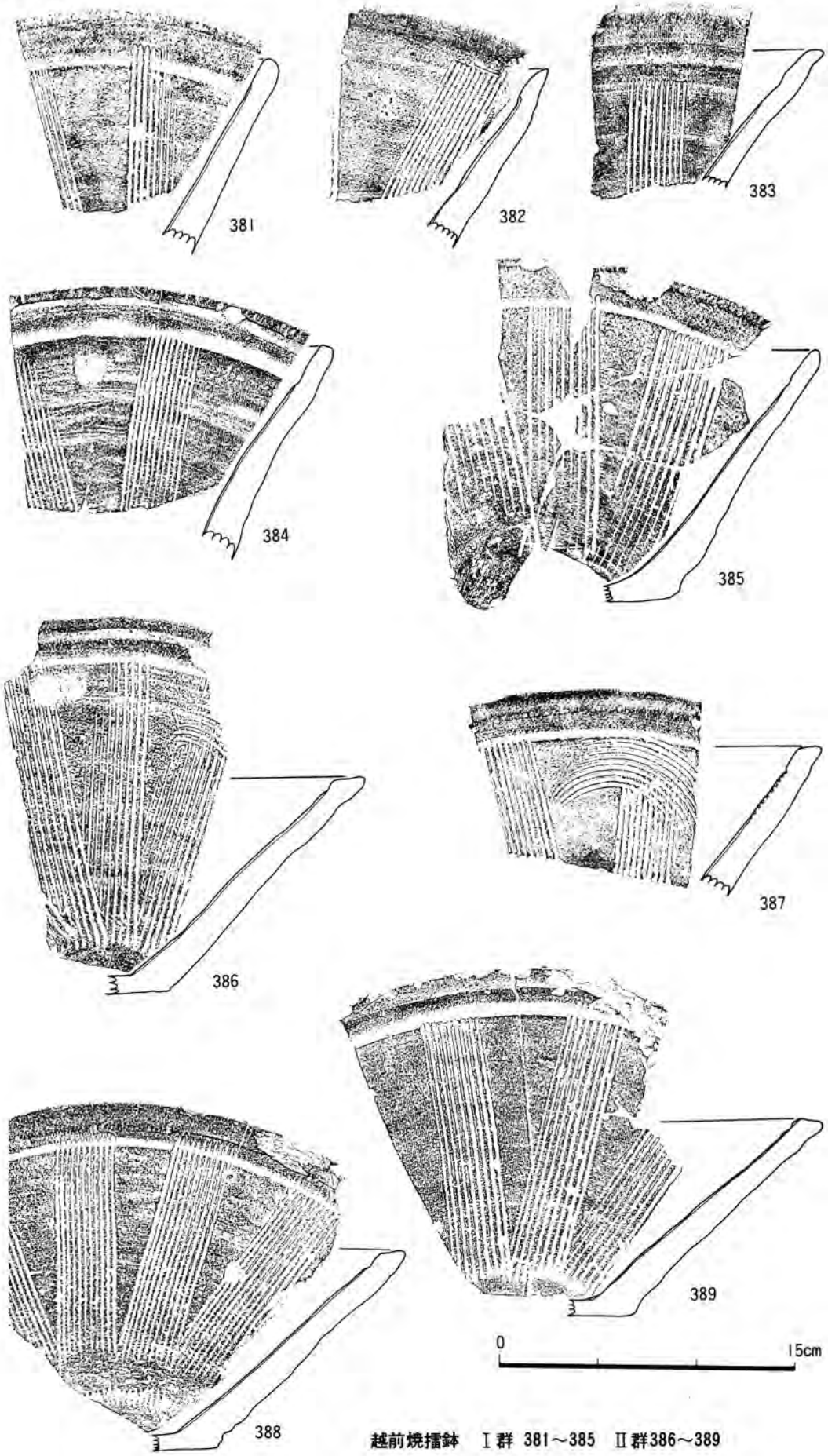
(H地区) 311. 越前焼甕　312. 越前焼壺　327. 信楽焼壺　328. 備前焼甕　314. 天目茶碗　319. 鉄釉香炉　320・321. 灰釉碗　323. 灰釉皿　329. 瓦質香炉



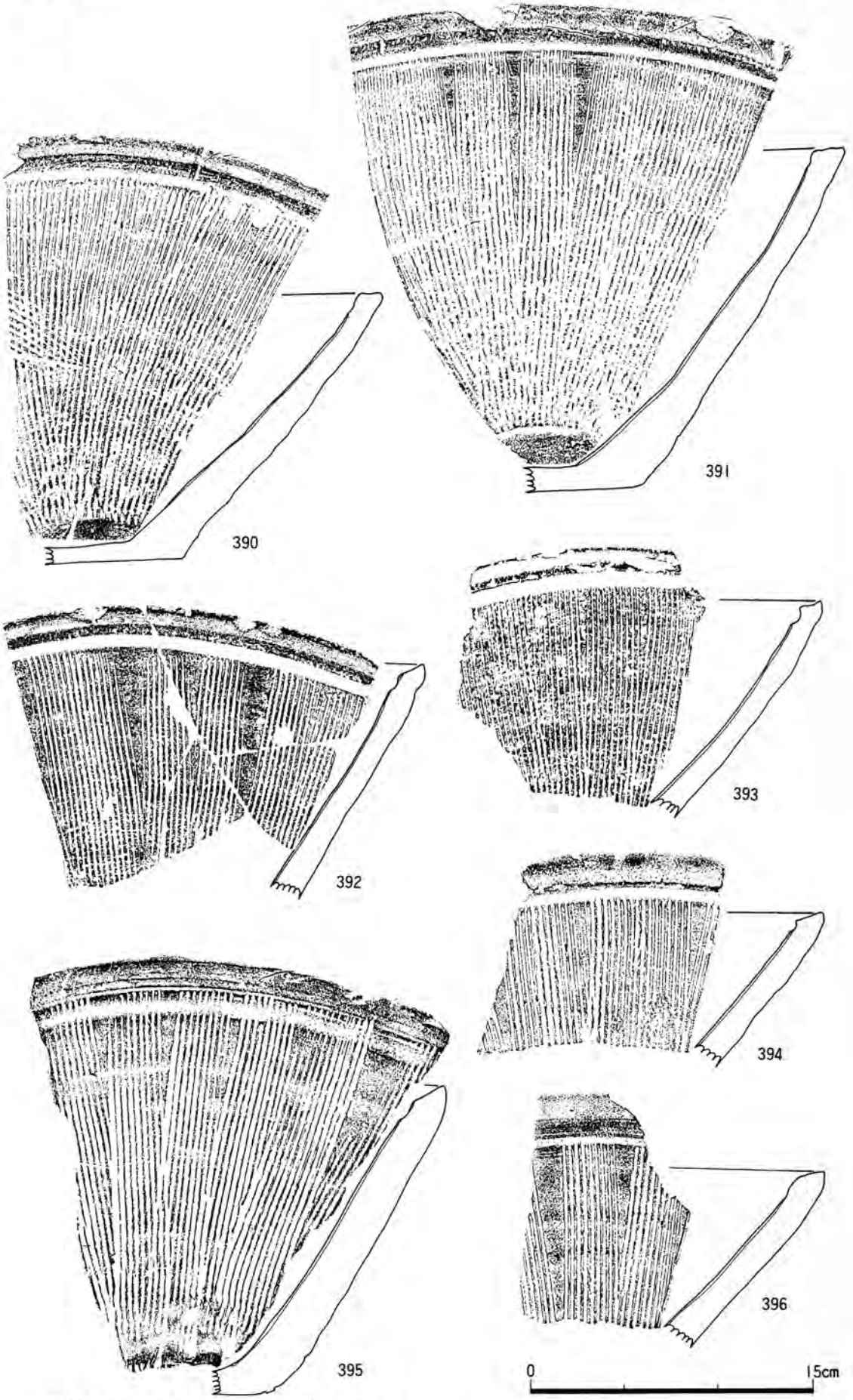
336．青磁碗　338～340．青磁皿　354・355．白磁坏　356．染付碗　357．染付皿　369．褐釉壺
370．高麗青磁香炉



越前焼甕　Ⅱ群 371・372　Ⅲ群b 373　Ⅲ群c 374・375
Ⅳ群a 376　Ⅳ群b 377　Ⅳ群c 378～380



越前焼擂鉢　Ⅰ群 381～385　Ⅱ群386～389



越前焼擂鉢　Ⅲ群a 390・391　Ⅲ群b 392～396

昭和58年3月25日　印刷
昭和58年3月31日　発行

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡

県道鯖江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書

編集　福井県立朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4字下流レ
発行　福井県教育委員会
印刷　河和田屋印刷株式会社
福井市一本木町88

1983. ©